

長者平遺跡

—昭和58年度緊急発掘調査報告書—

1984

静岡県袋井市教育委員会

長者平遺跡

—昭和58年度緊急発掘調査報告書—

1 9 8 4

静岡県袋井市教育委員会

序

文

長者平遺跡は、笠原地区に所在する大畑遺跡と共に袋井市における縄文時代の二大遺跡として著名であります。また、長者平古墳群も知られているところであります。

「メロンとお茶」の産地である当市では、近年優良品種への茶園改植がさかんに行われております。茶園となっている長者平遺跡は、改植に伴って昭和53年より5次にわたり、国・県の補助金による調査を進めてまいりました。調査では縄文時代中期後半を中心として住居跡が検出され、多数の遺物が発掘され、長者平の全容が明らかになりつつあります。今後の調査に待つところもありますが、縄文時代、古墳時代の袋井、さらには県中西部での位置づけがなされることでしょう。

相次ぐ開発と共に、埋蔵文化財の調査は全国いたる所で行われております。袋井市もそれに違わず、記録保存という調査は年を追って多くなっております。開発による文化財の有無の確認は毎日のように問い合わせがあります。保存か開発かという問題は古くて新しい問題であります。今回のような調査は農業との両立がなされなくてはなりません。

「物の豊かさから心の豊かさ」が言われるようになってきました。心の豊かさは、文化遺産を正しく継承し、それらの意味を問うことによって生まれるものではないでしょうか。また、一つ一つの文化財が人々の心に歴史を復元できるようになったとき、過去が未来に生きていくのではないのでしょうか。

おわりになりましたが、発掘調査、遺物整理作業、報告書のまとめにあたりまして、ご指導、ご助言、ご協力をいただきました静岡県教育委員会文化課の諸先生方、地主のみなさん、作業員のみなさん、ならびに関係各位に対しまして、深く感謝の意を表する次第であります。

昭和59年3月

袋井市教育委員会

教育長 鈴木 勲 一

例 言

1. 本報告書は、国庫補助金・県費補助金を得て、袋井市教育委員会が行った昭和58年度袋井市長者平遺跡緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は袋井市教育委員会社会教育課文化財係の寺田義昭・吉岡伸夫が発掘担当者となり、静岡県教育委員会文化課（指導主事山下晃）の指導を得て実施した。
3. 資料整理にあたり 足立順司 池田栄史 市原壽文 植松章八 漆畑敏 大橋保夫 加藤賢二 川江秀孝 佐野一夫 柴田稔 渋谷昌彦 鈴木敏則 瀬川裕市郎 中島郁夫 羽仁生保 平野吾郎 前田庄一 松本一男 向坂鋼二 山崎克己 山村宏 渡辺康弘氏ほか、多くの方々から教示を得た。また、挿図の作成に際し、前田庄一 森永明美 高野由美子 原田安江諸氏の手を煩わした。特に菊川町の加藤賢二氏には、何度も袋井市まで足を運んでいただき、出土土器の1片1片についてご指導を受けた。第2章第3節、第3章第3節に示した土器の分類は、加藤氏との共同作業による結果である。
4. 本書の執筆分担は次のとおりである。

第1章第1～3節	第2章第1～3節（石器を除く）	第3章第1～4節……………	吉岡伸夫
第2章第3節—石器—……………			渡辺幸弘
5. 第4～10表「昭和58年度出土石器計測表・石材一覧表(1)～(7)」のうち、石材の同定は伊藤通玄氏（静岡大学教養部）による。
6. 本書の編集は吉岡が行った。
7. 昭和58年度の発掘資料は、すべて袋井市教育委員会が保管している。
8. 調査および本報告書の発刊に係わる事務は、袋井市教育委員会社会教育課文化財係が行った。

目 次

第1章 序 説	1
第1節 調査にいたる経過	1
第2節 地理的・歴史的環境	2
i 地理的環境 ii 歴史的環境	
第3節 発掘調査の方法・経過・調査整理体制	9
i 方法 ii 経過 iii 調査整理体制	
第2章 遺 跡	12
第1節 基 本 層 位	12
第2節 遺 構	12
i 縄文時代の遺構 ii 古墳時代の遺構	
第3節 遺 物	32
i 縄文時代の遺物 ii 古墳時代の遺物	
第3章 ま と め	78
第1節 遺跡の立地について—その地理的条件—	78
i 周辺の地形 ii 飲用水 iii 立地条件	
第2節 集 落 の 構 造	80
i 中期前葉 ii 中期中葉 iii 中期後葉 iv 後期前葉	
第3節 出土土器の型式とその編年について	84
第4節 出土石器・その他の遺物について	88

挿 図 目 次

第1図	長者平遺跡位置図	1
第2図	長者平遺跡周辺地形図およびグリッド配置図	2
第3図	袋井市周辺の縄文時代遺跡分布図	4
第4図	出土土器量からみた長者平・大畑遺跡の盛衰変遷図	5
第5図	小笠沢川流域古墳群分布図・長者平古墳群分布図	6
第6図	昭和58年度発掘区全体図	7
第7図	長者平遺跡の基本層位	12
第8図	昭和58年度第1号住居跡実測図	13
第9図	昭和58年度第1号住居跡出土土器拓影	14
第10図	昭和58年度第2号住居跡実測図	14
第11図	昭和58年度第2号住居跡石囲い炉実測図	15
第12図	昭和58年度第2号住居跡出土土器実測図・拓影	15
第13図	昭和58年度第3号住居跡実測図	16
第14図	昭和58年度第3号住居跡出土土器実測図・拓影(1)	17
第15図	昭和58年度第3号住居跡出土土器実測図・拓影(2)	18
第16図	昭和58年度第4号住居跡実測図	19
第17図	昭和58年度土壌状遺構実測図(1)	21
第18図	昭和58年度土壌状遺構実測図(2)	22
第19図	昭和58年度土壌群の構成	23
第20図	昭和58年度集石遺構実測図	25
第21図	昭和58年度集石遺構土器集中部実測図	26
第22図	昭和58年度集石遺構土器集中部出土土器拓影	26
第23図	昭和58年度集石遺構直上出土土器実測図	27
第24図	昭和58年度第1号墳前方部前端周溝実測図	28
第25図	昭和58年度第1・2号墳出土遺物実測図・拓影	29
第26図	昭和58年度第2号墳主体部実測図	30
第27図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—b・l類土器 把手 脚部実測図	35
第28図	昭和58年度出土中期Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群—a類土器拓影	36
第29図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—a・b・c類土器実測図・拓影	37
第30図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—c・d類土器拓影	38
第31図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—d類土器拓影	39
第32図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—d・e類土器拓影	40
第33図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—f類土器拓影(1)	41
第34図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—f類土器拓影(2)	42
第35図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—g類土器拓影	43
第36図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—e・f・g類土器拓影	44
第37図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—g類土器実測図・拓影	45

第38図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—h類土器拓影(1)……………	46
第39図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—h類土器拓影(2)……………	47
第40図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—h類土器拓影(3)……………	48
第41図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—i類土器拓影(1)……………	49
第42図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—i類土器拓影(2)……………	50
第43図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—h・i類土器実測図・拓影……………	51
第44図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—j類土器拓影(1)……………	52
第45図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—j類土器拓影(2)……………	53
第46図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—j・k類土器拓影……………	54
第47図	昭和58年度出土中期Ⅲ群—l類土器 底部実測図・拓影……………	55
第48図	昭和58年度出土中期Ⅲ群土器 把手実測図・拓影……………	56
第49図	昭和58年度出土土器片円盤・土器片錘拓影……………	57
第50図	昭和58年度出土石器実測図(1)……………	62
第51図	昭和58年度出土石器実測図(2)……………	63
第52図	昭和58年度出土石器実測図(3)……………	64
第53図	昭和58年度出土石器実測図(4)……………	65
第54図	昭和58年度出土石器実測図(5)……………	66
第55図	昭和58年度出土石器実測図(6)……………	67
第56図	昭和58年度出土石器実測図(7)……………	68
第57図	昭和58年度出土石器実測図(8)……………	69
第58図	長者平遺跡周辺の湧水・湛水地……………	78
第59図	長者平集落の構造……………	83
第60図	長者平遺跡出土中期Ⅲ群土器の編年……………	86

表 目 次

第1表	中遠地方の主要縄文時代遺跡一覧表……………	5
第2表	昭和58年度土壌状遺構一覧表……………	20
第3表	昭和58年度出土石器・石鏃組成表……………	61
第4表	昭和58年度出土石器計測表・石材一覧表(1)……………	71
第5表	昭和58年度出土石器計測表・石材一覧表(2)……………	72
第6表	昭和58年度出土石器計測表・石材一覧表(3)……………	73
第7表	昭和58年度出土石器計測表・石材一覧表(4)……………	74
第8表	昭和58年度出土石器計測表・石材一覧表(5)……………	75
第9表	昭和58年度出土石器計測表・石材一覧表(6)……………	76
第10表	昭和58年度出土石器計測表・石材一覧表(7)……………	77
第11表	長者平遺跡発掘住居跡集成表……………	81

図 版 目 次

- 図版 1 長者平遺跡遠景（南方より） 長者平遺跡遠景（東方丘陵上より）
- 図版 2 G・H 6・7・8・9 区第Ⅲ b 層上面遺構検出状況（北方より） G・H 6・7・8・9 区完掘状況（北方より） G・H 6・7・8・9 区遺跡基盤層上面遺構検出状況（北方より） E・F 6・7・8・9 区遺跡基盤層上面遺構検出状況（北方より）
- 図版 3 昭和58年度第 2 号住居跡近景（北方より） 昭和58年度第 2 号住居跡石囲い炉検出状況（西方より） 昭和58年度第 2 号住居跡石囲い炉組み石の状況
- 図版 4 昭和58年度第 3 号住居跡近景（東方より） 昭和58年度第 3 号住居跡完掘状況（東方より） 昭和58年度第 4 号住居跡近景（北方より）
- 図版 5 G・H 8・9 区付近昭和58年度土壌群の分布状況（北西方より） 昭和58年度土壌状遺構近景（第 8 号 第12・13号 第14号 第15・16号 第17・18号 第19号）
- 図版 6 昭和58年度土壌状遺構近景（第20号 第22号 第23号） O15区昭和58年度柱穴状遺構検出状況（西方より） I 7 区礫集積状況 昭和58年度集石遺構土器集中部検出状況（南方より） 昭和58年度集石遺構直上（第Ⅲ b 層上面）遺構検出状況（北方より）
- 図版 7 昭和58年度集石遺構直上（第Ⅲ b 層上面）土器出土状況（北東方より） 昭和58年度集石遺構直上土器出土状況近景（西方より） 昭和58年度集石遺構直上土器出土状況近景（西方より）
- 図版 8 G 7 区付近昭和58年度集石遺構検出状況（西方より） G 7 区付近昭和58年度集石遺構検出状況（北方より） F 7 区付近昭和58年度集石遺構検出状況（北方より）
- 図版 9 昭和58年度集石遺構空白部近景（東方より） 昭和58年度集石遺構空白部西壁の状況 昭和58年度集石遺構近景（東方より） 昭和58年度集石遺構の状況 昭和58年度集石遺構焼礫分布状況 縄文土器出土状況 石器（磨製石斧・石棒片）出土状況
- 図版 10 昭和58年度第 1 号墳前方部前端周溝完掘状況（東方より） 昭和58年度第 2 号墳周溝検出状況（東方より） 昭和58年度第 2 号墳主体部検出状況（西方より）
- 図版 11 昭和58年度第 2 号墳主体部近景（西方より） 昭和58年度第 2 号墳鉄鏝出土状況 昭和58年度第 2 号墳前溝検出状況（西方より） 昭和58年度第 2 号墳封鎖施設近景（東方＝主体部側より） 昭和58年度第 2 号墳前溝状遺構近景（西方より） 発掘調査風景
- 図版 12 昭和58年度集石遺構直上出土土器 昭和58年度出土脚部 昭和58年度出土中期Ⅲ群—b 類土器
- 図版 13 昭和58年度第 3 号住居跡出土土器
- 図版 14 昭和58年度第 1・2・3 号住居跡出土土器 昭和58年度集石遺構土器集中部出土土器
- 図版 15 昭和58年度出土中期Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群—a 類土器 昭和58年度出土中期Ⅲ群—a 類土器
- 図版 16 昭和58年度出土中期Ⅲ群—a・b・c 類土器 昭和58年度出土中期Ⅲ群—d 類土器
- 図版 17 昭和58年度出土中期Ⅲ群—d 類土器 昭和58年度出土中期Ⅲ群—d・e 類土器
- 図版 18 昭和58年度出土中期Ⅲ群—e・f 類土器 昭和58年度出土中期Ⅲ群—f 類土器
- 図版 19 昭和58年度出土中期Ⅲ群—f 類土器 昭和58年度出土中期Ⅲ群—f・g 類土器
- 図版 20 昭和58年度出土中期Ⅲ群—g 類土器 昭和58年度出土中期Ⅲ群—e・f・g 類土器
- 図版 21 昭和58年度出土中期Ⅲ群—g 類土器

- 図版22 昭和58年度出土中期Ⅲ群—h類土器
- 図版23 昭和58年度出土中期Ⅲ群—h類土器
- 図版24 昭和58年度出土中期Ⅲ群—h・i類土器 昭和58年度出土中期Ⅲ群—i類土器
- 図版25 昭和58年度出土中期Ⅲ群—i類土器 昭和58年度出土中期Ⅲ群—h・i類土器
- 図版26 昭和58年度出土中期Ⅲ群—h類土器 昭和58年度出土中期Ⅲ群—i・j類土器
- 図版27 昭和58年度出土中期Ⅲ群—j類土器
- 図版28 昭和58年度出土中期Ⅲ群—j類土器 昭和58年度出土中期Ⅲ群—j・k・l類土器
- 図版29 昭和58年度出土中期Ⅲ群—l類土器・底部 昭和58年度出土把手
- 図版30 昭和58年度出土把手
- 図版31 昭和58年度出土石鏃・ポイント 昭和58年度出土ポイント・石銛・石錘・石匙・スクレイパー・磨製石斧・局部磨製石斧・打製石斧
- 図版32 昭和58年度出土磨製石斧・敲打石・凹石 昭和58年度出土磨石
- 図版33 昭和58年度出土磨石 昭和58年度出土石錘
- 図版34 昭和58年度出土石棒 昭和58年度出土石皿

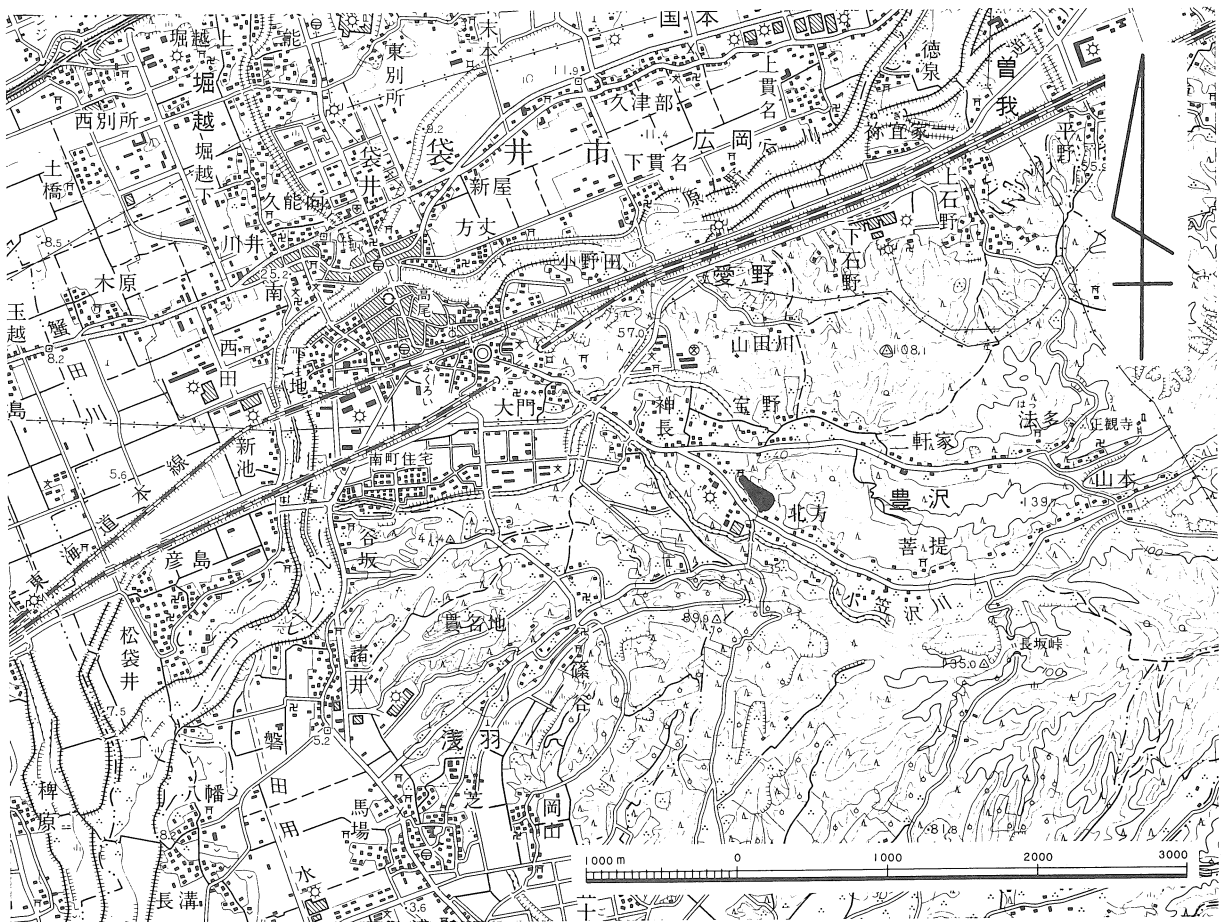
第1章 序 説

第1節 調査にいたる経過

長者平遺跡は東海道線「袋井」駅から東方へ約2.5km 離れた小笠山丘陵の西山麓に位置する。行政地番は袋井市豊沢字北方710番地外にあたる。「袋井」駅から路線バス「菩提經由法多山（はったさん）行」に乗り、15分程走ると「菩提西」のバス停に着く。バス停の北側には一面茶畑の営まれる丘陵地が広がっているが、そこが長者平遺跡である。

袋井市豊沢地区は市内有数の茶産地であり、近年各農家は茶の需要増加をめざして、優良品種への転換を行ってきた。苗の植え変えには、通常重機による天地返し（土壌の攪拌）が伴い、掘削の深さは地表下約1.5m にまで達する。ゆえに遺跡内における茶園改植事業では、常に埋蔵文化財の取り扱いが深刻な問題となっている。

こうした状況下、袋井市教育委員会は、昭和53年度以降、4次にわたり長者平遺跡の緊急発掘調査を実施してきた（吉岡他1979・1980 永井1981 永井・松井1982）。調査総面積は約5,000㎡に上っている。その後地元では遺跡内に防霜ファンを共同設置し、茶園改植は1年間休止状態であったが、昭和58年度活発化した。袋井市教育委員会は国・県の補助金を得て、再び長者平遺跡の記録保存に努めることとなった。



第1図 長者平遺跡位置図

第2節 地理的・歴史的環境

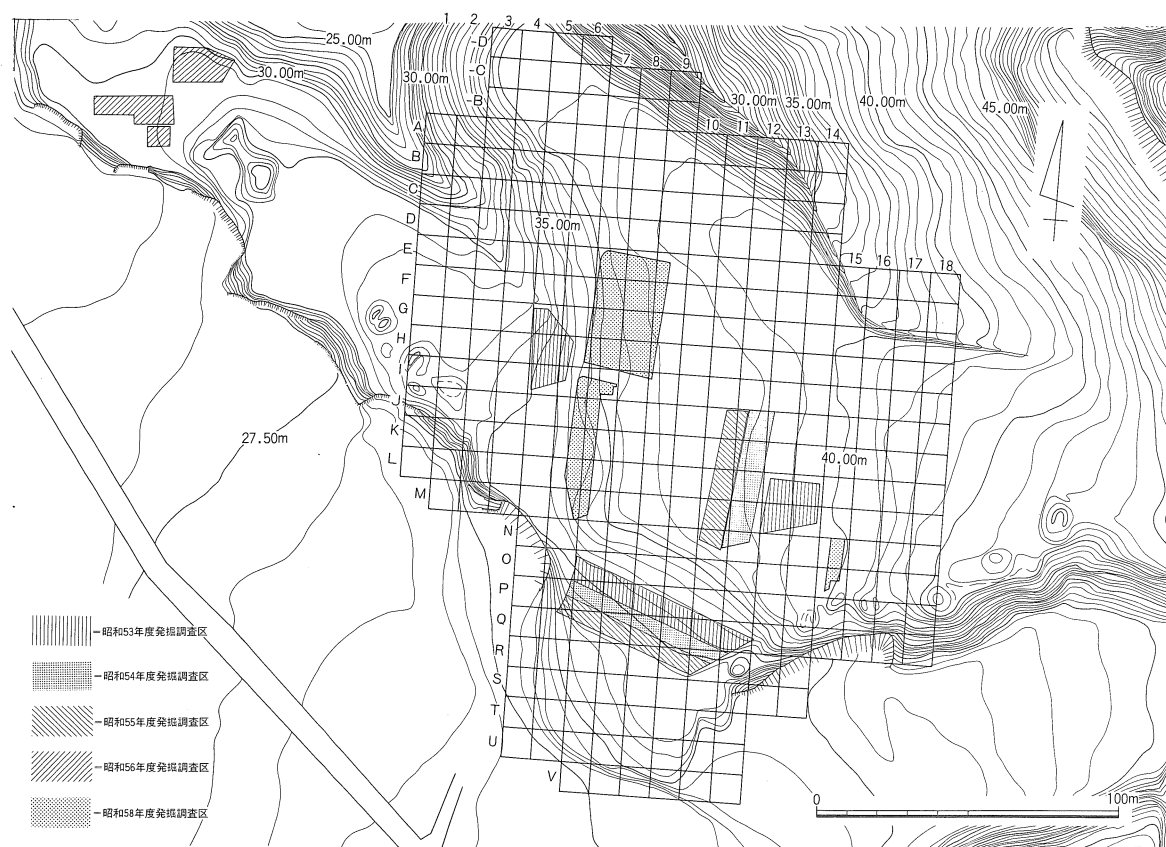
i) 地理的環境

袋井市周辺域の地形・地質は、北部から東部にかけて丘陵地（大日砂層―鮮新世 北小笠累層・曾我累層―鮮新世・更新世初期）が続き、西部に磐田原台地（洪積台地）、南東部に長者平遺跡の立地する小笠山丘陵（小笠山礫層―更新世中期）が分布している（大庭1983）。

小笠山礫層は北東から南西へ5～10度傾き、主に河成礫層からなる。部分的に砂層・内湾成泥層を挟む。現在、8枚の主要泥層が確認されているが、下から4枚目の泥層（法多山泥層）は袋井市山田川・二軒屋から法多・山本・大須賀町東大谷にかけて広がり、その上位の地磁気編年はブルニュヌス期（約73万年前から現在）と松山期（約73～167万年前）の境界付近にあたるという（石田1980 加藤1981）。若干の花崗岩・チャート・粘板岩質の礫を含むが、風化が激しく石器材としては適さない、大小の砂岩礫が圧倒的である。礫はよく円磨され、近距離にある大小河川（天竜川・太田川・原野川・菊川等）とその組成を異にすることから、小笠山礫層の起源は遠く東方の大井川に由来すると考えられている（加藤1981）。

小笠山（標高264m）の西南山麓は、小笠沢川・三沢川等に分断され、3条の尾根筋が、長くゆるやかにのびている。尾根の裾部はさらに細かく開析されて、支陵と支谷が複雑に入り組んだ地形を呈する。両河川の下流域（袋井市高尾・大門・貫名地・岡崎・山崎）には比較的規模の大きな河岸段丘が広がり、長者平遺跡は小笠沢川中流の北岸に形成された段丘上（標高30～40m）に立地している。

長者平遺跡周辺の地形を見ると、段丘は東西に細長く、面積約21,000㎡と小さい。北方より入り込



第2図 長者平遺跡周辺地形図およびグリッド配置図

む2条の小支谷は、ゆるやかな傾斜をもって低地へと連なる。南側には段丘縁が続くが、遺跡付近の低地との比高差は約7mと低い。東側に山脚末端が迫り、段丘は幅を減じながら、西方約250mで舌状支陵の先端部に至る。段丘の北・南側には法多沢川、小笠沢川が西流し、これら2条の小河川を挟んで、北・南・東方に丘陵地が広がる。太田川流域までは小笠沢川に沿って西方約4kmである。

ii) 歴史的環境

縄文時代 中遠地方に分布する縄文時代の遺跡数は60数カ所を数える(静岡県教委1979)。今のところ縄文草創期・早期・前期に属する遺跡は少く、原野谷川流域の段丘上(掛川市萩ノ段・瀬戸山・向山遺跡・袋井市陳屋北遺跡)や磐田原台地上(磐田市土取場遺跡)に数箇所見られるのみである。中期初頭から遺跡数は増加し始め、中期後葉に至って集落の数・規模とも著しく拡大する。その背景には、縄文海進が示すような気候の温暖化と、自然条件の変化による食糧資源の増大があったと考えられる。後期前葉を境として、再び遺跡数は減少するが、この時期、晩期まで続継するいわゆる複合遺跡が、沖積低地や古磐田海^{**}に面した台地縁(磐田市見性寺・西・石原貝塚)・段丘上(袋井市大畑遺跡・森町天宮神社遺跡)に成立する。晩期中葉以降まで続く遺跡は少ない。中遠地方の主要遺跡とその形成時期を第1表に整理してみた。

60数ヶ所の縄文遺跡は、太田川流域の沖積低地を取り囲むようにして、5つの遺跡群(磐田原台地南半・北半・太田川上流域・原野谷川流域・小笠山西南山麓遺跡群)を形成している。磐田原台地北半遺跡群では明確でないが、各遺跡群には2～3の大規模集落(中核遺跡)があり、その形成時期は互いに長期間重複しない。中期末葉・後期前葉以降、大規模集落の立地は、丘陵地の奥部から沖積低地・古磐田海近くに移動する傾向にあり、鹹水域に棲息する貝類の補食など、後期になって多様化した漁撈・生産活動に起因するものであろう。遺跡群内の大規模集落は基本的に1時期1集落と考えられ、遺跡群は縄文集落の生産領域に対比できると考えているが、中期後葉には、複数の集落が併存していた可能性もあり、日常的な生産領域はより小さかったと推定される(吉岡1983)。

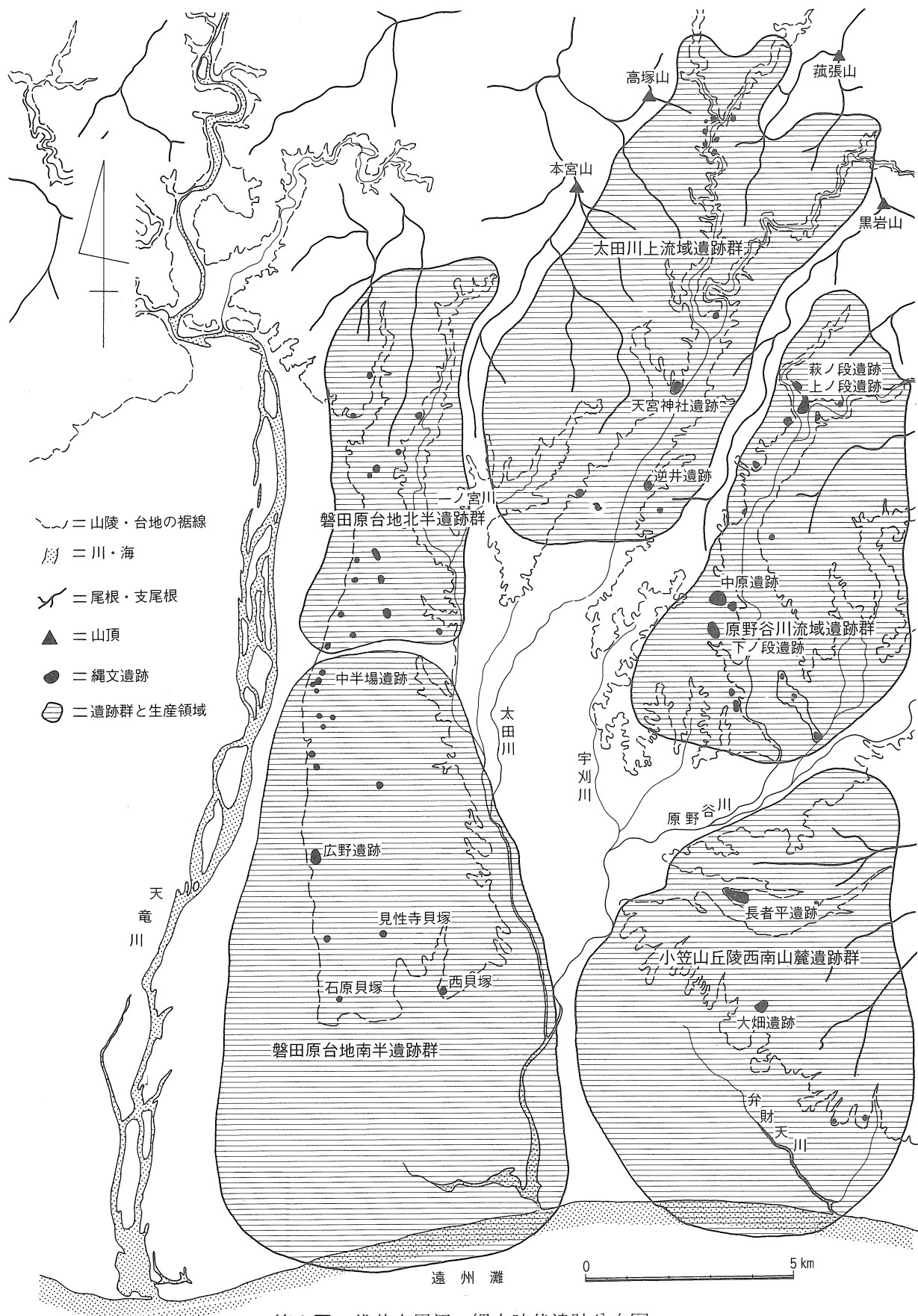
小笠山西南山麓遺跡群の中核をなす長者平・大畑遺跡^{****}の盛衰変遷を第4図に示した。小笠沢川流域に分布する掛の上(松井1983)・大門Ⅰ(松井1983)・山本遺跡や大須賀町小谷田・愛宕山遺跡からも、少量の土器片・石器(石鏃・石錘等)・黒耀石片が採集されているが、遺構は明確でなく、遺跡の規模は小さかったと思われる。

*) 萩ノ段遺跡からは縄文草創期に属する有舌ポイントと山形・格子捺型文土器(早期前半)が発見されている(久永1976)。瀬戸山遺跡採集の捺型文土器は細久保式土器(早期中葉)に、また土取場遺跡の捺型文土器は高山寺式土器(早期中葉)に対比される(加藤賢二・山崎克己両氏の教示による)。向山遺跡からは茅山式土器(早期末葉)が(加藤賢二氏の教示による)、陳屋北遺跡からは茅山式土器・北白川下層Ⅱ式土器(前期後葉)が出土している(山村他1977)。

**) 縄文海進により海水が入り込み、太田川流域(浅羽・今ノ浦低地)は、潟湖(ラグーン)を形成していた。『市原1978』ではこの潟湖を古磐田海と呼んでいる。磐田市西貝塚・袋井市大畑遺跡で確認された貝塚はヤマトシジミを主体とし(加藤1961・金子1981)、縄文時代後期、すでに低塩分化していたことを示している。

***) 大畑遺跡・西貝塚周辺には泥炭層が発達し、長い間湿地であったことを示している(加藤1981 市原壽文氏の教示による)。晩期中葉になって人々は段丘・台地を降り、こうした泥炭層の堆積地周縁に移り住んだとすれば、現在沖積層に覆われている小笠山西南山麓等に、縄文晩期の遺跡が埋没している可能性もあながち否定できない。

****) 大畑遺跡は長者平遺跡から大きな尾根筋を挟んで南へ約2.5km 離れ、浅羽低地近くの段丘上に立地する。中期前葉から晩期初頭にいたる竪穴・平地住居、埋葬人骨、地点貝塚等が検出されている。包含層の分布域は約15,000㎡におよび、出土土器量から見た遺跡の盛期は4時期(中期前・末葉・後期前・末葉)認められる。ちなみに大畑遺跡は遠江地方最東端の縄文貝塚である(岡本1955 市原1978・1979・1981・1982)。



第3図 袋井市周辺の縄文時代遺跡分布図

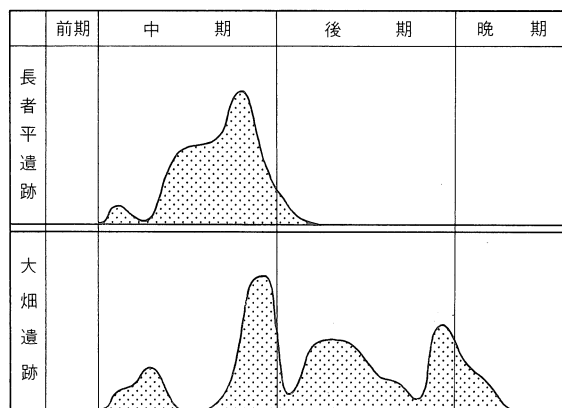
(『袋井市史—通史編—』より引用)

遺 跡 名	所 在 地	形 成 時 期	文 献
萩ノ段遺跡	掛川市原里萩ノ段	早期前葉・中期前葉～後葉	(久永他1976)
上ノ段遺跡	掛川市原里高山(原里小学校)	中期後葉～晩期前葉	
中原遺跡	掛川市吉岡	中期前葉～後葉	(平野他1982)
下ノ段遺跡	掛川市吉岡下ノ段	中期前葉～後葉	
瀬戸山遺跡	掛川市和田岡瀬戸山	早期中葉・中期前葉～後葉	
里在家遺跡	掛川市倉真里在家	後期前葉～晩期前葉	
長者平遺跡	袋井市豊沢北方	中期前葉～後期前葉	(吉岡他1979・1980 永井1981 永井・松井1982)
大畑貝塚	袋井市岡崎大畑	中期前葉・中期後葉～晩期前葉	(岡本1955 市原1978・1979・1981・1982)
天宮神社遺跡	周智郡森町天宮	中期前葉・中期後葉～晩期	(戸塚1971)
逆井遺跡	周智郡森町睦実鴨谷	後期前葉・後期後葉	(大橋1983)
中半場遺跡	磐田市岩田寺谷	早期中葉・中期前葉～後期前葉	
広野遺跡	磐田郡豊田町広野	中期後葉	(大橋1981)
見性寺貝塚	磐田市見付加茂川	後期前葉～晩期	(平野1974)
石原貝塚	磐田市中泉石原	後期前葉～晩期	(市原1967)
西貝塚	磐田市西貝塚	中期前葉・後期前葉～晩期前葉	(麻生1961)

第1表 中遠地方の主要縄文時代遺跡一覧表

古墳時代 太田川・原野谷川流域の前・中期古墳は、今ノ浦低地を望む磐田市御厨新貝の丘陵上と、原野谷川西岸の台地上（各和原台地）に集中する。現在、袋井市域内で明らかに中期にまで遡る古墳は発見されていない。

太田川の東岸、現在の森町飯田付近から袋井市・浅羽町にかけて分布する後期群集墳・横穴群は中小河川の形成した沖積低地を単位として、8つのまとまり（一ノ宮川流域・太田川中流域・宇刈川上流域・宇刈川中流域・原野谷川中流域・小笠沢川流域＝長者平古墳群を含む・弁財天川上流域・弁財天川中流域）に区分される。一ノ宮川流域・太田川中流域・宇刈川上流

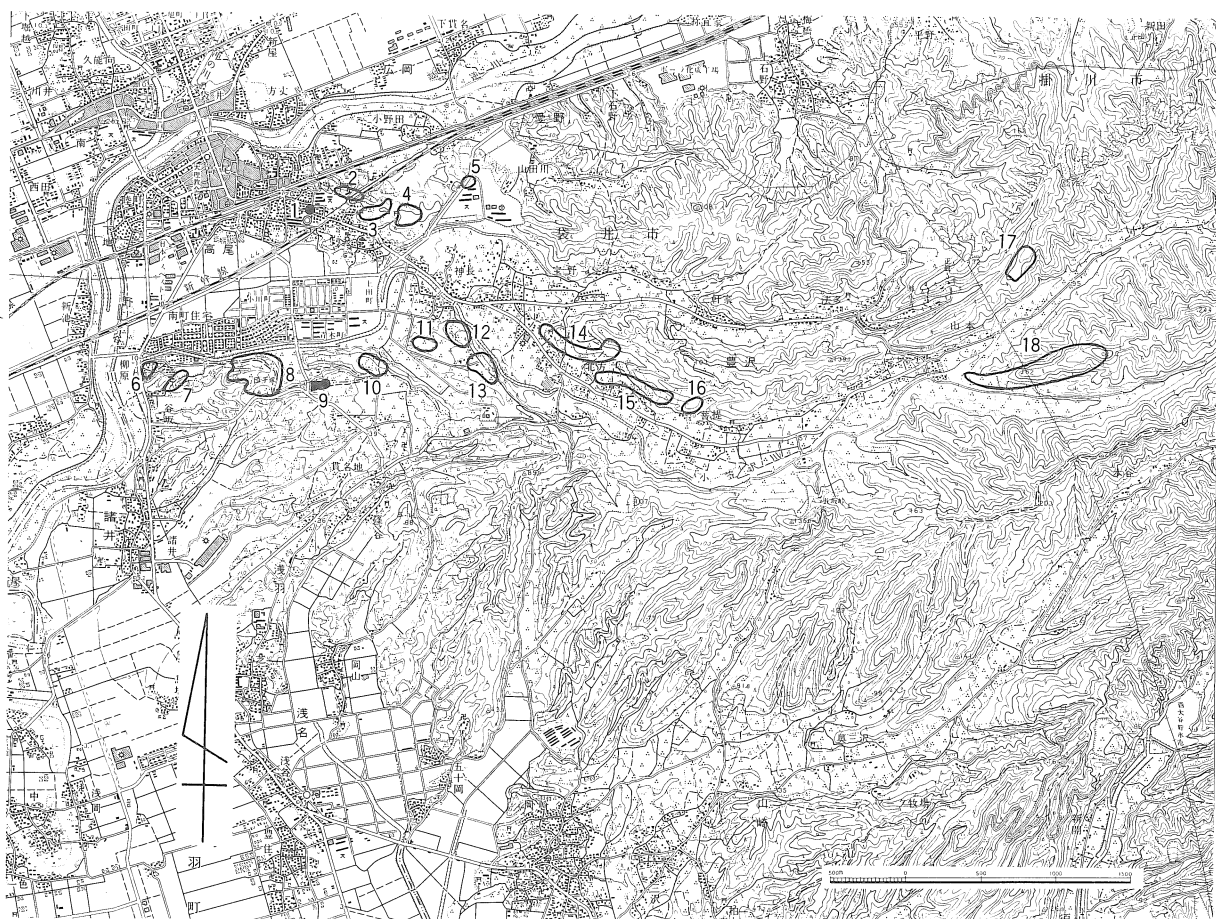
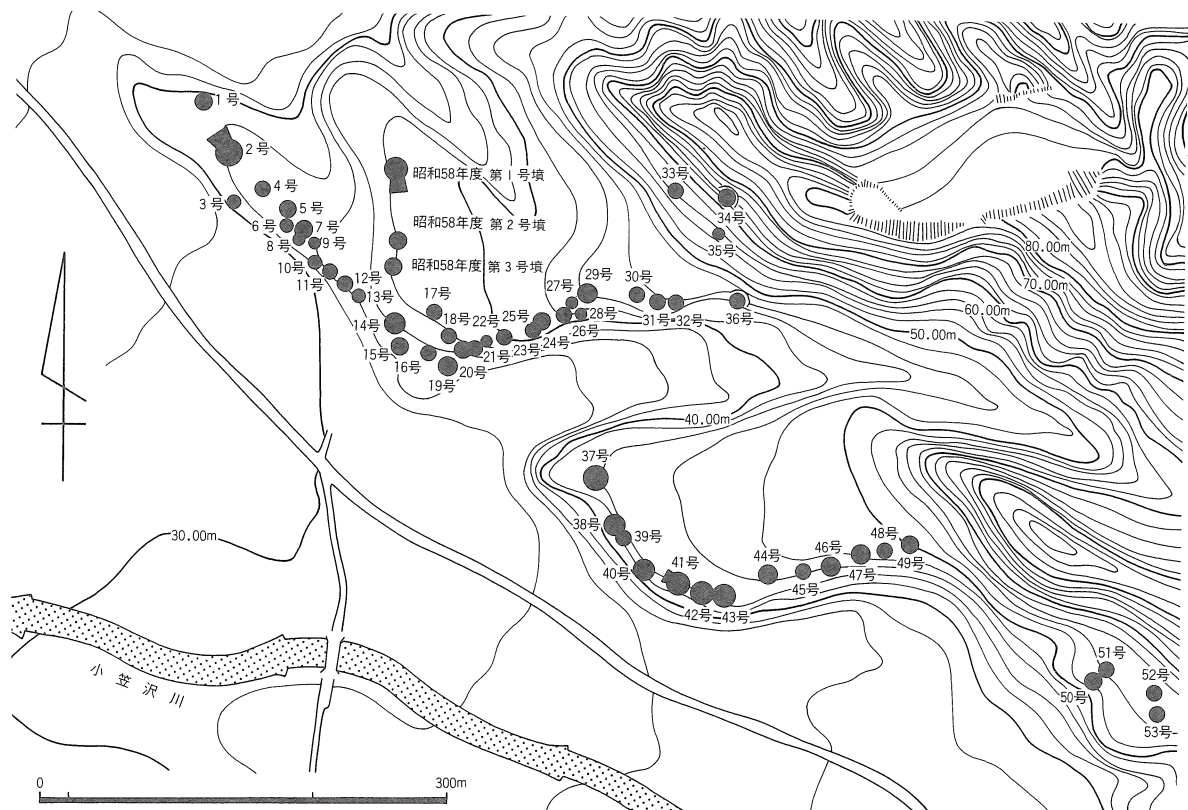


第4図 出土土器量からみた長者平・大畑遺跡の盛衰変遷図

*) 松林山古墳（前期 前方後円墳）を中心に、4基の大型中期古墳—新貝第17号墳（円墳）・同18号墳（前方後円墳）・同19号墳（円墳）・高根山古墳（円墳）が群集する。

**) 東西0.7km、南北2.3km の範囲内に前方後円墳4基（瓢塚・行人塚・各和金塚・吉岡大塚古墳）と円墳1基（春林院古墳）が分布する。吉岡大塚古墳はいわゆる帆立貝型を呈する（植松1980）。

***）敷地川流域や原野谷川北岸の丘陵先端部に、独立して立地する小前方後円墳（川会坊主山・宇佐八幡境内・権現山・浅間神社古墳等）は、中期古墳から後期群集墳に移行する過渡期に成立した首長墓と考えたい。



- 1 大門大塚古墳 2 地藏ヶ谷古墳・横穴群 3 大門山古墳群 4 渋垂神社上古墳群 5 金山横穴群
 6・7 谷坂古墳群 8 響ヶ谷古墳群 9 高尾向山6号墳 10 高尾向山古墳群 11～13 雲座古墳群
 14～16 長者平古墳群 17 菩提山古墳群 18 山本山古墳・横穴群

第5図 小笠沢川流域古墳群分布図・長者平古墳群分布図

(静岡県教委『遠江の横穴群』に一部加算、引用)



第6図 昭和58年度発掘区全体図

第Ⅲb層上面検出の遺構を（Ⅰ） 遺跡基盤層上面検出の遺構を（Ⅱ）と表記した

域では群集墳に比べむしろ横穴群の分布が顕著である^{*}。

小笠沢川流域古墳群は2基の単独墳（大門大塚古墳＝円墳 高尾向山第6号墳＝前方後円墳）と10余箇所の群集墳、4箇所の横穴群からなり、下流域北岸・南岸・中流域北岸（長者平古墳群）・南岸・上流域最奥部に、5つの古墳群グループを構成している。相対的に築造期の遡る単独墳・群集墳（雲座古墳群D単位群・地藏ヶ谷・金山古墳群）は下流域に成立し、古墳群の形成範囲は、時期が降るにしたがって、順次中・上流域に拡大していったと考えられる^{****}。

長者平古墳群は下流域より4番目の古墳群グループに属し、小前方後円墳3基・円墳55基からなる。その形成時期は6世紀後半から奈良時代におよぶ。

昭和48年、掛の上遺跡から7世紀前半代に属する掘立柱建物群が発見されたが、小笠沢川流域における古墳時代の集落調査例は皆無に等しい。下流域の両岸の段丘上より土師器・須恵器片が採集されているが、古墳の副葬品か、集落に伴ったものか明らかでない^{*****}。

第3節 発掘調査の方法・経過・調査整理体制

i) 方法

昭和53～55年度の発掘調査では、各年度独立した発掘区画を設定したため、年度を越えた遺構の位置関係、遺物の出土地点等の対比は、非常に煩雑な作業であった。よって昭和58年度の調査は、今後永続的に使用可能な発掘区画を確定することから始めた。

まず見通しのきく段丘面のほぼ中央に測量用原点（I 8ポイント）を設定し、原点を通り磁北へ向うY軸と、Y軸に直交するX軸により、遺跡全面を1辺10mの方形グリッド（大グリッド）に区画した。X軸を西から東へ1・2・3……、Y軸を北から南へD・C・B・A・B・C……と呼び、大グリッドの名称は、X・Y軸の組み合わせにより表記される（例えばE7・J6区等）。今後実施される長者平遺跡の発掘調査では、この大グリッドを基本調査区としてゆきたい。またX・Y軸の交点（ポイント）名称は、大グリッド北東端をもって代表させ、ポイント名称とした。（E7区の北東端交点はE7ポイントとなる）。大グリッドはさらに1辺5mの方形グリッド（小グリッド）に4分割され、北西―南西―北東―南東の順でa・b・c・d区と名付けた。小グリッドは遺構実測・遺物取り上の基本単位であり、小グリッド名は必ず大グリッドに併記される（例えばE7―a・J6―c区等）。小グリッドのポイント名称は、大グリッドと同様、小グリッド北東端を代表させ呼ぶこと

* 一ノ宮川流域には山下（3群8基）・片瀬ハンサ山（2群7基）横穴群が、太田川中流域には谷口（39基）・観音堂（23基）横穴群が、宇刈川上流域には宇刈（14群83基）・春岡（2群24基）横穴群が分布する。これら3地域に長者平古墳群のような大規模群集墳は成立しない。

** 下流域北岸グループ＝大門大塚古墳・地藏ヶ谷・金山・大門山・渋垂神社上古墳群 地藏ヶ谷・金山古墳群・横穴群
下流域南岸グループ＝高尾向山第6号墳・谷坂・響ヶ谷・高尾向山古墳群 中流域南岸グループ＝雲座古墳群 中流域北岸グループ＝長者平古墳群 上流域最奥部グループ＝菩提山・山本山古墳群 菩提山・山本山横穴群。

*** 大門大塚古墳の築造期は出土した須恵器坏身・坏蓋からみて、6世紀を降らないものと思われる（川江1979）。雲座古墳群D単位群や、横穴群と同一の丘陵頂部に成立した地藏ヶ谷・金山古墳群は4～5基の直葬墳からなり、その形成期は6世紀前後ごろと考えられている（川井1972・1976）。

**** 山本山古墳群・横穴群は同一丘陵に立地する。昭和52年発掘調査が実施され、調査者は「第Ⅲ期中葉（須恵器 遠考研編年）（山村1966）から古墳群が形成され、第Ⅲ期後半ないし第Ⅳ期前半まで続き、第Ⅳ期前半から横穴群が営まれていった」（平野 佐藤1978）と結論づけられている。

***** 川井正一氏の教示による。

にした（E7ポイントはE7-Cポイントと同一）。

調査は大グリッドの北・東側に土層観察用の帯を残し、改植予定範囲をすべて平面的に分層発掘した。掘り下げ・遺構確認・遺物の取り上げは、昭和53～55年度の基本層位（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa・b層）（第2章第1節参照）に準拠して行ったが、支谷斜面（G6・7 H6・7区付近）には基本層位と異なる細互層が形成されていたため、色調・土質を併記し、個別に土層名を定めた。

遺構は大グリッド別に、柱穴遺構をピット1・2・3……その他の遺構をすべて001・002・003と通し番号を付して呼び、現地で確認されたものから200分の1縮尺の略測図に記入して、遺構・遺物が混同しないよう努めた。竪穴住居跡、土壇状遺構は、資料整理が完了した時点で、昭和58年度第1・2……号と名称を変更した（例えば昭和58年度第1号住居跡 昭和58年度第12号土壇等）。古墳は北に位置するものから順に昭和58年度第1・2・3号墳と仮称した。

遺物は遺構別、基本層位別に取り上げた。

現地図面は小グリッド単位、20分の1縮尺を基本とし、より詳細な図面が必要な場合は、随時10分の1縮尺図を作成した。二つの小グリッドにわたる遺構は、原則的に西・北側の実測図面に記入することとした。実測作業は遺構確認面が2面以上あったため、すべてやり方方式により行い（1m方眼）、平板は一切使用しなかった。

記録写真はブローニーサイズ原画（白黒） 35mm サイズ原画（白黒・カラーリバーサル）で撮影した。

ii) 経 過

昭和58年10月15日～22日 G・H6・7・8・9区に発掘基本杭・やり方（標高38.00m）を設定。

H6・7・8・9区の第Ⅰ層を除去した。遺物の出土量は少ない。

10月24日～29日 G・H6・7・8・9区を第Ⅲ層上面まで掘り下げ、第2号墳の周溝を検出した。

G7区では第Ⅱ層が厚く推積し、第Ⅲ層との境界から比較的多量の縄文土器片が出土する。I・J6・7区に発掘基本杭を設定。

10月31日～11月5日 G・H8・9区で、20数箇所の土壇状遺構・第3・4号住居跡を完掘した。

H8-a区第Ⅲa層中より石棒片出土。I・J6・7区の第Ⅰ層を除去し始める。

11月7日～12日 G7区で集石遺構を検出。集石上から復元可能な縄文土器片が一括出土した。集石遺構を露出し、写真撮影。G・H6・7・8・9区の遺構全体図作成。I・J6・7区では第Ⅲ層上面まで掘り進み、第2号墳の封鎖施設を検出した。

11月14日～19日 I・J6・7区で古墳時代の遺構を写真撮影。実測作業に取りかかる。G・H6・7・8・9区を埋め戻し、E・F6・7・8・9区に発掘基本杭、やり方（標高37.50・38.00m）を設定した。

11月21日～26日 E・F6・7・8・9区の第Ⅰ層を除去。第1号墳（前方後円墳？）の前方部周溝を検出した。I・J6・7区に、縄文時代の遺構は認められない。

11月28日～12月3日 N・O15区を一気に発掘調査した。西側は攪乱されていたが、段丘縁の古墳の周溝、古墳前溝状遺構・縄文土器（中期後葉）を伴う柱穴状遺構を検出。15区付近まで縄文時代の遺構がおよんでいることを確認した。第1号墳周溝を完掘。写真撮影、実測作業。I・J6・7区を埋め戻し。K6・7・I7区に発掘基本杭を設定した。

12月9日～17日 I7-c・d区で第2号墳の主体部を発掘したが、攪乱されている。南接して掘り方状遺構（古墳主体部？）を検出。N・O15区を埋め戻す。E・F6・7・8・9区は深くまで耕作されていたため、支谷斜面（E7区）を除き、遺跡基盤層上面まで掘り下げ、初めて

遺構確認作業を行った。F 8－a 区で石囲い炉（第 2 号住居跡）を検出。

12月19日～27日 E 8－a 区で焼土・焼礫炉（第 1 号住居跡）を検出。第 2 号住居跡の石囲い炉北側から石皿が出土した。K 6・7 区を完掘。

昭和59年 1 月 5 日～14日 E・F 8・9 区の土壇状遺構（3 箇所）・30 数箇所の柱穴状遺構を発掘し、E 7 区では集石遺構を露出させた。E・F 6・7・8・9 区の完掘状況写真を撮影。遺構（全体図）の実測作業に取りかかる。K 6・7 区を埋め戻し、L・M 6・7 区で第 3 号墳の封鎖施設を検出した。第 2 号墳同様、不定楕円礫を不規則に積み上げている。

1 月 17 日～23 日 E・F 6・7・8・9 区遺構全体図の実測を完了。雪の降る日が多く、作業は困難をきわめた。E 7 区の集石遺構を除去した後、L・M 6・7 区の完掘状況写真を撮影し、昭和58年度発掘現地作業のすべてを終了した。

iii) 調査・整理体制

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

指導主事 山下 晃

調査実施機関 静岡県袋井市教育委員会

教 育 長 鈴木勲一

社会教育課長兼文化財係長 永田新作

指導主事 寺田義昭（発掘調査担当者） 五島康司

文化財係 吉岡伸夫（発掘調査担当者） 永井義博

松井一明

現 地 調 査 （資料整理・記録）浅井征江 （調査）金原ひさ 寺田松江 仲根わか 早川はま 仲根世始子 鈴木まさ子 名倉保子 窪野志奈子 寺田矩江 早川里美 金原新一 早川ハルミ 栗田みね子 樽松光子 安間しげ子 永田のぶ枝
（発掘基本杭設定）鈴木咲子 寺田ひで子 （遺構実測）早川保子 山下悦子 船越スミ子 高橋初江 大村かつ美 金原とみ江（以上袋井市豊沢）

資 料 整 理 早川保子 金原とみ江 渡辺幸弘（国学院大学学生） 山下里美（立正女子短大学生） 浅井寿美子（武蔵野美術短大学生）

第2章 遺 跡

第1節 基本層位

長者平遺跡の立地する河岸段丘上では、遺跡基盤層＝小笠山礫層（黄褐色礫層）上に、3層の自然堆積層が認められる。上層より示せば第Ⅰ層＝耕作土（暗褐色土層）—第Ⅱ層（黒色泥質土層）—第Ⅲ層（暗褐色砂礫混り土層）である。

第Ⅰ層には縄文時代から古墳時代、中・近世の遺物が混在し、層厚20～30cmを測る。茶園耕作の深いところでは、第Ⅱ・Ⅲ層は失われ、第Ⅰ層下すぐに遺跡基盤層が露出する。第Ⅱ層は段丘斜面で厚く（30cm前後）、頂部では薄い（5～15cm）。古墳時代以降の遺構は、主に第Ⅱ層を覆土とするが、比較的多くの縄文土器、石器類も認められる。部分的（段丘斜面等）に、小砂礫を多く含む。第Ⅲ層は砂礫質の強い上層（第Ⅲa層）と色調に黄色味を増し、遺跡基盤層へ漸移的に変化する下層（第Ⅲb層）に区分される。第Ⅲb層は第Ⅲa層に比べ著しく薄層（5cm未満）である

が、縄文時代の遺物のみを包含し、第Ⅲa・b層が竪穴住居跡・土壇状遺構等の主体的な覆土となる。北方より入り込む小支谷の斜面（G・H6・7区付近）では、第Ⅱ層下にレンズ状を呈する第Ⅲa・b層類似の土壤が細互層（層厚30～50cm）を形成していた。縄文時代以降、段丘頂部における第Ⅱ・Ⅲ層の推積は、段丘斜面に比べ、相対的に未発達であったと考えられる。

長者平遺跡の基本層位

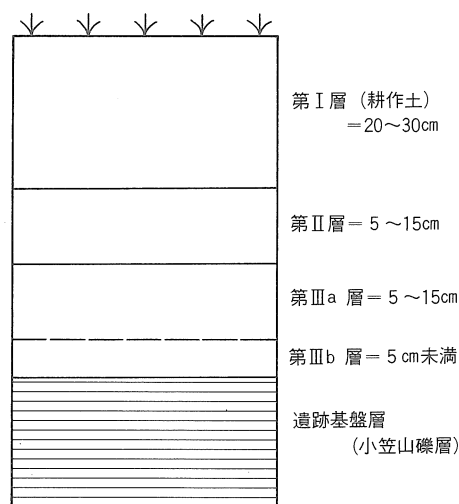
第Ⅰ層（暗褐色土層）＝茶園耕作土。層厚20～30cm。縄文時代から古墳時代、中・近世の遺物が混在する。

第Ⅱ層（黒色泥質土層）＝層厚5～15cm。縄文時代の遺物を含むが、古墳時代、中世を主とする遺物包含層。古墳時代・中世期の遺構覆土。

第Ⅲa層（暗褐色砂礫混り土層）＝層厚5～15cm。縄文時代の遺物包含層。縄文時代の遺構覆土。

第Ⅲb層（黄褐色砂礫混り土層）＝層厚5cm未満。遺跡基盤層への漸移層。縄文時代の遺物包含層。第Ⅲa層に比べ遺物の出土量が多い。縄文時代の遺構の主体的覆土。

遺跡基盤層（黄褐色礫層）＝小笠山礫層。無遺物。



第7図 長者平遺跡の基本層位

第2節 遺 構

i) 縄文時代の遺構

昭和58年度の発掘調査において検出された縄文時代の遺構は、住居跡4棟、土壇状遺構26基、柱穴状遺構40数箇所、集石遺構1箇所である。

遺構は北から入り込む小支谷の周辺に集中したが、小支谷の谷頭、段丘斜面からは一切検出されな



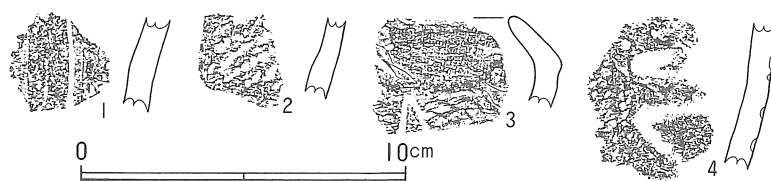
第8図 昭和58年度第1号住居跡実測図

かった。

住居跡

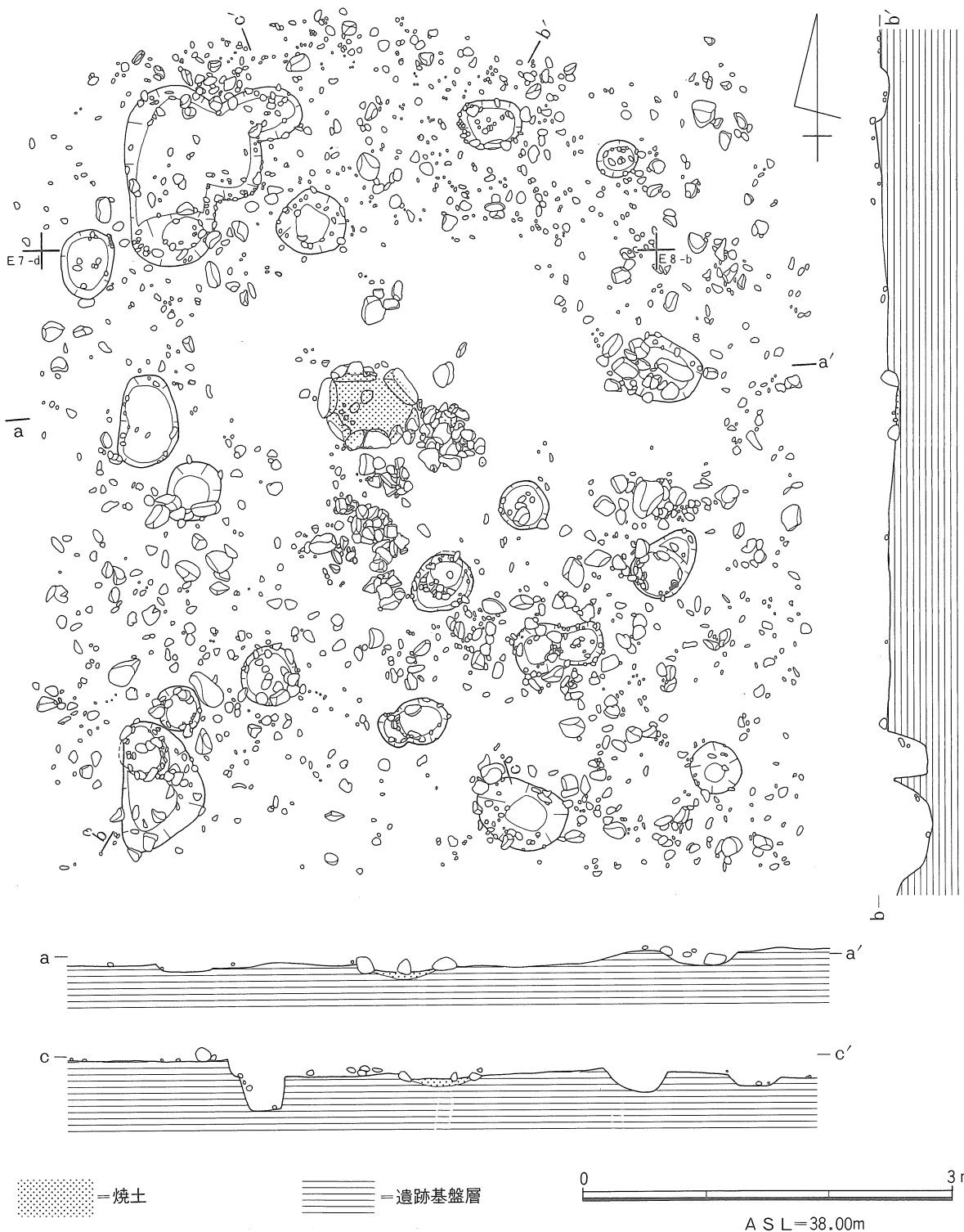
昭和58年度第1号住居跡 も

っとも北寄りに位置する住居跡
で、小支谷に面している。

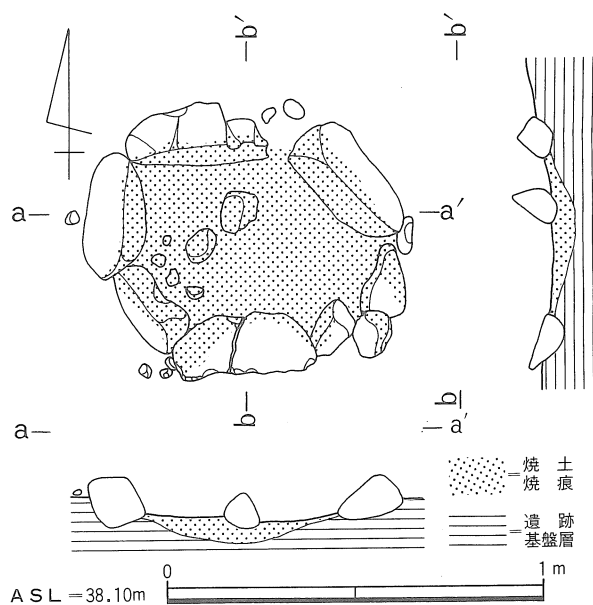


第9図 昭和58年度第1号住居跡出土土器拓影

1 = Ⅲ群—g類 2～4 = Ⅲ群—i類

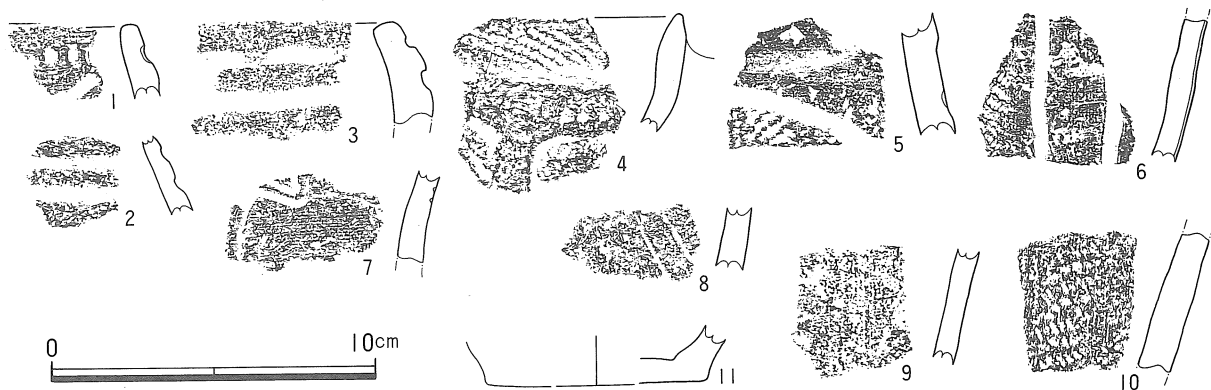


第10図 昭和58年度第2号住居跡実測図



第11図 昭和58年度第2号住居跡石囲い炉実測図

昭和58年度第1号墳の周溝に切断され、また茶園の耕作により第Ⅱ・Ⅲ層のほとんどが消失していたため、遺跡基盤層の上面にいたり、6箇所の柱穴と焼土・焼礫を確認した。壁は残存せず、その平面形・規模は明らかでないが、竪穴住居跡と思われる。大形の柱穴(径50~85cm 深さ20~45cm)と遺跡基盤層を約25cm 掘り込んだ小柱穴(径20~40cm)があり、両者とも基底径に比べ、立ちあがり上端径が著しく大きい。中央やや西寄りに焼土(約40×80cm)と数箇の焼礫(約15×10×10cm)が散在し、本住居跡は、当初楕円礫を用いた石囲い炉を有していたと推定される。焼土周辺には第Ⅲb層が薄く残り、床面は遺跡基盤層の上面近くにあったと考えられる。壁溝は検出されなかった。



第12図 昭和58年度第2号住居跡出土土器実測図・拓影

1 = Ⅲ群—c類 2・3 = Ⅲ群—d類 4~11 = Ⅲ群—i類

焼土および周辺の第Ⅲb層中より出土した土器片を第9図に示した。構築時期は中期後葉と思われる。

昭和58年度第2号住居跡 第1号住居跡から南へ約9m 離れ、小支谷の東斜面直上に位置する。

第1号住居跡同様、壁は確認されなかったが、円形をなす11ヶ所の柱穴が、平面形・規模を示している。柱穴は総じて小規模(径25~35cm)であるが、南側の柱穴列は、北側に比べ遺跡基盤層を深く(約35cm)まで、垂直に掘り込んでいた。北西・南西・南東側には、円形の柱穴列から内・外方にずれる8ヶ所の柱穴がある。外方の柱穴は浅く、壁の立ちあがりも緩い。柱穴は第Ⅲb層を覆土とし、多くのこぶ大礫を含んでいた。

床面の中央がやや凹み、そこに大小(約35×15×15cm 約20×10×10cm)の楕円礫を組みあわせて、石囲い炉を築いていた。炉石の内側には顕著な焼痕が残り、焼土の最大厚は6cm を測る。南側の配石は大きな盤状礫で、平坦面を上にし、内側に傾斜をもって配置されていた。平坦面の縁辺(特に外側)には多くの打ち欠き痕が認められる。

検出時、住居跡内には焼礫を含む多量のこぶし大礫が落ち込んでいた。礫の集積は南東側で顕著であり、石囲い炉をも被っていた。住居跡が廃棄された状況を物語っていると思われる。

北西・南西縁で確認された2ヶ所の土壇状の落ち込み（約 $120 \times 75 \times 20$ cm 約 $105 \times 65 \times 45$ cm）は本住居跡に伴うものか明らかなでない。壁溝は検出されなかった。

石囲い炉に接し、北側から出土した石皿を第57図—66に、石囲い炉周辺および集礫間に混入していた土器片を第12図に示した。土器量は少なく、型式も一定していないが、主体をなす土器は中期Ⅲ群—i類土器である。第1号住居跡と同時的に営まれていた可能性が大きい。



第13図 昭和58年度第3号住居跡実測図

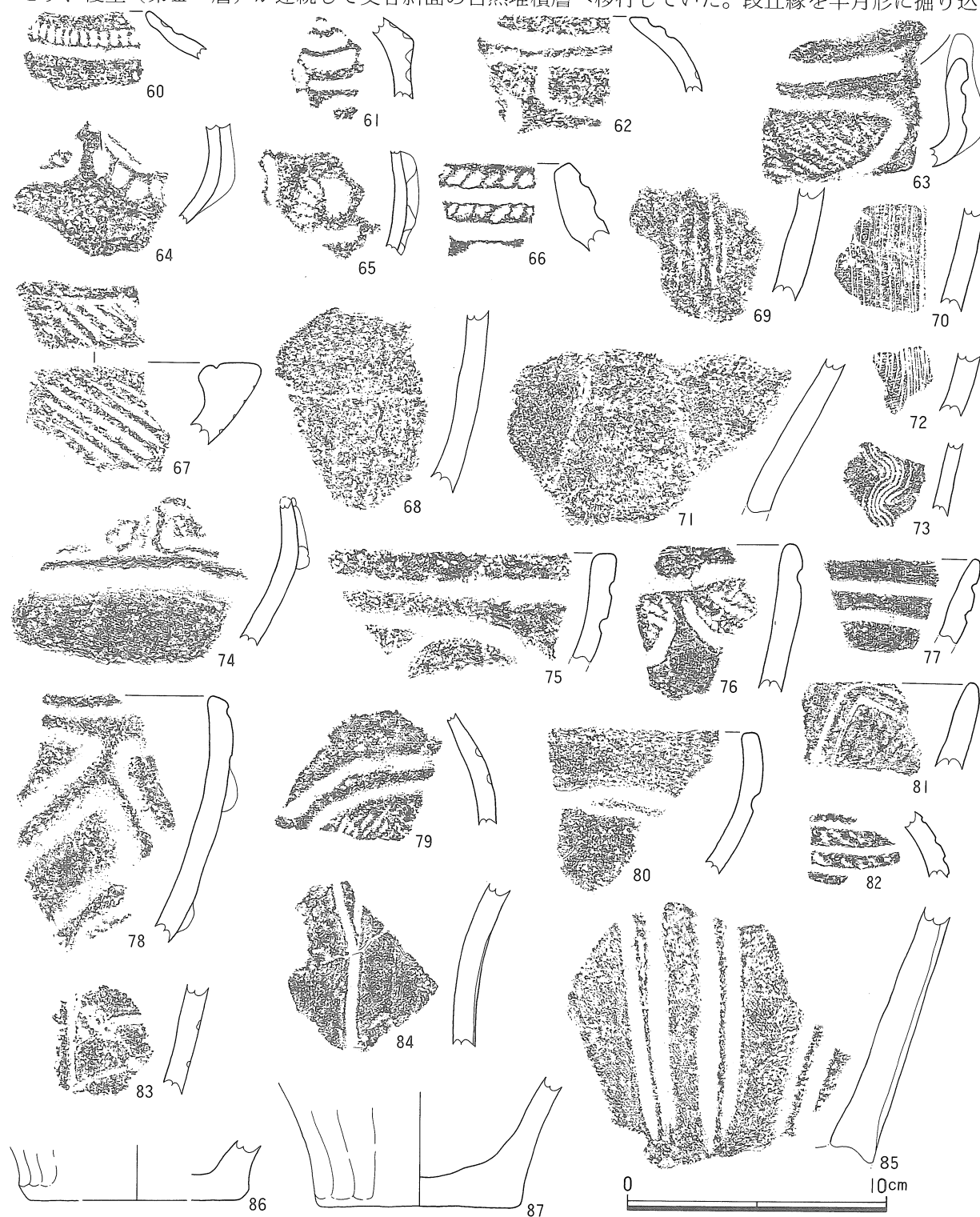


第14図 昭和58年度第3号住居跡出土土器実測図・拓影(1)

1～59＝Ⅲ群－a類

昭和58年度第3号住居跡 第1・2号住居跡から南へ約20m 離れ、第4号住居跡に西接する。住居跡は小支谷の谷頭近くに築かれ、西半は支谷斜面におよんでいた。第17号土壇に切断される。

第Ⅲb層が段をなして遺跡基盤層内へ落ち込み、東側の壁は明瞭であったが、西側の輪郭は判然とせず、覆土（第Ⅲb層）が連続して支谷斜面の自然堆積層へ移行していた。段丘縁を半月形に掘り込



第15図 昭和58年度第3号住居跡出土土器実測図・拓影(2)

60・61=Ⅲ群—b類 62~66=Ⅲ群—d類 67=Ⅲ群—e類 68・69・71=Ⅲ群—f類

70・72・73=Ⅲ群—g類 74~87=Ⅲ群—i類

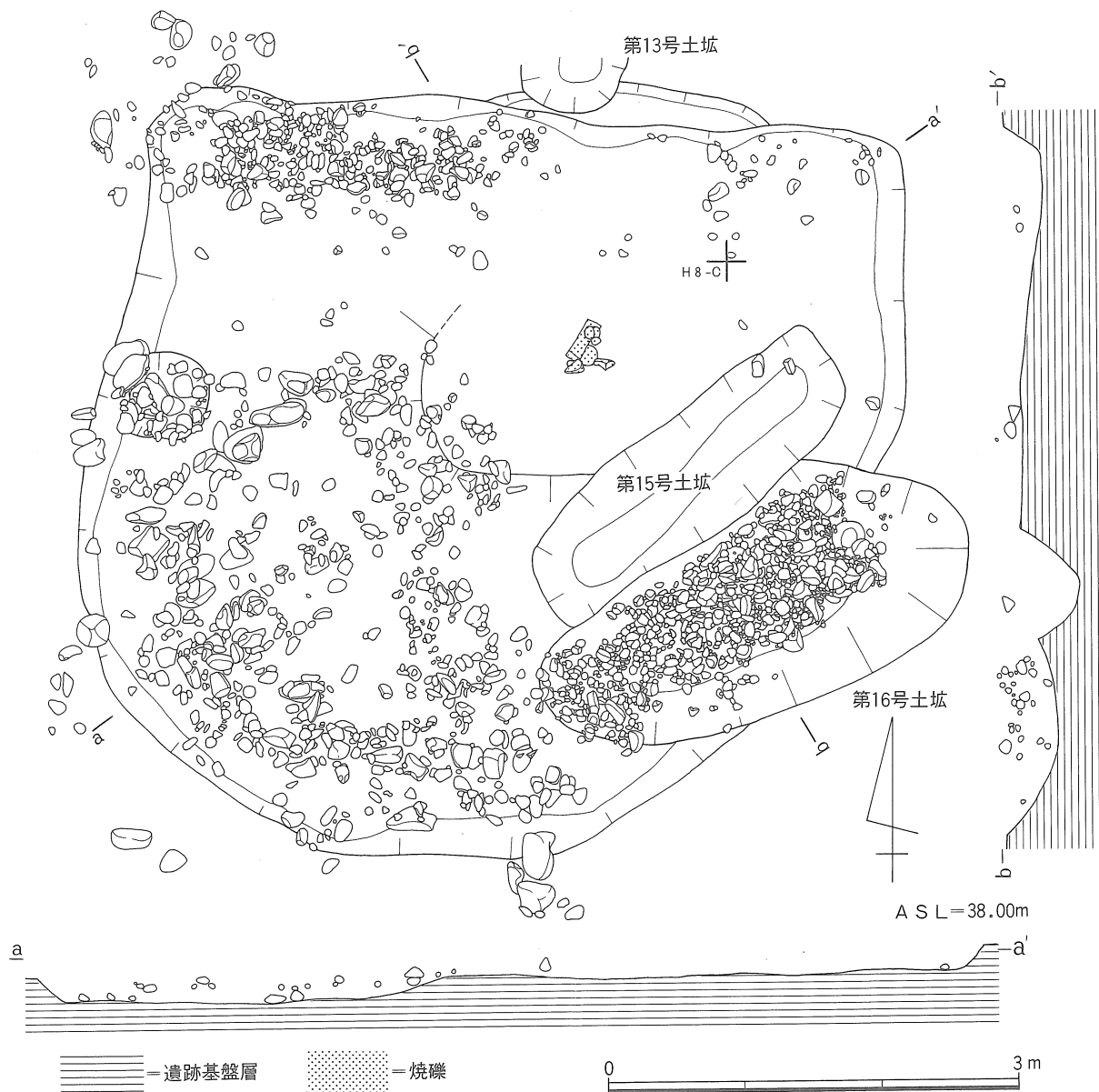
み、支谷側に壁を持たない特異な竪穴住居跡（径約5.5m）とも考えられる。

住居跡内と、やや離れて壁の外側（北東側、西側）に3箇所の柱穴が検出された。西側斜面の柱穴は垂直に掘り込まれ深い（約45cm）。完掘された床面は支谷に向い約3度傾いていたが、住居跡の中央、遺跡基盤層より約20cm 高いレベルに、焼土（約50×10×4 cm）と焼礫が認められ、また遺物も同レベルに集中することから、実際の床面は完掘面より上位にあった可能性がある。第2号住居跡程顕著でないが、覆土中に多くのこぶし大礫を含んでいた。

住居跡から出土した土器を第14・15図に示した。中期後葉に属し、中期Ⅲ群—a類土器が主体を占める。形成時期は第1・2号住居跡に比べ、遡るものと思われる。

昭和58年度第4号住居跡 第3号住居跡に東接し、支谷から約10m 離れた段丘頂部の平坦面に位置する。第15号土壌の上に築かれ、第13・16号土壌に切断される。

第Ⅲ a・b層を覆土とし、壁の立ちあがりが緩い竪穴住居跡である。覆土中にこぶし大礫を含んでいた。東—南—西側の輪郭は、基本的に円弧をなすが、北側は直線的となる。柱穴は、西壁に接して



第16図 昭和58年度第4号住居跡実測図

1箇所（径約25cm 深さ約20cm）しか検出されず、内にこぶし大礫が落ち込んでいた。床面の北東側が一段高くなり、そこに大小8個の焼礫（角礫を含む）と摩滅した土器小片が集積していた。壁溝は認められなかった。

出土遺物は焼礫群に伴った土器片と、若干の黒耀石片をのぞき皆無に近い。断定できないが中期後葉に属すると思われる。

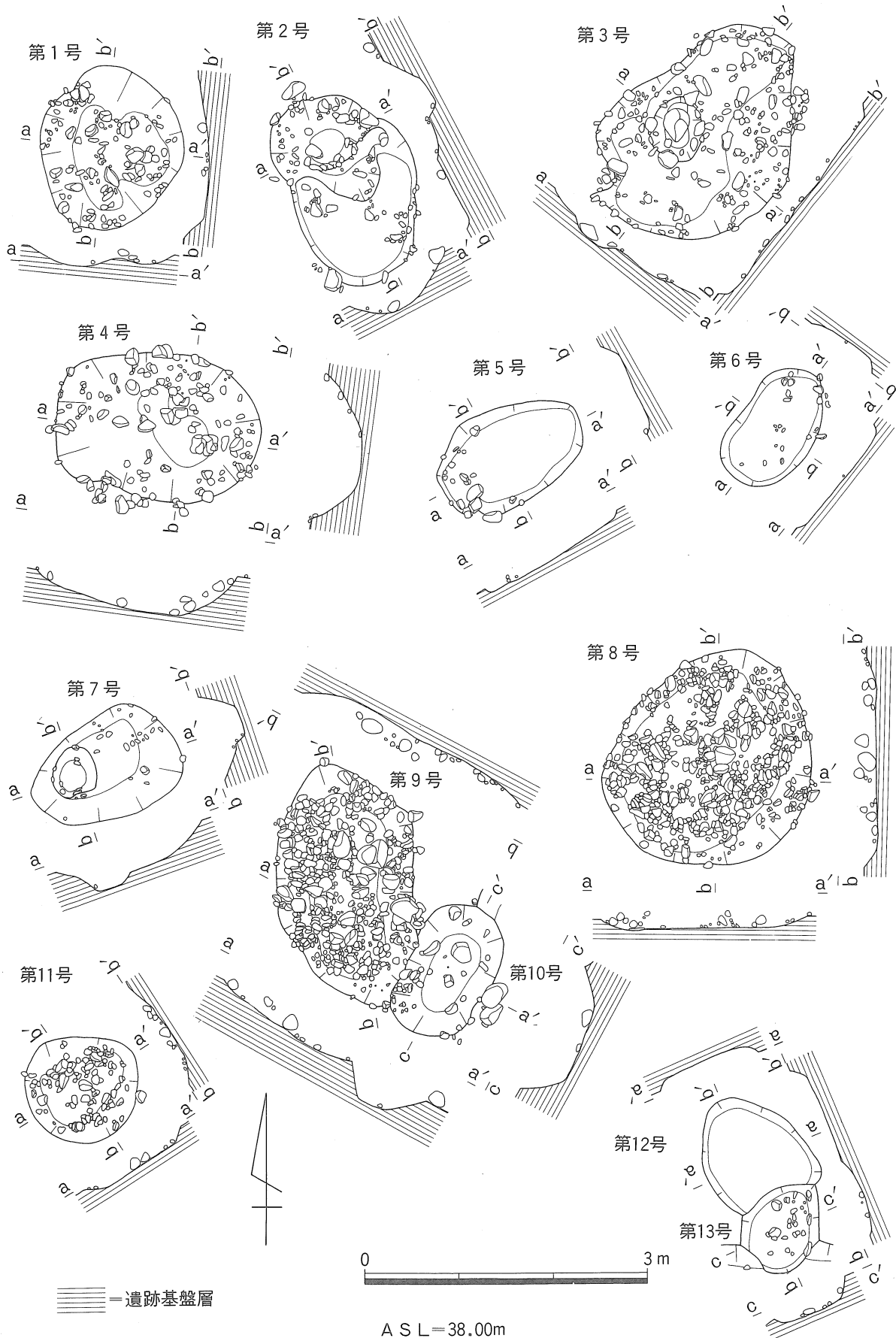
土壌状遺構

総数26基の土壌状遺構を検出した。分布域は第3・4号住居跡と重複し、第1・2号住居跡に隣接する。谷頭近くの分布密度は高く、北に向って低くなる。谷を挟んだ西側の平坦面からも、かつて22基の土壌群が検出されている（吉岡他1978）。

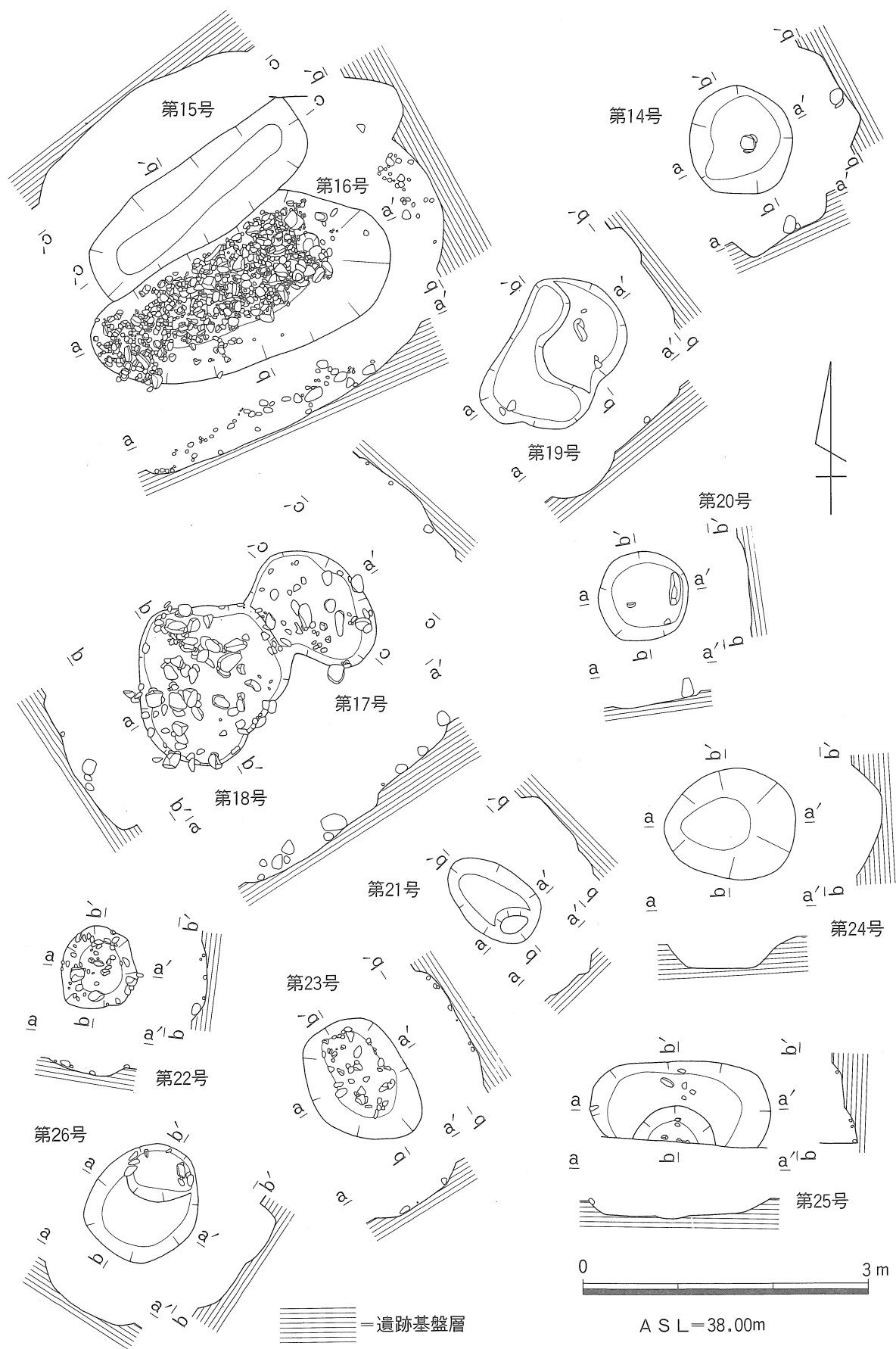
土壌番号	長軸方位	長径	短径	長径(1)：短径	配石の有無	配石の形態	検出面	その他
1	北—南	175	155	1:0.9 (0.89)	有	疎	基盤層上面	
2	北西—南東	205	135	1:0.7 (0.66)	有	疎	基盤層上面	
3	北東—南西	255	185	1:0.7 (0.73)	有	密	基盤層上面	
4	西—東	220	155	1:0.7 (0.70)	有	疎	第Ⅲb層上面	集石遺構と重複する
5	北東—南西	165	105	1:0.6 (0.64)	?		基盤層上面	
6	北東—南西	135	80	1:0.6 (0.59)	無		基盤層上面	
7	北東—南西	165	110	1:0.7 (0.67)	無		基盤層上面	
8	北東—南西	240	210	1:0.9 (0.88)	有	密	第Ⅲb層上面	
9	北—南	265	145	1:0.6 (0.55)	有	密	第Ⅲb層上面	第10号土壌に切断される
10	北東—南西	150	95	1:0.6 (0.63)	?		基盤層上面	第4号住居跡・第9号土壌を切断する
11	西—東	120	110	1:0.9 (0.92)	有	密	第Ⅲb層上面	
12	北西—南東	(135)	105	(1:0.8)(0.78)	無		第Ⅲb層上面	
13	北—南	(100)	80	(1:0.8)(0.80)	?		第Ⅲb層上面	
14	北—南	115	110	1:1 (0.96)	有	単	第Ⅲb層上面	
15	北東—南西	270	(85)	(1:0.3)(0.31)	無		基盤層上面	第4号住居跡下に位置する第16号土壌に切断される
16	北東—南西	330	(160)	(1:0.5)(0.48)	有	密	第Ⅲb層上面	第4号住居跡・第15号土壌を切断する
17	北西—南東	145	(100)	(1:0.7)(0.69)	有	疎	第Ⅲb層上面	第3号住居跡を切断する
18	北東—南西	(180)	160	(1:0.9)(0.89)	有	密	第Ⅲb層上面	
19	北東—南西	175	115	1:0.7 (0.66)	無		第Ⅲb層上面	
20	?	95	95	1:1 (1.00)	有	単	第Ⅲb層上面	
21	北西—南東	110	70	1:0.6 (0.64)	無		基盤層上面	
22	北—南	85	80	1:0.9 (0.94)	有	疎	基盤層上面	
23	北西—南東	140	105	1:0.8 (0.75)	?		基盤層上面	
24	西—東	140	115	1:0.8 (0.82)	無		基盤層上面	
25	西—東	190	105	1:0.6 (0.55)	無		基盤層上面	
26	北東—南西	130	115	1:0.9 (0.88)	?		第Ⅲb層上面	

第2表 昭和58年度土壌状遺構一覧表

単位＝cm



第17図 昭和58年度土坑状遺構実測図(1)



第18図 昭和58年度土壌状遺構実測図(2)

E・F 8・9 区付近の第Ⅱ・Ⅲ層は攪乱されていたため、第1～3号土壌の掘り込み面は明確でないが、第Ⅲb層上面(上面)において検出可能な土壌状遺構(第4・8・9・11～14・16～20・26号土壌=13基)と、遺跡基盤層上面(下面)にいたり、初めて平面形を確認しうる土壌状遺構(第1～3・5～7・10・15・21～25号土壌=13基)とがある。上面検出の土壌状遺構(第9・15号土壌)は下面の土壌状遺構(第10・16号土壌)を切断し、検出面の違いは形成時期の新旧を示していると考えられる。上下面の土壌状遺構はともに第Ⅲa・b層を主体的な覆土とし、第Ⅱ層に類似する黒灰色土がブロック状に混入していた。

形態・規模 長径85～330cm 短径70～210cm 深さ10～45cm を測る。多くの土壌状遺構は浅く、遺跡基盤層をわずかに掘り込んでいた。底面はすり鉢状を呈し、第2・7・21・25・26号土壌には、さらに一段深い掘り込みが認められた。顕著な規模の大小差を有するが、小型(長径85～135cm 短径70～120cm)の土壌状遺構が6割を占め、また長径(1):短径の比が1:0.6以上の土壌状遺構は21基(約80%)を数える。平面形は基本的に円形あるいは正円に近い楕円形をなし、第10・15・16号土壌のように深く、長径の著しく長い土壌状遺構は特異である。第1～3号土壌をのぞくと、下面で検出された土壌群に、小型・長楕円形化の傾向を指摘できるかもしれない。

配石 13基(約50%)が配石を有し、上面検出の土壌状遺構に多い。こぶし大(径10～15cm)・人頭大(径20～25cm)の自然礫を無造作に積み上げ、集積の状況には密疎の差が見られる。配石が土壌外にまでおよぶ土壌状遺構(第2・4・18号土壌)があり、埋土の後、土壌全面を自然礫で被ったものと推定される。浅く小型で、平面円形を呈する第14・20号土壌では、1個ないし数個の楕円礫が底面の中央、壁近くに立石状に配置されていた。長径170cm 短径130cm以上の大型の土壌状遺構すべてに配石が認められ、小型であっても平面形が円形に近い土壌状遺構に配石がめだつ。

長軸方位・分布 長軸方位に規則性は認められない。

上下面検出の土壌状遺構は、大きく3つのグループに区分される。

第Ⅲb層上面(上面)検出 北グループ(1基)=第4号土壌

中央グループ(7基)=第8・

9・11～14

・16号土壌

南グループ(5基)=第17～20

・26号土壌

遺跡基盤層上面(下面)検出

北グループ(3基)=第1～3

号土壌

中央グループ(5基)=第5～

7・10・15

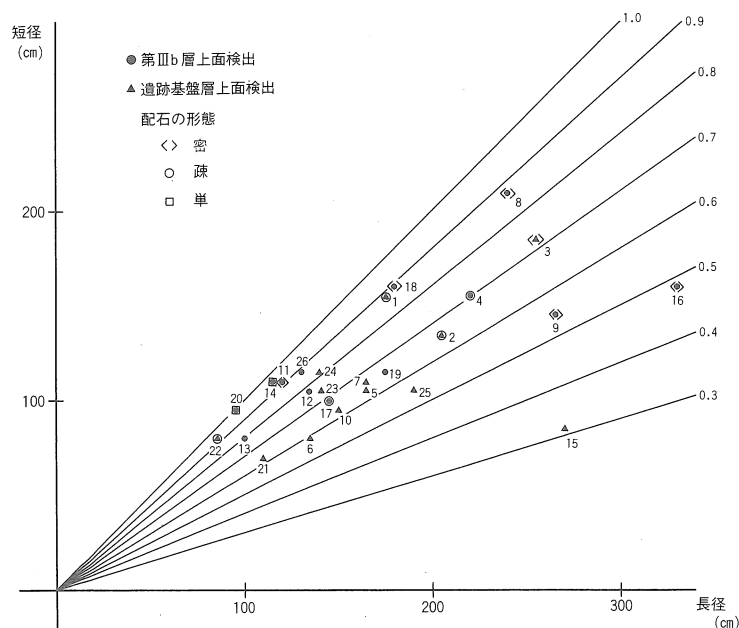
号土壌

南グループ(5基)=第21～25

号土壌

北グループ(下面)は大型の土壌状遺構のみにより構成される。

南グループ(下面)には、比較的小型の土壌状遺構が集中し、密集



第19図 昭和58年度土壌群の構成

度が高い。上下面とも中央グループの土壇状遺構はサークル状をなして分布しているようであり、それぞれ長径の大きな土壇状遺構（第10・15・16号土壇）を1・2基含んでいる。中央グループ（下面）に配石は認められず、立石状の配石を持つ第14・20号土壇は、上面で検出された中央・南グループに属している。

昭和53年度に発見された土壇群（22基）は、10数基からなる2つの土壇サークルを構成していた（吉岡他1979）。今調査検出の土壇グループはやや小規模であり、5基前後を1単位とする。

遺物 第22号土壇の東側、第Ⅲa層中より石棒（第57図-67）が1点出土した。黒耀石片や剥片状の石材が、覆土・配石間に若干認められたが、第8号土壇に伴った石鏃以外、明らかに副葬を思わせる遺物は皆無である。第16号土壇の配石間に混入していた土器片は縄文を有し中期Ⅲ群 i 類土器と思われる。

上下面検出の土壇群は、形成期に時期差を有するものの、ともに中期後葉に形成されたと考えられる。

柱穴状遺構

散在する柱穴状遺構が40数箇所検出された。規模は総じて小さい（径10～30cm）。一般的に壁の立ちあがりには緩く浅いが、遺跡基盤層を深くまで垂直に掘り込んだものがある。O15区で見つかった柱穴状遺構（径65cm 深さ40cm）は底面にこぶし大礫を敷きつめていた。第2号住居跡の南側では、柱穴状遺構（7箇所）が半円形をなして分布し、さらに1棟、住居が建てられていた可能性もある。

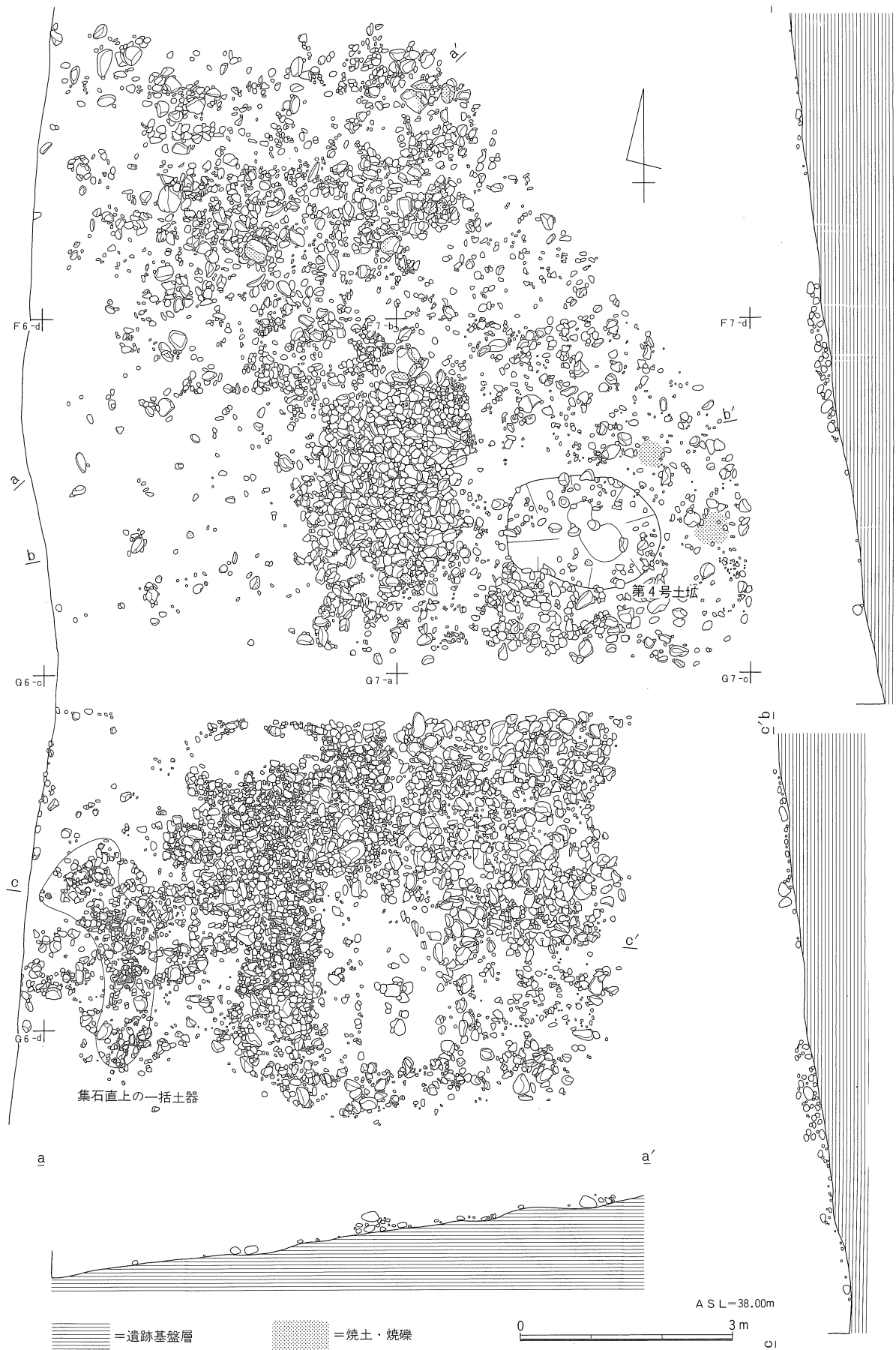
集石遺構

北から入り込む小支谷の東斜面頂部近くで、帯状を呈する集石を検出した。集石は南北15m、東西8mにおよぶ。こぶし大（径10～20cm）・人頭大（径30～40cm）礫が混在し、集積状況に明確な規則性は認められないが、西側（支谷側）で厚く（高さ25～35cm）、主にこぶし大礫が密集する。人頭大礫は南東側に多い。北東端は散在的となる。北半の集石は支谷斜面の等高線（標高37.50m 前後）に沿って南北方向にのびるが、南半は西に向って屈曲し、調査区外にまで達している。屈曲部の南側には平面長方形（約1.8×2.8m）を呈する集石の空白部分があり、その西辺は明らかに壁状をなしていた。土器片の集中した土壇状の落ち込みが2箇所あり、南西寄りの集石直上には、中期Ⅲ群-h類土器の同一個体片が約0.7×2.5mの範囲内に広がっていた。集石間から破砕された石器（石錘・石斧）や多くの大型剥片が出土する。北半の集石には、約1.5～2.5mの間隔で10余箇所の焼礫群・焼土（35～45cm×40～50cm）が認められた。焼礫の接合関係を把握していないため断言できないが、配石炉を思わせる焼礫群もあり、廃棄の結果とするよりも集石上で頻繁に火を焚いていた可能性が高い。第4号土壇は集石遺構に伴うものかもしれない。

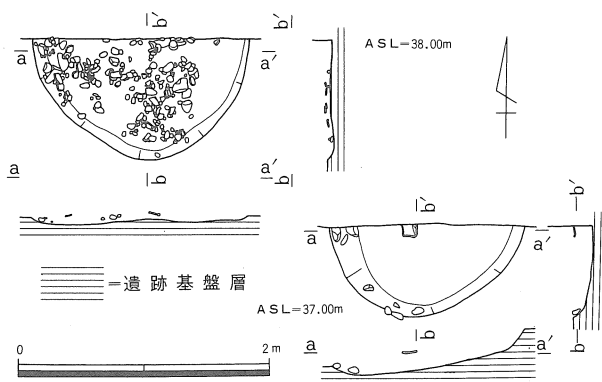
土壇状の落ち込み内に集積した土器片と西南寄りの集石直上から一括出土した土器を第22・23図に示した。集石間に混在した剥片の多くは三辺に自然面を残し、分割した盤状礫を輪切りにしたような縦長剥片である。形成時期は中期後葉に比定される。

小 結

4棟の住居跡は平面円形・不定形をなし、その規模は第1号住居跡を除き径5.5m 前後と小さい。第2号住居跡の柱穴は全周したが、他では不足し、総じて浅く、小規模である。第3・4号住居跡における柱穴の欠落は、調査技術の未熟さにもよろうが、もとより柱が小笠山礫層（遺跡基盤層）深くまで埋め込まれていなかったためとも思われる。第1・3・4号住居跡の炉跡・焼土は薄く、不明瞭であり、建て直しにより同一住居を長期間使用した痕跡は認められない。住居の構造は簡易・仮設的であったと考えられる。



第20図 昭和58年度集石遺構実測図



第21図 昭和58年度集石遺構土器集中部実測図

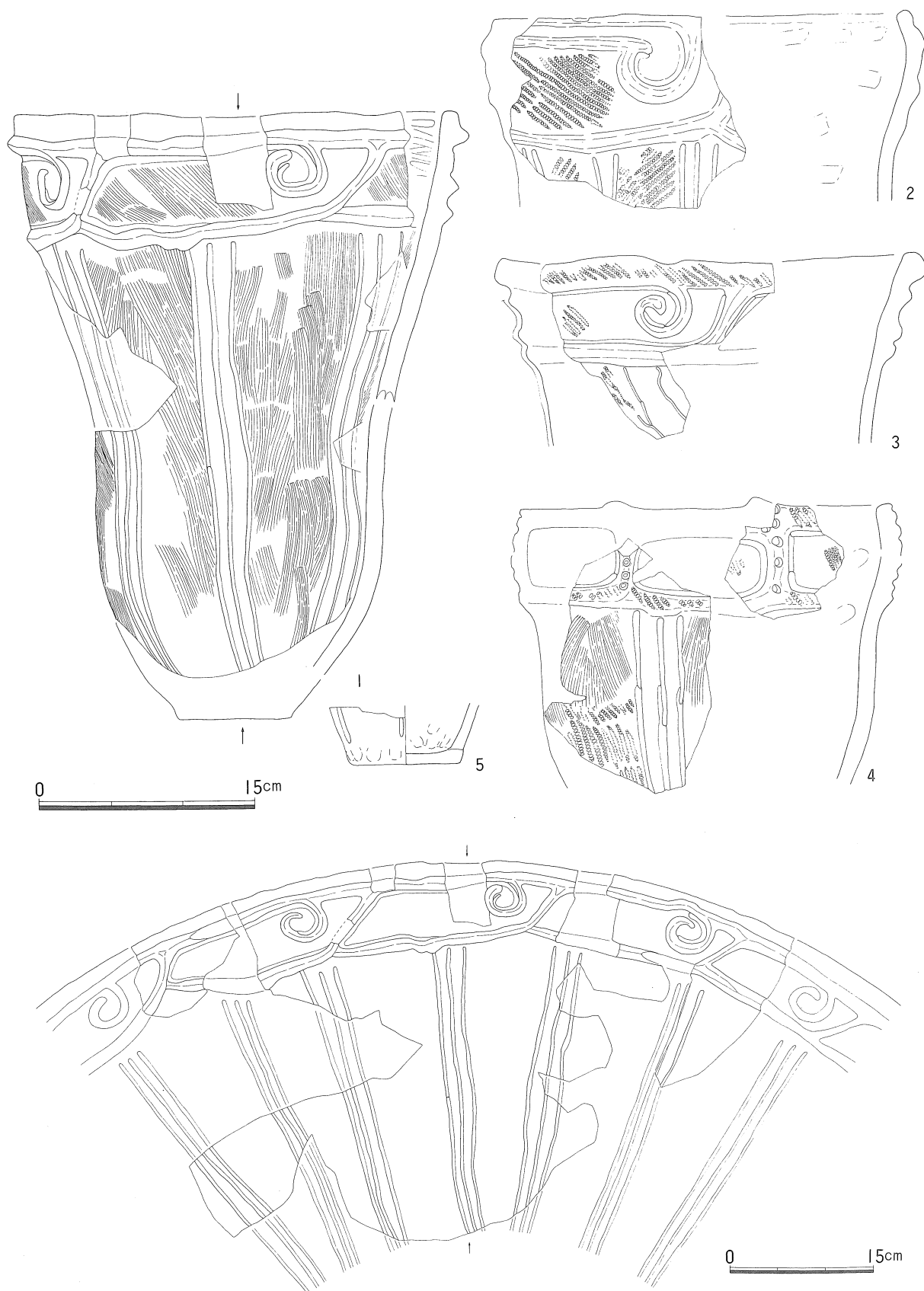
住居跡内（特に第2号住居跡）に見られたこぶし大礫の集積は、住居が廃棄された状況を物語っていると思われる。新たな住居の構築（建て替え）に伴い掘り出された多量の礫を、旧住居内へ投棄したものとするれば、推定された上屋の構造が簡易・仮設的であったこととあわせ興味深い。

第1～4号住居跡はすべて中期後葉に位置づけられたが、出土土器は第1・2号住居跡



第22図 昭和58年度集石遺構土器集中部出土土器拓影

1 = Ⅲ群—a類 2～5 = Ⅲ群—g類 8・9・12 = Ⅲ群—h類
6・7・10・11・13・14・17 = Ⅲ群—i類 15・16 = Ⅲ群—j類



第23図 昭和58年度集石遺構直上出土土器実測図
 1 = Ⅲ群—f 類 2 ~ 5 = Ⅲ群—h 類

と第3号住居跡の構築期に時期差があることを示している。第1・2号住居跡と第3・4号住居跡がそれぞれ同時に営まれていたとしても、約1,000㎡の調査域内に、一時期わずか2棟からなる住居群が一群しか成立していなかったことになる。

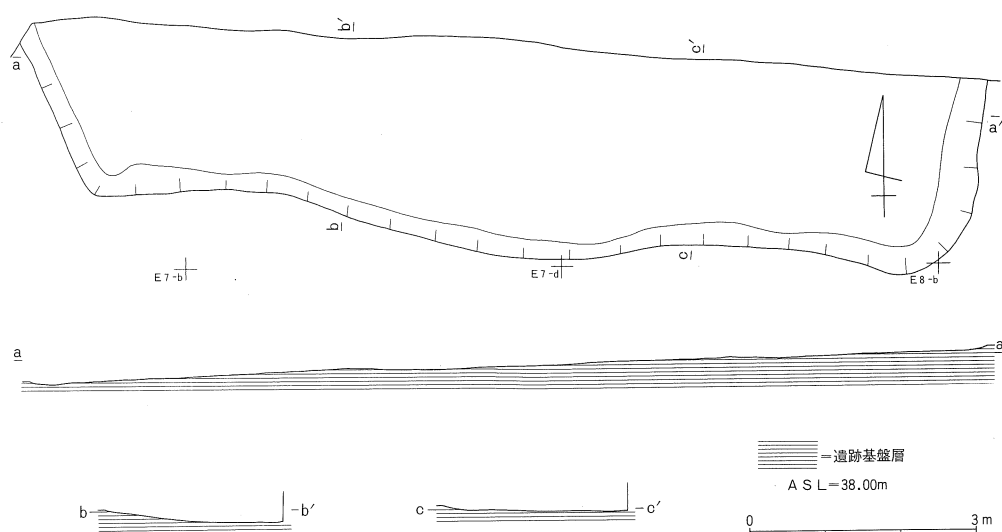
検出面（上下面）を異にする総数26基の土壇状遺構は、平面円形・楕円形を呈し、半数が配石を有していた。配石は上面検出の土壇状遺構に多く、形態に差はあるが、埋土の後、主にこぶし大礫で墳墓を被ったものと推定される。土壇状遺構は5基前後を1単位として、上下面6つの土壇グループを構成していた。昭和53年度に検出された土壇サークル（10基前後）（吉岡他1979）の規模は、今調査の土壇グループ2単位分に匹敵する。こうした大小の土壇グループが集落を営む集団のどのような組織の様相を反映したものか、今後に残された課題であるが、一つのまとまりを持つ土壇群は、有機的に結びついた複数の段階的な単位（土壇小群）をその内に含んでいる。

集石遺構の性格は明らかでない。支谷斜面に形成された礫等の廃棄場とも考えられる。集石間に石棒等いわゆる呪術的な遺物は含まれていなかったが、帯状をなし、集石上で頻繁に焚火をするなど、そこには宗教的な意識が色濃く認められた。

ここで各遺構の分布について整理しておきたい。第1・2号住居跡は土壇群・集石遺構に隣接し、第3・4号住居跡と土壇群は重複する。上面で検出された第9・10・17号土壇が下面の10・15土壇、第3・4号住居跡を切断し、第15号土壇は第4号住居跡が構築される以前に掘り込まれていた。上下面検出の土壇群と第3・4号住居跡には時期差があり、その形成順位は土壇群（下面）―第3・4号住居跡―土壇群（上面）と考えられる。第3号住居跡の出土土器には中期Ⅲ群―a類土器が多く、中期Ⅲ群―i類土器を伴った第1・2号住居跡に比べ、構築期が遡ることを示していた。第16号土壇の集石間・集石遺構直上から出土した土器は第1・2号住居跡同様、主に中期Ⅲ群―i類土器である。第1・2号住居跡・土壇群（上面）・集石遺構は同時期（中期後葉）に成立していた可能性が大きい。

小支谷の斜面直上を占地した住居群（2棟1単位）を中心として、南側に土壇群（墓域）、西側斜面に集石遺構（廃棄場？ 祭祀場）が営まれている。東側は未調査であり、広場・作業場等は明確でないが、1000㎡という小規模な範囲に、集落を構成する主要な生活舞台（住居・墓域・廃棄場？・祭祀場）が併存していたことは注目される。

ii) 古墳時代の遺構



第24図 昭和58年度第1号墳前方部前端周溝実測図

3基の後期古墳を検出した。

昭和58年度第1号墳

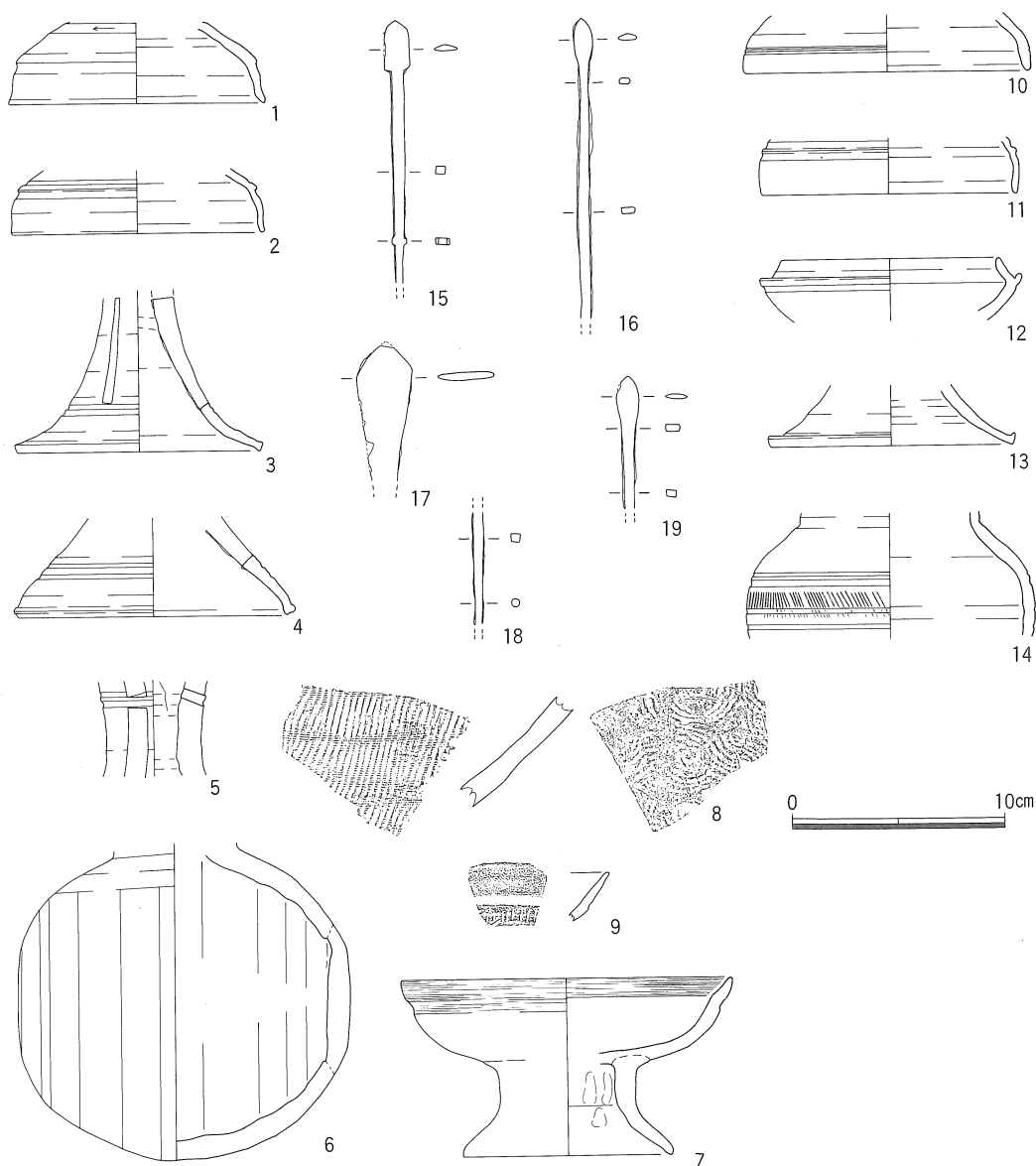
北から入り込む小支谷の東側斜面直上に位置する。

遺跡基盤層上面で、溝状（長さ約12.5m 確認幅3.0m）をなす第Ⅱ層の落ち込みを確認した。

溝状遺構はほぼ東西方向に直線的にのび、両端は急に浅くなり絶えている。北半は調査域外におよぶ。底面の中央がやや深く（深さ約25cm）なるが、断面は基本的に浅いU状を呈し、西側向ってわずかに傾斜（約2度）している。覆土中にはこぶし大（径10～15cm）礫が認められ、底面直上より須恵器坏蓋が1点出土した。

溝状遺構の検出された地点は、古くから小前方後円墳が立地していたと伝えられるところであり、^{*}本溝状遺構は前方部前端側の周溝の可能性が大きい。未確認の前方後円墳は南向きに築造されていたと考えられる。

*) 大谷純仁氏の教示による。



第25図 昭和58年度第1・2号墳出土遺物実測図・拓影

1 = 第1号墳周溝 2～5・7・9 = 第2号墳前溝 6・15～19 = 第2号墳主体部
8 = 第2号墳周溝 10～14 = 第2号墳南側主体部前溝状遺構



第26図 昭和58年度第2号墳主体部実測図

昭和58年度第2号墳

小支谷の谷頭に面している。周溝と内部施設の一部を発掘調査した。径約14mの円墳と思われる。

外部施設 主体部前面（斜面側）に周溝は認められず、段丘の頂部側のみに周溝をめぐらしていたらしい。北側の周溝は遺跡基盤層を若干掘り込み、断面U状（幅約3.0m 深さ約0.3m）をなす。周溝内には第Ⅱ層が堆積し、多くのこぶし大礫（径10～15cm）と須恵器甕片が落ち込んでいた。墳丘は削平されていた。

内部施設 主軸方位N-85度-Eを呈し、玄室幅（推定約1.2m）に比べ長さ（約4.0m）の発達した横穴式石室である。掘り方（推定幅2.5m 長さ4.5m）は、第Ⅲ・遺跡基盤層を0.5m 前後掘り込み、奥壁部分の立ちあがりは緩い。掘り方内に、裏ごめされた土がわずかに残っていたが、石室は完全に破壊され、茶園の暗渠となっていた。南壁の根石の抜き取り痕は明瞭で、比較的大型の楕円礫を横口積で配置していたと考えられる。胴張りは見られない。推定された玄室前面の幅は掘り方の開口部幅（約1.0m）より約20cm 広く、有袖式の石室と思われる。北壁・奥壁・玄門・敷石等の状況は明らかでない。

羨道・前溝はまっすぐ西にのび、開口部近くに封鎖施設を築いていた。扁平礫（約40×20×15cm）を底面に3個、羨道を横断するように並べ、前溝側にこぶし大礫を山形・不規則に積み上げていた。

掘り方に南接して、さらに1箇所、掘り方状の遺構が検出された。前壁にあたる部分は2段にくびれ、羨道より深くなっている。前溝状の溝（幅約50cm）は2段に掘られ（深さ約15cm）、西進するが、約10m で大きく南に屈曲し、並行する溝状遺構と合流する。北側主体部の前溝・周溝を切断する溝状遺構が南側の前溝状の溝に切断され、南側の掘り方状遺構は北側主体部より遅れて構築されたと考えられる。掘り方状遺構の位置は周溝上にあり、二つの主体部が近時して存在していた確証はないが、各前溝内より出土した須恵器坏蓋・坏身に顕著な型式差は認められない。

遺物・年代 掘り方内の攪乱土より須恵器フラスコ瓶・土師器高坏片が出土した。床面のほぼ中央に尖根鏃が3点確認され、約1.2m 奥壁寄りに平根鏃が1点、先端部を東に向けて埋置されていた。北側の主体部前溝より須恵器長脚2段透し高坏脚・坏蓋・坏身片が、南側の前溝内より須恵器坏蓋・坏身片が出土している。すべて6世紀後半代に比定しうる土器片である。

昭和58年度第3号墳

第2号墳から南へ約40m 離れ、段丘頂部の段差縁に位置している。羨道・前溝（封鎖施設）のみ確認し、墳丘・内・外部施設のほとんどは未調査のまま残った。

羨道・前溝（幅約1.2m 深さ約0.6m）は断面U状をなし、幅を減じながら西にのびる。前溝に接続する周溝は認められない。こぶし大礫（径10～15cm）を山形に積み上げて（長さ1.6m 高さ約0.4m）封鎖施設を築いていたが、第2号墳同様の楕円礫の並列配置は見られなかった。

周辺の第Ⅱ層中より須恵器坏蓋・坏身片が若干出土している。

小 結

長者平古墳群は総数53基からなり、3支陵の南縁に带状に連なることを、分布上の一つの特徴としていた（吉岡1983）。今まで古墳の見られなかった段丘頂部（第2・3号墳）・北縁（第1号墳）に小前方後円墳を含む3基の古墳が確認されたことは、本古墳群の群構成を再検討するうえで重要である。

第3節 遺物

i) 縄文時代の遺物

昭和58年度の発掘調査において出土した縄文時代の遺物は土器・土器片円盤・土器片錘・石器・各種の剥片である。第3号住居跡で確認された土器群をのぞき、遺構に伴った遺物は少なく、多くは小支谷の斜面に堆積した第Ⅲa・b層・細互層より採集された。

土器

出土土器の総量は39×54×15cmのポリコンテナーに約15箱分である。これらは3群12類に分類される。有文土器片の約1/3(740点余り)を図示した。

中期Ⅰ群(第28図—1～14)

五領ケ台式土器(今村1972)に対比され、中期前葉に位置づけられる土器を中期Ⅰ群とした。

雲母を多量に含む比較的薄手の土器で、半截竹管により平行沈線文・縦斜線文・渦文・三角形刻文・連続押し引き文等を施す。第28図—12・13は波状口縁をなし、ハート形の凹み・把手を有する。第28図—5・12に見られる押し引き手法は新しくなる要素である。

中期Ⅱ群(第28図—15)

中期中葉に位置づけられる土器を中期Ⅱ群とした。

肥厚された口縁突起部に北屋敷式土器(加藤1979)に特徴的な「く」の字状の連続刺突文が施される。図示できなかったが同型式の土器小片が他に1片出土している。

中期Ⅲ群

中期後葉に位置づけられる土器を中期Ⅲ群とした。次の12類に分類される。

a類(第14図—1～59 第22図—1 第28図—16～50 第29図—51～83) 里木Ⅱ・Ⅲ式土器(間壁1971)の施文手法を混在的に有する土器である。器壁は薄く小型で、口縁部が著しく内彎したキャリパー形をなす。底部には張り出し底様を呈するものが多い。第14図—59は木葉痕を残す。石英・長石・雲母粒を比較的多く含む。縦斜位の細条線を地文とし、半截竹管・ヘラ状施文具により口縁部・胴部上半に横線文・波状文・山形文・渦文・刻み・刺突列等を施す。口縁部文様は次の3種に細分される。

a1(第14図—6～11 第28図—18～23) 平行する沈線を交互に刻むことで鋸歯状文を1条ないし2条めぐらす土器である。1条のものには波状文が3条加えられる。

a2(第14図—12～28 第22図—1 第28図—24～45 第29図—63) 最上位の沈線内か、あるいは独立した刻み・刺突列を有する土器である。第14図—14では2条の沈線を刻む。多くは刻み・刺突列下に波状文・横線文・山形文・渦文等を加えるが、第14図—12・第28図—41・42は無文化している。口縁端部を立ちあがらせたものがある。

a3(第14図—1～5・29～35 第28図—16・17・46～49 第29図—51～61・64・66) 沈線のみにより口縁部文様帯を構成する土器である。第14図—1～5・第28図—17は、里木Ⅱ式土器の指標とされる捺糸文(R)を地文とする。第28図—46は口唇部に刻みを有する。

口縁部文様を簡略化ないしは無文化し、キャリパー形をなさない第14図—55・56・第29図—67～72は新しくなるものであろう。

b類(第15図—60・61 第27図—2 第29図—84～88) 咲畑式土器(久永1960 紅村1978)に対比される土器をb類とした。口縁部は著しく内彎する。

幅の広い押し引き沈線により横線文・波状文を施す。第27図—2は口縁部に突起を有し、縦位の隆

帯・渦文を加える。第29図—84・85は縄文を地文とし、第29図—88には格子状の貼付文が施される。

c類（第12図—1 第29図—89～98 第30図—99～106） 汰い沈線は波状・連弧状をなし、押引沈線文・格子状貼付文・細隆起線文等、咲畑式土器の施文手法を色濃く残す土器である。第29図—95・96の口縁部は外反し、第29図—92は波状口縁をなす。第30図—102・103は凸帯・突起を有し、渦文が施される。

d類（第12図—2・3 第15図—62～66 第30図—107～117 第31図—118～144 第32図—145～154） 咲畑式以降東海系（神明・取組式）土器（増子1978）の施文要素を有するが、在地性の強い土器をd類とした。頸部のくびれが弱いキャリパー形を呈する。胎土に赤色粒を含む。

太い沈線・隆帯により口縁部文様帯を区画し、波状文・横線文等を加える。施文によりd類は次の2種に細分される。

d1（第15図—62・63 第30図—107～117 第31図—118～120） 波状口縁をなし、口端内面に幅の広い断面三角形の凸帯をめぐらす土器で、地文として縄文・条線を施す。区画上位の沈線は連弧状を呈し、第30図—114では押し引きされる。波状口縁の頂部に渦文・縦位の沈線・刺突列を加えたものがあり、第31図—118では竹管により口唇部が刺突される。口縁部は基本的に外に開く。第30図—108・第31図—119は橋状把手部の破片である。

d2（第12図—2・3 第15図—64～66 第31図—121～144 第32図—145～154） d1類に比べ口縁部文様帯が退化・縮小化し、竹管・棒状施文具により隆帯上に刺突列・縦位沈線・刻み等を施す土器である。条線も施されるが、区画内を縄文で埋めたものが多い。第32図—149の刺突列は円形をなし、第31図—138の口唇部・第31図—131・第32図—147・149には渦文が加えられる。第31図—131・141・144・第32図—146の口縁部は著しく内彎し、第32図—147・153は口唇部に刺突・沈線を有する。

e類（第15図—67 第32図—155～164 第36図—251） 曾利Ⅱ式土器（武藤1978 長崎他1979）に対比される土器をe類とした。長石・雲母粒を多量に含む。茶褐色を呈し、器面の保存状態はすこぶる悪い。地文として強く太い縦斜位の平行沈線を施し、頸部以下に貼付粘土紐により波状横線文・懸垂文・渦文等を加える。壺形を呈する第32図—164は若干時期の降るものかもしれない。

f類（第15図—68・69・71 第23—1 第33図—165～185 第34図—186～218 第36図—252～261） 縦斜位の条線を地文とし、横長の口縁部文様帯を構成する土器である。曾利Ⅲ式土器（武藤1978 長崎他1979）に対比される。口縁部の内彎する度合は小さくなり、頸部のくびれが弱いキャリパー形をなす。黒褐色を呈し、焼成良好な土器が比較的多い。沈線・隆帯により口縁部に渦文・円文・楕円文・横線文等を施す。第33図—170・174・177・178は区画内を刺突列で埋め、第34図—195・201～206の隆帯上には、半截竹管により刻み・刺突列が加えられる。波状口縁をなす第33図—181・183は口唇部に沈線・渦文を有する。胴部には磨消帯が見られ、波状懸垂文・渦文が施される。第33図—165・166・第34図—186・189は曾利Ⅱ式土器の施文手法を残すが、地文の平行沈線・内面の凸帯は退化しており当類に含めた。

g類（第9図—1 15図—70・72・73 第22図—2～5 第35図—219～250 第36図—262～278 第37図—279～307） 胴部文様帯がせり上がり、口縁部文様帯が退化・消失した土器である。曾利Ⅳ・Ⅴ式土器（武藤1978）に対比されるが、地域色も強い。頸部の若干くびれた深鉢型が主体となる。器面保存は良好で、縦斜位の細条線を地文とする。張り出し底様を呈するものは少ない。隆帯は減り、基本的に沈線により文様帯を区画する。第35図—226・245・238には渦文・2条の刺突列（竹管）が加えられ、胴部には磨消帯・波状懸垂文・ハノ字状文・逆ハノ字状文が発達する。第37図—292・

301・304は地文の細条線を櫛状施文具により施し、第15図—73・第35図—223・233～235・244では格子状・波状を呈する。胴部破片のいくつかはf類土器に属する可能性がある。

h類（第22図—8・9・12 第23図—2～5 第38図—308～327 第39図—328～346 第40図—347～367 第43図—440～457・459～467）加曽利EⅢ式土器（鈴木保他1980）に対比される土器をh類とした。沈線・隆帯により文様帯を区画し、地文として縄文を施す土器で、地域色も強い。胎土に石英・長石・雲母粒を含み、器形は基本的に頸部のくびれが弱いキャリパー形をなす。底部には底面から胴部下半へ段をなさずなめらかに移行するものと、張り出し底様を呈するものがある。第43図—461は木葉痕を残し、第43図—465では縦位の隆帯が底部にまで達している。胴部には磨消帯が発達し、波状懸垂文・渦文が加えられる。沈線が細線化・曲線化した第43図—446・447等はi類土器に属するものかもしれない。口縁部文様はさらに3種に細分される。

h1（第22図—8・9・12 第23図—2・3・5 第38図—308～327）隆帯により文様帯を区画し、渦文を盛んに施す土器である。第23図—3・第38図—326では隆帯上に鍵手状の縦位沈線・縄文が加えられる。頸部以下に磨消帯・波状懸垂文を有するものがあり、第38図—309・310は沈状口縁をなす。焼成良好な破片が多い。

h2（第23図—4 第39図—328～346 第40図—347～354）隆帯・沈線による横長の文様区画を有する土器である。内彎しつつ外に開く口縁部形態が比較的多い。第39図—336～339は区画内を無文化する。第39図—329・335・336・第40図—347・351・354は隆帯上に刺突・横縦位の沈線・蕨手状沈線・縄文を加え、第39図—328の口縁突起部、波状口縁をなす第40図—351の口唇部には渦文・沈線が施される。第39図—346は鐔様の凸帯をめぐらす。隆帯上に縄文・刺突列を有する第23図—4は、地文として縄文・細条線を併用した特異な土器である。

h3（第40図—355～367）隆帯は相対的に低くなり、口縁部の文様区画が小型方形化・円形化した土器である。第40図—361は区画内を無文化し、第40図—366・367の隆帯上には縄文が施される。

i類（第9図—2～4 第12図—4～11 第15図—74～87 第22図—6・7・10・11・13・14・17 第41図—368～406 第42図—407～439 第43図—458）胴部文様帯がせり上り、口縁部文様帯が著しく退化・縮小化、ないしは消失した土器である。在地化しているが、加曽利EⅣ式土器（鈴木保他1980）に対比される。胎土はh類土器に類似し、器形は深鉢型をなす。第15図—84・第42図—436の胴部懸垂文（微隆帯・沈線）はY字状を呈する。文様は主に沈線により施され、隆帯は低く不明瞭となる。地文の縄文も細かいものが増える。第22図—10・第41図—368～370の沈線は渦文を構成し、第22図—7・11・第41図—376・394・第42図—409・410・423には縦位短沈線・蕨手状沈線・刺突列が加えられる。第15図—81・第42図—413・414は竹管を施文具とする。無文で横位沈線のみを有する第15図—77・第22図—6・第42図—426～435は当類に含めた。第41図—386・第42図—425は浅鉢型土器、鐔葉の凸帯をめぐらした第42図—437は壺型土器と思われる。

j類（第22図—15・16 第44図—468～484 第45図—485～516 第46図—517～537）広野C式土器（向坂1970 加藤1972 神村1978 大橋他1981）と呼ばれ、天竜川流域に分布する在地の土器である。頸部に刻み・刺突列を加えた凸帯をめぐらし、口縁部・胴部に縦位の結節縄文を施す。胎土は特徴的で、赤色粒を多量に含み、暗茶褐色を呈する。頸部のくびれが弱いキャリパー形をなす。胴部には磨消帯が見られ、第44図—482・第46図—532～534の原体は2箇所・2条4箇所の結び目を有する。第45図—506には蕨手状沈線が加えられる。底部は張り出し底様を呈する。口縁部文様は次の3種に細分される。

j 1 (第44図—468～473) 沈線・隆帯により横長の文様区画を構成する土器である。第44図—468・473には渦文が施され、第44図—469・471は3条・2条の結節を有する。第44図—468は波状口縁をなし、第44図—469は著しく内彎した口縁部破片である。

j 2 (第44図—474・476・477) 口縁部文様帯が退化・縮小化した土器である。第44図—474の文様区画は縦長の方形となり、第44図—476では口唇部に刺突列が加えられる。

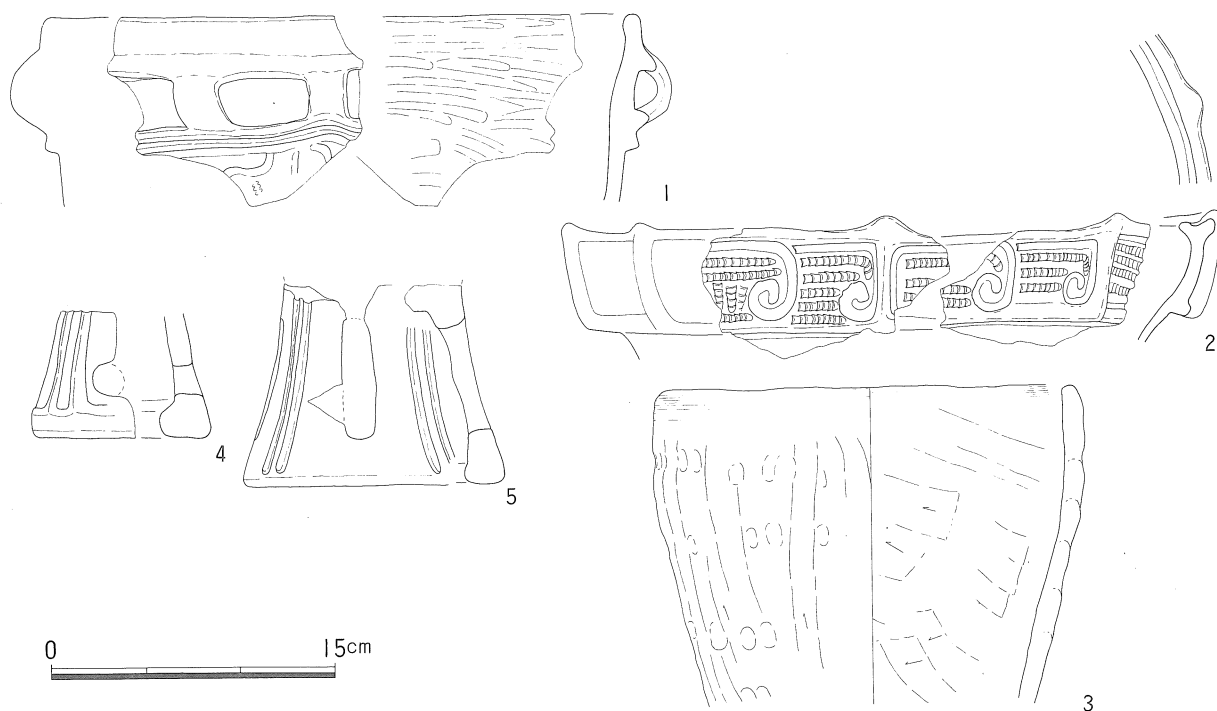
j 3 (第44図—478・479・484 第45図—485～487) 刻み・刺突列を加えた凸帯がせり上がり、口縁部文様帯が消失した土器である。口縁部は外に開き深鉢型をなす。第44図—479は2条の凸帯をめぐるすが、口端直下に半截竹管により刻み・刺突列を施した第45図—485・487には、凸帯は見られない。第45図—485は口縁突起部を有する。

k 類 (第46図—538～545) 縄文のみ施された土器片を一括し、k 類とした。口縁部形態は大きく内彎するものから外に開くものまでバラエティーに富む。多くはh・i 類土器に伴うものであろう。

l 類 (第27図—3 第47図—545～553) 無文の口縁部破片を一括し、l 類とした。内彎する口縁部形態は少ない。第27図—3は口縁近くを横ナデし、胴部内外面に縦斜位の板ナデ痕・指頭痕を残す。主にg・i 類土器に伴うものと思われる。

把手 (第27図—1 第48図—1～19) 第48図—1は口縁突起の頂部にまで押し引き沈線文を施したb 類土器の橋状把手である。突起部に円窓を持つ第48図—2は、第48図—3・4とともにd 類土器に属する。第48図—6・7は曾利Ⅱ式土器の頸部に付く橋状把手(e 類土器)に酷似し、円窓把手(第48図—11～14)は曾利Ⅲ式土器(f 類土器)に多く見られる。第48図—8～10もf 類土器の橋状把手であろう。第27図—1・第48図—15～19はh 類土器に属すると思われる。口縁部に多くの橋状把手を連続して付けた第27図—1は若干新しくなるものかもしれない。

底部・脚部 (第27図—4・5 第47図—555～559) 第47図—557は底面に編物状痕を、第47図—



第27図 昭和58年度出土中期Ⅲ群—b・l 類土器 把手 脚部実測図

2 = Ⅲ群—b 類 3 = Ⅲ群—l 類



第28図 昭和58年度出土中期Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群—a類土器拓影

1～14＝Ⅰ群 15＝Ⅱ群 16～50＝Ⅲ群—a類



第29図 昭和58年度出土中期Ⅲ群— a・b・c 類土器実測図・拓影

51~83=Ⅲ群— a 類 84~88=Ⅲ群— b 類 89~98=Ⅲ群— c 類



第30図 昭和58年度出土中期Ⅲ群—c・d類土器拓影
 99~106=Ⅲ群—c類 107~117=Ⅲ群—d類



第31図 昭和58年度出土中期Ⅲ群—d類土器拓影

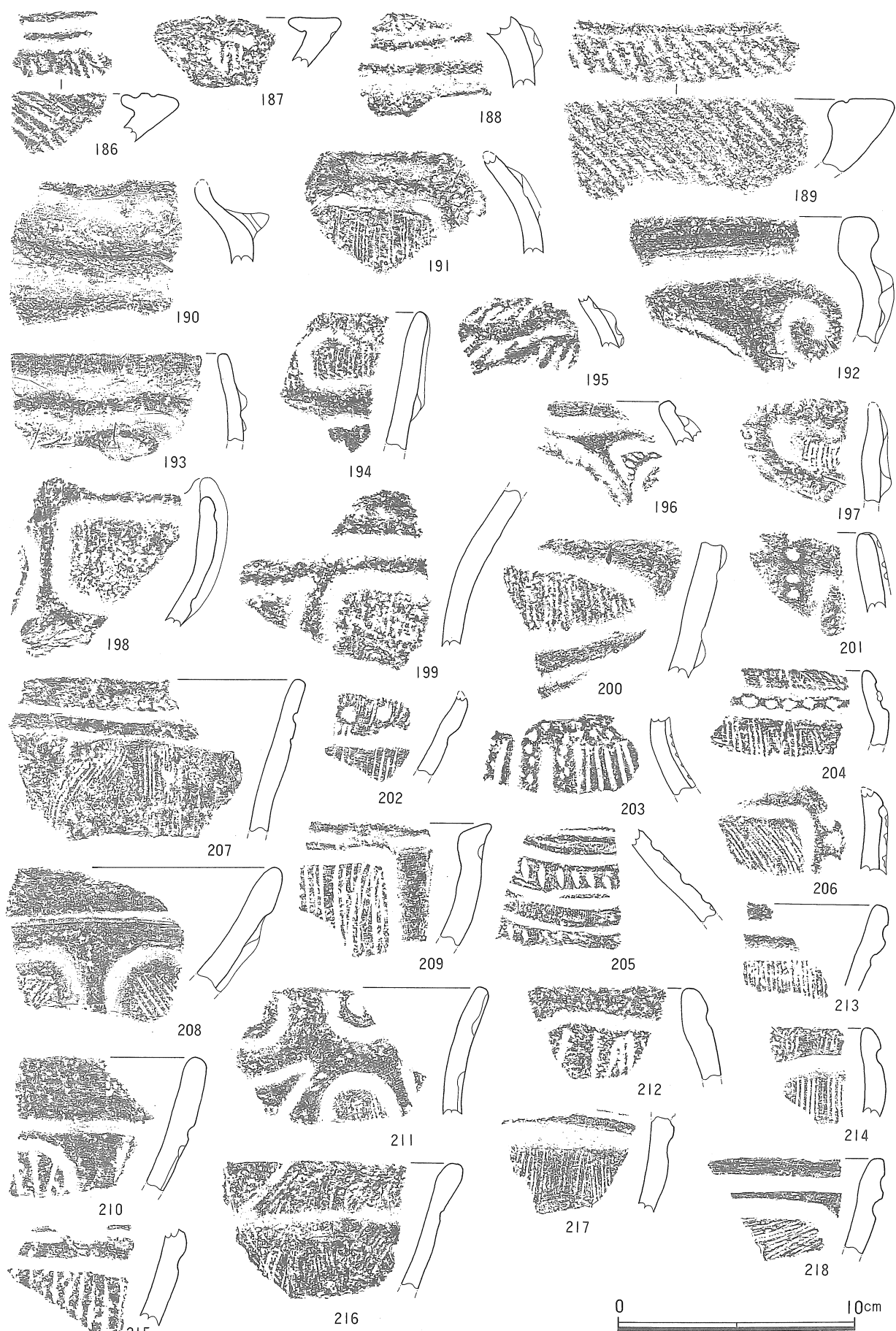


第32図 昭和58年度出土中期Ⅲ群—d・e類土器拓影

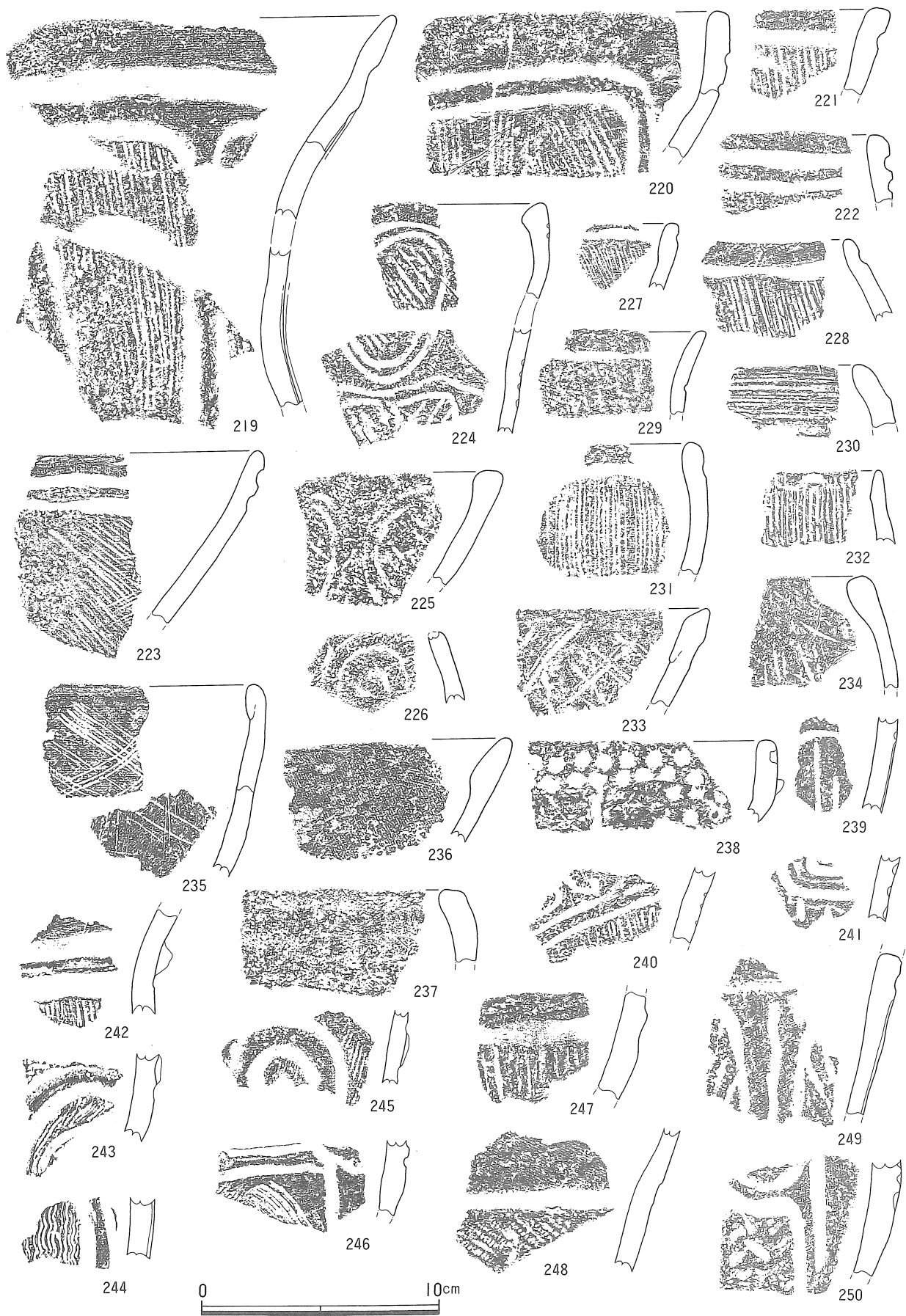
145～154＝Ⅲ群—d類 155～164＝Ⅲ群—e類



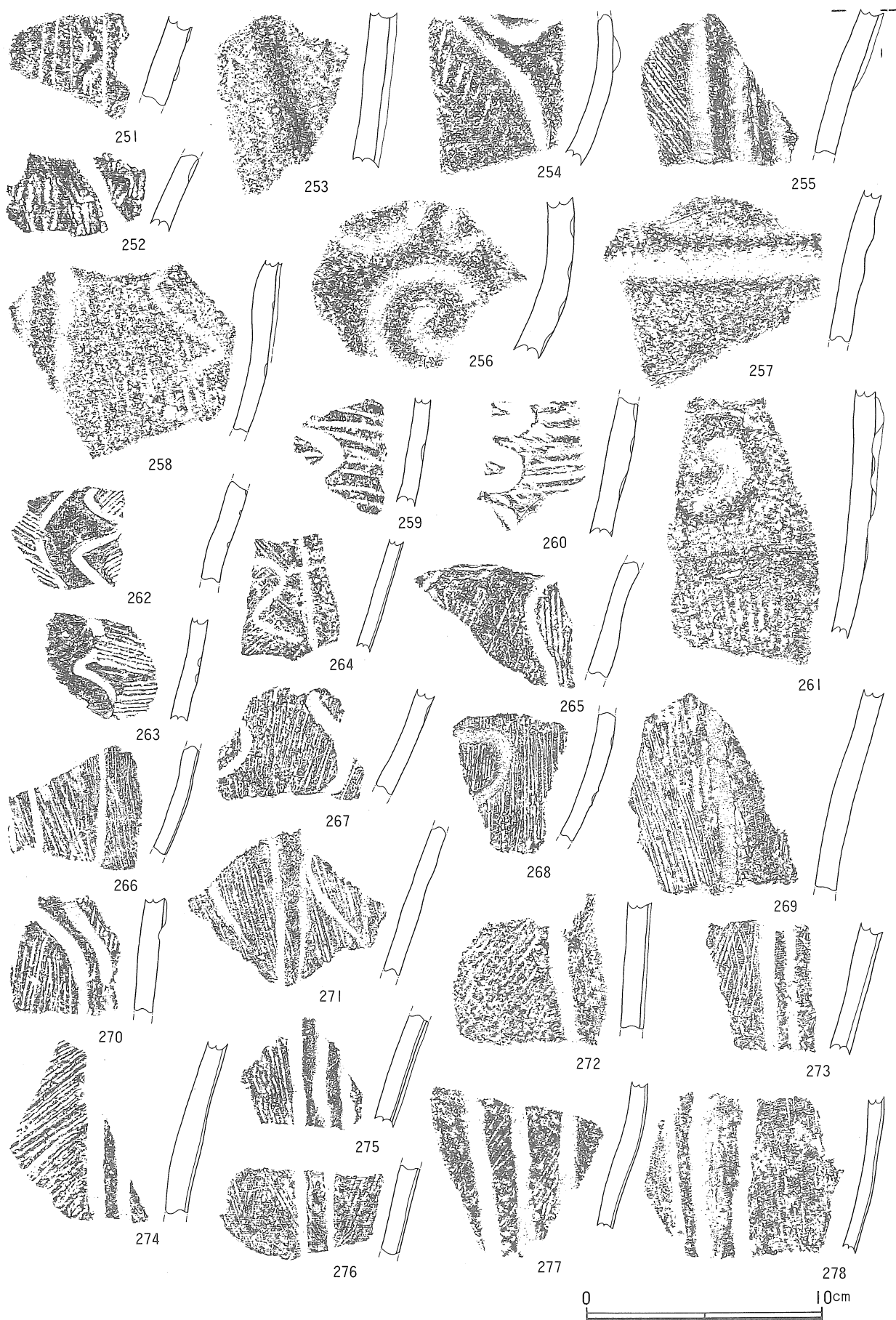
第33図 昭和58年度出土中期Ⅲ群—f 類土器拓影(1)



第34図 昭和58年度出土中期Ⅲ群—f 類土器拓影(2)

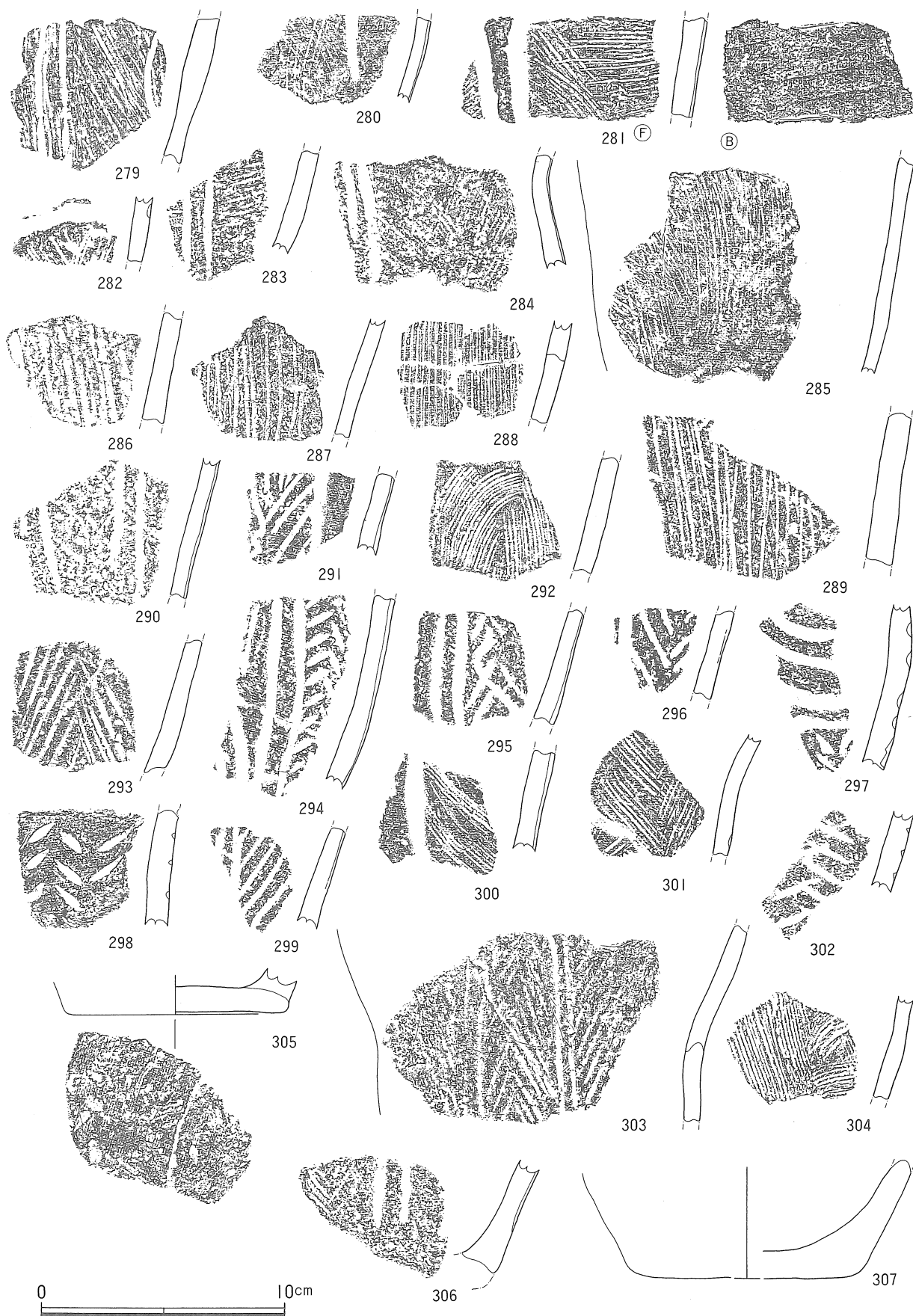


第35図 昭和58年度出土中期Ⅲ群—g類土器拓影

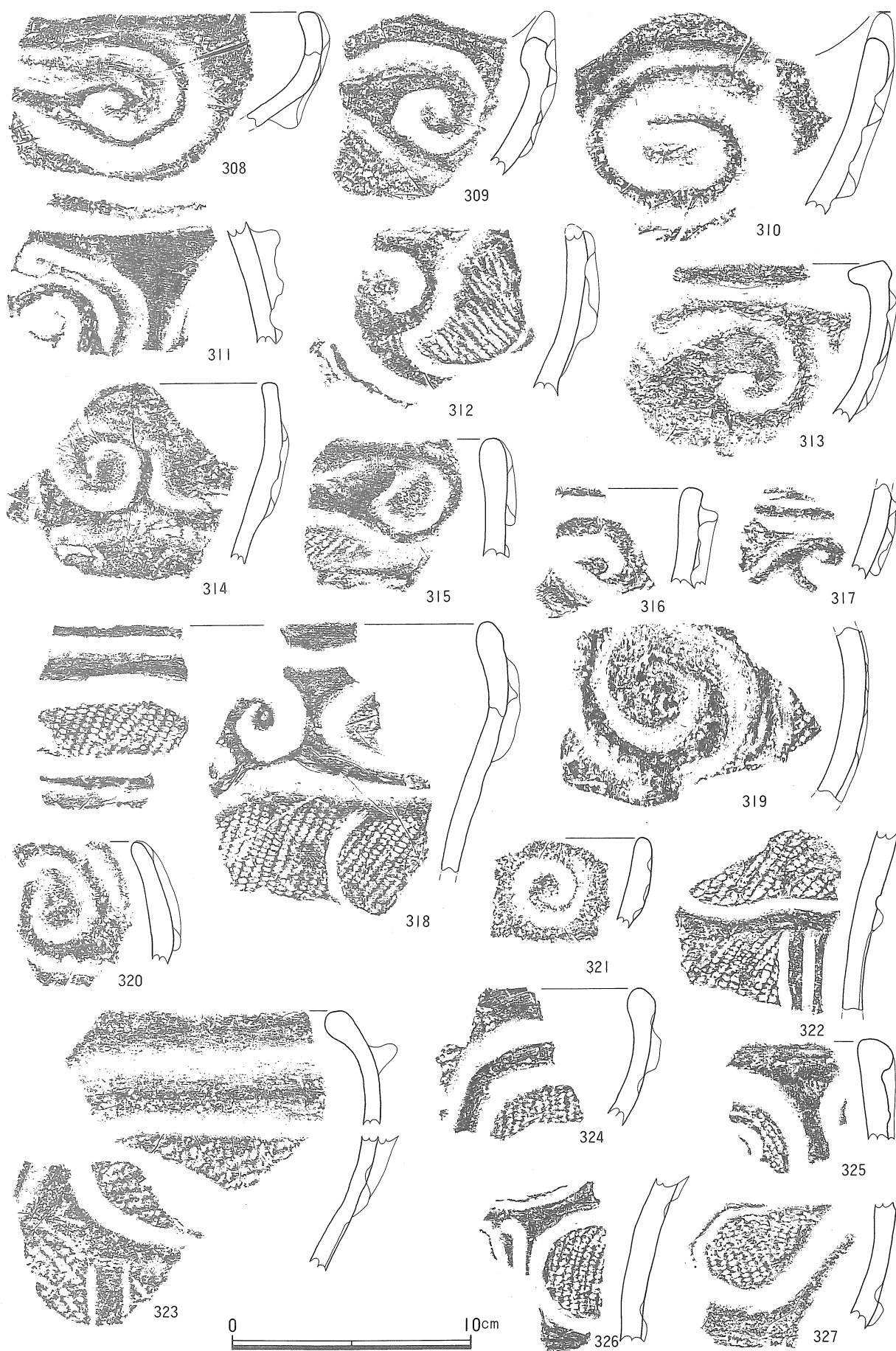


第36図 昭和58年度出土中期Ⅲ群—e・f・g類土器拓影

251=Ⅲ群—e類 252~261=Ⅲ群—f類 262~278=Ⅲ群—g類



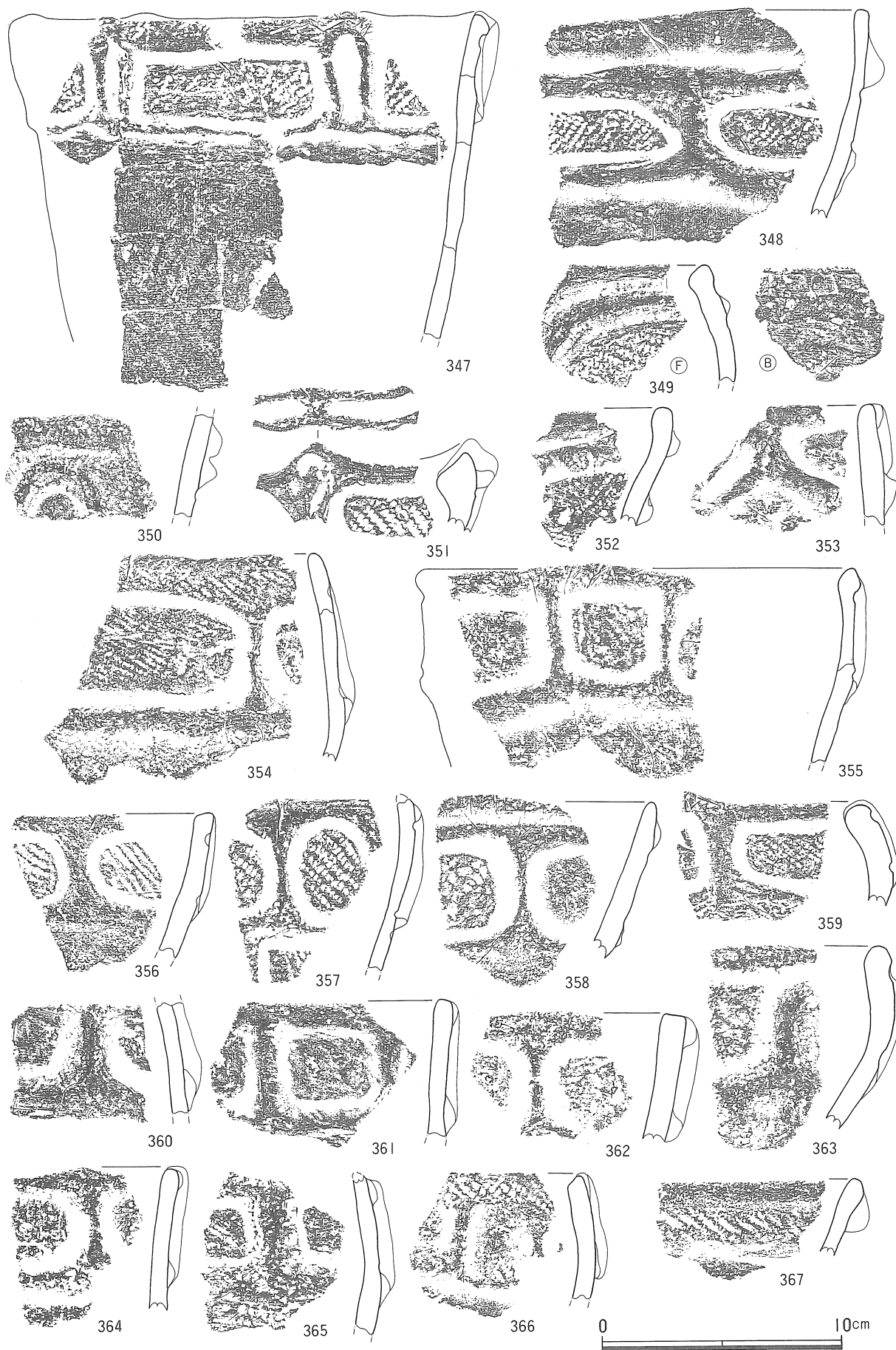
第37図 昭和58年度出土中期Ⅲ群—g類土器実測図・拓影



第38図 昭和58年度出土中期Ⅲ群—h類土器拓影(1)



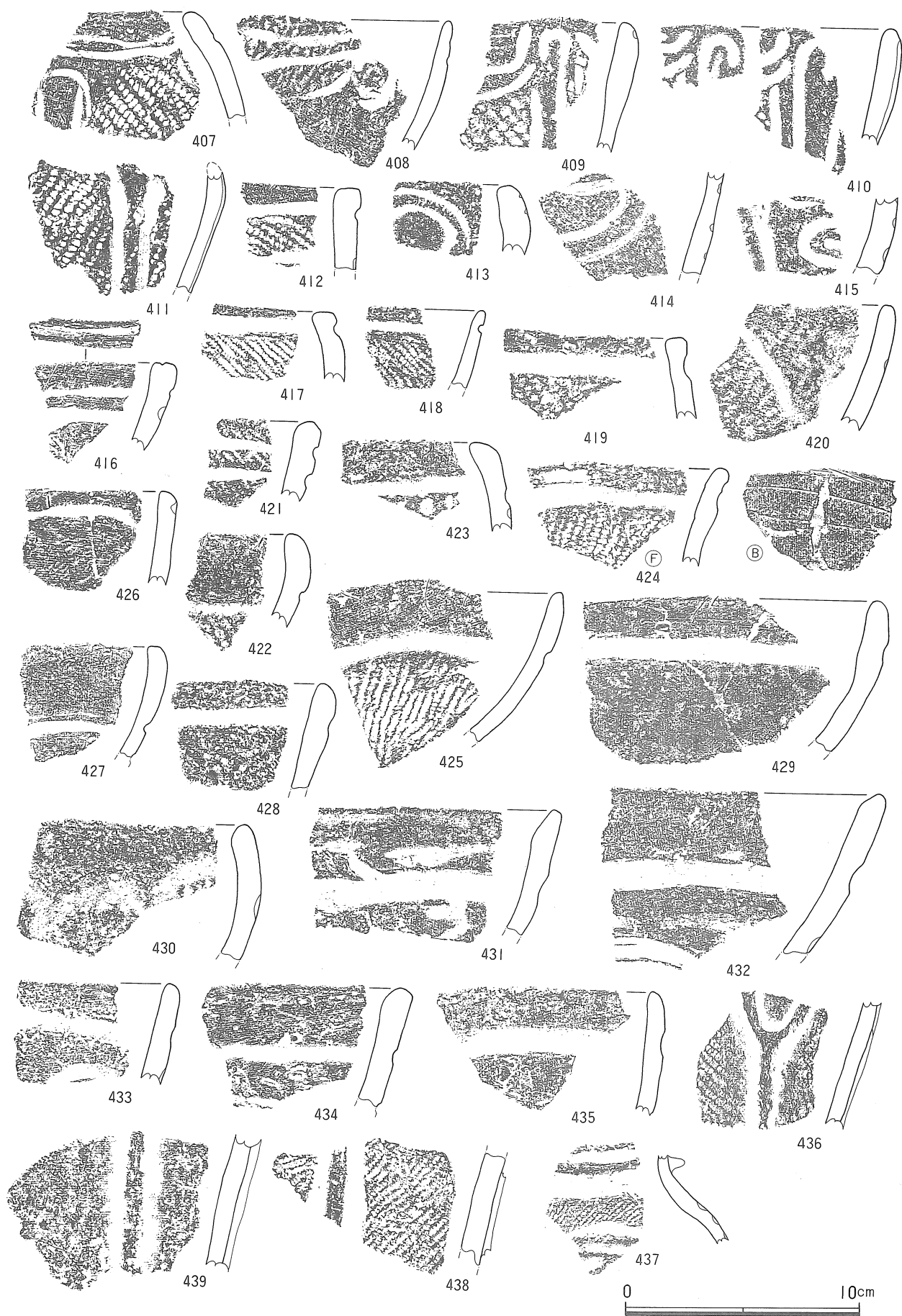
第39図 昭和58年度出土中期Ⅲ群—h類土器拓影(2)



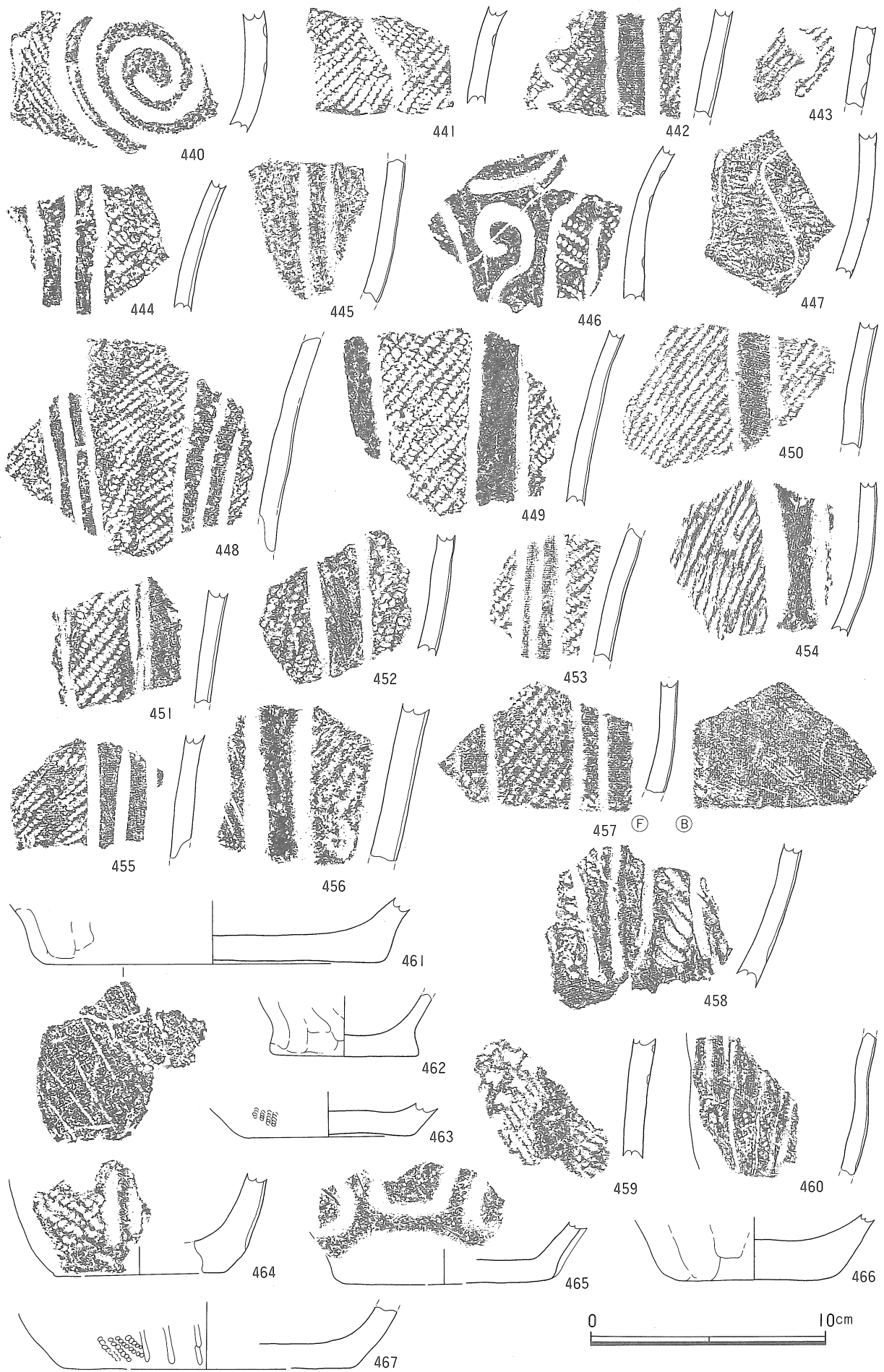
第40図 昭和58年度出土中期Ⅲ群一h類土器拓影(3)



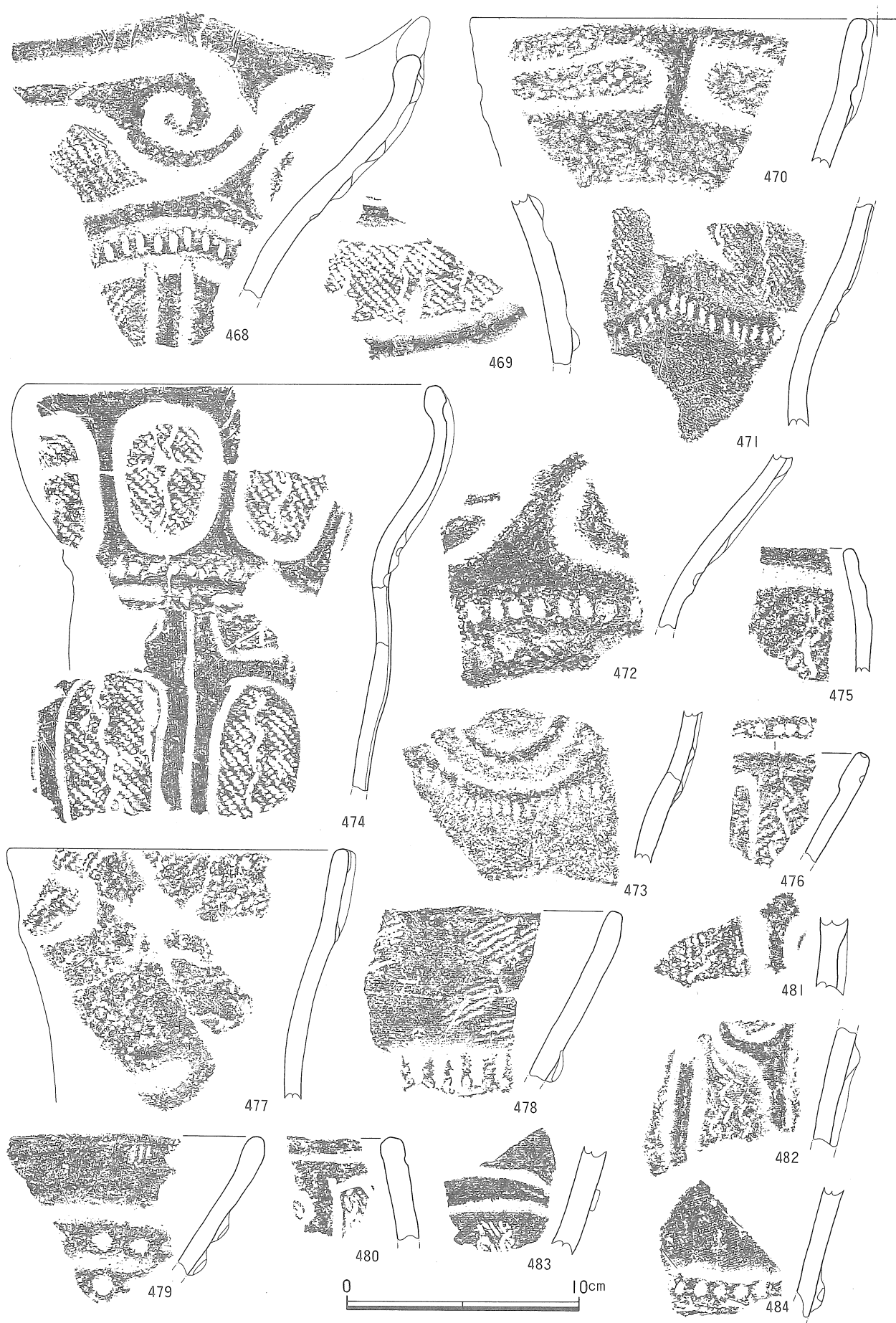
第41図 昭和58年度出土中期Ⅲ群—i類土器拓影(1)



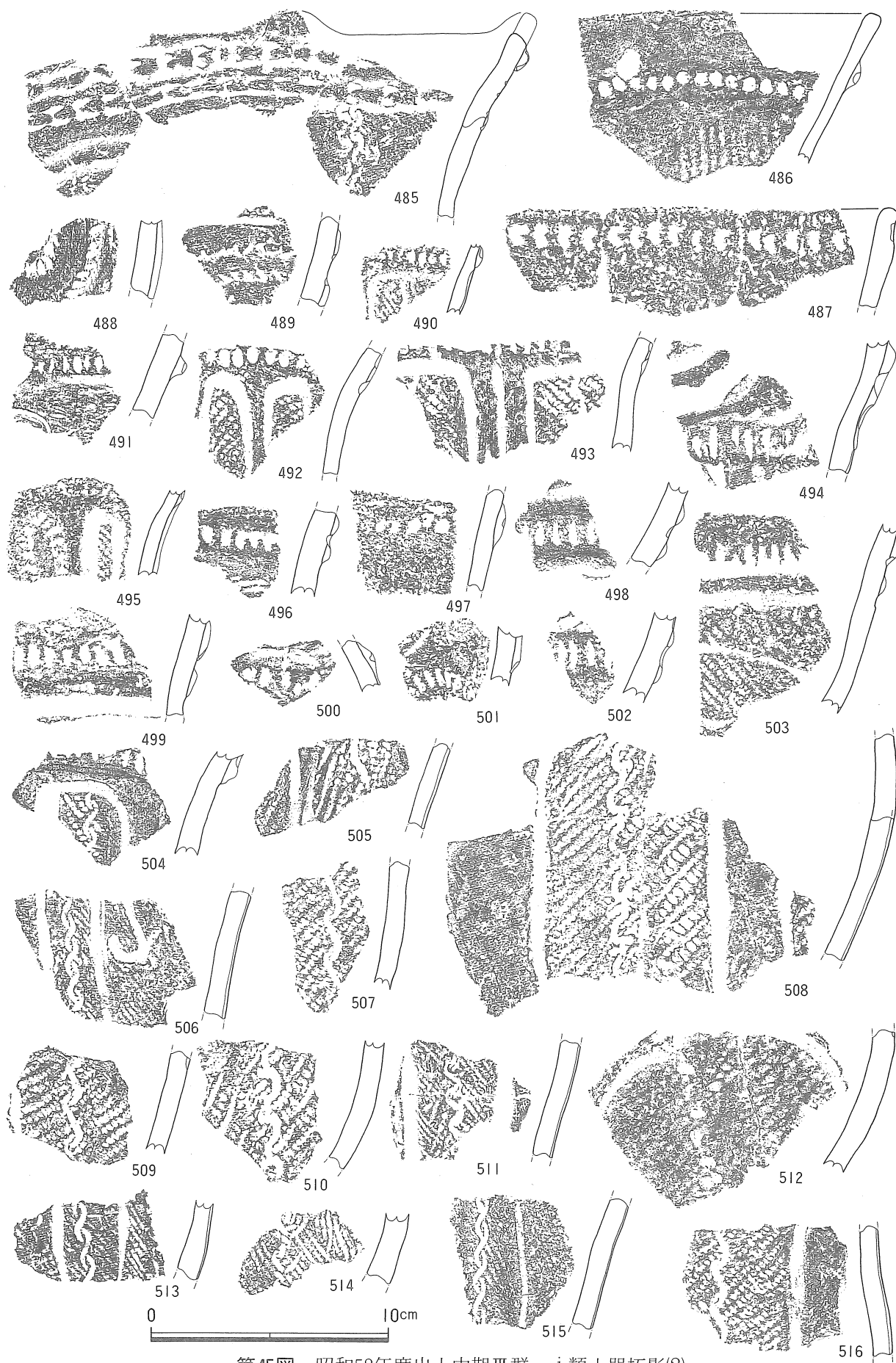
第42図 昭和58年度出土中期Ⅲ群—i 類土器拓影(2)



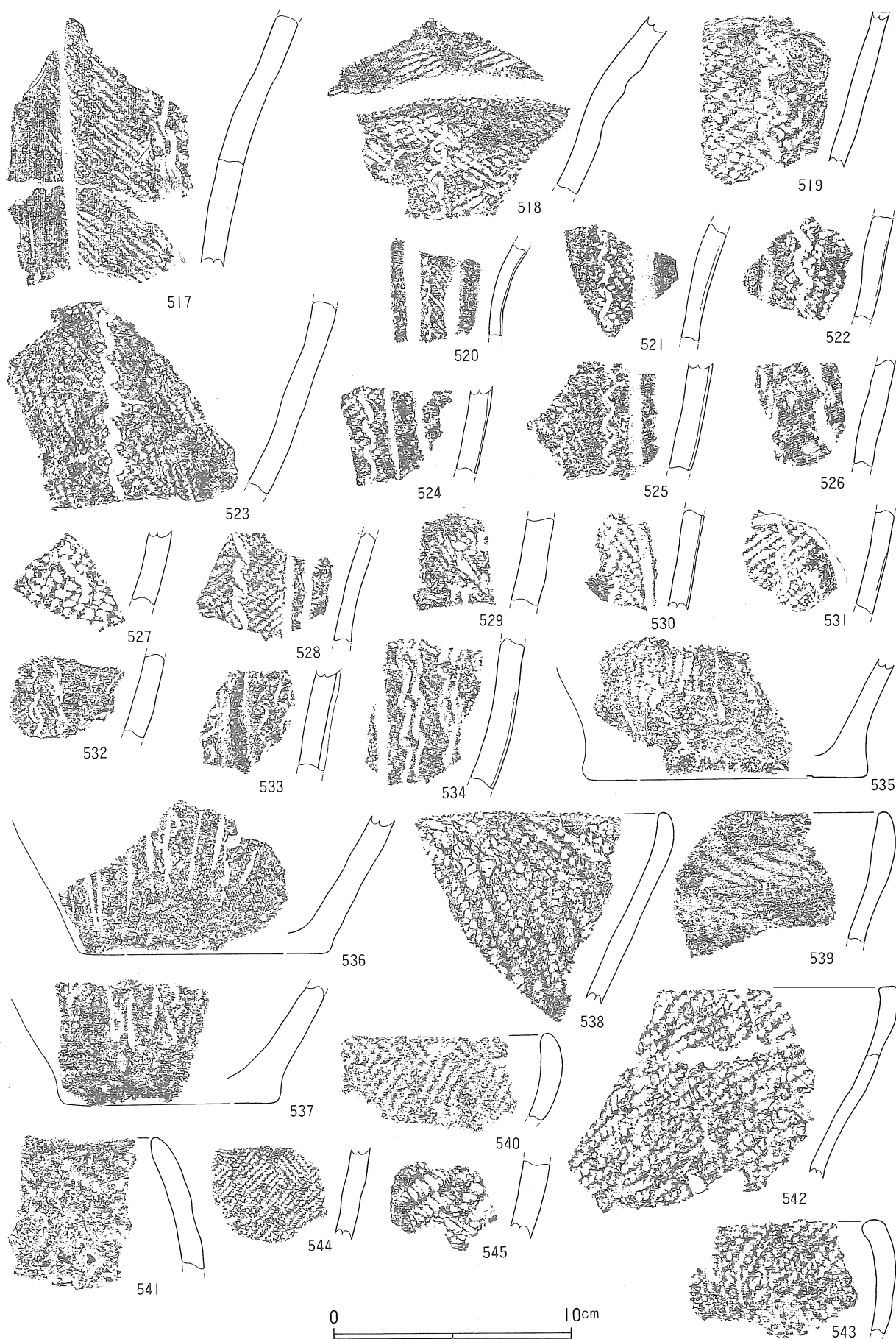
第43図 昭和58年度出土中期Ⅲ群—h・i類土器実測図・拓影
 440～457・459～467＝Ⅲ群—h類 458＝Ⅲ群—i類



第44図 昭和58年度出土中期Ⅲ群一j類土器拓影(1)



第45図 昭和58年度出土中期Ⅲ群一j類土器拓影(2)

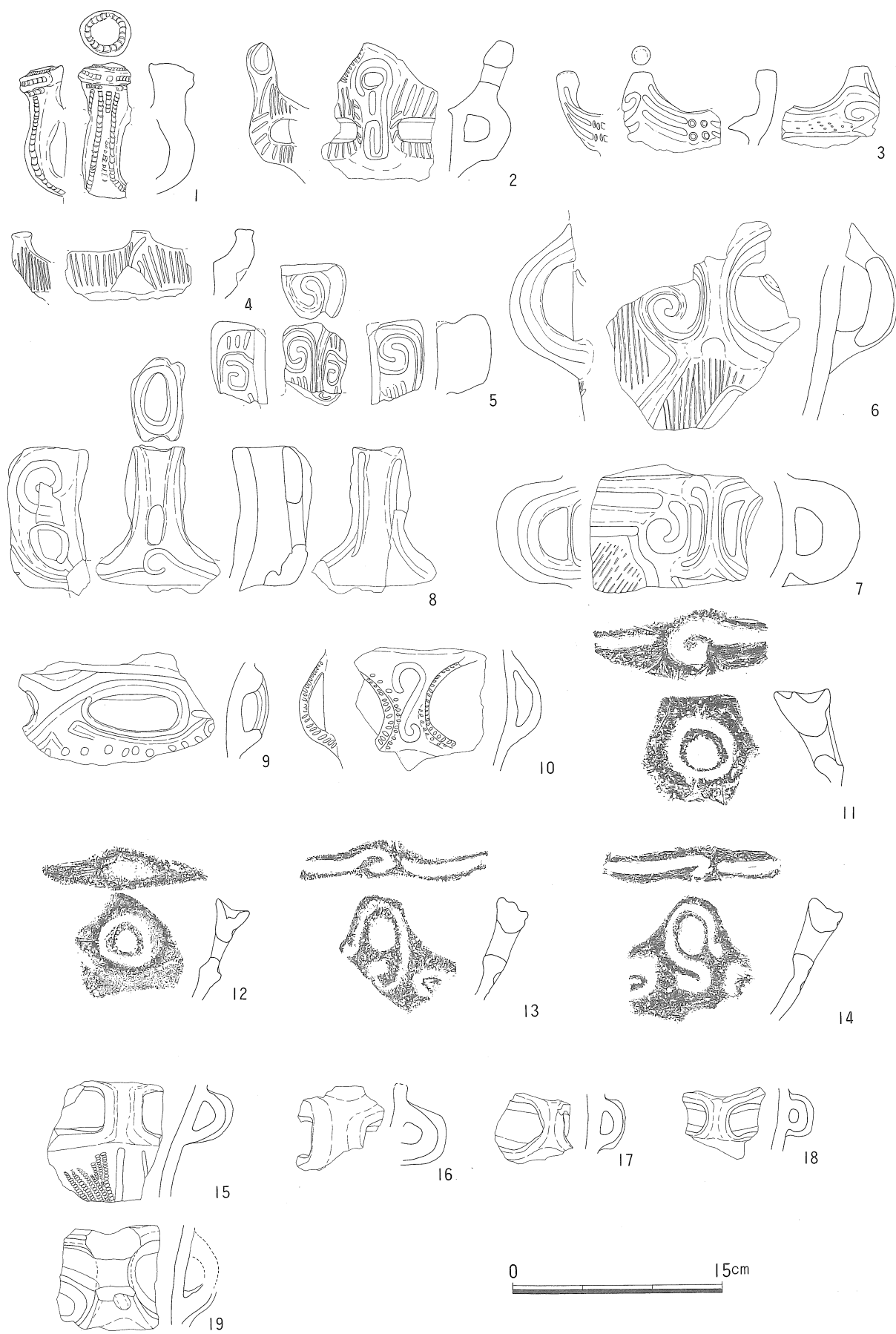


第46図 昭和58年度出土中期Ⅲ群—j・k類土器拓影
 517～537＝Ⅲ群—j類 538～545＝Ⅲ群—k類

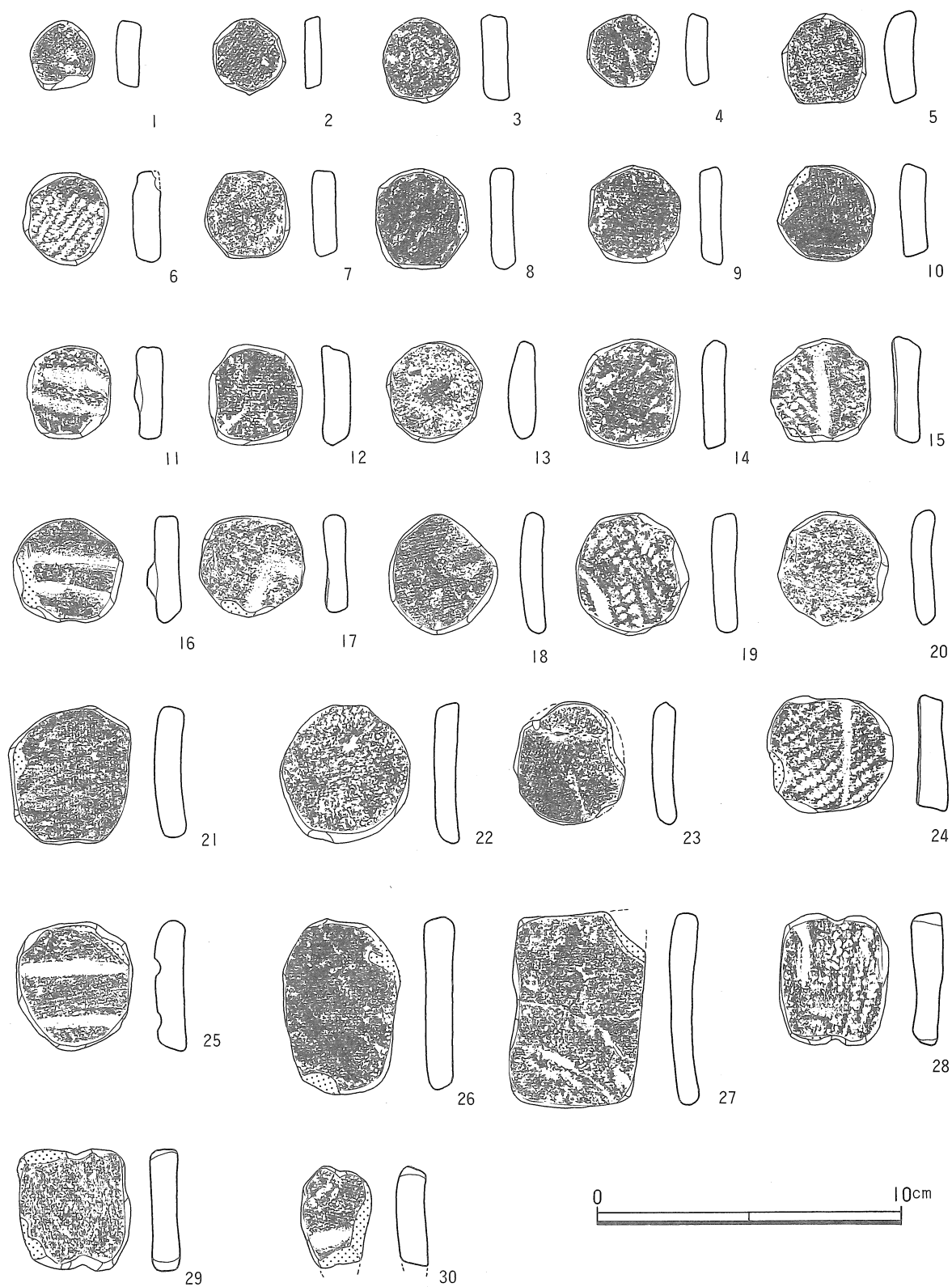


第47図 昭和58年度出土中期Ⅲ群-Ⅰ類土器・底部実測図・拓影

545～553＝Ⅲ群-Ⅰ類



第48図 昭和58年度出土中期Ⅲ群土器把手実測図・拓影



第49図 昭和58年度出土土器片円盤・土器片錘拓影

558は網代痕を残す。第47図—559は上げ底様をなす。円形あるいは楕円形の窓を有する脚（第27図—4・5）はf・g類土器に伴うものと思われる。

土器片円盤（第49図—1～25）

破片を含めれば100点余り出土している。土器片の周囲を丸く磨くが、わずかに角を残したのものもある。径2.0～4.2cmを測り、大きさにはバラエティーが見られる。縄文を施した土器（h・i・k類土器）・無文土器（l類土器）を転用したものが圧倒的に多い。

土器片錘（第49図—26～30）

長径3.0～6.2cm 短径2.0～4.0cmを測る。土器片を方形・楕円形に磨き整形し、第49図—28・29は両端に溝を刻む。第49図—26・27はl類土器を、第49図—28～30はh・i・k類土器を利用したものと思われる。第49図—26・27は錘でない可能性もある。

小 結

今調査で出土した土器の大半は中期後葉（中期Ⅲ群土器）に属するものであった。支谷斜面の包含層は厚く、初めて長者平遺跡の土器を層序により区分し得るかと期待したが、第3号住居跡や集石遺構等に伴った資料を除き、遺物は中期Ⅰ・Ⅱ群土器も含め、第Ⅱ・Ⅲa・b層中に混在していた。したがって出土土器を3群12類に分類した規準は、器形・文様の推移等、いわゆる型式学的方法によっている。

中期Ⅲ群土器について整理し小結としたい。

厳密なデータを作成していないが、出土総量の約40%をf・g類土器が占め、次いでh₂・h₃・i類土器の比率が高い。a・d類土器の出土量も比較的多い。a類土器は小支谷の谷頭近くに集中し、多くは第3号住居跡に伴っていたものと思われる。

a類土器の鋸齒状文（a1類）・刻み・刺突列（a2類）は里木貝塚Ⅱ・Ⅲ式土器にともに見られる施文要素である。一方4類に細分された里木Ⅲ式土器のうち、簡略化した3つの類の口縁部形態・横位の細条線等はa類土器中にまったく認められない。顕著な上げ底を呈する底部片はなく、波状文も里木Ⅱ・Ⅲ式土器の「波うつ波状文」（間壁1971）とは趣を異にする。a類土器の文様構成は増子康真氏が中富Ⅲ式土器—B類とした一群（増子1979）、清水ノ上貝塚第三群3類土器—B（山下1979）に類似し、在地化していよう。a3類土器には地文を持たないものも多く、文様の変遷過程から見れば、a1・a2類土器に比べ新しくなると考えられるが、里木Ⅱ式土器の指標とされた地文の撚糸文はa3類土器のみに施され、a1～a3類土器の施文手法は、地文が撚糸文から細条線へ転化した時期、中遠地方において同時に用いられていたと考えたい。

b類土器の出土量はきわめて少なく、中期Ⅲ群土器のなかで、特異な色調（灰褐色）・胎土（砂質）を示す。咲畑貝塚第一群土器—A類（久永1960）に酷似し、渥美・三河地方から直接移入された可能性がある。

c・d類土器は咲畑式土器以降、中期後葉の東海系土器として整理できた土器群である。c類土器は退化しているもののb類土器の施文手法を踏襲し、d類土器の第30図—108・117や第48図—2の把手に施された短沈線列は、神明式土器第2グループの「隆帯と貼付文による立体的装飾が著しい」（増子1970）土器によく似ている。d1類土器はおそらく前記の「立体的装飾が著しい」土器との関連のなかで生まれてきたものであろうし、c・d類土器は東海地方西部域の神明式土器段階に対比できているが、口端内側に隆帯をめぐらし、内外面に地文の縄文・細条線を施した土器（d1類）は、知りえたかぎり、東海地方西部域に類例を見ない。隆帯上に刻み・刺突列を加える手法（d2類）も他地域に比べ盛んであり、d類土器はきわめて在地性に富んでいる。

e 類土器は中部高地の曾利Ⅱ式土器に、h 類土器は関東地方の加曾利EⅢ式土器に対比され、f・g 類土器、i 類土器は、それぞれe・h 類土器の漸移的な変化型式として理解できる。e 類土器では顕著でないが、h 類土器には、第23図—4に代表されるように中部高地系（地文の条線）・東海系（隆帯上の刻み・刺突列・縦位短沈線等）土器との接触（相互の影響）が認められ、在地化の傾向は口縁部文様帯が退化・縮小化、消失するにしたがって一層進行している。

j 類土器は神村透氏が1978年に指摘された、飯田地方を中心に分布する「結節縄文をつけた一群の土器」にあたる。A～Gの7形態（以上）があるとされ、施文手法には2期以上の変遷が認められるという（神村1978）。j 類土器は3種に細分され、J1～J3類土器への変化は、e～g 類土器、h・i 類土器と同様、口縁部文様帯が退化・消失していく過程である。当地方においても、j 類土器自体が時期幅を持って変化を遂げていくようであり、最終段階まで、頸部の刻み・刺突列が明確に残存することは、飯田地方との大きな相違点と思われる。

後世攪乱を受け、住居跡等の残りは良好でなかったが、次に遺構内における土器群の共伴関係について整理しておきたい。

もっとも多量の土器が出土した第3号住居跡では、a 類土器が圧倒的な主体を占め、b・d・e・f・g・i 類土器が伴出した。a 類土器には3種すべての施文要素が認められ、地文として撚糸文を施した土器片もある。f・i 類土器は他遺構での伴出関係からみて新しくなるとわれ、包含層からの混り込みと考えているが、a・b・e 類土器は同時期に存在していた可能性が大きい。この点東海地方西部域の編年（増子1979）と錯誤するものの、長者平遺跡において、曾利Ⅰ式・加曾利EⅡ式土器に並行・先行する中期後葉の土器群は未だ確認されておらず、中遠地方にあってはa 類土器の盛ん期が中富Ⅳ・Ⅴ式土器段階まで降るものと思われる。

集石遺構の直上から一括採集された土器群はf・h 類土器からなり、ともに口縁部文様帯を残していた。土器集中地点からはg・h・i 類土器がほぼ等しい割合で出土し、j 類土器を伴出した。少量ながら、第1・2号住居跡ではi 類土器に伴出するd・g 類土器が認められた。

各遺構での共伴関係から、a 類土器を主体とし客体としてb・e 類土器が伴出する土器組成と、わずかに新しくなり、f—g・h—i 類土器にj 類土器が伴う土器組成との2時期のあり方を想定できそうであるが、j 類土器と同じく在地性に富んだd 類土器の編年的位置は明確にしない。

昭和53年度以降、5次にわたる発掘調査の成果を踏まえ、第3章第3節で再度、長者平遺跡出土土器について検討してみたいと思う。

石 器

今回の調査では186点の石器が出土した。しかしこの中で遺構に伴ったものはわずか10分の1に過ぎず、また出土地点もばらばらであったため遺構単位ごとの特徴をつかむことはできなかった。

第3表は本調査出土石器・石鏃の石材組成表である。砂岩および花崗岩が全体の71.2%を占めるが、これは主に石錘や磨石・石皿などの比較的大型の生活用具に用いられ、小型の用具には鋭利な割れ方をする石材を選別していることがわかる。

石 鏃（第50図—1～19 第51図—20～30）

出度地点・石材およびその組成は第4・5・6表に示した。

今回の出土石器の中でもっとも多い85点を数える。図示したものはこのうちの35%ではあるが、形態的に特徴のあるものを選び、以下の通り分類した。

I 類 基部の平らなもの。（第50図—1・2）

II 類 基部の形態でさらにa・b・c 類に細分される。

Ⅱ a 類 基部がわずかに認められるもの（第50図—6・7・9）

Ⅱ b 類 基部に浅い抉入のあるもの（第50図—8・10～14）

Ⅱ c 類 基部に深い抉入のあるもの（第50図—15～17）

Ⅲ類 いわゆる長脚のもので、さらに a・b 類に細分される。

Ⅲ a 類 先端が鋭角な二等辺三角形を呈し、基部の幅が長さの 3 分の 1 前後のもの（第50図—18・19 第51図—20～24）

Ⅲ b 類 先端部は鈍角で基部が全体の 2 分の 1 前後を占めるもの（第51図—25～27）

第50図—1・2は全体的に丁寧な調整剥離を行っており、細部にわたる仕上げも行き届いている。前者の場合は、欠損した長脚鏃の再調整型とも考えられるが、ここではひとまずⅠ類に含めた。第20図—6・7・9は小剥片を基材として用いており、必ず片面あるいは両面に一次剥離面を残している。また抉も粗雑であり、形も一定していない。この系統を剥片鏃と考えても良からう。第50図—8・10～14はⅡ a 類とは異なり、抉を入れる際の調整剥離も丁寧であり、均整のとれた形態をしているが、その大きさは19～30mm とかなりの開きがある。これに対して、第50図—15～17は基部を意識したように抉は深く丁寧である。Ⅱ a 類と同様に一次剥離面を残し、刃部の作りはかなり粗雑である。また長径も15mm 前後と小さい。

第50図—18は両基部が次損しているが、刃部の長さから考えてⅢ a 類に含めた。調整剥離は表裏から行われており、器厚も薄い。このタイプの石鏃は1点しかなく完形であれば40mm を超える大型の石鏃であろう。第50図—19の刃部は欠損しているが、基部の長さから当類に含めた。前者とは対称的に器厚も厚く、全体的に丸みを帯びている。

第51図—20～24は刃部の鋭角な二等辺三角形を呈する点で共通するが、抉入の浅い第51図—20・21と、深い第51図—22～24に分れる。双方とも全体の調整剥離は丁寧で細身の美しい形態をしている。この形の石鏃は他に欠損品をあわせて17点出土しているが、その大きさは15～30mm とバラエティーに富む。

第51図—25～27は長径と短径の値が等しいか、あるいは短径の方が長く、抉入の深いタイプである。第51図—25は先端部を尖らせているが、第51図—26・27は逆にかなり丸味を帯びている。また第51図—26の刃部の調整剥離は比較的丁寧であり、第51図—25・27には片面ずつ交互に調整を加えた鋸歯状の箇所が認められる。この形態の石鏃は縄文前期の鋏形鏃に類似し中期に属する例は、関東地方中南部・中部地方などでも見られるが、その数は多いとは言えず、むしろ静岡県東部から西南部中期縄文遺跡にある程度見られることから、東海地方の特徴的な石鏃とも考えられる。

第51図—28～30は未製品である。第51図—28は先端部を欠損している。これら3点にはすでに基部の抉入調整が行われており、石鏃の製作技法を示す好資料と言えよう。

ポイント（第51図—31・32・第52図—33）

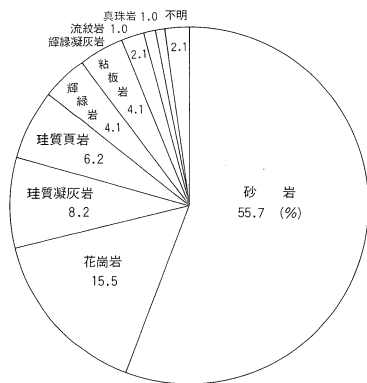
出土地点及び石材は第6表の通りである。

第51図—31は、全体的に丸味を帯び、表裏共に刃部の調整剥離を行っている。第51図—32は同形の未製品である。若干の調整剥離は施されているがかなり粗雑である。第52図—33の基部は未調整であり、自然面を残している。未製品と見るのが妥当であろう。

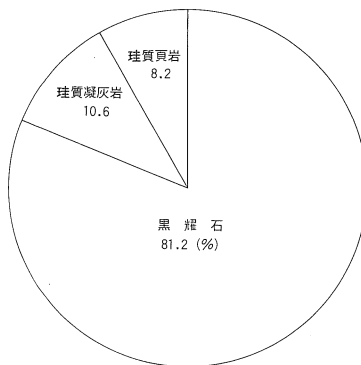
石鋸（第52図—34）

珪質凝灰岩製である。

いわゆる柳葉形を呈する。縁辺部の調整剥離は丁寧であるが、調整の際に裏面の一部が大きく剥離し、大きな段差が付いたと考えられる。このタイプは赤堀栄三氏の分類（赤堀1929）によれば石鏃の



石器組成表 (石鏃を含まない)



石鏃組成表

第3表 昭和58年度出土石器・石鏃組成表

範疇に含まれるが、本遺跡が縄文中期後葉を主体とすることからここでは石鋸とした。

石錐 (第52図—35)

H 8 — d 区の柱穴状遺構より出土した。珪質凝灰岩製である。

調整剥離は丁寧である。基部にやや抉入が見られ、先端部は断面五角形を呈している。

石匙 (第52図—36~38)

出土地点及び石材は第7表に示した。

第52図—36・37は縦型、38は横型である。第52図—36・38は一次剥離面の一部を残して調整剥離を施し、37は縁辺部の片側のみを剥離調整し、刃部を作っている。またごく一部ではあるが第52図—37には搔痕が認められる。

スクレイパー (第52図—39~41・第53図—42)

出土地点及び石材は第7表に示した。

第52図—39は石匙の未製品とも考えられるが片側のみ刃部調整が施されており、サイドスクレイパーとした。第52図—40は刃部の調整剥離を両面から行っている。第52図—41は縁辺に自然面を残し、小型石匙の未製品という可能性もある。第53図—42は小型剥片に剥離調整を行い、刃部を作るが、バルブはきれいに残り、未製品であろう。

磨製石斧 (第53図—43~45)

出土地点及び石材は第7表に示した。

第53図—43は仕上げの丁寧な小型磨製石斧である。表面には磨いた際の搔痕と刃部付近には使用痕が認められる。第53図—44も前者同様全面磨製であり、蛤刃の石斧である。第53図—45の刃部形態は下半が欠損しているため不明である。

局部磨製石斧 (第53図—46)

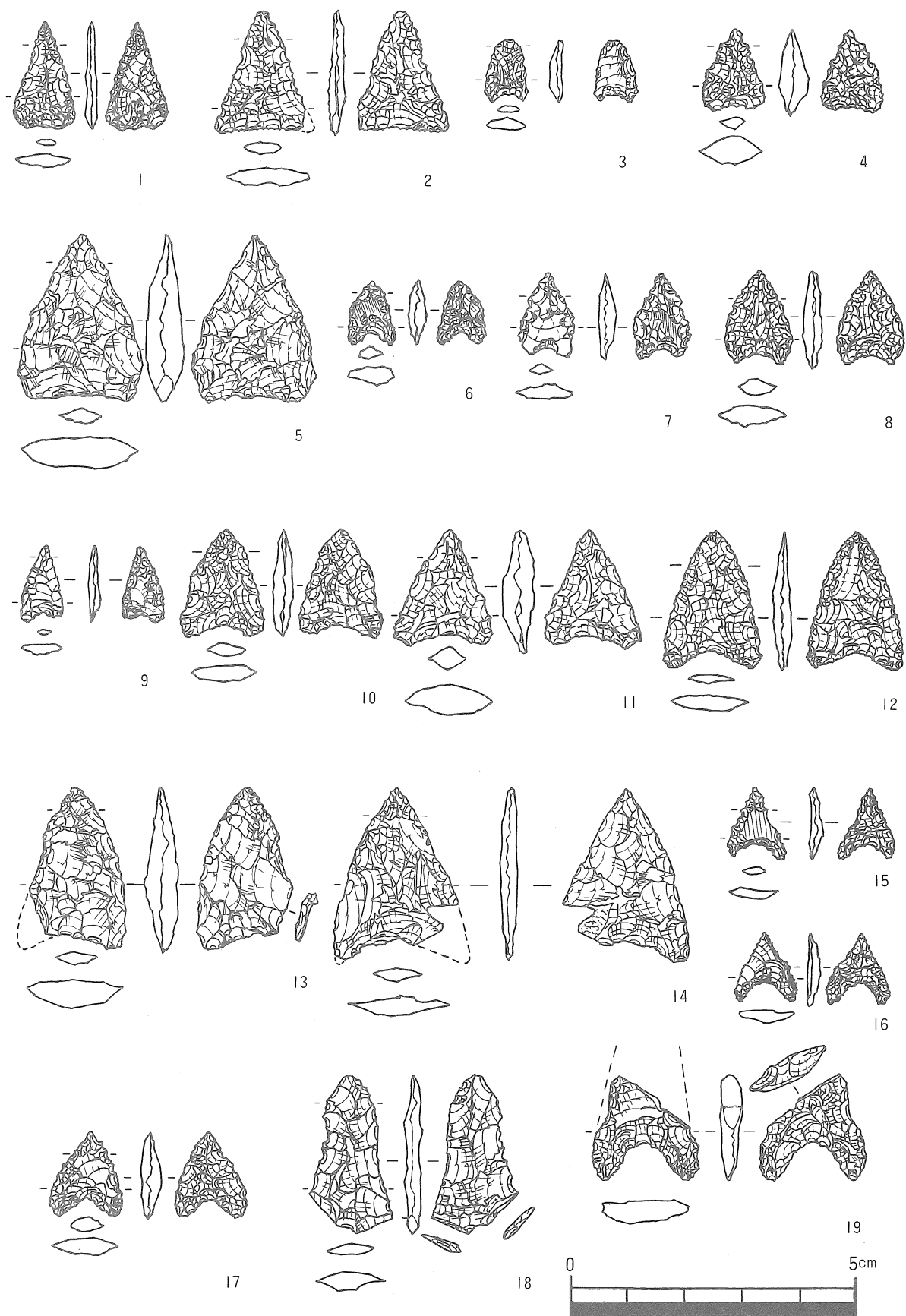
砂岩製である。

表面は自然面をさらになめらかに研磨している。裏面は調整剥離の後、磨いてはいるが完全ではなく刃部及び側面に剥離面を残す。

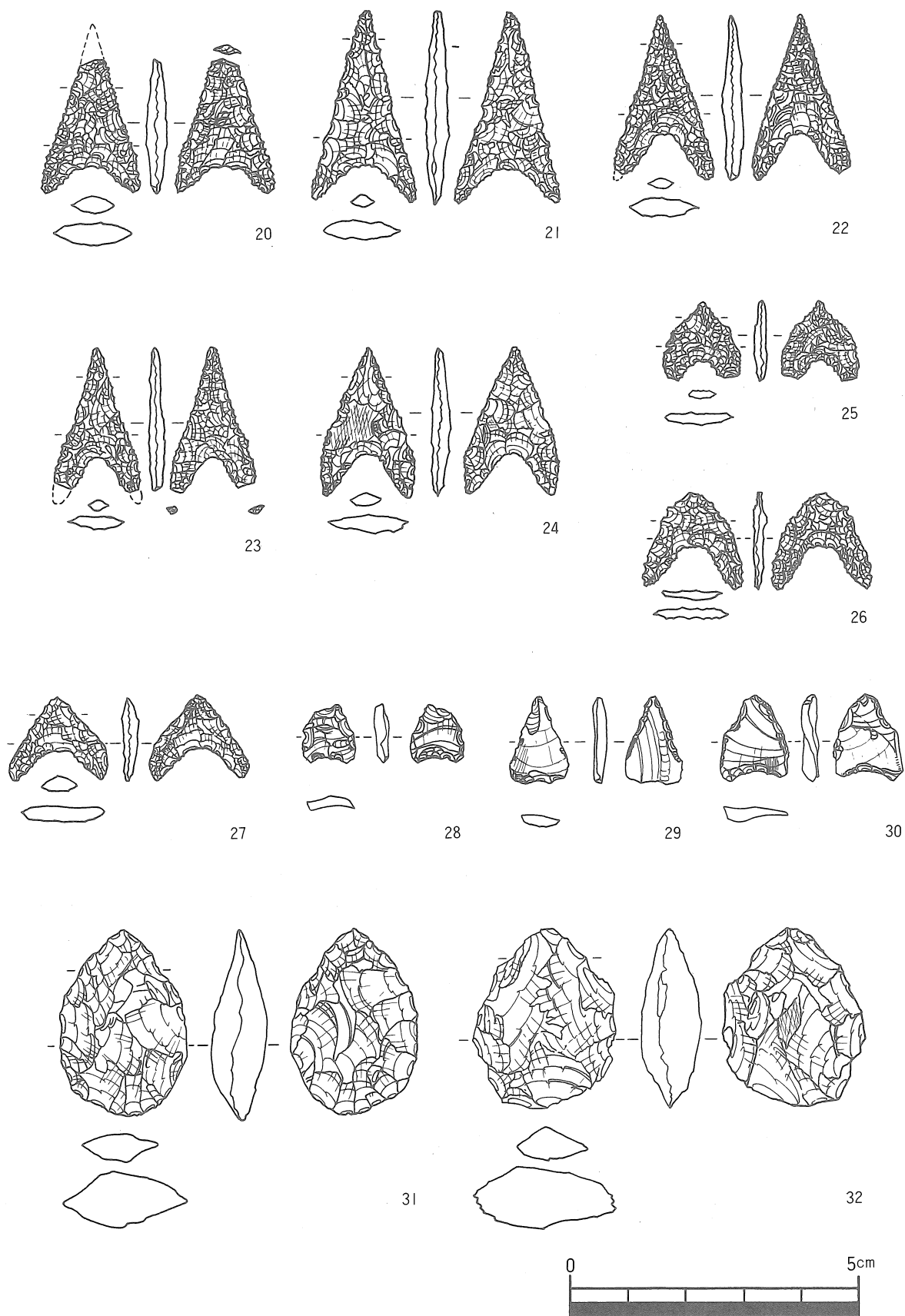
打製石斧 (第53図—47)

砂岩製である。

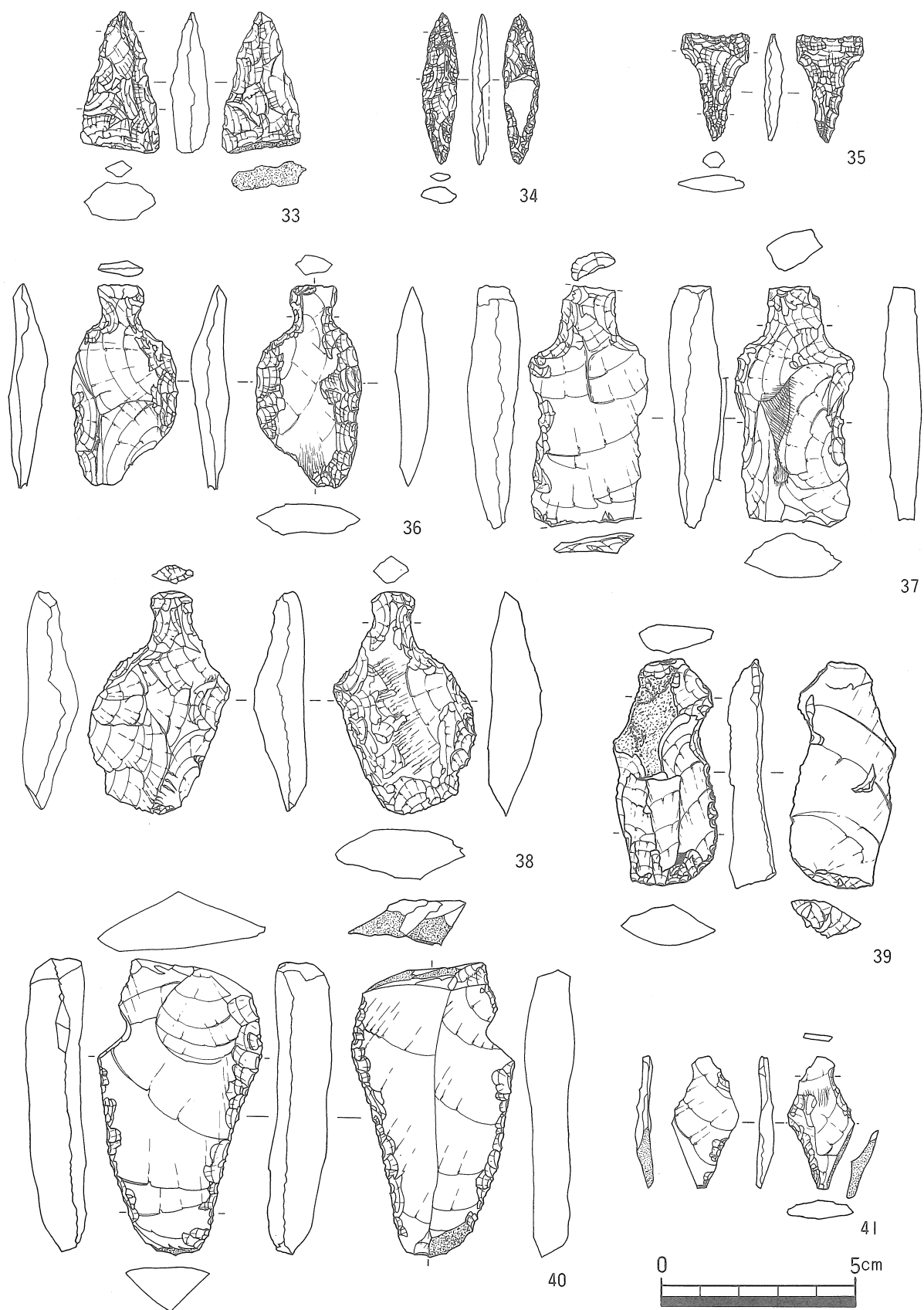
刃部は欠損しているが、着柄部に抉入を付けた分銅型に類似する形態をとる。裏面中央部は若干磨かれているようであるが、局部磨製とするには疑問もあろう。



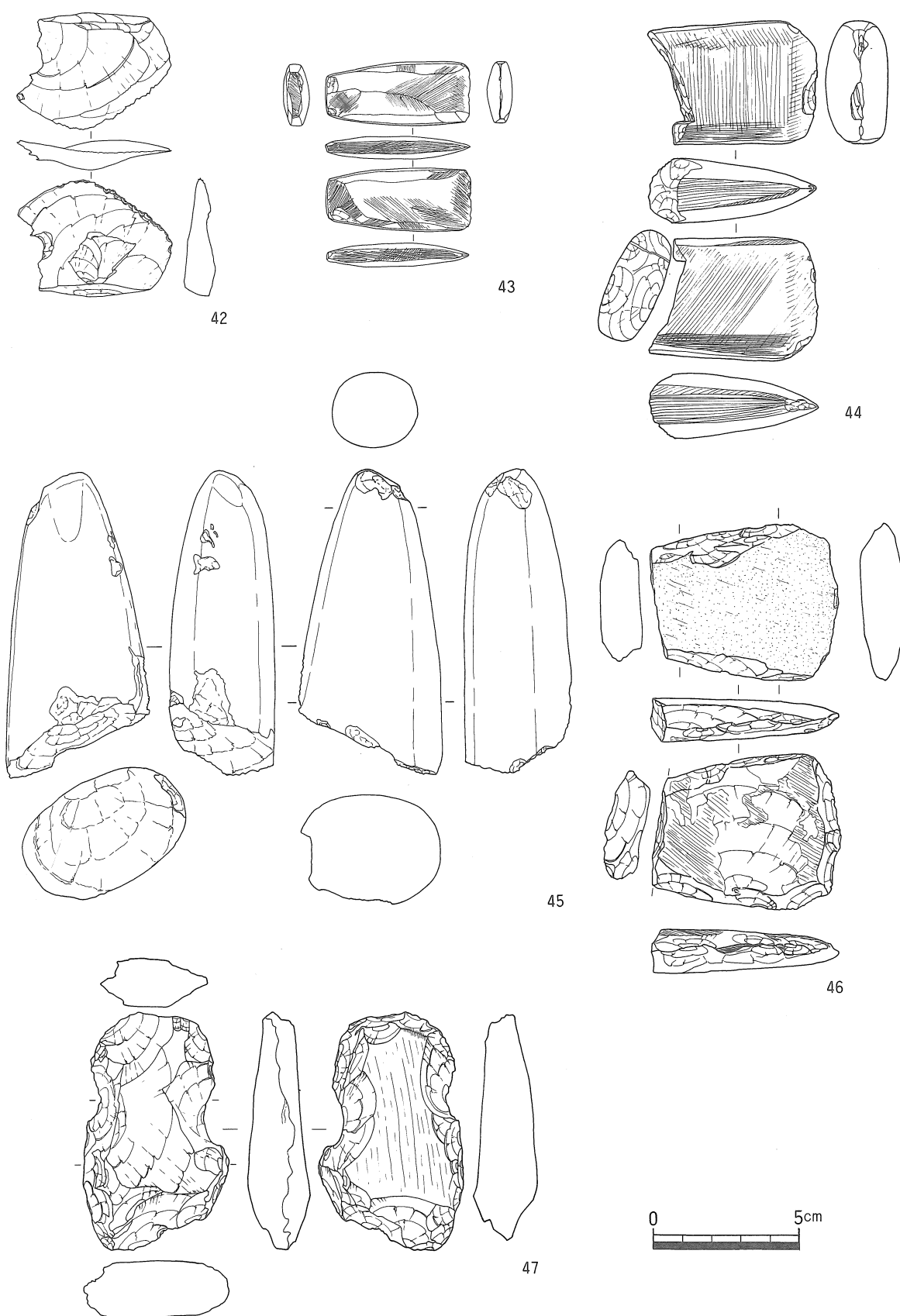
第50図 昭和58年度出土石器実測図(1)



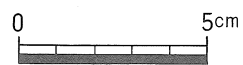
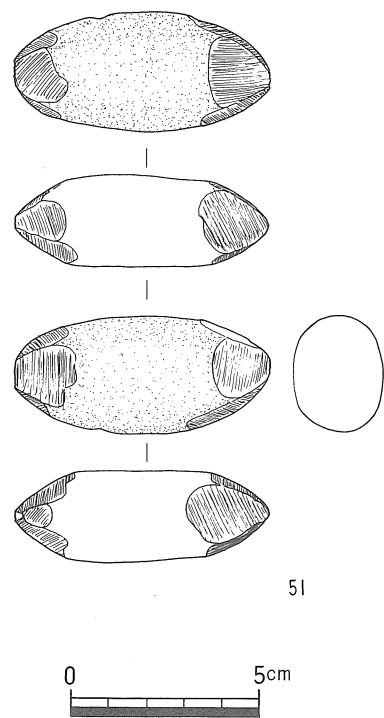
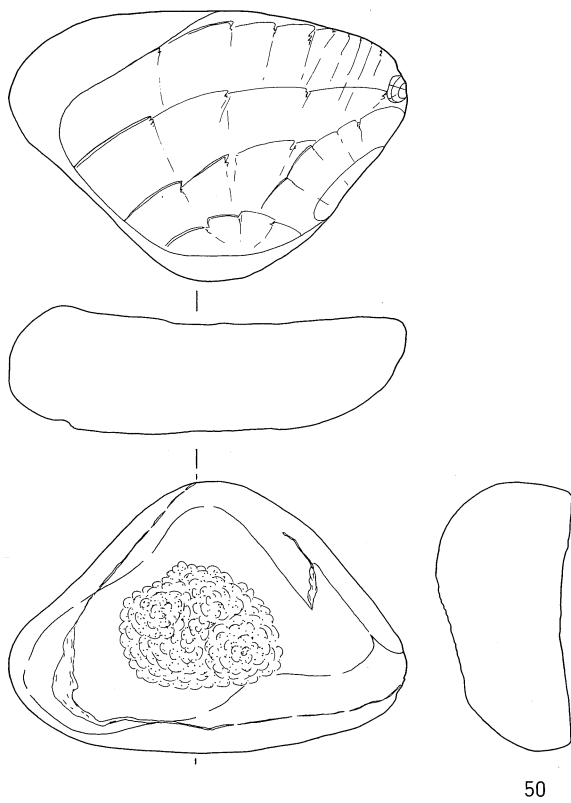
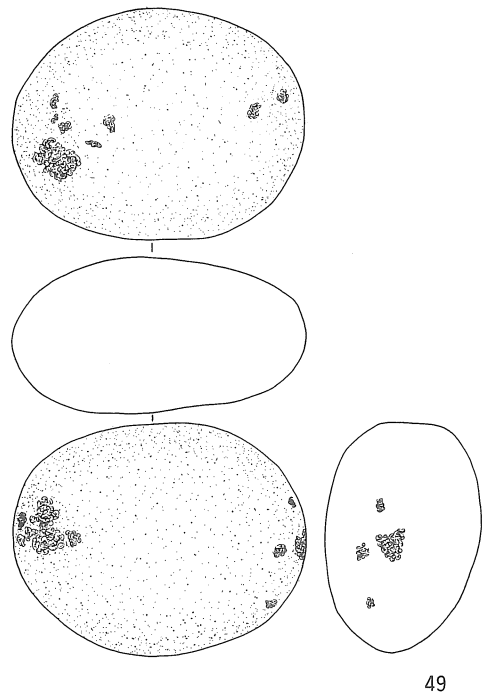
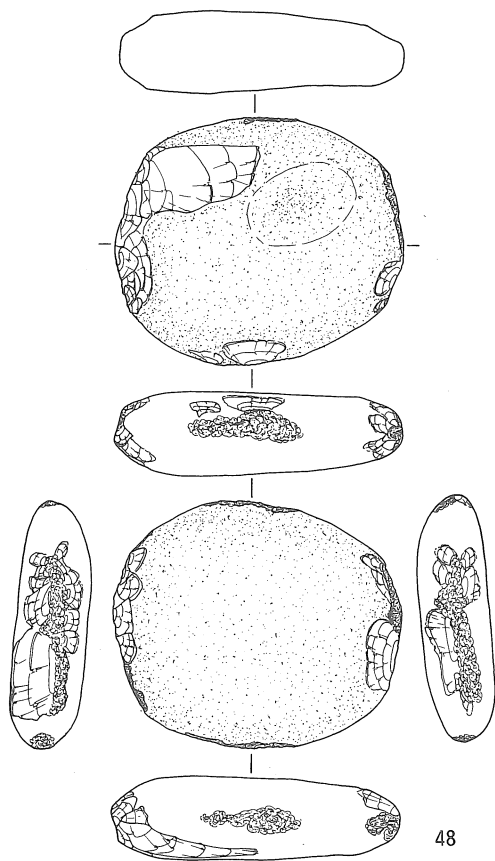
第51図 昭和58年度出土石器実測図(2)



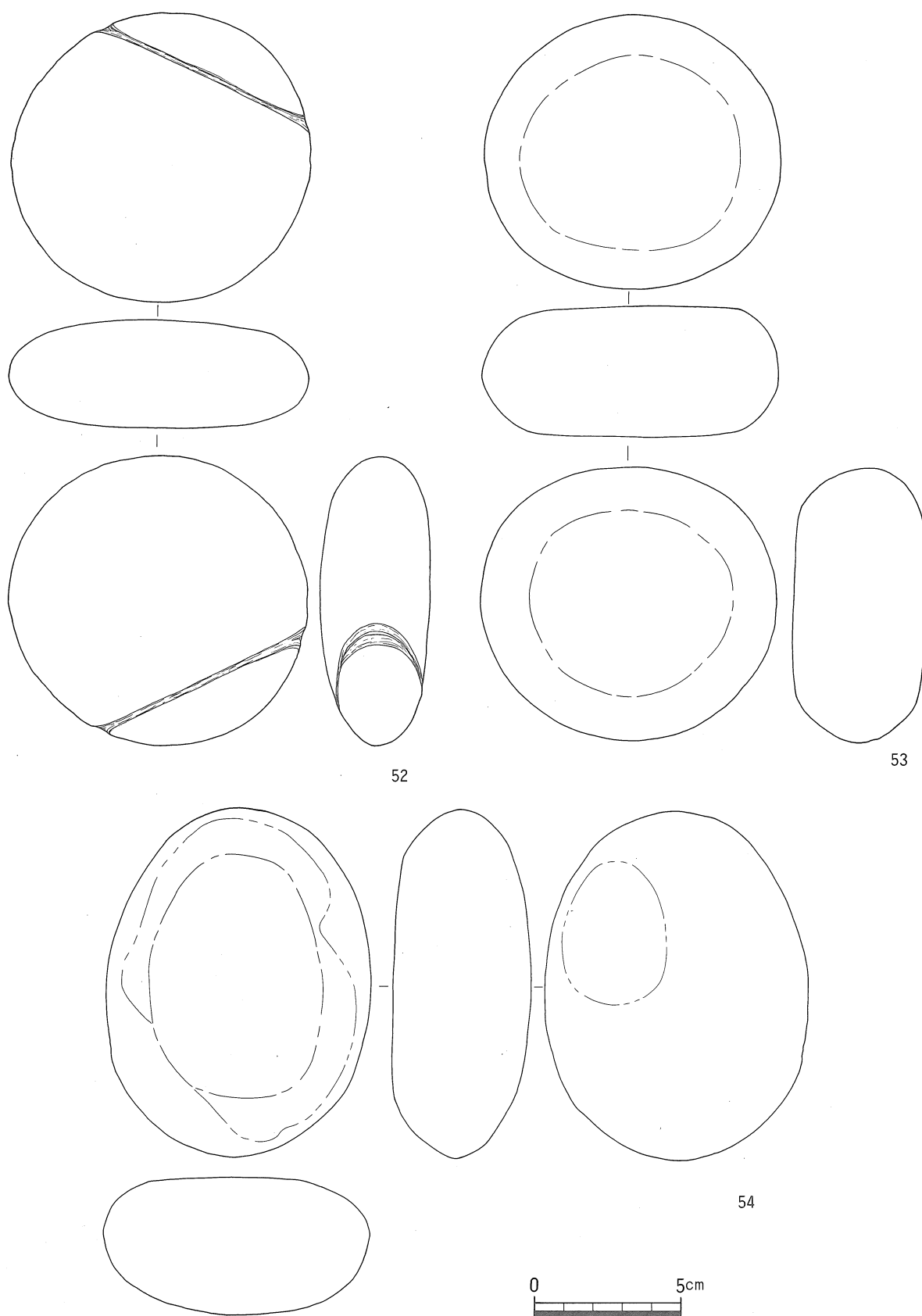
第52図 昭和58年度出土石器実測図(3)



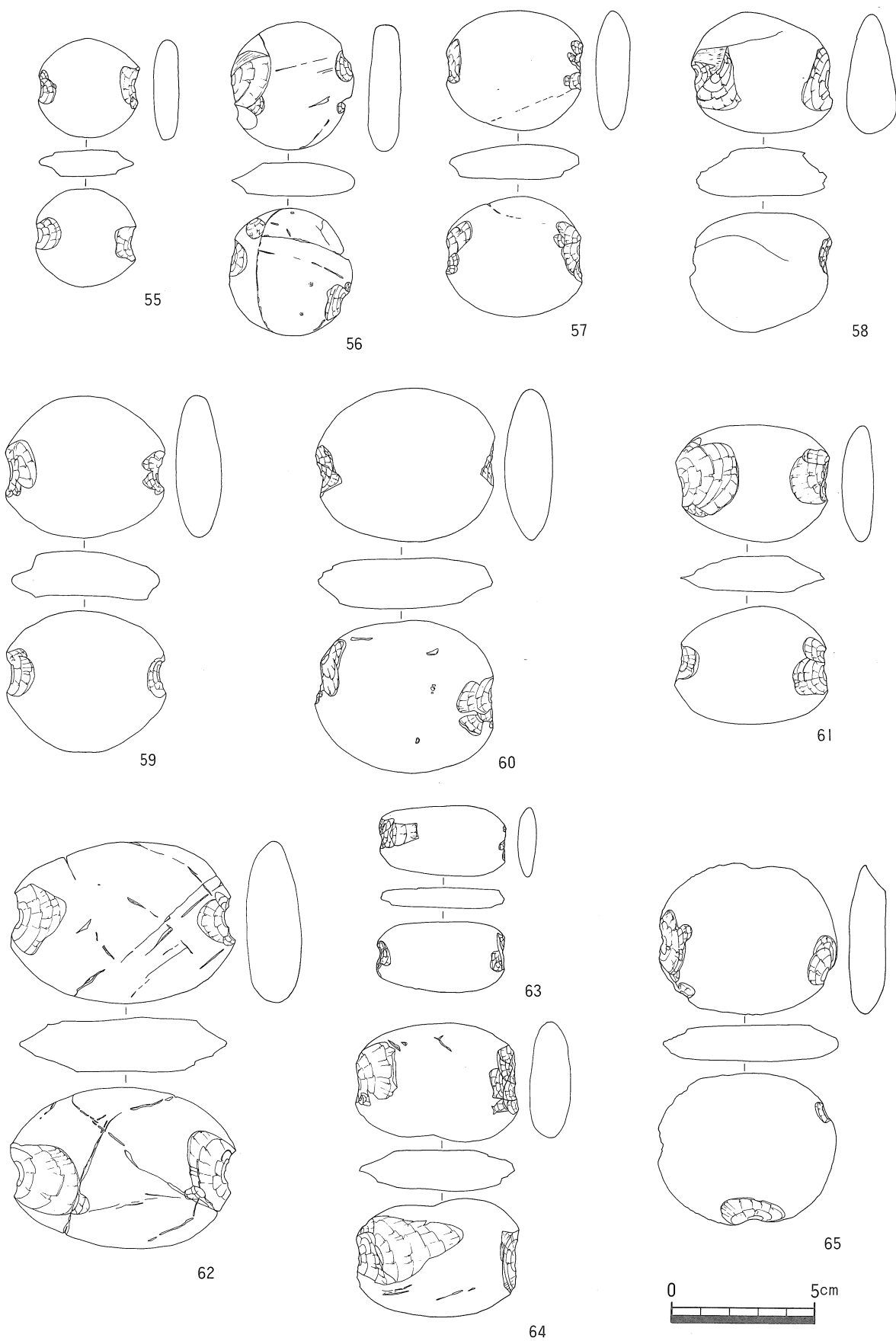
第53図 昭和58年度出土石器実測図(4)



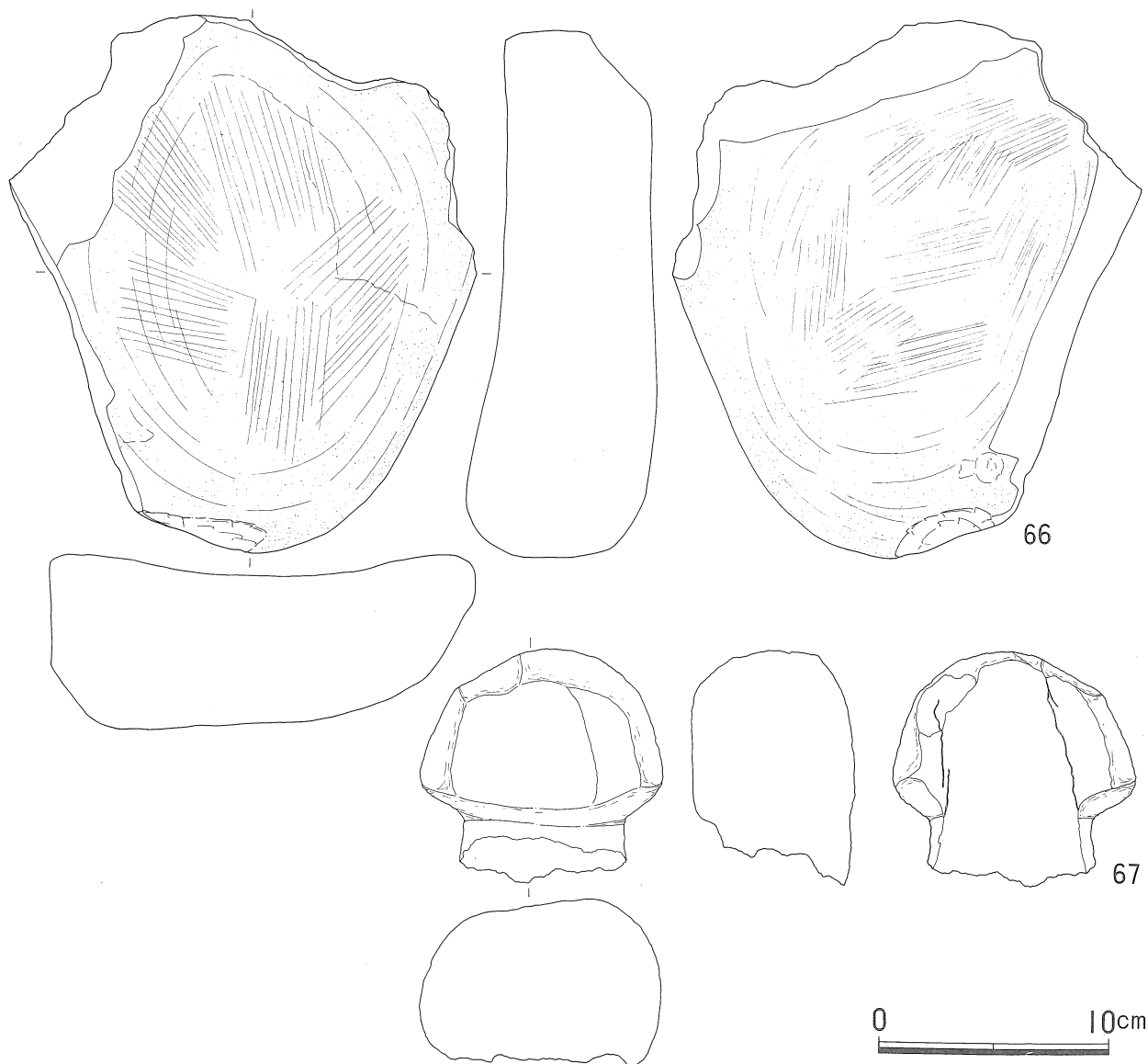
第54図 昭和58年度出土石器実測図(5)



第55図 昭和58年度出土石器実測図(6)



第56図 昭和58年度出土石器実測図(7)



第57図 昭和58年度出土石器実測図(8)

敲打石（第54図—48・49）

砂岩製である。

第54図—48は縁部に剥離痕が見られる。これは、何かを加工する際に、石材を直接、敲打石として用いたのではなく、礫の上をさらにハンマーストーンのようなもので敲いた時にできた剥離痕と思われる。裏面には若干ではあるが石皿のような凹みが見られる。第54図—49は、48と使用法が異なり、単に手に持って対象物を敲くのにのみ用いたと考えられる。

凹石（第54図—50）

集石遺構より出土した。砂岩製である。

裏面を人為的に割ってその剥離面を若干磨き、さらに剥離面の周縁を打ち欠いてなめらかにしている。凹石として分類したが、ハンマーストーンとして用いられた可能性も大きい。

磨石（第55図—52～54）

出土地点および石材は第8表に示した。

第55図—52には表裏面を一周する溝がある、周縁に敲打痕が見られ、呪術的色彩の強い遺物である。第55図—53・54は両面を使用する。第55図—53はかなり使い込まれ、著しく磨滅している。

石皿（第57図—66）

砂岩製である。図示したものは、第2号住居跡石囲い炉北東側より出土した。炉跡に面した側縁が火の影響を受けて赤く変色しており、使用面（凹みのある面）を上に向けた状態で検出された。石皿自体動かされた形跡はなく、住居が廃棄された際に放置されたものと考えられる。有縁の石皿である。

石錘（第56図—55～65）

出土した地点および石材は第8・9表に示した。

今回の調査で石鏃に次いで多い35点が出土した。図示したものはこのうちの3分の1であるが、中でもいくつかの形態に分類できる。円形を呈するもの（第56図—55・56）、楕円形を呈するもの（第56図—57～60・62・65）、隅丸長方形を呈するもの（第56図—61・63・64）である。これらはほとんどが表裏から挟入加工を施しているが、中には第56図—58・65のように片側からのみ挟を入れたものもある。特に第56図—65は挟入が長軸方向になく3箇所認められる。縄を十字に結んだものであろう。また第56図—59は二次焼成を受け赤く変色していたが、焼成を受けた際、石錘に縄がかかっていたらしく、その痕が未焼成で残っていた（図版33）。

石棒（第57図—67）

出土地点は第10表に示した。真珠岩製である。

縄文中期の大型粗製の石棒である。頭部のみの出土であり、その全形を把握することはできないが、全長は1m近くになるろう。また一部縦に剥落しており、風化も著しい。剥落面に自然堆積時に生じた断層線を見ることができる。

その他の石器（第54図—51）

砂岩製である。

大きさは、長さ67.0mm 31.6mm 厚さ24.0mm 重さ75.5gである。川原石を用い、上下の先端部を杭の先の様に尖らせている。先端部の断面は四角形を呈する。各面は磨かれ、上下面が対称をなすように、丁寧に整形されている。

この石器が実際にどのような用途で用いられたかは不明であるが、祭祀的な遺物とも考えられる。今後他遺跡での出土例を調べた上でさらに分析・検討を加えたい。

小 結

今回の調査では、石鏃の出土量が多く、その形態も多岐にわたっていた。しかし、出土した85点はすべて無茎石鏃であり、有茎のものは見られない。また、出土石錘（35点）に切り目・有溝のものは1点も存在しない。

石鏃の有茎・無茎、石錘の切り目・有溝・礫石錘等の違いは、当時の人々の生産方法および時期差などによって生じるものであろう。その社会的背景は今後の検討課題としたい。

石斧については、関東・中部地方の中期縄文遺跡の出土量に比べ、著しく少量である。また出土石斧の中でも打製のものは、磨製のものに比べかなり少ない。これは近年報告された大畑遺跡（西井1981）でも取り挙げられていたが、遠江地方中期縄文文化の特色ではないだろうか。

遺構に伴う石器はわずかであったが、器種にはバラエティーがあり、静岡県西部域の縄文時代中期の環境及び人々の生活を探る上で、重要な資料を得た。また、石器以外に、各種の縦長剥片が出土している。特に自然面を周縁に残す短冊状の大型剥片が多く、石器製作工程を知るうえで重要な資料である。

図 No.	No.	グリッド	層 位	種 類	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 量 (g)	石 材	備 考
1	S-344	G 8 - b 区	覆 土	石 鏝	17.6	11.1	2.3	0.3	黒 耀 石	第8号土壌
2	S-27	H 8 - c 区	Ⅲ	石 鏝	20.9	(16.2)	3.2	0.8	珪質凝灰岩	片脚先端部欠損
3	S-306	I 6 - c 区	Ⅲ	石 鏝	7.3	10.9	1.9	0.2	黒 耀 石	
4	S-90	G 7 - c 区	I・Ⅲ	石 鏝	14.5	10.5	4.7	0.5	黒 耀 石	
5	S-539	E 8 - b 区	I・Ⅱ	石 鏝	29.0	21.9	7.5	4.1	珪質凝灰岩	
6	S-293	J 6 - c 区	Ⅲ	石 鏝	10.8	8.7	3.2	0.3	黒 耀 石	
7	S-762	K 7 - b 区	Ⅱ	石 鏝	14.3	9.9	2.9	0.3	黒 耀 石	
8	S-680	J 6 - d 区	I・Ⅱ・Ⅲ Ⅲ b	石 鏝	16.4	11.9	3.4	0.6	黒 耀 石	
9	S-285	I 6 - d 区	Ⅲ	石 鏝	13.7	7.5	1.9	0.2	黒 耀 石	
10	S-168	G 8 - d 区	I・Ⅲ	石 鏝	18.7	14.9	3.9	0.8	黒 耀 石	
11	S-503	J 7 - b 区	Ⅲ b	石 鏝	20.7	(17.5)	5.2	1.5	珪 質 頁 岩	片脚先端部欠損
12	S-426	H 6 - d 区	Ⅲ b	石 鏝	23.6	16.9	2.7	0.9	黒 耀 石	
13	S-517	J 7 - a 区	Ⅲ b 下	石 鏝	28.5	(16.8)	5.6	2.5	黒 耀 石	片脚欠損
14	S-521	J 6 - c 区	Ⅲ b 下	石 鏝	(29.4)	(22.2)	3.2	1.6	珪質凝灰岩	片脚・片脚先端部欠損
15	S-638	F 8 - d 区	Ⅲ	石 鏝	12.8	9.6	1.9	0.2	黒 耀 石	
16	S-582	F 7 - b 区	Ⅱ	石 鏝	12.2	11.1	2.3	0.2	黒 耀 石	
17	S-327	J 7 - b 区	Ⅲ	石 鏝	15.0	12.5	3.2	0.5	黒 耀 石	
18	S-822	F 7 - a 区	Ⅲ b 下	石 鏝	(27.7)	(15.4)	2.7	0.9	珪 質 頁 岩	両脚欠損
19	S-472	I 7 - b 区	Ⅲ b 下	石 鏝	(18.2)	18.4	4.2	1.0	黒 耀 石	先端部欠損
20	S-220	G 8 - b 区	Ⅲ b	石 鏝	(22.7)	17.4	3.7	0.9	黒 耀 石	先端部欠損
21	S-261	G 7 - d 区	Ⅲ b	石 鏝	32.9	18.1	4.3	1.3	珪質凝灰岩	集石遺構
22	S-414	J 7 - a 区	I	石 鏝	28.4	(16.9)	3.6	0.9	黒 耀 石	片脚先端部欠損
23	S-399	J 6 - c 区	Ⅲ b	石 鏝	(25.0)	(14.9)	2.8	0.7	珪質凝灰岩	両脚先端部欠損
24	S-259	J 7 - a 区	Ⅲ	石 鏝	25.6	16.3	3.0	0.8	珪質凝灰岩	
25	S-324	I 6 - d 区	I	石 鏝	(13.7)	(13.3)	2.3	0.3	黒 耀 石	両脚先端部欠損
26	S-490	J 7 - a 区	Ⅲ b ?	石 鏝	(16.7)	(16.9)	2.5	0.3	黒 耀 石	先端部欠損
27	S-768	J 7 - b 区	Ⅲ	石 鏝	14.5	17.2	2.9	0.4	黒 耀 石	
28	S-647	F 7 - a 区	Ⅲ b 下	石 鏝	(10.1)	9.3	2.1	0.3	黒 耀 石	先端部欠損 未製品
29	S-624	F 7 - b 区	I・Ⅱ	石 鏝	(15.1)	(9.9)	2.1	0.3	黒 耀 石	未製品
30	S-431	G 7 - d 区		石 鏝	(14.9)	(11.9)	2.6	0.4	黒 耀 石	未製品

第4表 昭和58年度出土石器計測表・石材一覧表(1)

図 No.	No.	グリッド	層 位	種 類	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 量 (g)	石 材	備 考
	S-377	H 8－c 区	I	石 鏃	17.1	(10.3)	3.3	0.4	黒 耀 石	片脚欠損
	S-291	J 6－c 区	Ⅲ	石 鏃	19.0	(11.2)	2.3	0.2	黒 耀 石	片脚欠損
	S-121	J 7－a 区	I・Ⅱ	石 鏃	(15.9)	15.1	(2.9)	0.5	黒 耀 石	先端部欠損
	S-715	E 7－d 区	Ⅲ b	石 鏃	(17.6)	(13.2)	2.9	0.4	黒 耀 石	両脚先端部欠損
	S-728	E 8－d 区	Ⅱ	石 鏃	(24.7)	(12.1)	2.7	0.5	珪質凝灰岩	先端部欠損 片脚先端部欠損
	S-238	G 7－a 区	Ⅲ b	石 鏃	(16.2)	(10.5)	3.5	0.5	黒 耀 石	半截 脚先端部欠損
	S-181	G 7－b 区	Ⅲ	石 鏃	(12.7)	(11.7)	2.1	0.2	黒 耀 石	両脚欠損
	S-184	G 8－d 区	Ⅲ	石 鏃	(21.2)	(13.8)	2.7	0.6	黒耀石(?)	片脚欠損 先端部欠損
	S-92	G 7－c 区	I・Ⅲ	石 鏃	20.7	11.9	2.8	0.4	黒 耀 石	片脚欠損
	S-300	I 6－c 区	Ⅲ b	石 鏃	(16.8)	7.9	3.0	0.3	黒 耀 石	片脚欠損
	S-337	J 6－c 区	Ⅱ・Ⅲ	石 鏃	(9.9)	(5.6)	2.2	0.2	黒 耀 石	半截
	S-347	I 7－b 区	Ⅲ	石 鏃	20.5	14.7	4.5	0.9	珪 質 頁 岩	
	S-352	I 7－b 区	Ⅲ	石 鏃	13.6	(7.6)	2.3	0.2	黒 耀 石	片脚欠損
	S-360	I 6－d 区	Ⅲ b	石 鏃	14.8	6.9	3.1	0.2	黒 耀 石	半截
	S-596	E 7－b 区	Ⅲ b	石 鏃	20.7	12.7	4.8	0.9	黒 耀 石	両脚欠損
	S-281	I 7－b 区	Ⅱ・Ⅲ	石 鏃	19.0	(7.8)	2.9	0.3	珪質凝灰岩	半截
	S-270	J 7－a 区	Ⅱ・Ⅲ	石 鏃	21.9	(17.0)	3.6	0.7	黒 耀 石	片脚先端部欠損
	S-272	J 6－c 区	Ⅱ・Ⅲ	石 鏃	(16.5)	13.3	3.2	0.5	黒 耀 石	片脚先端部欠損
	S-329	J 7－b 区	Ⅲ	石 鏃	17.0	16.1	3.9	0.6	黒 耀 石	
	S-491	J 7－a 区	Ⅲ b ?	石 鏃	(16.1)	12.9	2.6	0.5	黒 耀 石	両脚欠損
	S-637	F 8－d 区	Ⅲ	石 鏃	(14.0)	14.0	2.8	0.5	黒 耀 石	先端部欠損
	S-669	F 7－c 区	Ⅱ	石 鏃	24.9	(16.8)	3.4	0.8	黒 耀 石	片脚欠損
	S-650	F 7－d 区	Ⅲ b 下	石 鏃	22.9	(13.7)	2.3	0.4	黒 耀 石	片脚欠損
	S-717	E 8－ d・c 区	I	石 鏃	(16.2)	10.3	2.5	0.3	黒 耀 石	先端部・片脚欠損
	S-473	I 7－b 区	Ⅲ b 下	石 鏃	(31.8)	(14.7)	3.7	1.3	黒 耀 石	片脚・先端部欠損
	S-516	J 7－a 区	Ⅲ b 下	石 鏃	28.6	(17.1)	2.9	0.6	黒 耀 石	片脚欠損
	S-515	J 7－a 区	Ⅲ b 下	石 鏃	(17.9)	(16.6)	2.7	0.6	黒 耀 石	先端部・両脚欠損
	S-294	J 6－c 区	Ⅲ	石 鏃	(25.0)	(15.1)	2.8	0.8	珪質凝灰岩	片脚欠損
	S-122	J 7－a 区	I・Ⅱ	石 鏃	(20.5)	(17.2)	2.8	0.9	黒 耀 石	下半部欠損
	S-726	E 7－d 区	Ⅲ b 下	石 鏃	(13.9)	(10.5)	3.1	0.4	黒 耀 石	両脚欠損

第 5 表 昭和58年度出土石器計測表・石材一覧表(2)

図 No.	No.	グリッド	層 位	種 類	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 量 (g)	石 材	備 考
	S-335	J 6 - c 区	Ⅱ・Ⅲ	石 鏝	(24.7)	(15.2)	3.9	1.1	珪 質 頁 岩	両脚欠損
	S-489	J 7 - a 区	Ⅲ b ?	石 鏝	(19.0)	15.7	5.1	1.0	珪 質 頁 岩	片脚先端部欠損
	S-417	I 7 - a 区	Ⅱ・Ⅲ	石 鏝	20.9	(13.1)	3.4	0.7	黒 耀 石	両脚・先端部欠損
	S-229	I 7 - a 区	Ⅲ	石 鏝	17.7	(13.7)	2.7	0.6	黒 耀 石	片脚欠損
	S-135	G 7 - b 区	Ⅲ	石 鏝	(17.5)	(6.0)	7.7	0.3	黒 耀 石	半截
	S-109	H 8 - c 区	I・Ⅱ・Ⅲ	石 鏝	(14.0)	12.0	2.4	0.5	黒 耀 石	先端部欠損
	S-781	F 7 - b 区	Ⅲ b 下	石 鏝	17.6	(11.1)	2.6	0.3	黒 耀 石	片脚欠損
	S-767	E 7 - b 区	Ⅲ b 下	石 鏝	12.8	(13.2)	1.5	0.4	黒 耀 石	片脚欠損
	S-735	J 7 - a 区	Ⅲ	石 鏝	14.8	(11.4)	2.0	0.2	黒 耀 石	片脚欠損
	S-731	G 8 - d 区	Ⅲ b	石 鏝	(17.6)	(8.7)	2.8	0.5	珪 質 頁 岩	半截・先端部欠損
	S-786	K 7 - b 区	Ⅲ b	石 鏝	15.9	18.3	2.4	0.4	黒 耀 石	
	S-786'	K 7 - b 区	Ⅲ b	石 鏝	17.9	15.3	2.2	0.5	黒 耀 石	先端部欠損
	S-796	E 8 - a 区	覆 土	石 鏝	14.3	10.6	4.3	0.5	黒 耀 石	第1号住居跡柱穴 片脚先端部欠損
	S-16	H 7 - c 区	I・Ⅲ	石 鏝	(27.9)	(9.8)	3.4	0.8	黒 耀 石	半截・片脚先端部欠損
	S-55	I 6 - c 区	Ⅱ・Ⅲ	石 鏝	23.1	10.6	2.9	0.6	黒 耀 石	半截
	S-39	G 8 - d 区	I・Ⅲ	石 鏝	17.1	(15.3)	3.4	0.5	黒 耀 石	片脚先端部欠損
	S-828	F 7 - a 区	Ⅲ b 下	石 鏝	(12.6)	(11.9)	2.6	0.6	珪 質 頁 岩	先端部・両脚欠損
	S-807	K 7 - d 区	I	石 鏝	17.2	(7.6)	2.4	0.5	黒 耀 石	半截
	S-34	G 7 - d 区	I	石 鏝	(12.9)	(11.5)	3.2	0.3	黒 耀 石	両脚先端部欠損
	S-803	F 7 - b 区	Ⅲ b 下	石 鏝	(17.8)	(13.9)	3.2	0.8	黒 耀 石	先端部・脚部欠損
	S-807'	K 7 - d 区	I	石 鏝	(11.7)	14.7	2.9	0.5	黒 耀 石	先端部上半欠損
	S-803'	F 7 - b 区	Ⅲ b 下	石 鏝	(16.1)	19.6	3.8	1.2	黒 耀 石	先端部上半欠損
	S-765	K 6 - c 区	Ⅲ b	石 鏝	(20.5)	(10.0)	2.9	0.4	黒 耀 石	半截
	S-821	F 7 - d 区	Ⅲ b 下	石 鏝	(11.1)	(11.2)	2.3	0.3	黒 耀 石	両脚・先端部欠損
	S-768	J 7 - b 区	Ⅲ	石 鏝	(20.4)	(14.1)	3.0	0.7	黒 耀 石	半截・脚先端部欠損
31	S-798	K 7 - a 区	Ⅲ	ポイント	32.2	22.2	9.4	6.0	珪 質 頁 岩	
32	S-618	E 8 - d 区	Ⅱ b	ポイント	30.5	24.3	10.2	7.7	珪質凝灰岩	未製品あるいは粗製
33	S-583	F 7 - b 区	Ⅱ	ポイント	36.2	20.5	10.5	6.4	珪質凝灰岩	
	S-234	G 7 - b 区	Ⅲ b	ポイント	(28.0)	21.8	7.6	4.3	珪 質 頁 岩	集石遺構・先端部欠損
	S-210	G 8 - a 区	Ⅲ b	ポイント	(26.5)	16.0	6.8	2.6	チャート	先端部欠損

第 6 表 昭和58年度出土石器計測表・石材一覧表(3)

図 No.	No.	グリッド	層 位	種 類	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 量 (g)	石 材	備 考
34	S-275	I・J 7-a・b区	Ⅱ・Ⅲ	石 鋸	38.9	9.2	4.4	1.4	珪質凝灰岩	
35	S-278	H 8-d区	Ⅲ	石 錐	27.5	17.5	4.4	1.5	珪質凝灰岩	
36	S-469	I 7-b区	Ⅲ b下	石 匙	52.8	27.8	8.6	11.8	珪質凝灰岩	
37	S-537	F 7-c区	I・Ⅱ	石 匙	(61.2)	30.3	13.4	24.2	珪質凝灰岩	先端部・つまみ 端部欠損
38	S-147	G 7-c区	Ⅲ	石 匙	57.6	37.5	13.1	23.2	珪 質 頁 岩	
	S-740	K 6-c区	Ⅲ b	石 匙	(19.9)	28.0	5.5	2.6	珪 質 頁 岩	つまみのみ
	S-411	H 8-d区	Ⅲ・Ⅲb	石 匙	(27.9)	(21.7)	5.1	2.3	珪質凝灰岩	つまみのみ
	S-213	J 7-a区	Ⅱ・Ⅲ	石 匙	(41.4)	(31.7)	9.4	9.7	珪 質 頁 岩	刃部半截
39	S-649	F 7-d区	Ⅲ b下	ス ク レ イ パ ー	(58.4)	(28.2)	11.7	14.9	珪 質 頁 岩	
40	S-534	E 8-d区	Ⅱ	ス ク レ イ パ ー	(76.2)	42.3	15.0	42.6	珪質凝灰岩	つまみ・刃部一 部欠損
41	S-258	J 7-a区	Ⅲ	ス ク レ イ パ ー	34.0	12.0	4.0	1.7	珪質凝灰岩	半截?
42	S-514	J 7-a区	Ⅲ b下	ス ク レ イ パ ー	(53.0)	40.0	9.9	14.1	珪 質 頁 岩	未製品?
43	S-6	G 7-d区	I	磨製石斧	49.6	21.6	8.2	15.9	輝緑凝灰岩	
44	S-276	I・J 7-a・b区	Ⅱ・Ⅲ	磨製石斧	(57.7)	42.9	22.0	82.9	輝緑凝灰岩	頭部欠損
45	S-404	J 7-d区	Ⅲ b	磨製石斧	(106.7)	(52.2)	37.2	235.0	真 珠 石	刃部欠損
	S-81	G 7-d区	I	磨製石斧	(106.7)	(61.2)	44.9	433.0	輝 緑 石	頭部・刃部欠損
	S-230	H 8-d区	Ⅲ b	磨製石斧	(85.8)	63.6	39.6	356.2	輝 緑 石	頭部・刃部欠損
	S-756	K 7-b区	Ⅲ	磨製石斧	(102.4)	54.1	31.0	277.0	輝 緑 石	頭部・刃部欠損
	S-123	J 7-a区	I・Ⅱ	磨製石斧	(94.9)	51.0	17.5	126.6	輝 緑 石	頭部打欠き・刃 部欠損
	S-421	G 7-c区	Ⅲ	磨製石斧	(62.9)	(49.0)	33.2	144.4	輝 緑 石	刃部欠損
46	S-66	G 7-b区	Ⅲ	局 部 磨製石斧	(65.4)	53.1	13.9	65.8	砂 岩	頭部欠損
	S-831	F 9-b区	I・Ⅲ	局 部 磨製石斧	(111.2)	(53.3)	22.1	169.0	砂 岩	半截・頭部欠損
	S-384	G 7-b区	Ⅲ b	局 部 磨製石斧	(68.0)	(54.3)	21.0	97.4	砂 岩	頭部・刃部欠損
47	S-622	F 7-b区	I・Ⅱ	打製石斧	(82.3)	50.0	20.8	100.1	砂 岩	分銅型・刃部欠 損
	S-342	I 7-b区	Ⅱ	打製石斧	(87.0)	69.0	25.3	164.5	砂 岩	刃部欠損
	S-779	I 7-c区	Ⅱ	打製石斧	(87.9)	58.2	22.6	147.6	砂 岩	頭部欠損
48	S-220	G 8-b区	Ⅲ b	敲 打 石	76.2	64.5	20.7	162.0	砂 岩	
49	S-828	F 7-a区	Ⅲ b下	敲 打 石	77.6	61.5	39.7	262.0	砂 岩	集石遺構
50	S-525	G 7-d区	Ⅲ b	凹 石	106.3	73.0	33.8	306.0	砂 岩	
	S-400	J 6-c区	Ⅲ b	凹 石	100.4	72.0	30.2	310.0	砂 岩	

第7表 昭和58年度出土石器計測表・石材一覧表(4)

図 No.	No.	グリッド	層 位	種 類	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 量 (g)	石 材	備 考
	S-679	J 6 - d 区	I・II・III III b	凹 石	95.6	78.3	22.0	194.0	砂 岩	
	S-305	J 7 - a 区	III	凹 石	96.2	74.1	31.7	260.0	砂 岩	
	S-568	F 7 - d 区	II	凹 石	101.8	83.6	28.8	281.0	砂 岩	
52	S-510	J 7 - a 区	III b 下	磨 石	100.0	97.1	36.1	525.0	砂 岩	
53	S-779	I 7 - c 区	II	磨 石	100.7	92.6	44.6	665.0	花 崗 岩	
54	S-449	J 7 - a 区	III b	磨 石	116.9	90.1	44.7	745.0	砂 岩 ?	
	S-755	表 採		磨 石	103.7	97.2	47.4	671.0	砂 岩	
	S-765	K 6 - c 区	III b	磨 石	114.3	(65.4)	56.0	644.0	花 崗 岩	半截
	S-520	J 6 - c 区	III b 下	磨 石	87.2	(50.2)	48.3	345.0	花 崗 岩	半截
	S-760	K 6 - d 区	III	磨 石	(172.0)	(43.0)	53.4	270.0	花 崗 岩	半截
	S-754	J 6 - d 区	III	磨 石	180.0	78.6	45.4	584.0	花 崗 岩	
	S-765	K 6 - c 区	III	磨 石	87.6	(46.8)	54.3	325.0	花 崗 岩	半截
	S-643	F 7 - d 区	III b 下	磨 石	117.2	(48.6)	59.1	644.0	花 崗 岩	半截
	S-760	K 6 - d 区	III	磨 石	106.5	50.2	47.9	363.0	花 崗 岩	半截
	S-298	I 7 - b 区	III b	磨 石	111.0	(61.9)	51.2	562.7	花 崗 岩	半截
	S-470	I 7 - b 区	III b 下	磨 石	102.0	78.5	52.4	547.0	花 崗 岩	
	S-225	表 彩		磨 石	11.3	55.85	63.9	525.0	砂 岩	半截
	S-824	F 8 - a 区	III b	磨 石	95.6	(60.8)	52.8	430.0	花 崗 岩	第2号住居跡周辺半截
	S-524	G 7 - d 区	III b	磨 石	88.2	(71.0)	39.5	391.0	砂 岩	集石遺構・半截
	S-633	F 7 - d 区	I・II	磨 石	95.4	(63.0)	55.3	524.0	花 崗 岩	半截
	S-288	J 6 - c 区	III	磨 石	97.2	(65.3)	49.4	414.0	花 崗 岩	半截
	S-448	J 7 - a 区	III b	磨 石	87.8	(61.2)	51.4	350.0	花 崗 岩	半截
	S-815	J 6 - d 区	III b	磨 石	103.1	88.9	50.8	699.0	花 崗 岩	
66	S-830	F 8 - a 区	覆 土	石 皿	237.5	203.7	80.0		砂 岩	第2号住居跡
	S-685	G 7 - d 区	III b	石 皿	201.5	115.2	50.0		砂 岩	集石遺構
55	S-104	H 7 - a 区		石 錘	34.6	33.9	7.7	15.3	砂 岩	
56	S-671	F 7 - c 区	II	石 錘	44.6	43.4	10.4	31.3	砂 岩	
57	S-667	J 6 - c 区	I・II・III III b	石 錘	48.2	41.6	12.8	36.5	砂 岩	
58	S-314	I 6 - c 区	III	石 錘	48.4	39.8	16.2	40.4	珪質凝灰岩	
59	S-744	F 7 - a 区	III b 下	石 錘	55.8	49.8	15.3	54.0	流 紋 岩	

第8表 昭和58年度出土石器計測表・石材一覧表(5)

図 No	No	グリッド	層 位	種 類	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 量 (g)	石 材	備 考
60	S-244	I 6 - d 区	Ⅱ	石 錘	62.4	53.7	16.8	86.7	砂 岩	
61	S-584	F 7 - b 区	Ⅱ	石 錘	52.9	40.0	12.0	35.6	砂 岩	
62	S-593	E 7 - b 区	Ⅲ	石 錘	77.7	56.0	17.8	112.2	砂 岩	
63	S-309	J 6 - c 区	Ⅲ	石 錘	44.6	24.2	6.3	11.5	粘 板 岩	
64	S-80	H 6 - c 区	Ⅲ	石 錘	57.5	40.0	14.3	52.9	粘 板 岩	
65	S-152	G 8 - b 区	I	石 錘	63.3	53.1	13.1	58.5	砂 岩	
	S-804	F 7 - d 区	Ⅲ b	石 錘	65.4	43.2	12.5	48.9	砂 岩	
	S-145	G 7 - c 区	Ⅲ	石 錘	55.5	49.4	13.7	55.8	砂 岩	
	S-274	I・J 7 - a・b 区	Ⅱ・Ⅲ	石 錘	64.2	46.8	16.7	71.7	砂 岩	
	S-316	I 7 - b 区	Ⅲ b	石 錘	65.5	51.1	14.5	73.7	砂 岩	
	S-315	I 7 - b 区	Ⅲ b	石 錘	72.6	49.7	14.9	83.7	砂 岩	
	S-608	F 7 - b 区	Ⅲ b 下	石 錘	62.7	41.7	11.1	39.9	砂 岩	
	S-97	J 7 - a 区	Ⅲ	石 錘	53.4	40.5	9.3	28.2	粘 板 岩	
	S-255	J 7 - a 区	Ⅲ	石 錘	59.0	47.3	17.1	74.2	砂 岩	
	S-354	I 7 - b 区	Ⅲ	石 錘	77.0	44.7	15.5	80.3	砂 岩	
	S-279	H 8 - a 区	Ⅲ	石 錘	42.2	61.5	17.6	70.7	砂 岩	
	S-286	I 6 - d 区	Ⅲ	石 錘	58.9	50.5	16.3	67.1	砂 岩	
	S-353	I 7 - b 区	Ⅲ	石 錘	41.7	32.3	11.6	19.7	粘 板 岩	
	S-485	J 7 - a 区	Ⅲ b ?	石 錘	64.9	51.6	19.2	87.6	砂 岩	
	S-221	J 6 - c 区	Ⅲ	石 錘	49.2	39.0	12.7	34.5	砂 岩	
	S-146	G 7 - c 区	Ⅲ	石 錘	49.3	44.3	12.7	37.7	砂 岩	
	S-667	F 7 - c 区	Ⅱ	石 錘	63.4	50.8	16.4	79.9	砂 岩	
	S-265	G 7 - d 区	Ⅲ b	石 錘	49.2	33.1	19.4	21.8	砂 岩	
	S-484	J 7 - a 区	Ⅲ b ?	石 錘	63.8	61.0	15.9	75.2	砂 岩	
	S-779	I 7 - c 区	Ⅱ	石 錘	62.4	48.3	11.2	56.3	砂 岩	
	S-766	F 7 - c 区	Ⅲ b 下	石 錘	52.4	37.8	10.9	29.3	砂 岩	
	S-65	H 8 - c 区	覆 土	石 錘	62.0	49.8	21.0	82.5	砂 岩	
	S-829	F 7 - a 区	Ⅲ b 下	石 錘	67.0	41.9	20.7	80.0	砂 岩	
	S-795	F 7 - b・d 区	Ⅲ b 下	石 錘	37.7	26.1	12.8	17.5	砂 岩	
	S-832	表 採		石 錘	56.0	38.9	11.3	37.0	砂 岩	

第9表 昭和58年度出土石器計測表・石材一覧表(6)

図 No.	No.	グリッド	層 位	種 類	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 量 (g)	石 材	備 考
67	S-8	H 8 - d 区	Ⅱ・Ⅲ	石 棒	(107.6)	104.4	(74.9)	1093.0	真 珠 岩	頭部のみ・半截
51	S-380	G 7 - d 区	Ⅲ b	異形石器	67.0	31.6	24.0	75.5	砂 岩	
	S-634	F 7 - d 区	Ⅰ・Ⅱ	異形石器	72.5	67.2	29.5	195.0	砂 岩	
	S-765	K 6 - c 区	Ⅲ b	異形石器	(47.7)	40.2	16.5	52.0	砂 岩	
	S-660	J 6 - c 区	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ Ⅲ b	疎製石器	(100.0)	62.7	20.5	134.5	砂 岩	頭部欠損
	S-260	G 7 - d 区	Ⅲ b	疎製石器	(89.7)	81.2	17.8	121.3	砂 岩	集石遺構・分銅 型・頭部欠損

第10表 昭和58年度出土石器計測表・石材一覧表(7)

ii) 古墳時代の遺物

昭和58年度第1・2号墳に伴った土器・鉄製品を第25図に示した。

須 恵 器

坏蓋 (第25図-1・2・10・11) 最大径11.9~13.5cm を測る。口縁部は高く、肩部に比較的明瞭な稜を残す。法量的に2大別される(最大径12.0cm 前後・13.5cm)。第25図-1は第1号墳周溝、第25図-2は第2号墳前溝、第25図-10・11は第2号墳南側主体部前溝状遺構より出土。

坏身 (第25図-12) 最大径12.2cm を測る。受部直下に1条凹線をめぐらす。回転ヘラ削りの範囲は小さい。第2号墳南側主体部前溝状遺構より出土し、第25図-11の坏蓋と対になると思われる。

高坏 (第25図-3~5・9・13) 長脚2段3方透しの高坏脚が主体をしめる。脚中段・透しの下に2条単位で凹線を加える。第25図-9は無蓋高坏の高縁部片である。端部近くが内彎する第25図-4は器台の脚かもしれない。第25図-3~5・9は第2号墳前溝、第25図-13は第2号墳南側主体部前溝状遺構より出土。

フラスコ瓶 (第25図-6) 最大径15.5cm を測る。器壁は厚く、外面のほぼすべてを回転ヘラ削り調整する。頸部接合時のヘラ削り調整は2条である。第2号墳主体部内の暗渠礫に混入していた。

壺 (第25図-8) 体部下半の破片である。叩きの後、外面をカキメ調整する。第2号墳北側周溝より出土。

甗 (第25図-14) 最大径13.5cm を測る。ヘラ状工具により刺突文を施し、その上に4条の凹線を加える。第2号墳南側主体部前溝状遺構より出土。

土 師 器

高坏 (第25図-7) 最大径15.5cm 器高8.2cm を測る。脚接合部の径は大きく、内面に縦位の指頭痕を残す。口縁部を横ナデ調整する。第2号墳前溝より出土。

鉄 製 品

鉄鏃 (第25-15~18) 尖根・平根鏃がある。第25図-15はいわゆる棘篋被鏃であるが、篋被の幅は広く短い。第25図-17の鏃身は五角形を呈する。尖根鏃は第2号墳主体部床面より一括出土した。

小 結

第2号墳出土の須恵器坏身・坏蓋は遠考研編年(山村他1966)第Ⅲ期後半に比定できるが、長脚2段3方透し高坏が伴い、壺の外面にカキメ調整が残る等、若干時期の遡る様相を示している。

第3章 ま と め

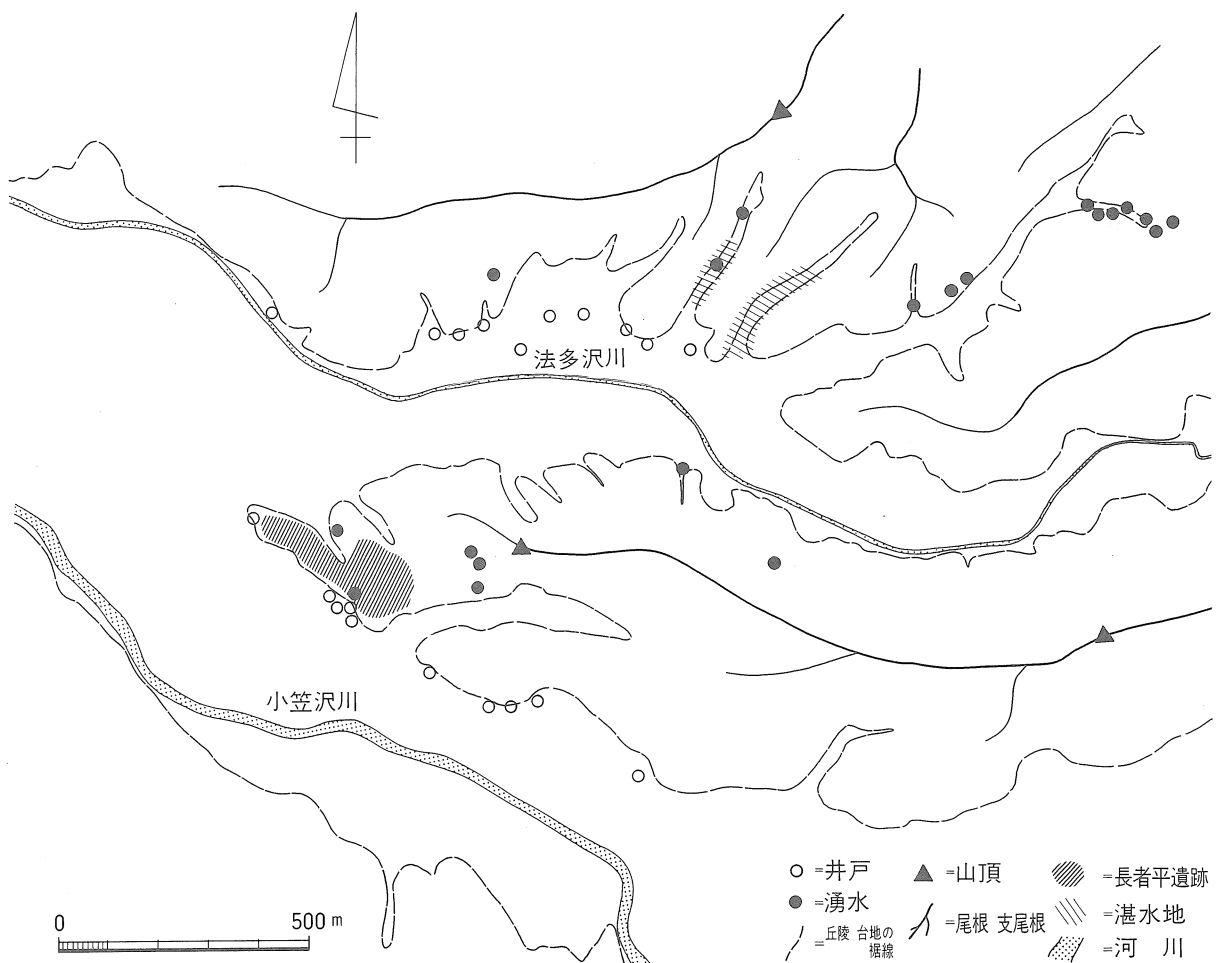
本章では第1～5次調査の成果を踏まえ、縄文時代の長者平遺跡について考えてみたいと思う。

第1節 遺跡の立地について—その地理的条件—

i) 周辺の地形

小笠山の西南山麓は丘陵地形をなし、末端には河岸段丘が形成されている（大庭1983）。長者平遺跡は小笠山（標高264m）から西にのびる支陵の南側裾部（段丘上）に立地し、裾部はさらに細く開析されて、大小の舌状支陵が複雑に入り組んだ地形を呈している。遺跡が営まれた段丘は、こうした舌状支陵の先端に位置し、その形状は幅が狭く（約100m）、東西に長い（約350m）。標高30～40m、底地との比高差約7～15m を測る。

遺跡の東側には山脚末端が迫り、南北側には小笠沢川・法多沢川の形成した低地が広がる。低地の背後は再び丘陵地となり、東西に連なる。西側の低地は徐々に幅を増し、西方約4km で太田川の沖積地へ達する。段丘斜面は急峻であるが、南側の縁部は一部張り出して緩斜面となり、北側には数条の小支谷が入り込んでいる。これら緩斜面部や小支谷をたどれば、段丘頂部から低地へ容易に降りて



第58図 長者平遺跡周辺の湧水・湛水地

行くことができ、また段丘南縁にそって、東にのびる支谷を遡ると、そこは小笠山へと続く支陵の尾根である。

以上のように長者平遺跡は小笠山丘陵をわずかに内陸へ入った段丘面に立地し、四方を生産地たる低地＝河川・丘陵に取り囲まれている。小支谷等の土壌堆積は進んだであろうが、小笠山の形成年代から見て、縄文時代以降、周辺の地形はほとんど変化していないと思われる。

ii) 飲 用 水

飲用水の確保は、集落を営むうえで最大の課題である。遺跡の南北側には、西流する小河川があり、従来この小河川に取水地を求めてきた。現在の流路は小笠沢川まで約300m、法多沢川まで約350m 離れているが、洪水により川筋が段丘近くにまで移動したこともあったであろうし、取水地を小河川とする考え方は妥当なように思われた。

しかし、ある時共に調査を進める人達から異議が出された。「土器で水を運んだとすれば、重量は大変なものであり、小笠沢川・法多沢川は遠すぎる。それに川には常時水が流れていない。」と言うのである。小笠山丘陵の河川は、一般的に河底が礫であるため、雨水をほとんど吸い込んでしまう（加藤1981）。確かに大雨の時を除いて、平時に流水を見ることはめったにない。それでは長者平集落の人々は、どこからどのようにして生活用水を得ていたのだろうか。こうした素朴な疑問がきっかけとなって、今回、遺跡周辺の水源調査を実施してみた。

調査は3月下旬、一週間以上雨が降らない時期を選んで行われた。方法は遺跡を中心として半径約1.5km の範囲内で、地表のわずかな水溜り、流水を見つけ、あとはただひたすら、水源まで流路を辿るというものである。また土層露頭地から水がしみ出していないか注意することとした。

小笠山丘陵の礫層は水をよく透すが、挟在する泥層が不透水層であるため、透過した水は泥層の上に伏流する。泥層が支谷斜面に露出していたり、地表近くにある場合、地下水は湧出し、泉となる（加藤1981）。調査結果を図示（第58図）してみると、湧水箇所が多いことに驚かされる。水量はさして豊かでないが、支陵南斜面の多くの谷頭に湧水が認められた。もっとも湧水が顕著だったのは、二軒屋周辺の支谷で、谷頭付近に泥層が露出し、10数箇所から水が湧き出していた。谷口には水が溜まり湛水地となっていた。長者平遺跡の立地する舌状支陵では、茶園のパイロット事業が進み、支谷が埋め立てられてしまったため、明確な湧水を発見できなかったが、水溜めをつくり集水すれば取水可能な程度の水は、段丘斜面や小支谷から湧き出している。段丘の張り出し部分には、薄い泥層が認められた。

現在まで残る井戸に注目すると、大多数が支陵の南裾に掘られ、分布は遺跡周辺に集中している。泥層の深さや小笠山礫層の傾斜（北東―南西方向へ傾斜角5～10度）に左右されたためと思われる。

水の運搬には、土器以外にも、木器や皮袋等軽量・柔軟な容器が使われた可能性があり、現河川までの距離は、まったく運搬不可能な程大きなものではない。川も重要な取水地であったが、渇水期における生活用水の確保は、湧水により力点がおかれていたと推定される。遺跡周辺の段丘裾や谷頭に浅い穴を掘り、湧水とともに地表水を集めて井戸としたり、段丘斜面からしみ出る地下水を土器等に受け止め、取水していたと考えられる。

長者平遺跡は、飲用水を恒常的に確保しやすい自然環境の中に立地している。

iii) 立 地 条 件

長者平遺跡成立の地理的条件は、次の4項目に整理できる。

- 1 遺跡は高燥な段丘平坦面に立地し、良好な居住環境であった。
- 2 段丘は南向きで日当たりが良い。特に中期後葉の集落は支陵先端部から離れて営まれていた

め、周縁の山林が、冬の季節風（遠州のからっ風）や暴風雨を和らげる役目を果していた。

3 渇水期でも、集落近くの湧水を利用することにより、比較的容易に飲用水・生活用水を確保することができた。

4 丘陵地ばかりでなく、周辺には低地（河川）が広がり、湧水も分布する。集落近効に各種の猟場・漁場を控え、また植物質食料の採集にも適していた。

第2節 集落の構造

5次にわたる発掘調査面積は約5,000㎡に達した。土器片の分布により推定された遺跡総面積からすれば、わずかに25%を知りえたにすぎないが、11棟の住居跡や土壇群等、ある程度集落の内容を復元しうる資料は蓄積されつつある。検出された遺構群の有機的な繋がりについて、現時点での整理をしておくことも必要と考えた。

i) 中期前葉

遺跡東側の段丘上から見つかったわずかな土器片が、この地で人々の生活が開始された時期を示している。中期前葉の遺構は明確でなく、当時の具体的な様相を知ることはできない。

ii) 中期中葉

中期前葉から継続するものか明らかでないが、段丘の先端部に集落が営まれる。以下概報（永井・松井1982）の記述に従って述べると、5軒の竪穴住居（平面円形）は北を向いて三日月型に配置され、ほぼ中央に大型住居（径9.0m 前後 K-16住居跡）が認められる。この大型住居は壁溝を持ち、2度建て直されていた。最初の建て直しでは、床面積を拡大し（約5㎡）、上屋の構造を変え（柱穴数の増加）、炉をも移動させていたが、2度目の建て直しは支柱を増やしたのみで旧住居の形態を基本的に踏襲していた。M-16住居跡の北側壁は、崩れたように外方へふくらみ、北面に入口を設けていたと推定される。入口の方向・住居群の配列は共同の広場がその北側に定められていたことを示しているよう。

5軒の住居跡は3つの住居単位（西＝1棟 中央＝3棟—大型住居を含む— 東＝1棟）に区分される。住居跡・調査域から出土した土器群はほぼ一時期に納まり、すべての住居跡に近時性が認められるが、K-16住居跡は少くとも2度の建て直しの間継続していた訳であり、他の重複しない住居跡を建て替えの結果として、併存した住居数は一時期2～3軒とするのが妥当なように思われる。

K-16住居跡には数基の土壇状遺構が隣接する。本住居群と分布域を異にする未発見の住居群や墓域、祭祀場等が東西に連なる段丘上に形成されていた可能性もあり、中期中葉に属する集落全体の規模・存続期間は、今のところ明確にしない。

iii) 中期後葉

住居群

東側の段丘上から成立時期を異にする（仮りに中期後葉第Ⅰ・Ⅱ期とする）6棟の竪穴住居跡が発見されている。長者平遺跡では曽利・加曽利E式土器の前葉型式に並行する土器群が明確でないため、中期後葉の集落が段丘先端部に立地した住居群（中期中葉）から直接継続するものか判断できないが、土器型式の欠落を評価すれば、中期中葉の人々は一度離村し、再びある集団が当地に移住してきたことになる。

第Ⅱ期の住居跡（昭和53年度第2号住居跡 昭和58年度第1・2号住居跡）は平面円形をなすが、第Ⅰ期の住居跡（昭和53年度第1号住居跡 昭和58年度第3・4号住居跡）には楕円形・不定形も見られる。平面規模は比較的小型で、両期を通じ径5.5～6.0m とほぼ一定している。小笠山礫層（遺

住居跡番号	時期	住居型式 平面形	炉跡	壁溝	住居跡法量	柱穴数・法量	隙の落ち込み	覆土	その他の
昭和53年度 第1号	中期後葉	竪穴住居 楕円形	石囲い炉 有(大型隙)	無	510×(435)	住居跡内2(大30×25×20) 小25×20×15)	有	第Ⅲb層	昭和53年度第2号住居跡に切断される。
昭和53年度 第2号	中期後葉	竪穴住居 円形	石囲い炉 有(小型隙)	無	径565～580	住居跡内5(20×30×15～20) 外5(×15～25)	有	第Ⅱ・Ⅲa・ Ⅲb層	昭和53年度第1号住居跡を切断する。 土壌状遺構(2箇所)を伴う。
昭和56年度 第1号 (K-16号)	中期中葉I)	竪穴住居 楕円形	有	有(全周)	950×830	住居跡内7(25×30×25～30) ×40～60)	若干有	第Ⅱ・Ⅲa・ Ⅲb層	重複せず一群をなす。
	中期中葉II)	竪穴住居 円形	石囲い炉 有(小型隙)	有(一部 途切れる)	径(900)～950	住居跡内16(大30～40×30～40) ×60～70) 小20～25×20～25) ×45～55)			
昭和56年度 第2号 (M-16号)	中期中葉	竪穴住居 楕円形	石囲い炉 有	無	710×(610)	住居跡内17(大25×30×25～30) ×30～60) 小15～20×15～20) ×?			
昭和56年度 第3号	?	? 円形?	無	無	径(600)	住居跡内11(大20×30×20～30) ×? 小10～15×10～15) ×?			
昭和56年度 第4号	?	? 円形?	無	有?	径(600)	?	無	?	
昭和56年度 第5号	?	? 円形?	無	無	径(500)	?	無	?	
昭和58年度 第1号	中期後葉	竪穴住居? ?	石囲い炉 有(大型隙)	無	径(600～700)	6(大65～85×50～65) ×20～45) 小20～25×30～40) ×20～30)	無	第Ⅲb層	昭和58年度第2号住居跡に隣接する。 南半分のみ調査。
昭和58年度 第2号	中期後葉	竪穴住居? 円形?	石囲い炉 有(大型隙)	無	径(550～600)	19(25×35×25～35) ×10～35)	有	第Ⅲb層	昭和58年度第1号住居跡に隣接する。
昭和58年度 第3号	中期後葉	竪穴住居 円形	有	無	径550	住居跡内2(25×30×15～30) 外1(×15～35)	有	第Ⅲb層	昭和58年度第4号住居跡に隣接する。 第17号土壌に切断される。
昭和58年度 第4号	中期後葉?	竪穴住居 不定形	有?	無	550×550	住居跡内1(25×25×20)	有	第Ⅲa・Ⅲb 層	昭和58年度第3号住居跡に隣接する。 第15号土壌上に築かれ、第10・16号土壌に切 断される。

。単位=cm 。全周すべての壁を確認しえなかった住居跡の法量は推定数値を記入し()でくくった。 。柱穴法量は底径により示した。

第11表 長者平遺跡発掘住居跡集成表

跡基盤層)の掘削が容易でなかったせいか、柱穴は総じて浅く小さい。こうした柱穴に支えられた上屋の構造は安定したものになりえず、礫層を掘ることの難しさが、住居小型傾向の一因であったと推定される。出入口は、並列する柱穴や炉跡の位置から見て、昭和53年度第1・2号住居跡では南面(段丘斜面側)に、昭和58年度第2号住居跡では南東面(段丘平坦面側)に設けられていたと考えられ、第Ⅰ・Ⅱ期それぞれに、炉石を残す住居跡(昭和53年度第1号住居跡 昭和58年度第2号住居跡)と、炉石が抜き取られ焼土のみ残存する住居跡(昭和53年度第2号住居跡 昭和58年度第1・3・4号住居跡)がある。

6棟の堅穴住居は隣接あるいは一部重複する2棟を1単位として3小群に区分され、2地点(北から入り込む小支谷の東側斜面直上・段丘張り出し部の北東域)に別れ分布する。昭和58年度第1・2号住居跡・第3・4号住居跡は、伴出した土器群から見て併存していた可能性が大きい。昭和53年度第1・2号住居跡には時期差があり、この地点に建てられていた棟数は1時期1棟と考えられる。一つの住居小群は1棟ないし2棟により構成されている。

すべての住居跡に建て直しの痕跡は認められず、中期後葉の集落では隣接地への建て替えが住居構築の原則であったと推定される。建て替えに際し、併存する2棟の住居跡はその位置関係を厳密に守っており、各住居が単独で住居地を選定することはない。各住居内に落ち込んでいた多量の礫は、建て替えに伴い掘り出された礫が旧住居に廃棄され、集積したものと考えられる。建て替えの利点は、新住居の完成まで旧住居を使用できることにあるが、先に述べた小笠山礫層の掘削の難しさは、むしろ建て替えにとって不都合な条件である。中期後葉になって建て替えが盛行する主要な要因は、地理的条件にではなく、住居に対する宗教的観念の変化をも含め、社会的なものに求めなければならないように思う。

各地点における住居小群の動きを整理すれば昭和53年度第1号住居跡→第2号住居跡、昭和58年度第3・4号住居跡→第1・2号住居跡となる。

土 壙 群

調査地全域から土壙状の落ち込みが検出されたが、顕著に群集するのは3地点(北から入り込む小支谷の東・西側斜面直上 段丘張り出し部の北東域)である。群集する土壙状遺構は墓穴と思われる。

各土壙群は住居小群に近接して分布し、その構成する基数(20基・10基前後)は住居小群の規模に対応している。土壙は浅く、一般的に平面円形ないしは正円に近い楕円形をなすが、長楕円形の土壙もあり、規模の大小差は著しい。各土壙群のなかに配石を持つ土壙と持たない土壙があり、3種の配石形態(こぶし大礫集積—密— 同一疎— 立石—単—)を示す。昭和58年度の土壙群は2時期にわたり形成されていたが、昭和53年度の土壙群には重複する例がほとんど見られず、各土壙の掘られた時期は近似していたと考えられる。各土壙群は内部に10・5基前後からなるさらに小さなまとまり(小群)を構成し、昭和53年度の土壙小群はサークル状をなしていた。

近接する位置関係から見て、各土壙群は住居小群と、土壙小群は住居跡とそれぞれ対になる墓域と考えられる。

祭祀場・その他

昭和58年度に検出された集石遺構は北から入り込む小支谷の東側斜面に位置し、斜面直上の住居小群・土壙群に近接している。礫等の廃棄場であった可能性もあり、また石棒等のいわゆる呪術的遺物は伴なわなかったが、集石上で何度も火を焚くなど宗教的色彩の強い遺構である。昭和53年度の住居小群(第1・2号住居跡)の北方からも小規模な集石遺構が確認されている。昭和58年度の調査で出土した石棒片を含め、今までに3点の石棒・石剣が採集されているが、分布域は北から入り込む小支

谷の谷頭直上近くに集中する。

昭和53年度2号住居跡から南西方へ約25m離れた地点に、径1.2mを測る屋外炉（石囲い炉）が築かれていた。

集 落

中期後葉の集落構造を復元する前に、茶園改植や耕作時に発見された遺構・遺物の状況について補足しておきたい。過去、発掘調査地域外で多量の土器・石器片が採集されたのは2地点である。段丘張り出し部直上の平坦面では、昭和50年ごろ茶園の改植が行われたが、その際、点在する焼土・焼礫（炉跡？）が確認されている。^{*}採集土器は中期後葉に属し、第Ⅰ・Ⅱ期の土器片をともに含んでいた（早川1980）。おそらく住居小群が形成されていたと推定される。また昭和53年度の土壙群（西側）に南接する段丘縁から、中期後葉の土器片が一括採集され、この地点でも住居小群と土壙群の併存していた可能性は大きい。

検出された遺構をもとに、中期後葉の集落を第59図に模式化してみた。住居小群は北から入り込む小支谷付近から段丘縁にそい、張り出し部北東域にかけて分布する。住居は建て替えにより移動するが、住居小群内に強い規制が認められ、昭和58年度の住居群では、併存する2棟が同時的に建て替えられたとさえ推定できる。住居小群の移動範囲は小地域に限定され、この限られた敷地内で、墓域・祭祀場等を個別に営んでいる。住居小群は集落内に独自の居住権・用益権を主張する“場”を占有しており、こうした一定の権利が認められた集団は「家族」（世帯）であろう。一時期、3～4家族が集合し、集落を構成していたと考えられる。出土土器で見ると、2箇所の住居群（昭和53・58

^{*}）足立順司氏の教示による。



第59図 長者平集落の構造

年度)の出現時期(昭和53年度第1号住居跡 昭和58年度第3号住居跡)・建て替え時期(昭和53年度第2号住居跡 昭和58年度第1・2号住居跡)は近時している。また茶園改植により採集された土器の時期幅も、両住居群と一致する。3～4の住居小群はほぼ同時に成立し、集落の存続期間を通じ、その数は一定していたと推定される。集落は一斉に形作られ、成立直後直ぐに固定化してしまうようである。

家族の実態はとても明らかにしえないが、土壙群(墓域)に見られた各土壙の形態・規模の差・配石の有無等の違いが、家族の構成員・組織の様相を物語っていることは確かである。性・世代の違いを表示しているかもしれないし、家長(指導・統轄する者)と成員(指導される者)との関係を反映しているかもしれない。まれに副葬される石鏃等は、死者が生前に果していた社会的な労働内容・役割を示していると思われる。土壙群は10・5基前後を単位として、さらに小さなまとまり(土壙小群)に区分される。この土壙小群のなかに、形態・規模の差、配石の有無等の違いが確認できるのであるから、家族はその内に、性・世代等の区分とは異質の、墓域を異にする人々をも含んでいたことになる。集落・住居小群を維持していこうとすれば、近親婚を認めないかぎり、集落外からの成員の補充を必要とする。同一世帯内の出自の違いが、一つの土壙群内にこうした土壙小群を形成したとも考えられよう。墓は家族単位でつくられ、集落全体の共同墓地は成立していない。

住居小群に囲まれた段丘平坦面を広場と考えた。石棒等呪術的遺物の分布域は昭和58年度の住居群から茶園改植時に認められた焼土・焼礫群にかけて広がり、住居群から離れ、孤立した屋外炉が築かれている。家族には、上述したように独自性が認められたが、集団労働を背景として、集落からのより強い規制を受けていたことは言うまでもない。居住域の固定化はその表われである。住居群にまたがって分布する石棒や屋外炉は、集落を動かしていくための、集団的祭祀・行事・集会等に関連する遺物・遺構と考えている。

3～4の住居小群はほぼ同時に出現し、その移動範囲が小地域に限定されることは先に述べたが、ただ漠然と弧状に配置されているのではない。北から入り込む小支谷の周辺や段丘南縁の張り出し部直上に位置している。小支谷や張り出し部は段丘頂部と低地とを結ぶ唯一の緩斜面部であり、住居小群は生産地に至る道筋を選び占地したものと理解されよう。それはまた水場への道でもある。広場を挟んで東方にのびる尾根筋・支谷も主に狩場・採集地へ向う道であろう。このように集落を基点とするいくつかの道が想定できるが、丘陵地に向うのではなく南北の低地へ通じる道筋により、集落を構成する複数の住居小群が2分される事実は興味深い。当時の基本的な生産方法は、あくまでも集落を単位とした集団労働にあったと考えているが、ある種の生産物(地)に対しては、家族単位の利用権が認められていたとも推定できるからである。

中期後葉の集落は3～4の家族からなる地縁集団であり、世帯共同体と規定し得る。

iv) 後期前葉

後期初頭に位置づけられる土器片が、東側の段丘上から、わずか7片出土している。中期後葉を境として長者平遺跡は急激に衰退していく。

第3節 出土土器の型式とその編年について

第1次～第5次調査において出土した土器は中期前葉から後期前葉におよぶ。長者平遺跡では層序を基準とした土器群の把握は難しく、住居跡を中心とする遺構内での相伴関係を軸として、時期の同時性・近時性を検討せざるをえない。ところが後世の攪乱を受けたりして遺構の残存状態が良好でない場合、包含層内の遺物が混入し、遺構内に伴出する土器群が一時期の正確な様相を伝えていないこ

とも多い。制約は多々あるが、他遺跡の資料とも比較するなかで、以下出土土器の型式とその編年について考えてみたいと思う。なお分類された土器群の名称はすべて第2章第3節に従い、かつて概報等で用いた名称を（ ）により附記した。

中期Ⅰ群土器（中期前葉）

今のところ丘陵先端部（昭和55年度調査域）での発見例はなく、少量（20数片）ながら東側の段丘上（昭和54・58年度調査域）に集中する。中期Ⅲ群土器とともに第Ⅲ層内に混在し、当群土器を伴う遺構は検出されていない。鷹島式土群（巽1969）（昭和54年度第Ⅰ群a類）・五領ヶ台式土器（今村1972）（昭和54年度第Ⅰ群b類）に対比され、前者をa類土器、後者をb類土器とすべきであろう。b類土器には古段階の五領ヶ台Ⅰ式土器が多く、関西系a類土器は客体である。

中期Ⅱ群土器（中期中葉）

昭和55年度の竪穴住居群に伴った土器群が当群にあたる（永井・松井1982）。東側の段丘上からは第28図—15に示した破片を含め、わずか2片しか採集されていない。

K—16・M—16住居跡出土土器は次の3類に大別される^{*}。

a類（昭和55年度K—16—a・d類 M—16—d類） 勝坂式土器（今村1972）の後半に位置づけられる土器で、口縁部に特徴的な三叉文・刻み目の入った隆起線文等を施す。K—16住居跡の主体をなす。

b類（昭和55年度K—16—b類 M—16—b類） 北屋敷式土器（加藤1979）に対比される。縦斜位の細条線のみを施した薄手の深鉢型土器がある。東側の段丘上から出土した2片はb類に属する。

c類（昭和55年度K—16—c類 M—16—a類） 細隆起線文・口唇部内面に施された縄文・半截竹管による条線文等、船元Ⅲ式土器（間壁1971）の施文手法を有する土器である。M—16住居跡の主体をなす。

a～c類土器は中遠地方中期中葉の土器組成の一端を示していると思われる。

中期Ⅲ群土器（中期後葉）

東側の段丘上に広範に分布する。丘陵先端部からもg類土器片（昭和55年度M—16—c類）が若干出土しているが（永井・松井1982）、中期後葉の集落は主に東側の段丘上に営まれたらしい。中期Ⅲ群土器の分類は第2章第3節で行ったのでここでは割合し、まず住居跡出土の土器群について整理してみる。

昭和53年度第1号住居跡 昭和53年度第1・2号住居跡は過去の発掘調査のなかで、もっとも保存良好だった竪穴住居跡である。両住居跡には切合が見られ、伴出土器群の時間差を捉えることができた（吉岡1979）。第1号住居跡の土器群は約40%のa類土器（昭和53年度d類）、約30%のf・g類土器（同c類）、他にc（同a類）・d（同不明土器）・i（同b類）・k（同f類）・l（同g類）類土器からなる。a類土器に鋸歯状文（a1類）は認められず、f類土器には曾利Ⅱ式土器（武藤1978 長崎他1979）的な施文を残す破片も含まれている。i・k・l類土器は本来第2号住居跡に伴っていたと考えられ、昭和53年度の不明土器はd2類土器であろう。

土器組成を要約すれば、「里木Ⅱ・Ⅲ様式」とも呼ぶべきa類土器が主体をなし、客体として曾利Ⅲ式土器に対比されるf類土器、咲畑式土器（久永1960 増子1979）直後のc類土器、刺突列を有す

^{*} 松井一明氏は昭和55年度の概報（永井・松井1982）のなかで、K—16住居跡の土器群を8類に、M—16住居跡の土器群を5類に細別し、詳述している。松井氏とも話しあい今回3類にまとめた。松井氏はc類土器を、西日本の船元Ⅲ式土器の影響を受け、当地方に成立した特色ある土器とされる。

る d 2 類土器が伴出する。

昭和53年度第 2 号住居跡 出土土器の約60%を i 類土器（昭和53年度 b 類）が占め、ほぼ等しい比率（8%前後）で、a（同 d 類）・g（同 c 類）・j（同 e 類）・k（同 f 類）・l（同 g 類）類土器が伴う。口縁部文様帯を残した i 類土器はわずか1片しかない。a 類土器は第 1 号住居跡からの混入と思われる。

加曾利 E IV 式土器（鈴木保他1980）に対比される i 類土器が圧倒的であり、それに曾利 IV・V 式土器類似的 g 類土器、結節縄文を持った j 類土器が伴出する。

昭和58年度第 1 号住居跡 総量わずか4片であるが、昭和53年度第 2 号住居跡と同様、i 類土器と g 類土器が共伴している。

昭和58年度第 2 号住居跡 i・g 類土器が主体をなす。

昭和58年度第 3 号住居跡 詳細は第 2 章第 3 節を参照願いたい。f・i 類土器を混入として除去すれば、a 類土器が約80%を占め、他は咲畑式土器に酷似する b 類土器、その直後の c 類土器、曾利 II 式土器に対比される e 類土器である。

住居跡以外では、集石遺構直上から口縁部文様帯を残した f・h 類土器が一括出土し、g・h・i 類土器と j 類土器が共伴した土器集中地点が確認されている。

以上のように見てくると、二通りの土器組成があることに気付く。一つは昭和53年度第 1 号住居跡・

	中 期 後 葉								
東海地方西部域(系)	中富 I	中富 II	中富 III	中富 IV	中富 V(咲畑)	神 明	取 組	島崎 III	山の神
III 群-b類									
c類									
関西・中国(系)	船元 IV・里木 II		里 木 III		第 I 期				
III 群-a類									
中部高地(系)	井戸尻 III・曾利 I			曾 利 II		曾利 III	曾利 IV・V・井戸		
III 群-e類									
f類									
g類									
関東(系)	加 曾 利 E I				加曾利 E II			加曾利 E III	加曾利 E IV
III 群-h類									
i 類									
中遠(在地)						第 II 期			
III 群-d類									
j 類									
III 群-k類									
ℓ 類									

第60図 長者平遺跡出土中期Ⅲ群土器の編年

昭和58年度第3号住居跡の土器群であり、a類土器を主体とし、東海系のb・c類土器・曾利Ⅱ式的なe類土器を伴出している。他の一つは曾利・加曾利E式土器の末葉型式（g・i類土器）に在地性の強いj類土器が伴った昭和53年度第2号住居跡・昭和58年度第1・2号住居跡の土器群である。無文あるいは縄文のみ施されたl・k類土器の多くは後者に属することが理解されよう。昭和53年度第2号住居跡は第1号住居跡を切断しており、前者の土器組成が、後者に先行していたことは言うまでもない。各住居跡の土器組成率には差が認められ、集石遺構直上からは、後者の土器群より遡るf・h類土器のみが一括採集されている。2様の土器組成自身にも変化・推移があり、両者が隔たりなく連続するとは思われないが、一応、前者を長者平遺跡中期後葉第Ⅰ期の、後者を中期後葉第Ⅱ期の土器組成と規定しておきたい。

第2章第3節で述べたように、a類土器の祖型式は近畿・中国地方に求められる。おそらく里木Ⅱ式土器段階に東海地方の海岸域を経由して伝播したと考えられ、3種の施文手法や地文の撚糸文・細条線が併存するなど、a類土器はすでに当地方としての独自の発展を遂げている。第Ⅰ期はこうしたa類土器の盛花期にあたり、さらに地域性を強めつつあった東海地方（咲畑式土器）・中部高地（曾利Ⅱ式土器）から文化的影響を主に受容した時期である。その編年的位置は、増子編年の中富Ⅳ・Ⅴ式土器期（増子1979）に並行すると考えている。

東海地方において、関東系加曾利E式土器の侵透が始まるのは中富Ⅴ式段階であるという（増子1979）。当地方にあっても、第Ⅱ期への転換に関東系文化の進出が深く関わっていたことは、その土器組成から見て否定しえない。遺跡全域からの出土量は、地文に条線を施したf・g類土器がもっとも多く、曾利式土器との関係は第Ⅱ期まで継続している。f・h類土器には曾利式・加曾利E式土器相互の接触（折衷）が認められ、隆帯に在地的・東海的な刻み・刺突列を加えるなど、第Ⅱ期の土器群は、こうした意味で転換当初より在地化の様相を呈していた。第Ⅱ期を通じ、主要な施文要素は曾利式系（地文条線）から加曾利E式系（地文縄文）へと推移し、関東系文化が優位にたった段階に、昭和53年度第2号住居跡の土器群（i類土器主体）は位置づけられると思われる。f～g類土器（曾利式系）・h～i類土器（加曾利E式系）への変化は漸移的であり、結節縄文をつけたj類土器も同様の变化をなす。f—g類土器・h—i類土器・j類土器において口縁部文様帯が退化・消失し、在地性を強めていく過程は、たがいに一致・対応していよう。組成率に差はあるものの、第Ⅱ期の土器組成は、増子編年の神明・取組式土器段階から中期最終末まで長期間継続したと考えられ、第Ⅱ期はさらに細分される可能性を有している。

東海地方西部域に類例を見ず、j類土器とならんできわめて在地性が強いとしたd類土器の伴出関係は明確でない。今のところ昭和53年度第1号住居跡（第Ⅰ期）からd2類土器の破片がわずかに1片出土した程度である。d1類土器は神明式土器第2グループとよく似た施文を持ち、d2類土器の隆帯上に加えられた刻み・刺突列は、北屋敷式土器、直接的には咲畑式土器の施文要素を発展・継承したものと思われる。d類土器を基本的に東海系土器とすることも可能かもしれないが、d1類土器の多くは区画内を縄文により充填しており、加曾利E式土器との関連が想定される。あくまで推定の域を出ないが、特異な口縁部形態をなすd1類土器は、関東系文化と接解することにより土器組成にまで混乱が生じた時期、つまり第Ⅱ期への転換期に、第Ⅰ期の伝統を守りつつ当地方に成立した特徴的な土器と考えたい。刻み・刺突列の盛行（d2類）は、d1類土器とほぼ同時期あるいは後出的に発展した施文手法であろう。d類土器自身変化を遂げたようであるが、第Ⅱ期への転換以後、在地の土器としてはj類土器が長く存続し、終末段階まで明瞭に残ったj3類土器の刻み・刺突列や曾利・加曾利E式系土器（g・i類土器）の縦位短沈線に、d類土器の面影を見ることができるよう思う。

d1類土器は広く東中遠地方に分布しており、上記のごとく編年的位置が限定されるとすれば、「長者平式土器（d1類）」とも呼びうる特異性を有している。

今後各地の資料が増加するなかで、中期Ⅲ群土器については、さらに検討される必要があるだろう。

後期Ⅰ群土器（後期前葉）

昭和54年度の発掘資料中に8片（昭和54年度第Ⅱ群土器a類）、昭和53年度資料中に2片（昭和53年度不明土器）、後期の土器片が含まれていた。丘陵先端部（昭和55年度調査域）からは一切見つかっていない。太く明瞭な沈線で文様を区画し、比較的細い磨消縄文を施す。円周の一部が途切れた特徴的な円文を加えたものがある。南関東地方称名寺式土器（今村1977）の古段階に対比されるが、在地化の様相も著しい。

第4節 出土石器・その他の遺物について

長者平遺跡から多量の石鏃が採集されることは、古くから地域の研究者によって注目されていた。発掘・採集資料には黒耀石製の石鏃が圧倒的に多く、当時の主たる生産手段が狩猟にあったことを推定させる。発掘調査においても多くの石鏃・石錘・縦・横型石匙等の石器・各種の剥片が出土しているが、残念ながら、これらの石器類について縄文中期社会との関わりの中なかで記述するだけの能力・見識を、私は持ちあわせていない。発掘担当者としてははなはだ怠慢であり、また無責任ではあるが、今回は資料を提示するだけに止まらざるをえなかった。労働・生活用具としての長者平遺跡出土石器の検討は、その製作技法をも含め、今後に残された最大の課題である。

*) 約2.7km 南に離れた袋井市大畑遺跡Ⅰ—f 類土器（市原1981）のなかに類例が見られる。また掛川市五百済（ようずみ）遺跡・中原遺跡・下ノ段遺跡・豊田町広野遺跡（大橋他1981）・島田市東鎌塚原遺跡・西原遺跡から加藤賢二氏が採集された資料中に、類似した破片が認められる。

**) わずか4点ではあるが、昭和54年度の発掘資料を京都大学原子炉実験所で分析していただいた。すべて長野県南部の霧ヶ峰・麦草峠で産する黒耀石とのことである。

本報告書を作成する過程で出会った水野正好氏の縄文集落に関する一連の論文（水野1969等）に、深い感銘を受けた。また友人の渡辺康弘・佐野一夫両氏から、多くの励ましとともに、報告書のあり方について激烈な批判をいただいた。中遠地方の縄文資料は、広く公にされていないとの意見もあり、不十分ながら、第1次～5次発掘調査の成果をまとめてみたのである。

参 考 文 献

- 吉岡伸夫他 1979 「長者平遺跡—昭和53年度緊急発掘調査概報—」 袋井市教育委員会
1980 「長者平遺跡—昭和54年度緊急発掘調査概報—」 袋井市教育委員会
永井 義博 1981 「長者平遺跡—昭和55年度発掘調査概報—」 袋井市教育委員会
永井義博・松井一明 1982 「長者平古墳群—埋蔵文化財発掘調査報告書—」 袋井市教育委員会
大庭 正八 1983 「第一編 第二章 袋井市域の地形と地質」『袋井市史—通史編—』 袋井市役所
石田志郎他 1980 「掛川地域の中部更新統」『第四紀研究』19巻3号 第四紀研究会
加藤 芳朗 1981 「大畑遺跡周辺の地学的背景と遺跡立地」『袋井市大畑遺跡—1951・1977・1978・1980年度の発掘調査』 袋井市教育委員会
静岡県教育委員会 1979 「静岡県遺跡地名表」
久永春男他 1976 「萩ノ段遺跡調査概報」 掛川市教育委員会
山村 宏他 1977 「静岡カントリークラブ袋井ゴルフ場建設工事への提言」 遠江考古学研究会

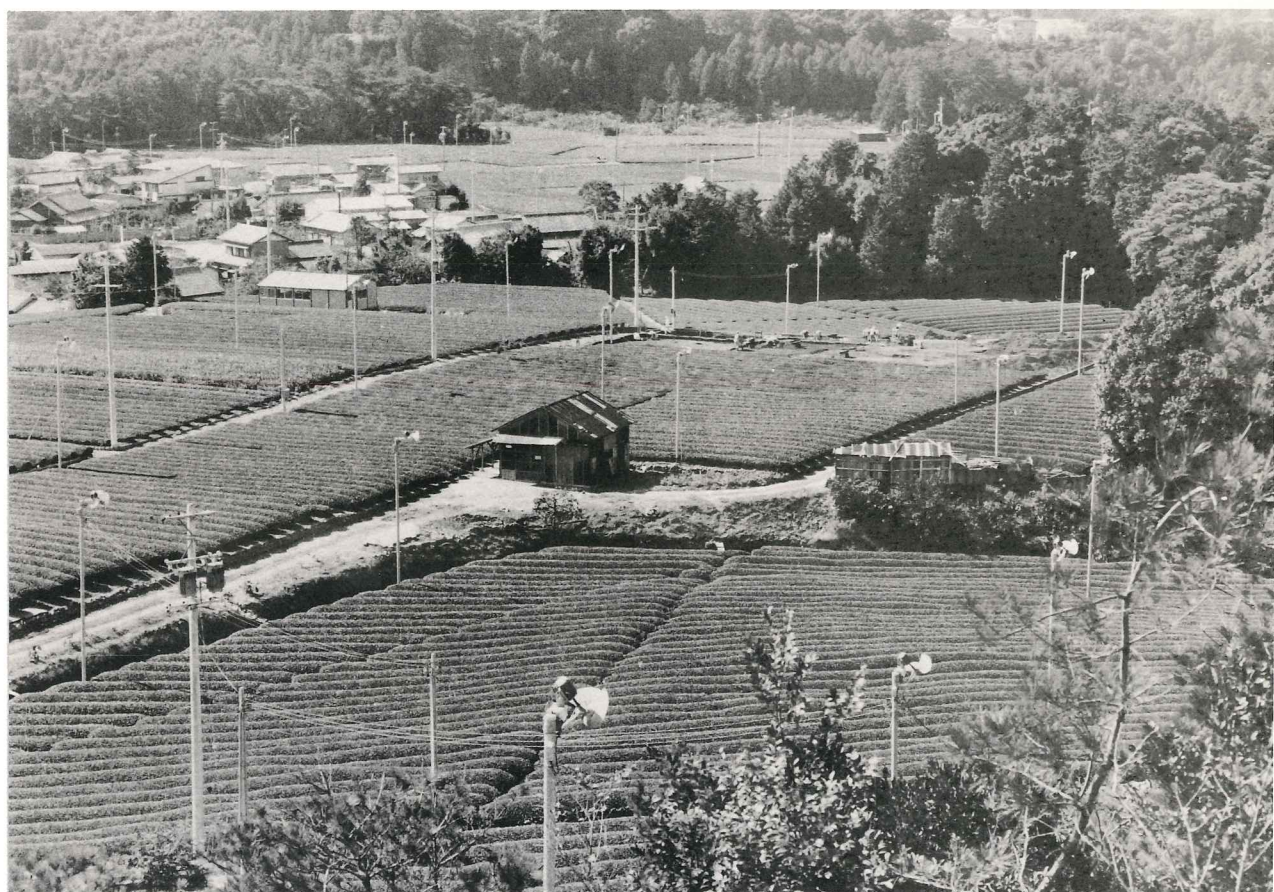
- 加藤 芳朗 1961 「4 出土貝類について」『西貝塚』 磐田市教育委員会
- 金子 浩昌 1981 「第9章 第2節 昭和55年度出土の動物遺体概要」『袋井市大畑遺跡—1951・1977・1978・1980年度の発掘調査』 袋井市教育委員会
- 吉岡 伸夫 1983 「第二編 第二章 縄文時代の袋井」『袋井市史一通史編一』 袋井市役所
- 松井 一明 1983 「掛の上遺跡Ⅱ—袋井市掛の上遺跡第2次調査報告書一」 袋井市教育委員会
- 1983 「大門—大門Ⅰ遺跡第2次発掘調査報告書」 袋井市教育委員会
- 平野吾郎他 1982 「中原遺跡—発掘調査概報一」 掛川市教育委員会
- 岡本 勇 1955 「静岡県小笠郡大畑遺跡」『昭和26年度日本考古学年報』 日本考古学協会
- 市原 壽文 1978 「袋井市大畑遺跡—1977年度の発掘調査一」 袋井市教育委員会
- 1979 「袋井市大畑遺跡—1978年度の発掘調査一」 袋井市教育委員会
- 1981 「袋井市大畑遺跡—1951・1977・1978・1980年度の発掘調査一」 袋井市教育委員会
- 1982 「袋井市大畑遺跡—1981年度の発掘調査一」 袋井市教育委員会
- 戸塚 賢二 1971 「森町天宮採集の柏窪式土器の新例」『森町考古2』 森町考古学研究会
- 大橋 保夫 1983 「周智郡森町逆井遺跡」『森町考古18』 森町考古学研究会
- 大橋保夫他 1981 「広野遺跡」『森町考古17』 森町考古学研究会
- 平野 吾郎 1974 「遠江貝性寺貝塚の研究」 磐田市教育委員会
- 市原 壽文 1967 「遠江石原貝塚の研究—縄文後期における地域性の問題をめぐって—」『人文論集』18号 静岡大学人文学部
- 麻生 優他 1961 「西貝塚」 磐田市教育委員会
- 植松章八他 1980 「吉岡大塚古墳測量調査報告書」 掛川市教育委員会
- 川江 秀孝 1979 「静岡県下出土の須恵器について」『静岡県考古学会シンポジウム2 須恵器—古代陶質土器の編年一』 静岡県考古学会
- 川井 正一 1972 「袋井市雲座古墳D単位群発掘調査概報」『袋井市文化財調査報告書第1集』 袋井市教育委員会
- 1976 「袋井市地蔵ヶ谷横穴群の問題点」『森町考古10』 森町考古学研究会
- 山村 宏他 1966 「大沢・川尻古窯跡調査報告書」『遠江考古学研究会学報』第3集 遠江考古学研究会
- 平野吾郎・佐藤達雄他 1978 「山本山古墳群」 袋井市教育委員会
- 吉岡 伸夫 1983 「第V章 第1節 群集墳と横穴群の構造」『遠江の横穴群—静岡県内横穴群分布調査報告書Ⅰ—』 静岡県教育委員会
- 今村 啓爾 1972 「宮ノ原貝塚」 武蔵野美術大学考古学研究会
- 加藤 賢二 1979 「白岩下遺跡—西方川河川改修工事における採集遺物—」『森町考古14』 森町考古学研究会
- 間壁忠彦他 1971 「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7号 倉敷考古館
- 久永 春男 1960 「咲畑貝塚」 愛知県知多郡師崎町立師崎中学校
- 増子 康真 1978 「縄文中期後半土器の編年—東海地方西部地域—」『古代人』34 名古屋考古学会
- 紅村 弘他 1978 「東海先史文化の諸段階 資料編Ⅰ」
- 武藤雄六他 1978 「曾利第三・四・五次発掘調査報告書」 長野県富士見町教育委員会
- 長崎元広他 1979 「中部高地縄文土器集成 第1集—縄文中期後半の部・その1」 中部高地縄文土器集成グループ
- 鈴木保彦他 1980 「シンポジウム・縄文時代中期後半の諸問題—とくに加曾利E式と曾利式土器との関係について—」『神奈川考古』10号 神奈川考古同人会
- 向坂 鋼二 1970 「遠江における縄文土器の変遷」『遠江考古学研究4』 遠江考古学研究会
- 加藤 賢二 1972 「広野C式土器」『なう』No.3・5
- 神村 透 1978 「結節縄文をつけた一群の土器—飯田地方縄文中期終末—」『中部高地の考古学—長野県考古学会15周年記念論文集』 長野県考古学会
- 山下 勝年 1976 「清水の上貝塚—南知多町文化財調査報告書」 南知多町教育委員会
- 赤堀 栄三 1929 「石器研究の一方法—石鏃に関する2・3の試み」『人類学雑誌』44巻3号

- 西井 幸雄 1981 「第8章 第2節 遺物 ii石器」『袋井市大畑遺跡—1951・1977・1978・1980年度の発掘調査—』
袋井市教育委員会
- 鈴木道之助 1981 「図録石器の基礎知識Ⅲ」 柏書房
- 加藤晋平・小林達雄編 1983 「縄文文化の研究」7 雄山閣
- 早川 保子 1980 「付載 故早川二二氏が採集した長者平遺跡縄文土器について」『長者平遺跡—昭和54年度緊急発掘調査概報』 袋井市教育委員会
- 巽 三郎他 1969 「鷹島—鷹島遺跡発掘調査報告書—」 南紀考古同好会
- 今村 啓爾 1977 「称名寺式土器の研究（上）」『考古学雑誌』第63巻第1号 日本考古学会
- 1977 「称名寺式土器の研究（下）」『考古学雑誌』第63巻第2号 日本考古学会
- 水野 正好 1969 「縄文時代集落研究への基礎的操作」『古代文化』第21巻第3・4号 古代学協会

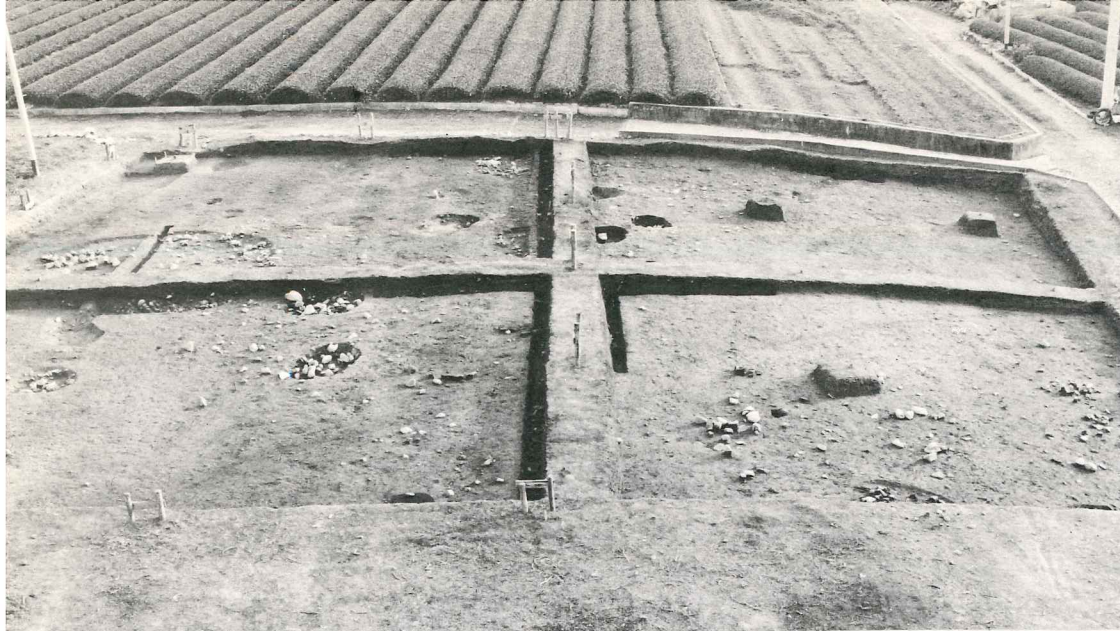
版 図 真 写



長者平遺跡遠景（南方より）



長者平遺跡遠景（東方丘陵上より）



G・H6・7・8・9区第Ⅲb
層上面遺構検出状況
(北方より)



G・H6・7・8・9区完掘状
況 (北方より)



G・H6・7・8・9区遺跡基
盤層上面遺構検出状況
(北方より)



E・F6・7・8・9区遺跡基
盤層上面遺構検出状況
(北方より)

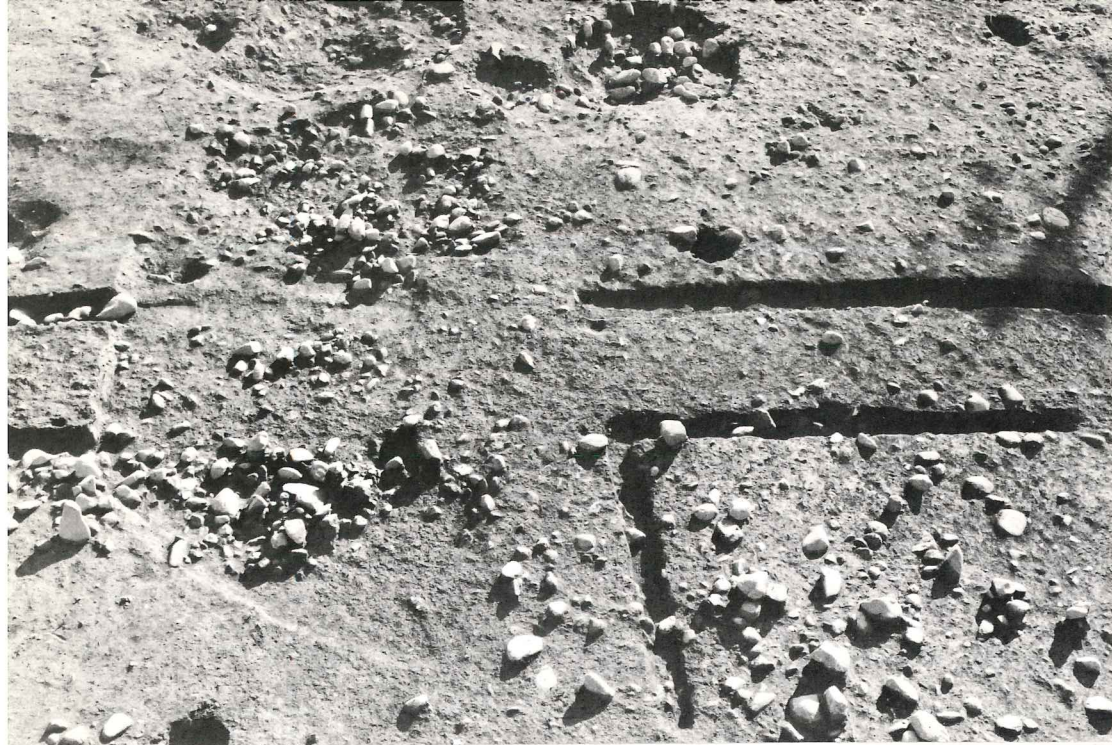
昭和58年度第2号住居
跡近景（北方より）



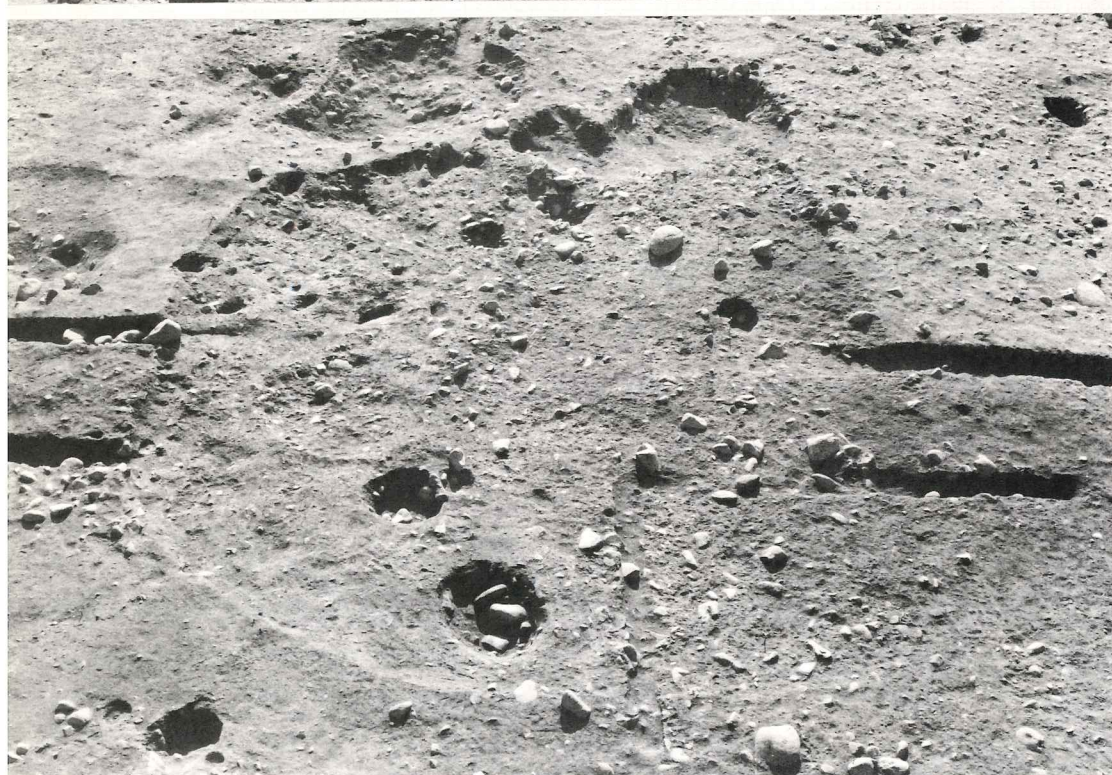
昭和58年度第2号住居
跡石囲い炉検出状況
（西方より）



昭和58年度第2号住居跡石囲い炉組み石の状況



昭和58年度第3号住居
跡近景（東方より）



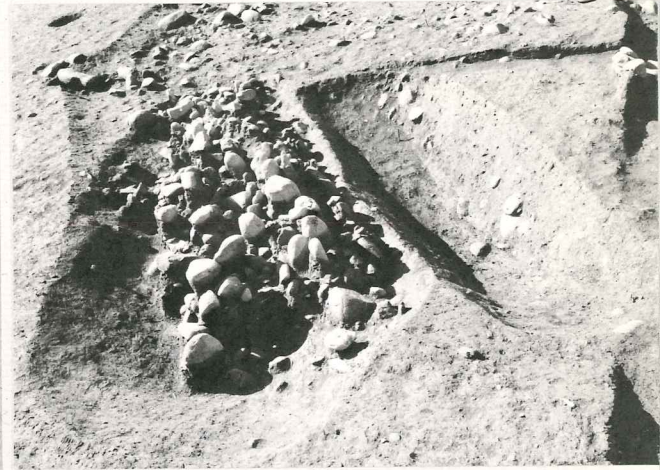
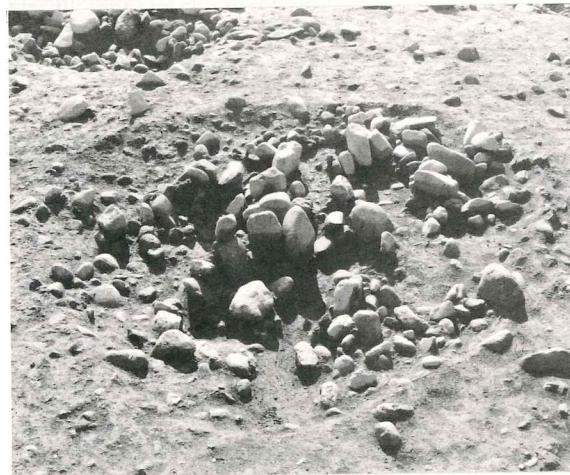
昭和58年度第3号住居
跡完掘状況（東方より）



昭和58年度第4号住居
跡近景（北方より）

図版 5

G・H 8・9区付近昭和58
年度土壇群の分布状況
(北西方より)



昭和58年度土壇状遺構
近景

(第8号 第12・13号)
(第14号 第15・16号)
(第17・18号 第19号)

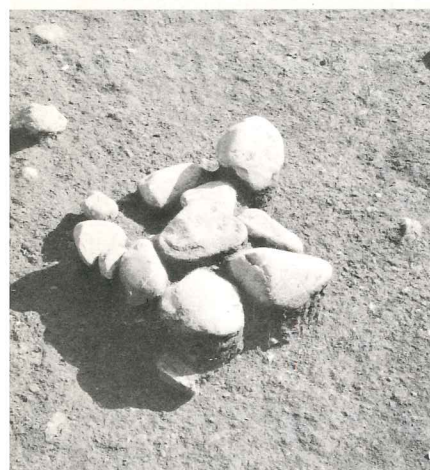




昭和58年度土壇状遺構
近景
(第20号 第22号)
(第23号)



O15区昭和58年度柱穴
状遺構検出状況(西方
より)



(左) I 7 区礫集積状況
(右) 昭和58年度集石遺構
土器集中部検出状況
(南方より)



昭和58年度集石遺構直
上(第Ⅲb層上面)遺
構検出状況(北方より)

昭和58年度集石遺構直
上(第Ⅲb層上面)土器
出土状況(北東方より)



昭和58年度集石遺構直
上土器出土状況近景
(西方より)



昭和58年度集石遺構直
上土器出土状況近景
(西方より)





G7区付近昭和58年度
集石遺構検出状況
(西方より)



G7区付近昭和58年度
集石遺構検出状況
(北方より)



F7区付近昭和58年度
集石遺構検出状況
(北方より)

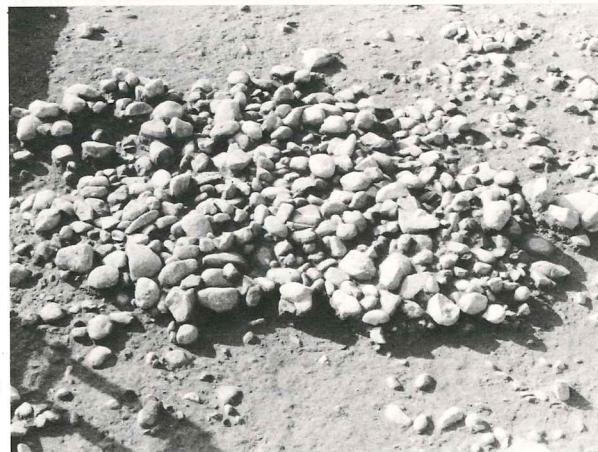
図版 9

(左)昭和58年度集石遺構
空白部近景（東方より）



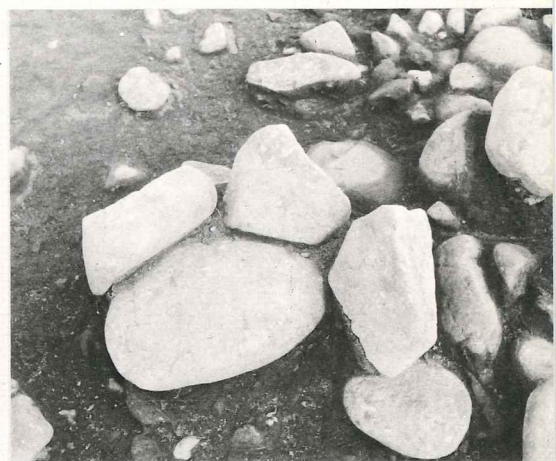
(右)昭和58年度集石遺構
空白部西壁の状況

(左)昭和58年度集石遺構
近景（東方より）



(右)昭和58年度集石遺構
の状況

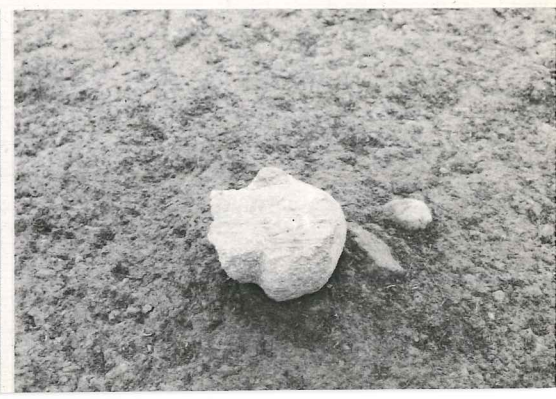
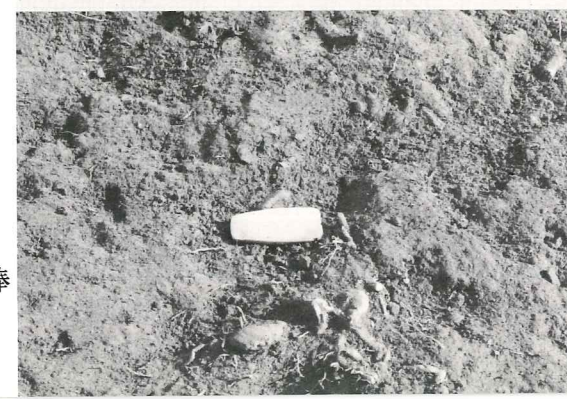
昭和58年度集石遺構焼
礫分布状況

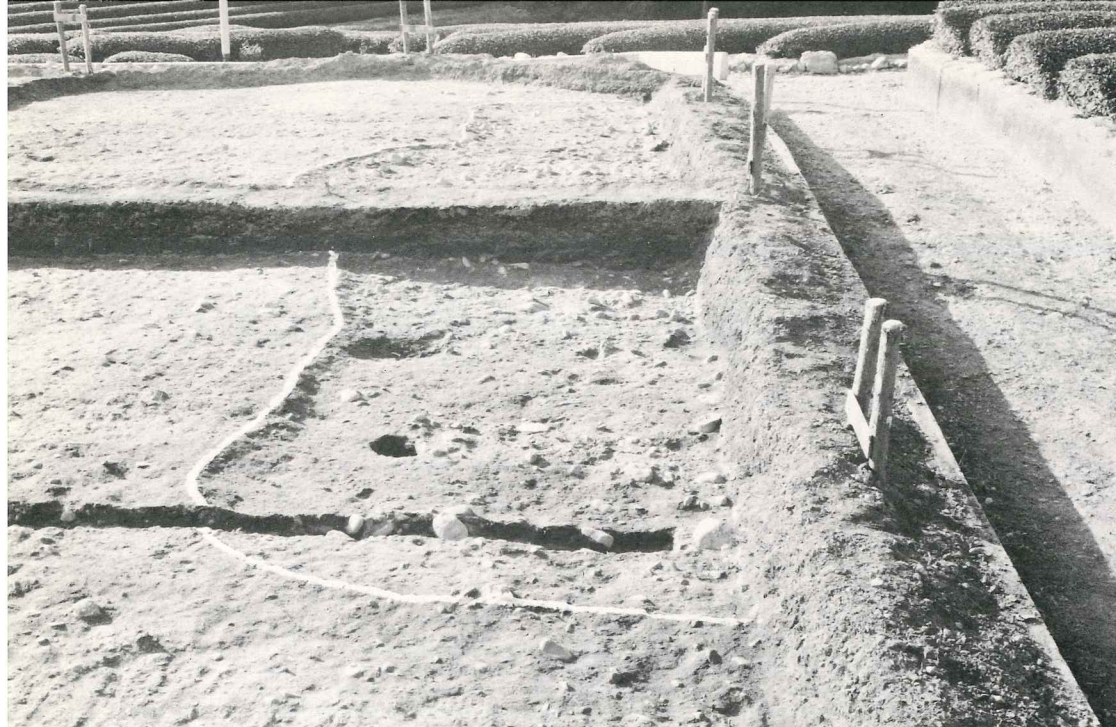


縄文土器出土状況



石器（磨製石斧・石棒
片）出土状況





昭和58年度第1号墳前方部前端周溝完掘状況
(東方より)



昭和58年度第2号墳周溝検出状況(東方より)



昭和58年度第2号墳主体部検出状況(西方より)

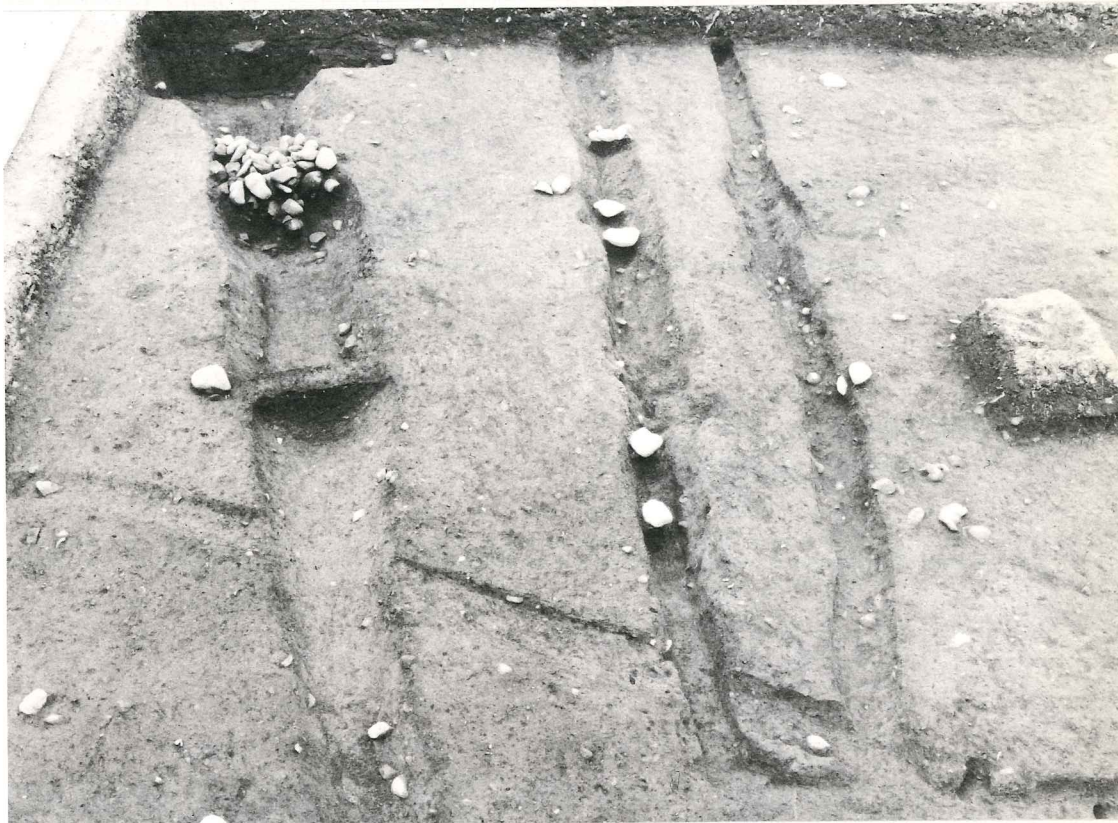
図版11

(左)昭和58年度第2号墳
主体部近景（西方より）

(右)昭和58年度第2号墳
鉄鍬出土状況

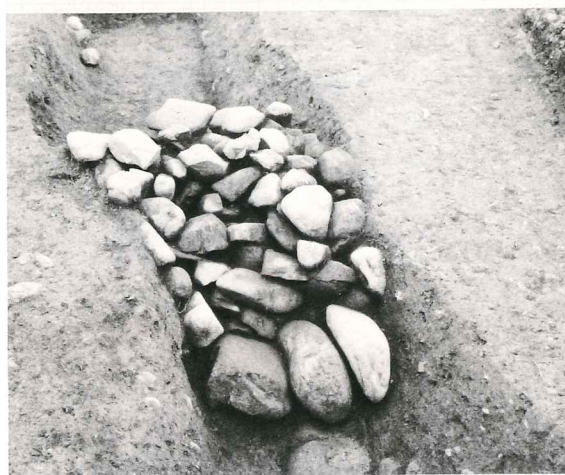


昭和58年度第2号墳前
溝検出状況（西方より）



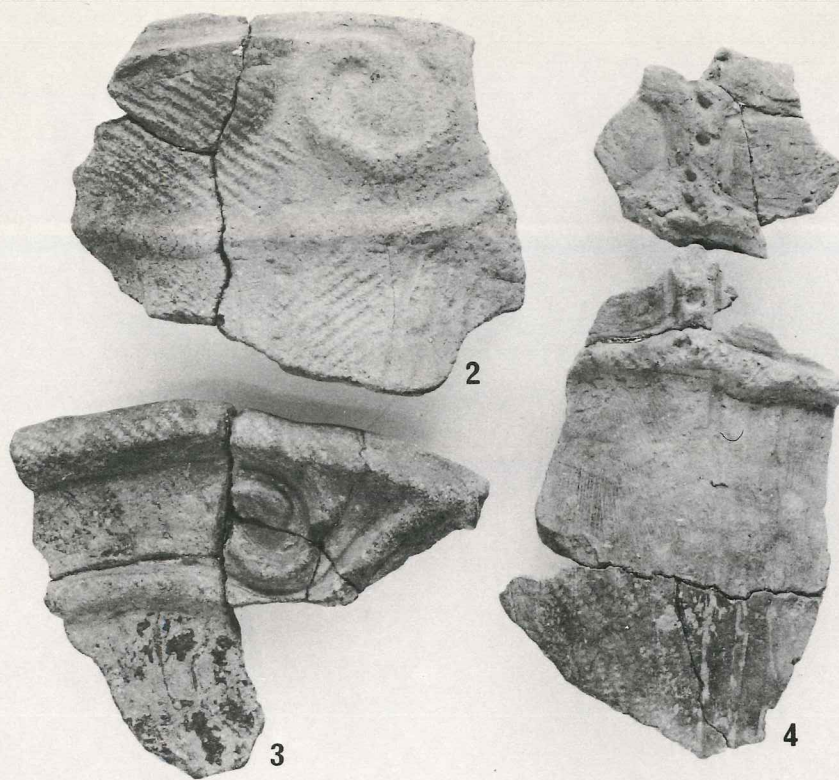
(左)昭和58年度第2号墳
封鎖施設近景（東方
＝主体部側より）

(右)昭和58年度第2号墳
前溝状遺構近景（西
方より）



発掘調査風景



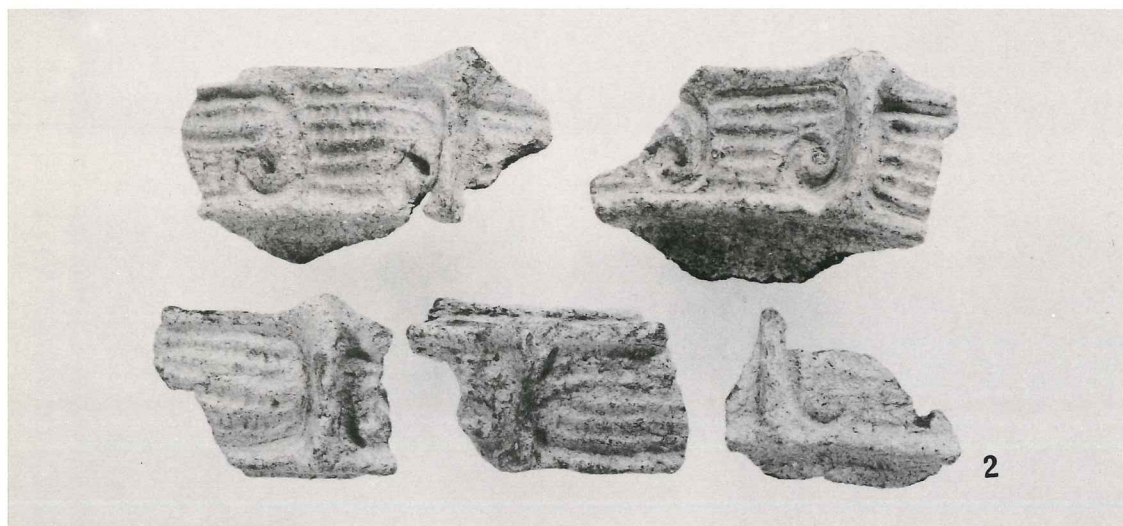
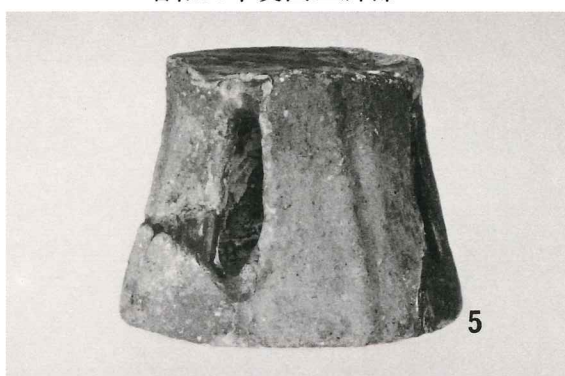


昭和58年度集石遺構直上出土土器

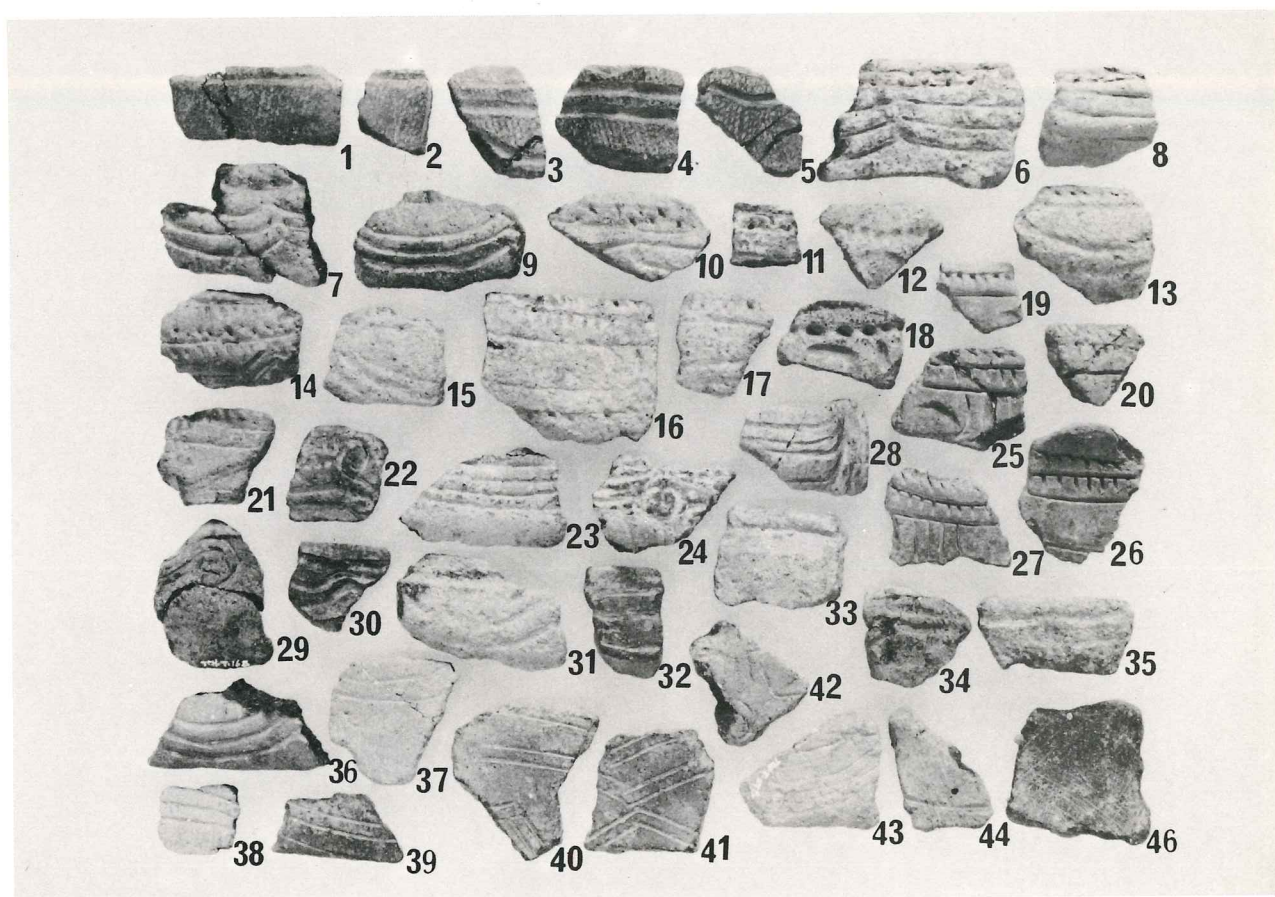


昭和58年度集石遺構直上出土土器

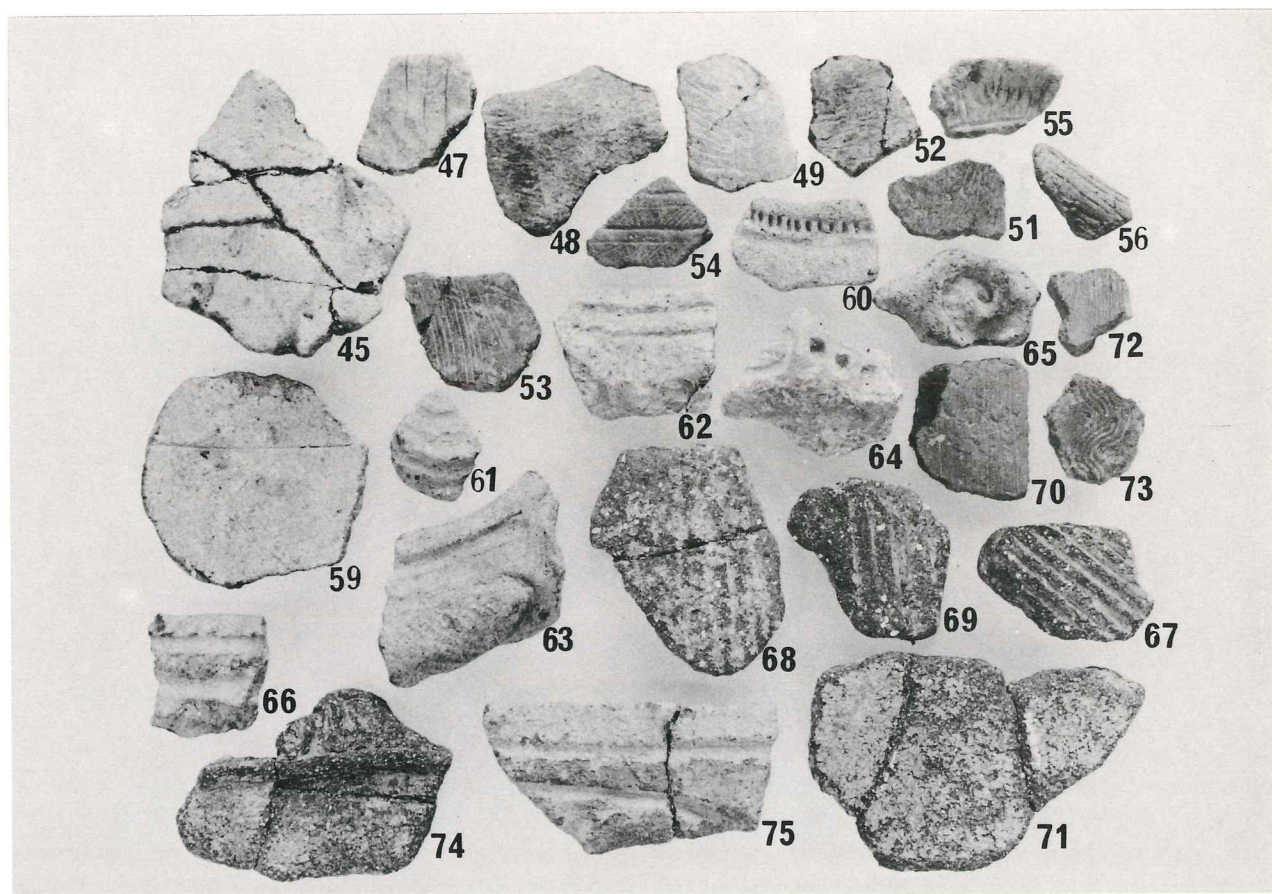
昭和58年度出土脚部



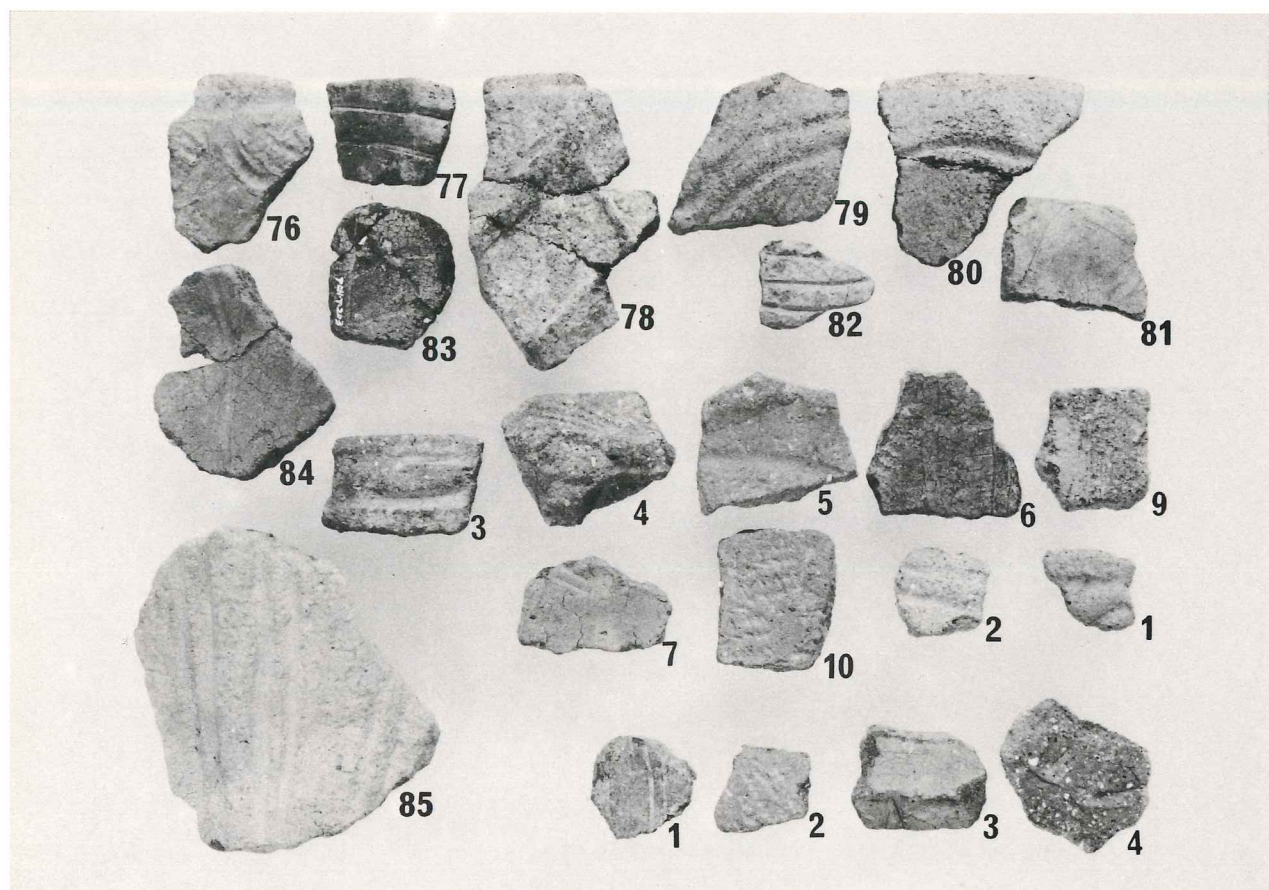
昭和58年度出土中期Ⅲ群—b類土器



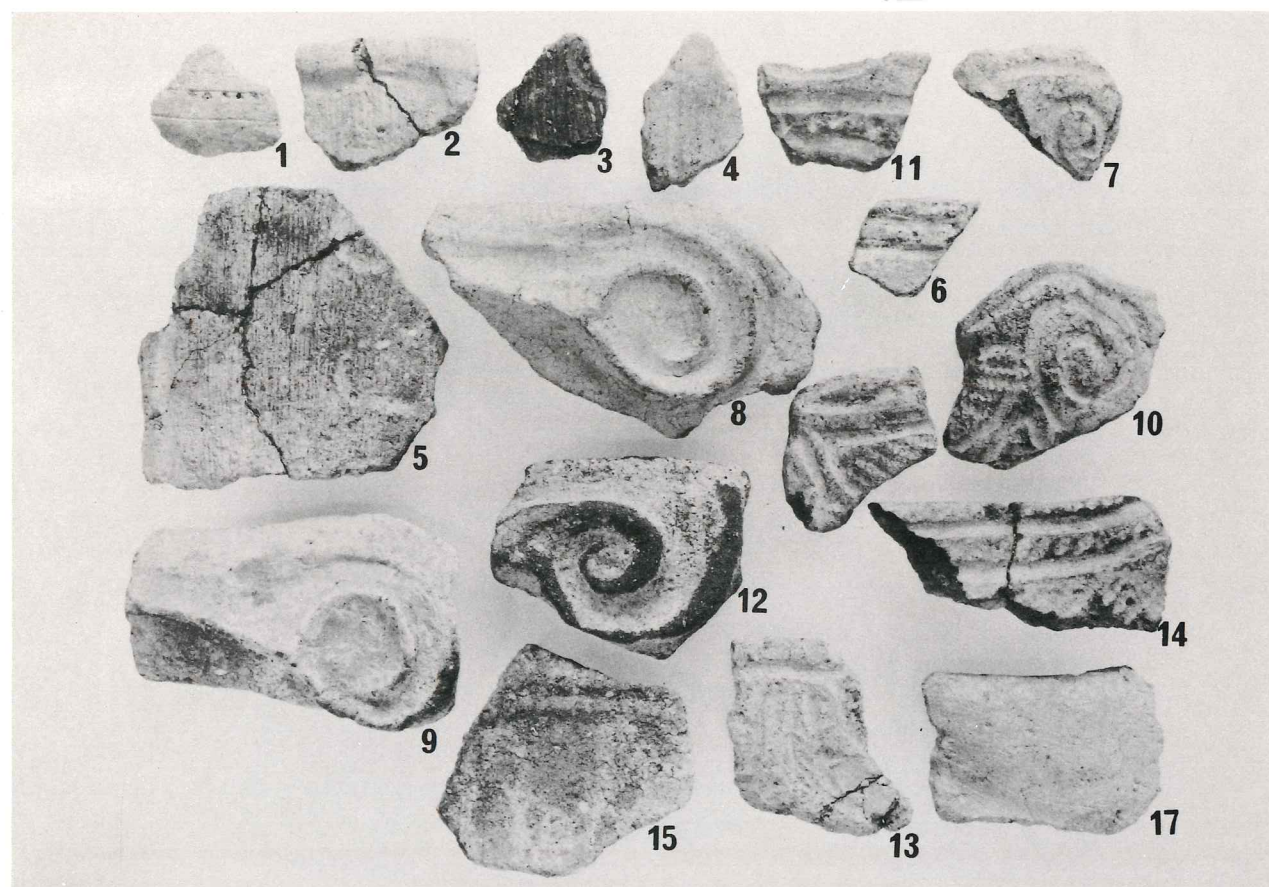
昭和58年度第3号住居跡出土土器



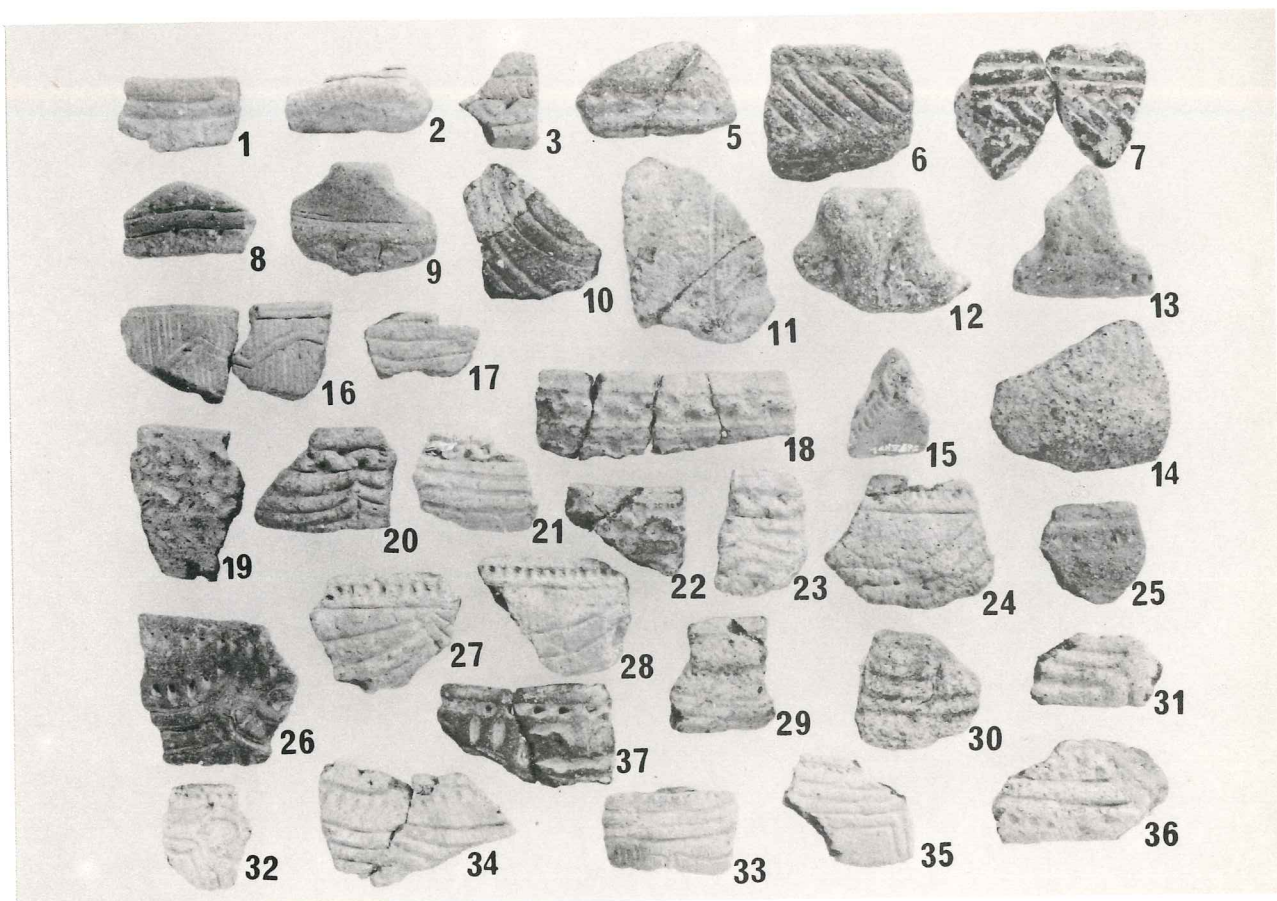
昭和58年度第3号住居跡出土土器



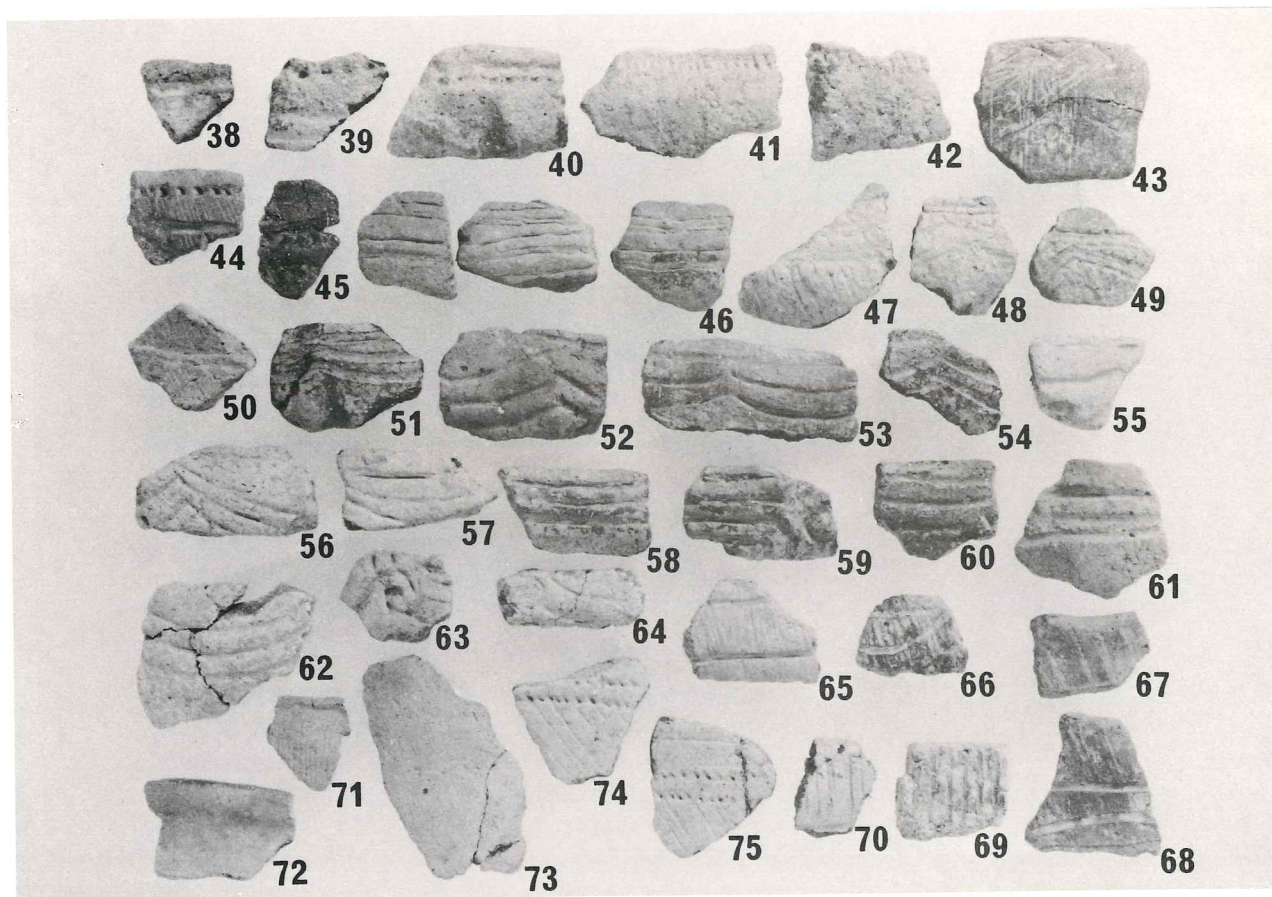
昭和58年度第1・2・3号住居跡出土土器



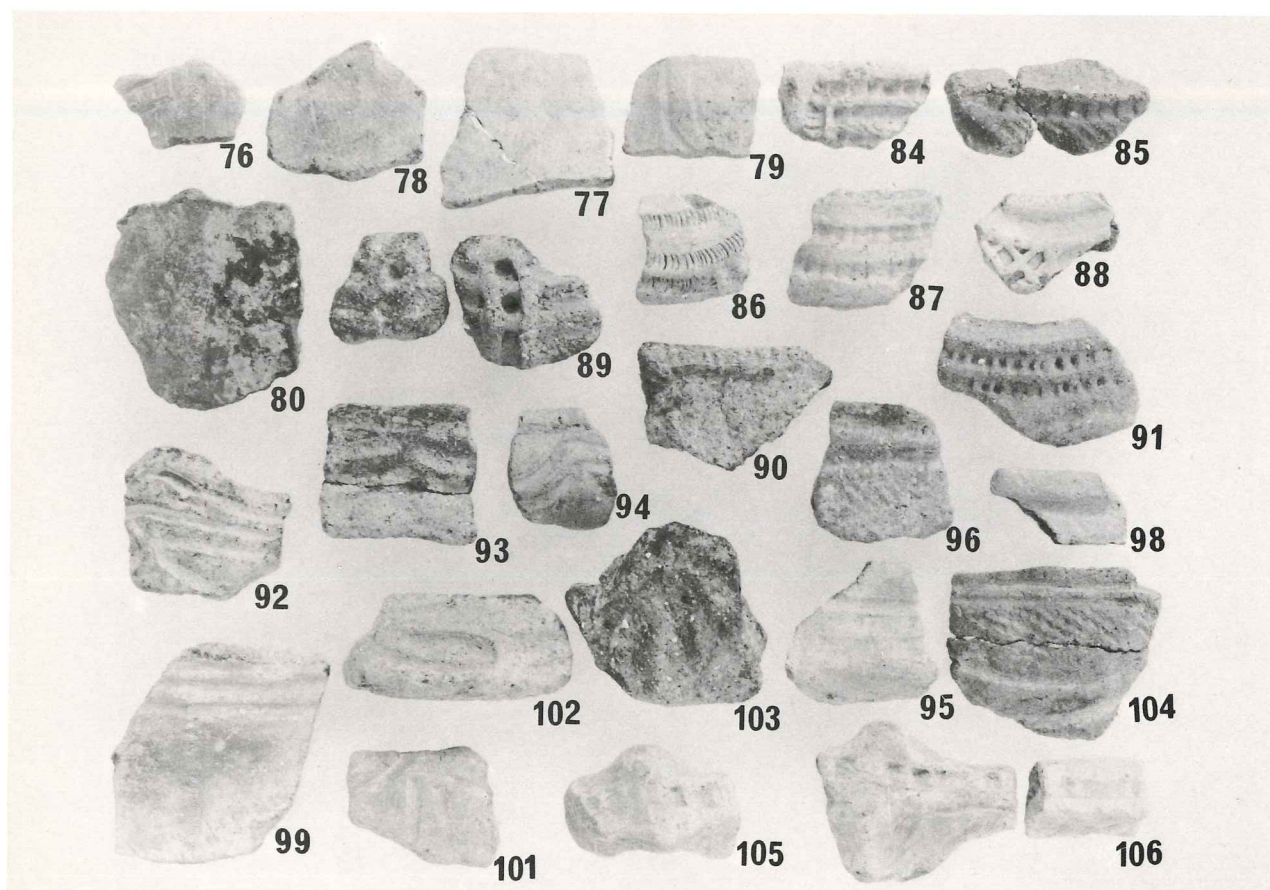
昭和58年度集石遺構土器集中部出土土器



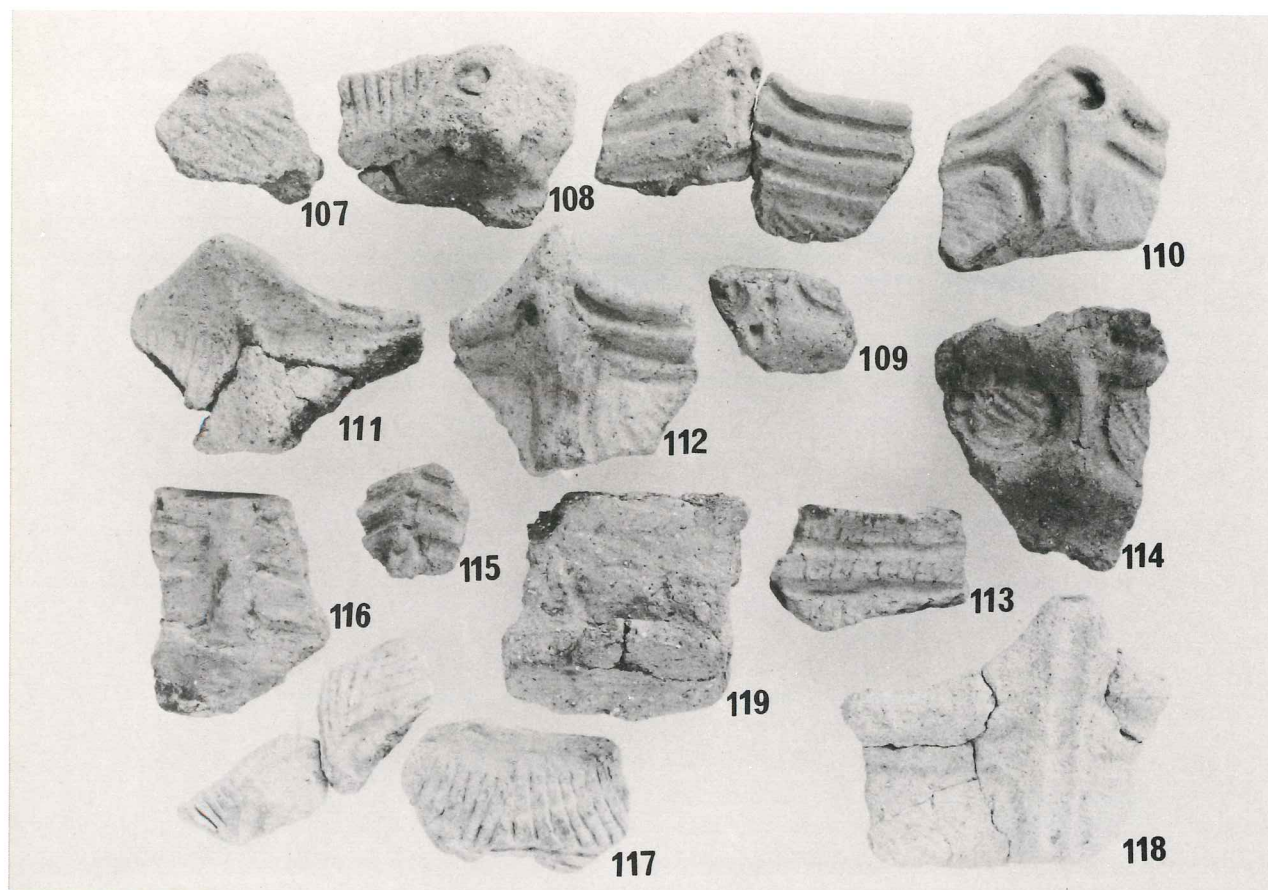
昭和58年度出土中期Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群—a類土器



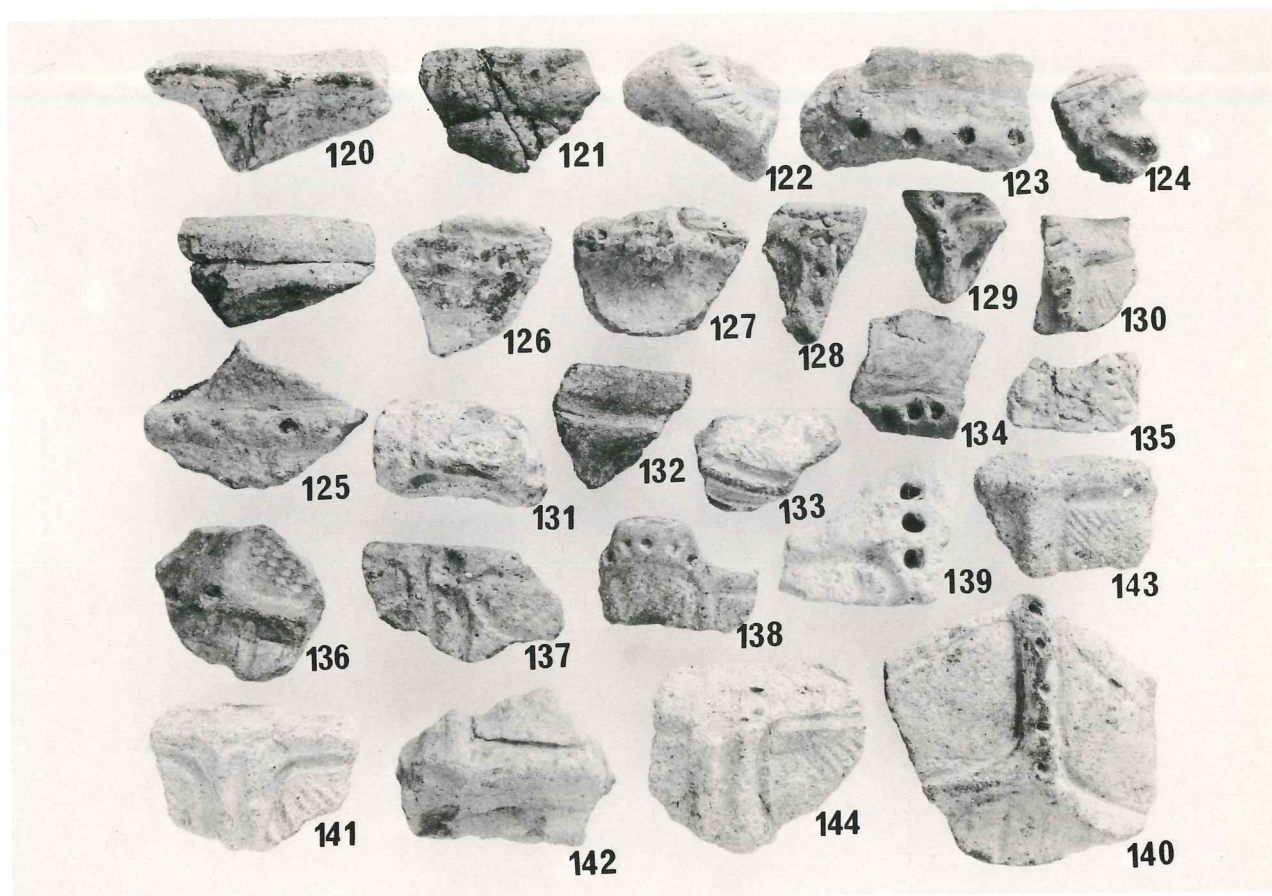
昭和58年度出土中期Ⅲ群—a類土器



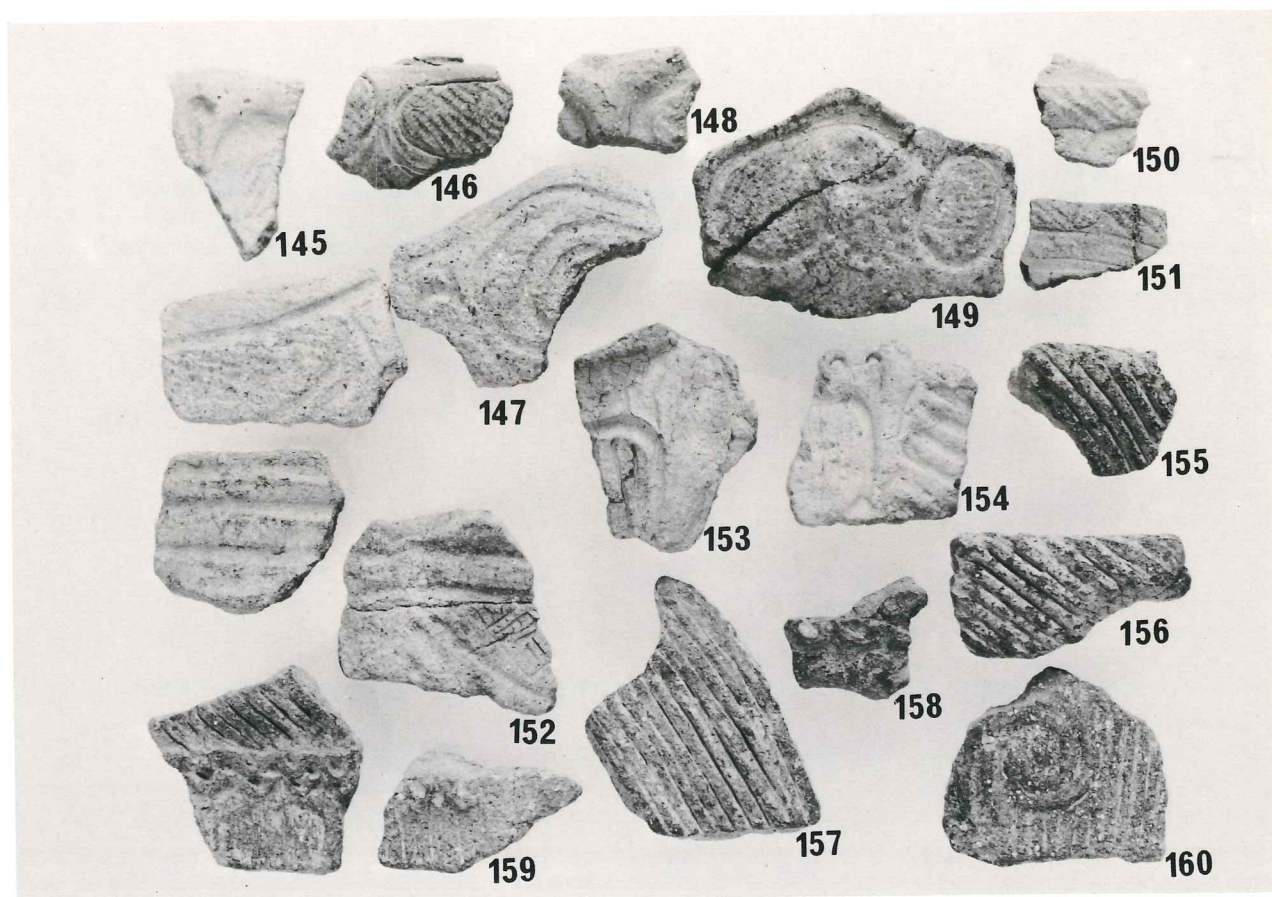
昭和58年度出土中期Ⅲ群—a・b・c類土器



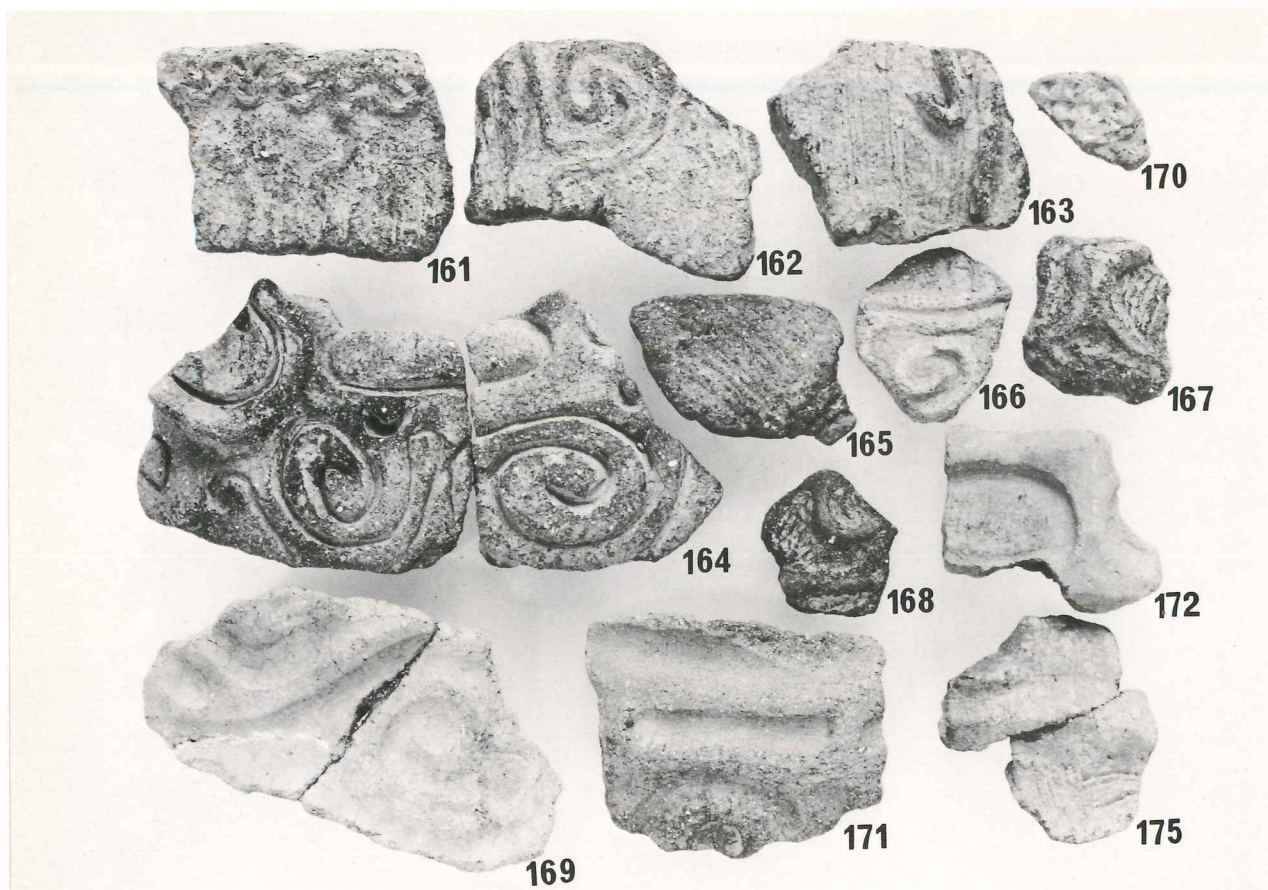
昭和58年度出土中期Ⅲ群—d類土器



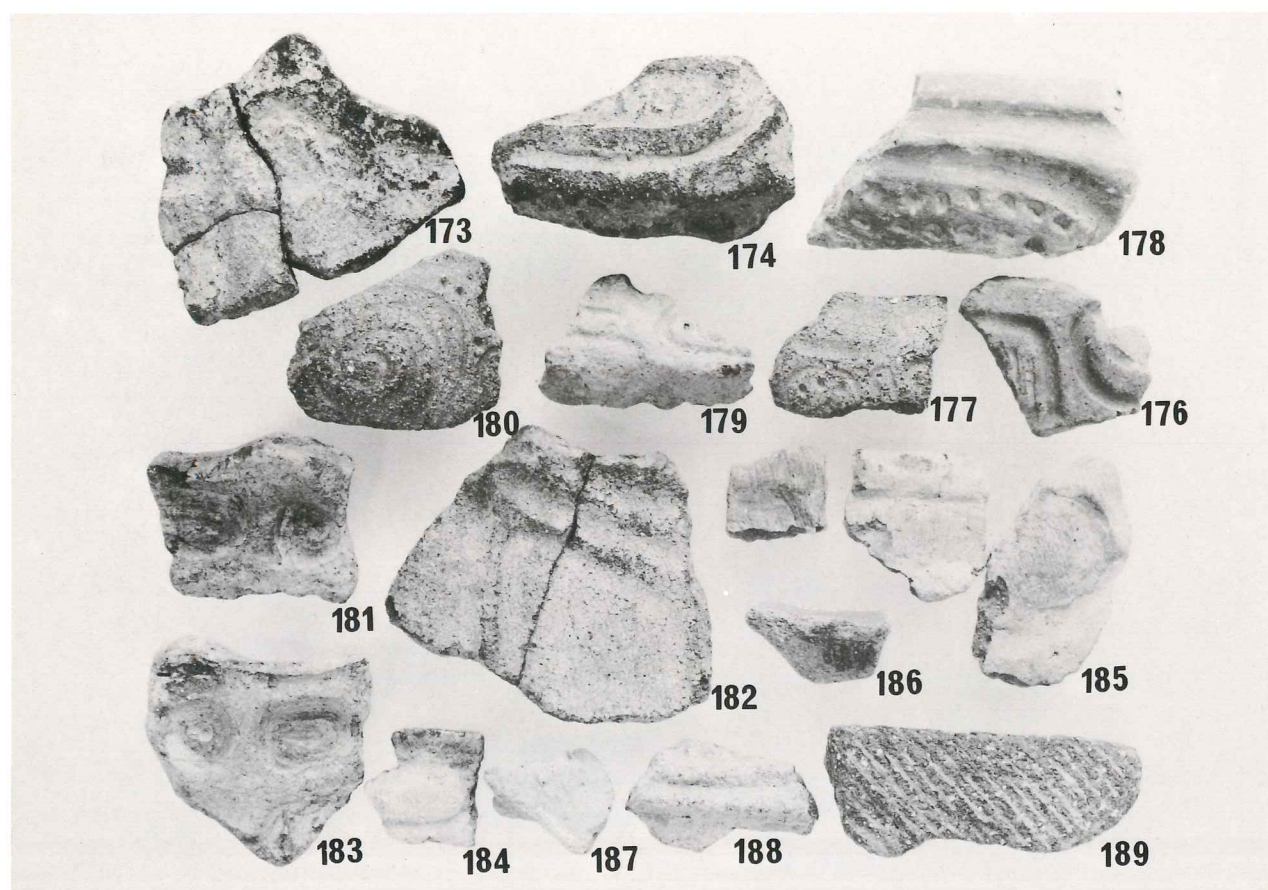
昭和58年度出土中期Ⅲ群—d類土器



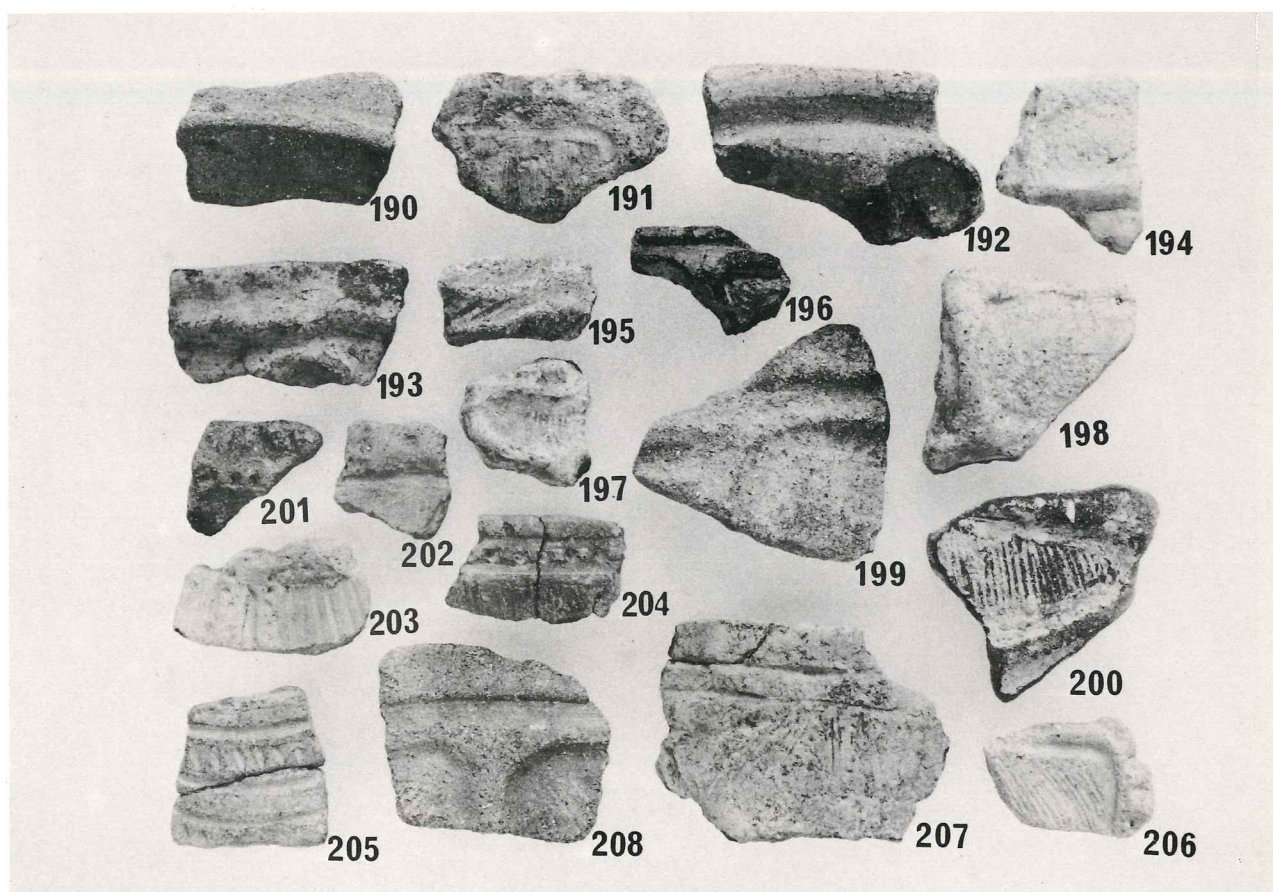
昭和58年度出土中期Ⅲ群—d・e類土器



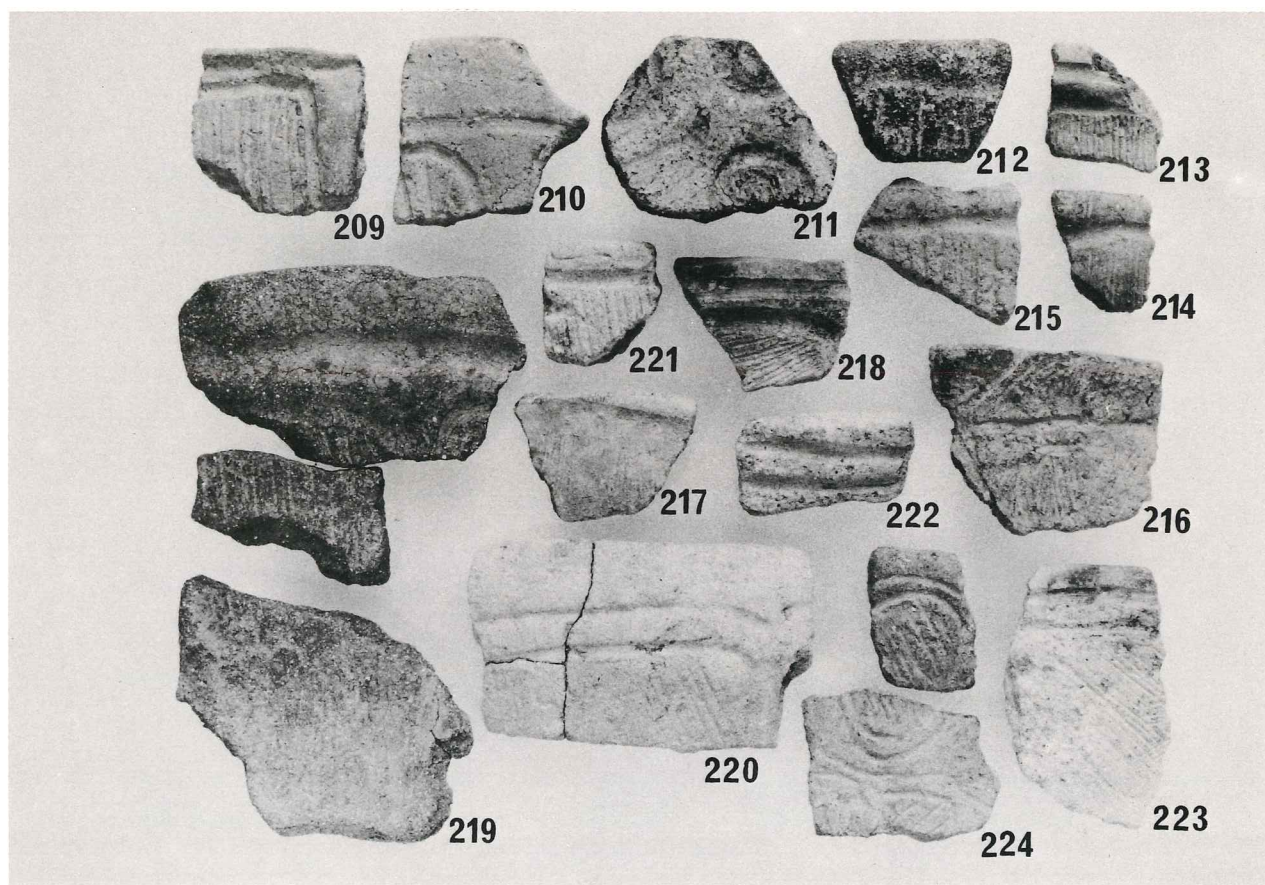
昭和58年度出土中期Ⅲ群—e・f類土器



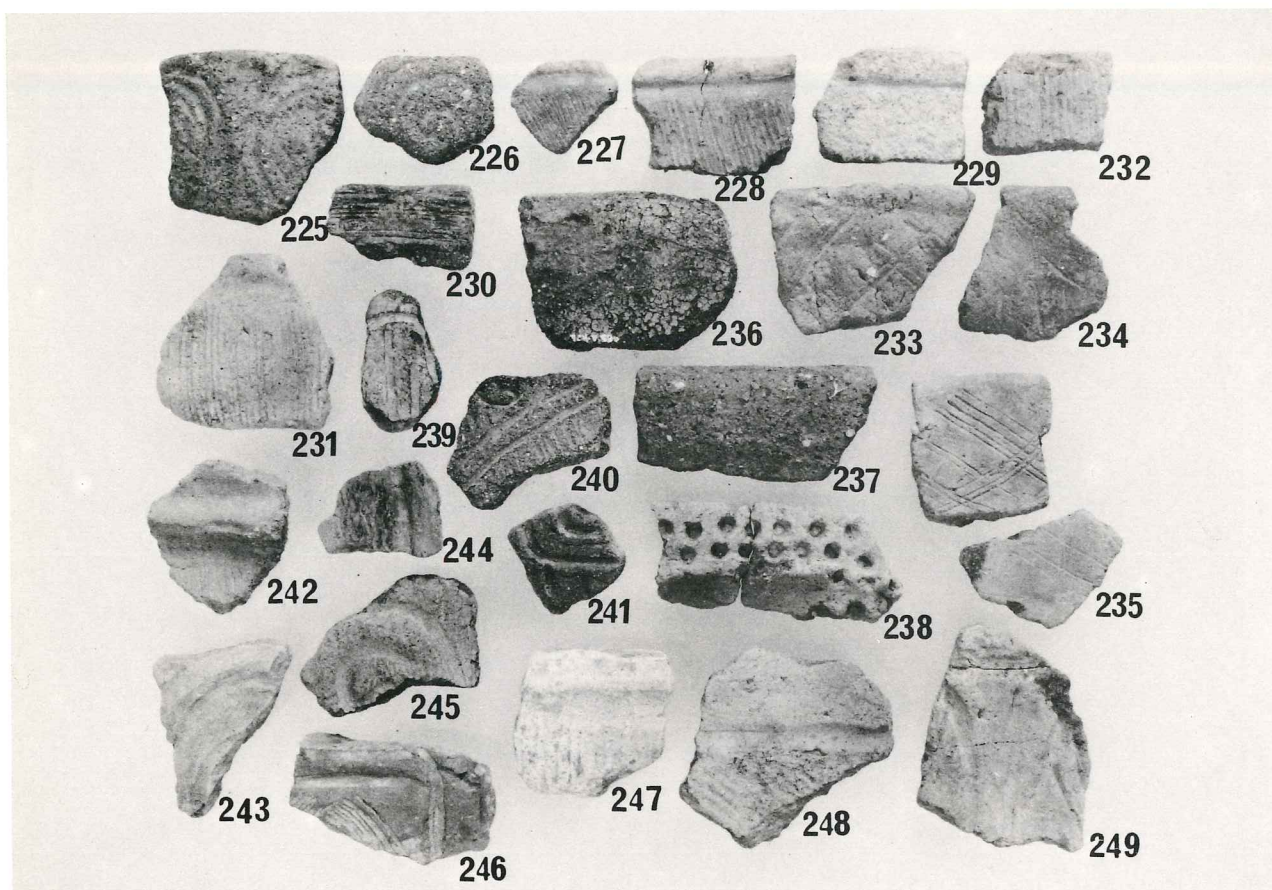
昭和58年度出土中期Ⅲ群—f類土器



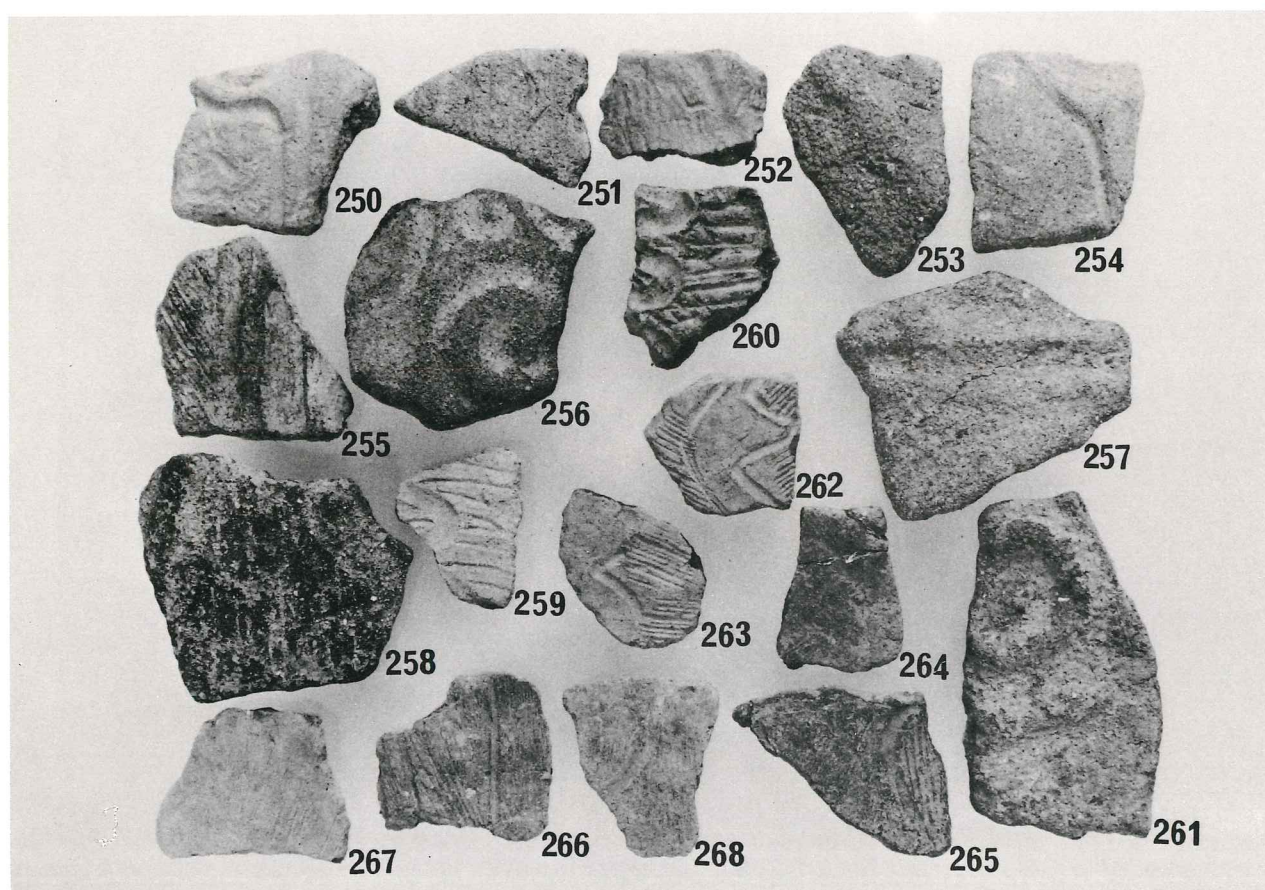
昭和58年度出土中期Ⅲ群—f類土器



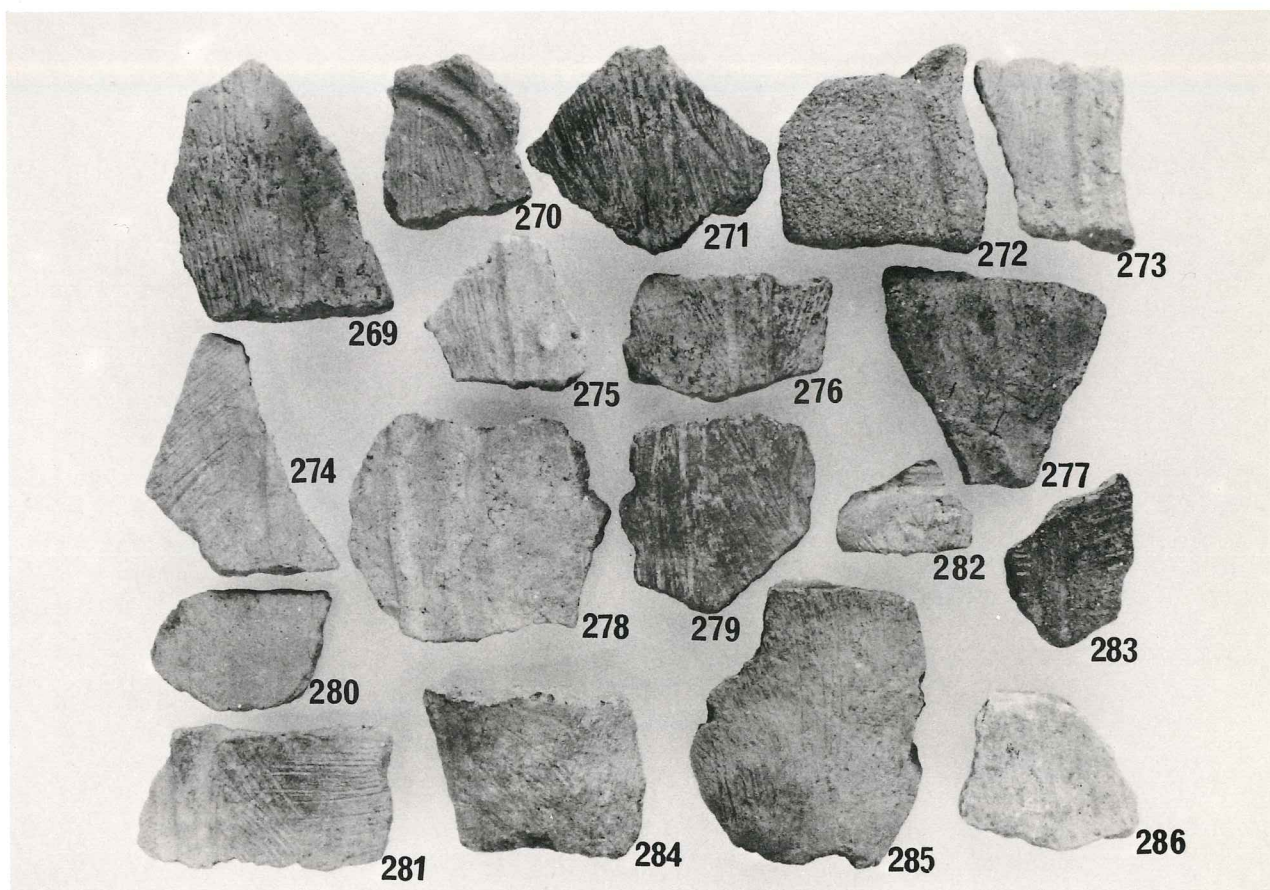
昭和58年度出土中期Ⅲ群—f・g類土器



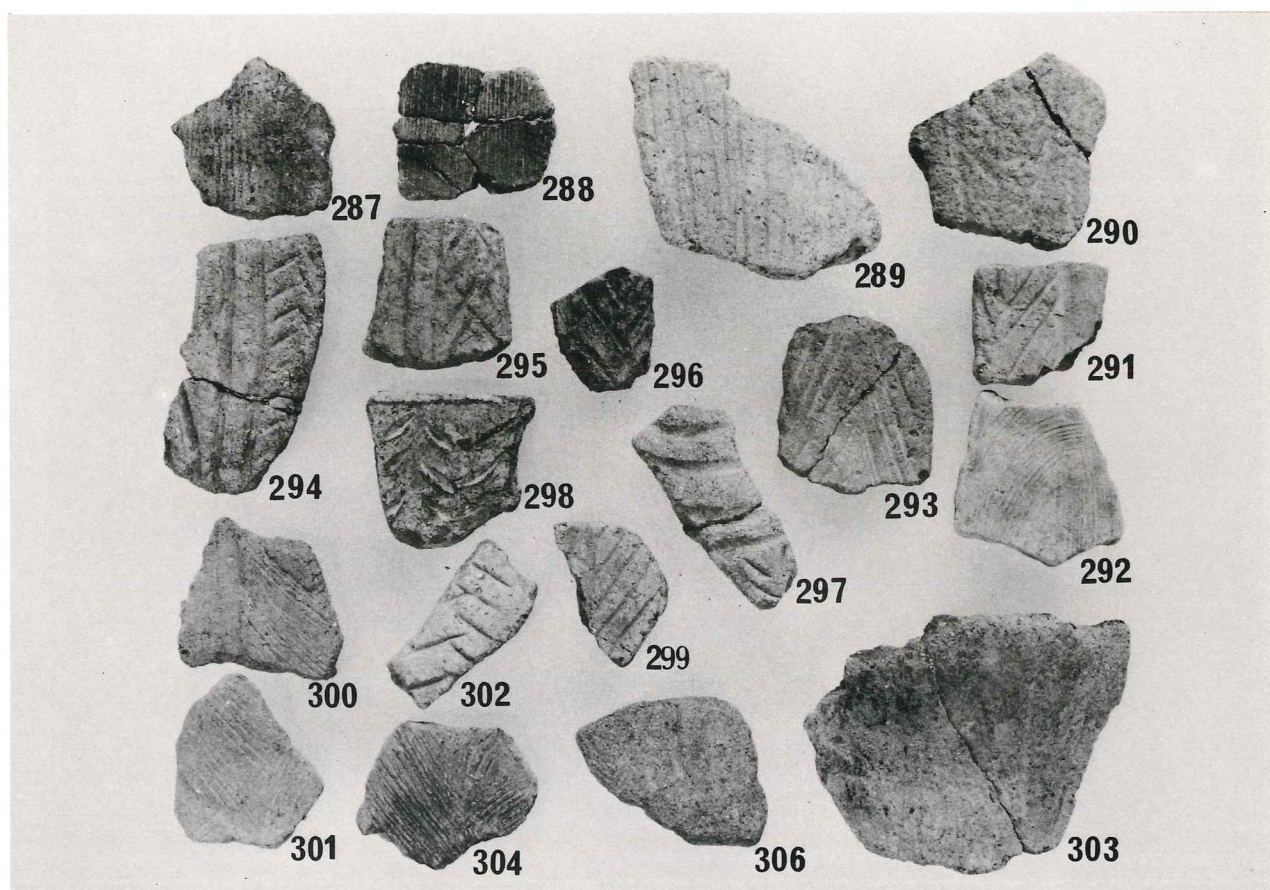
昭和58年度出土中期Ⅲ群—g類土器



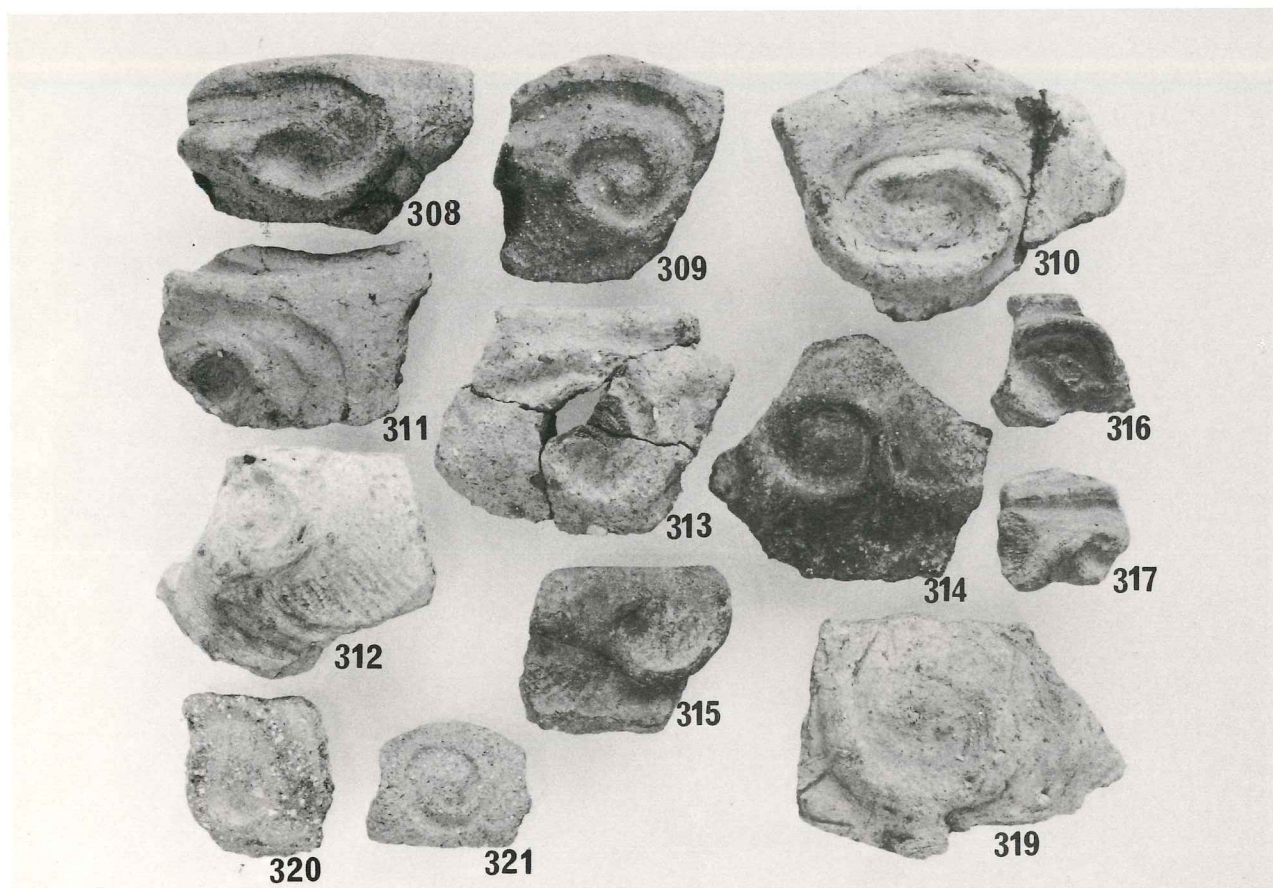
昭和58年度出土中期Ⅲ群—e・f・g類土器



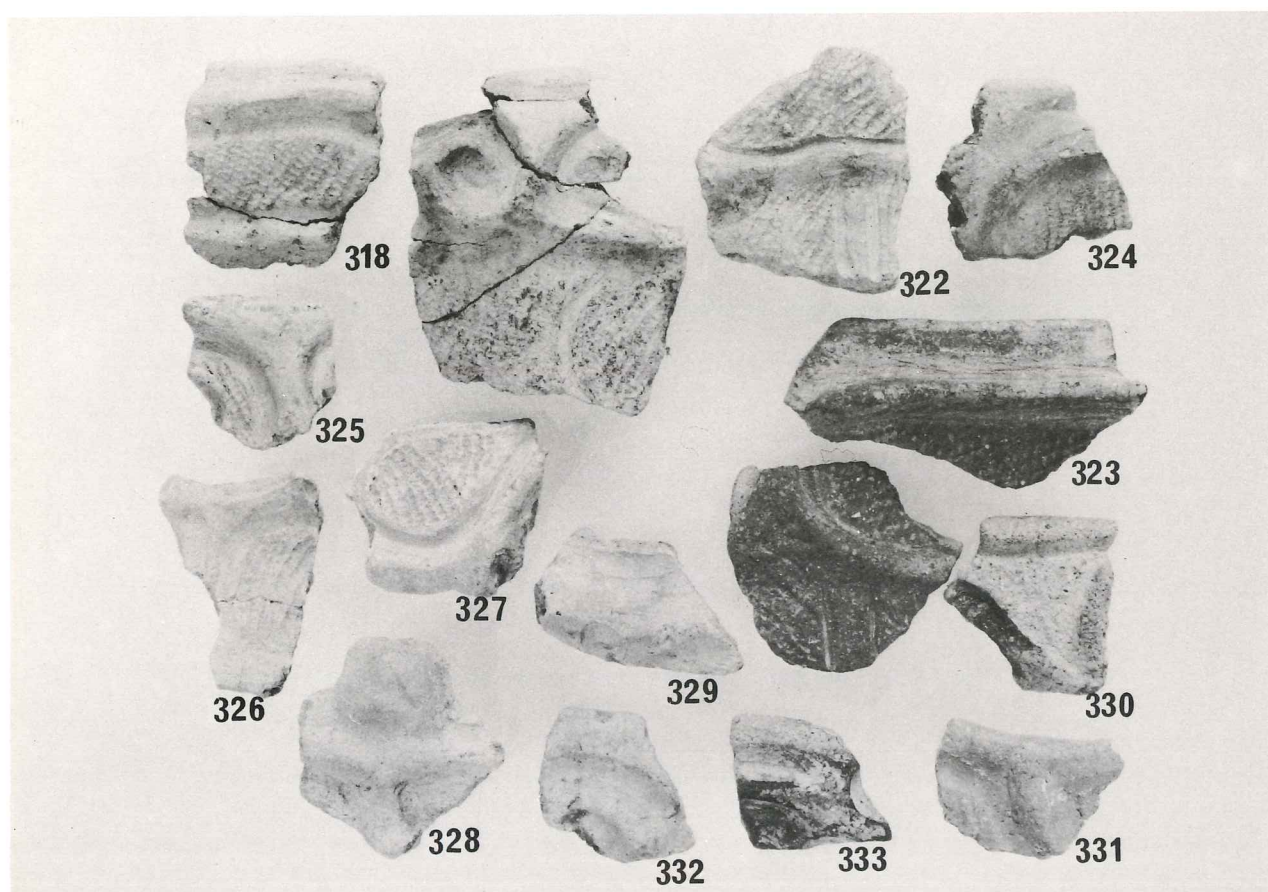
昭和58年度出土中期Ⅲ群—g類土器



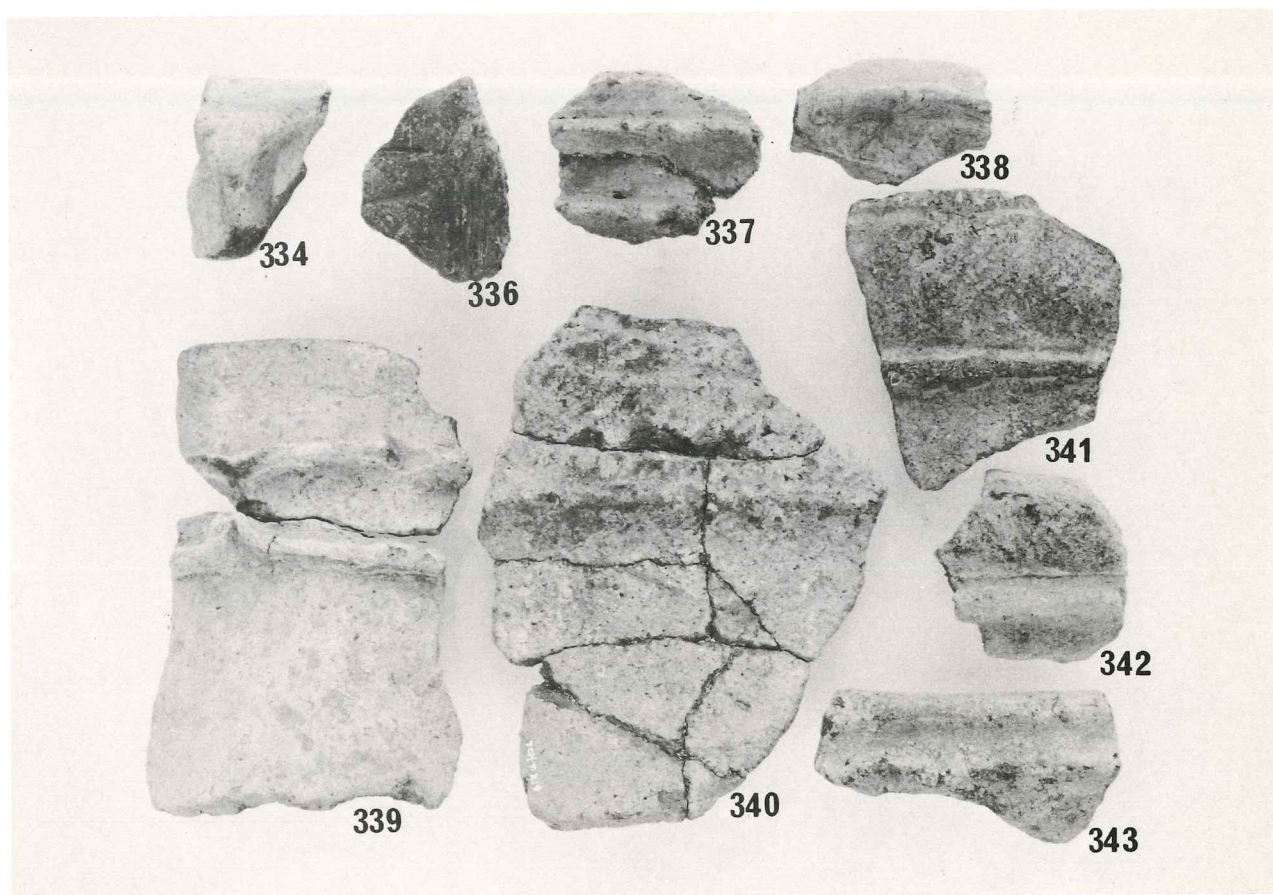
昭和58年度出土中期Ⅲ群—g類土器



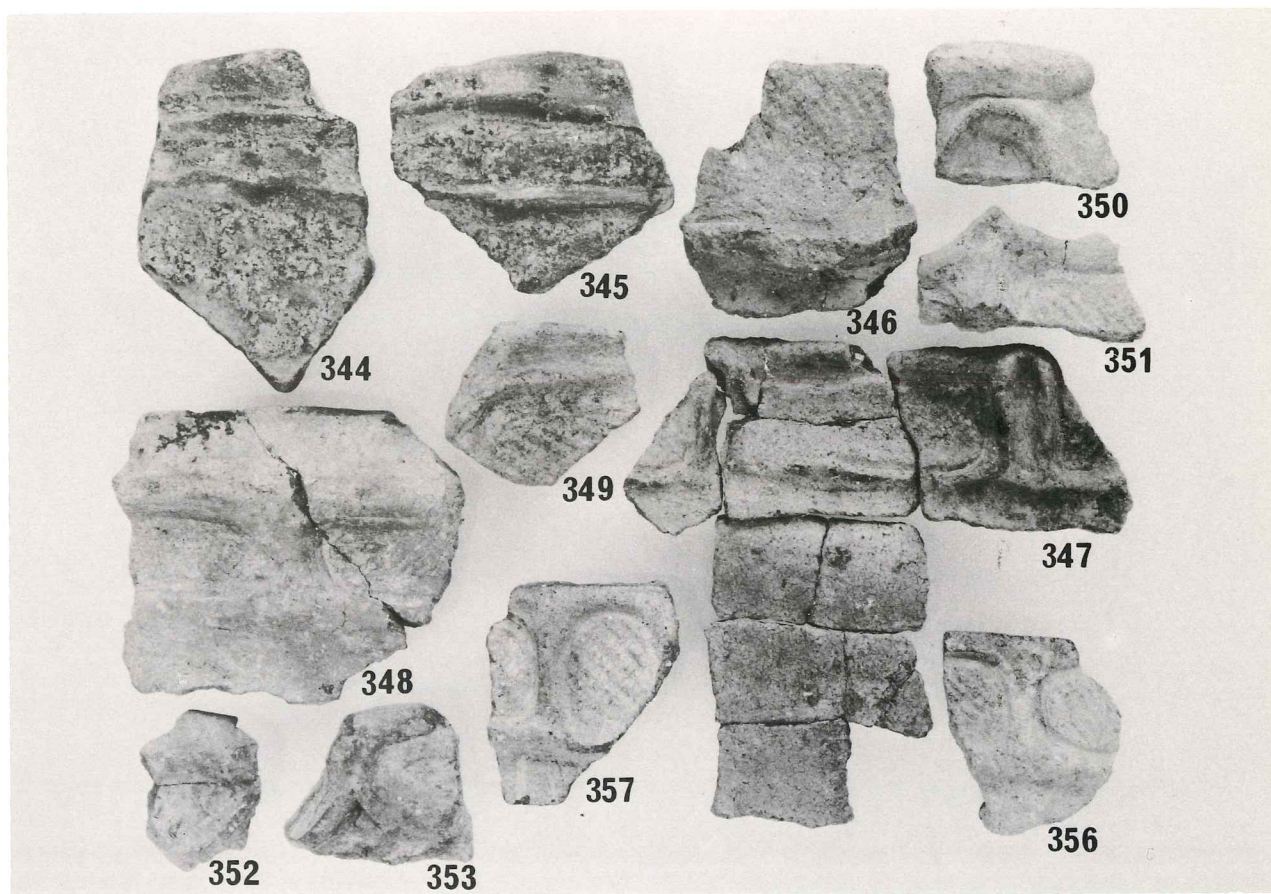
昭和58年度出土中期Ⅲ群—h類土器



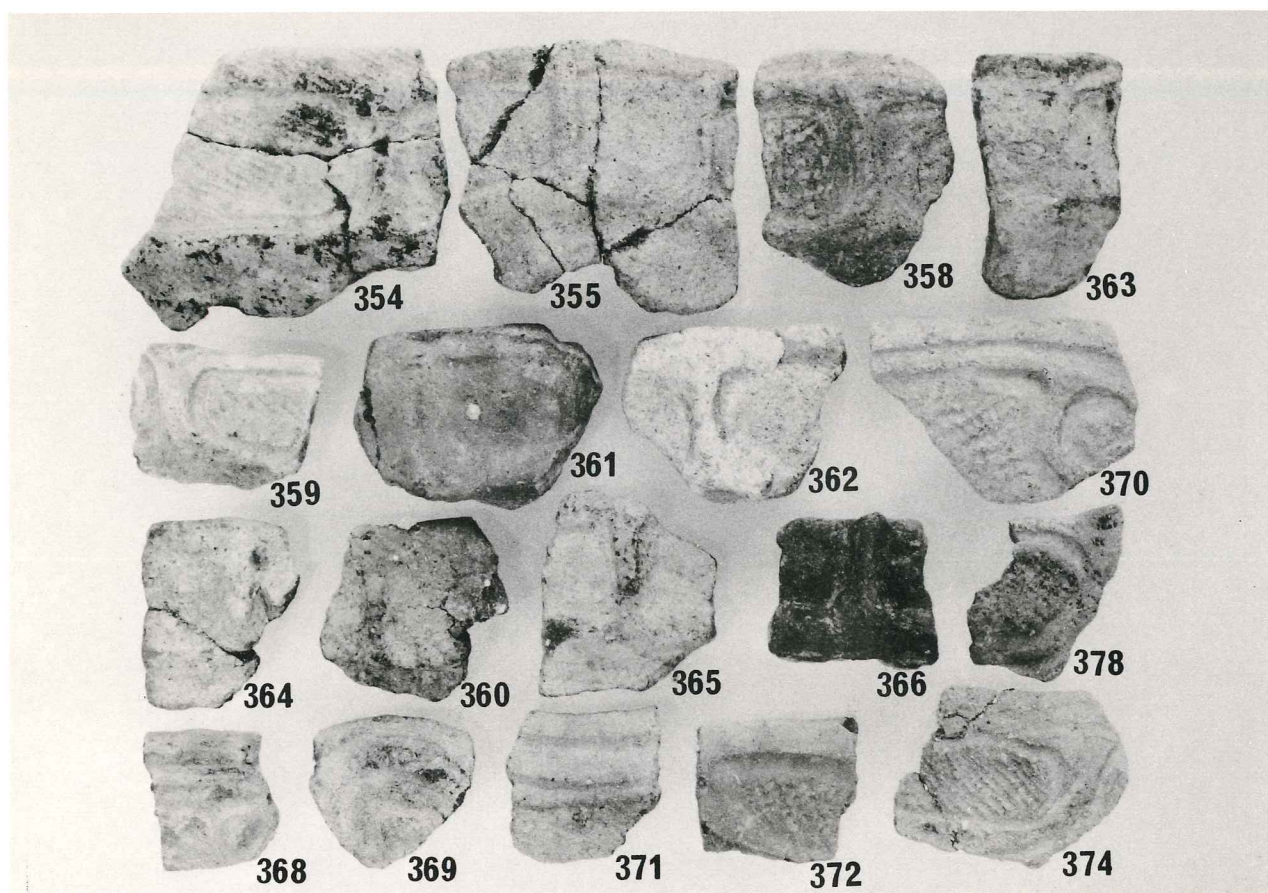
昭和58年度出土中期Ⅲ群—h類土器



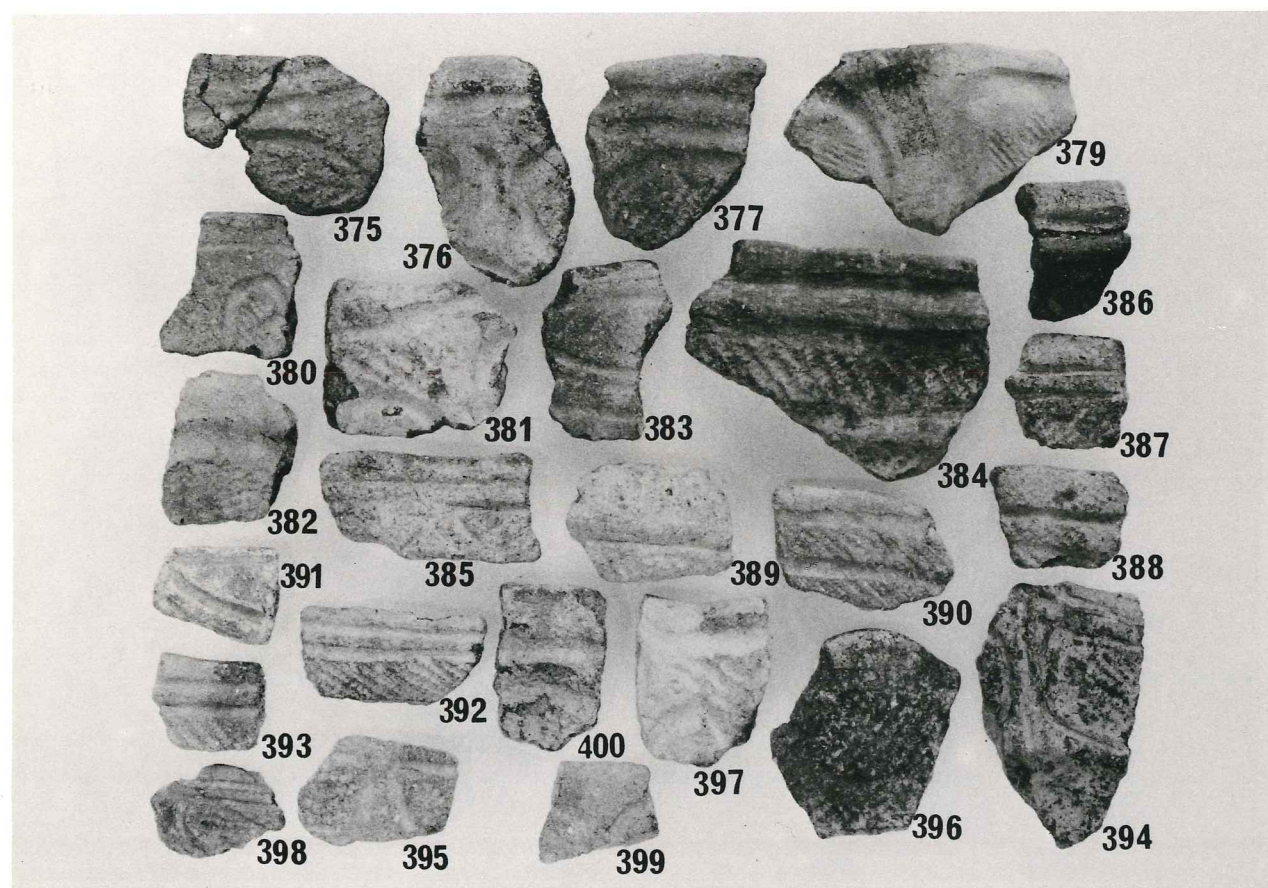
昭和58年度出土中期Ⅲ群—h類土器



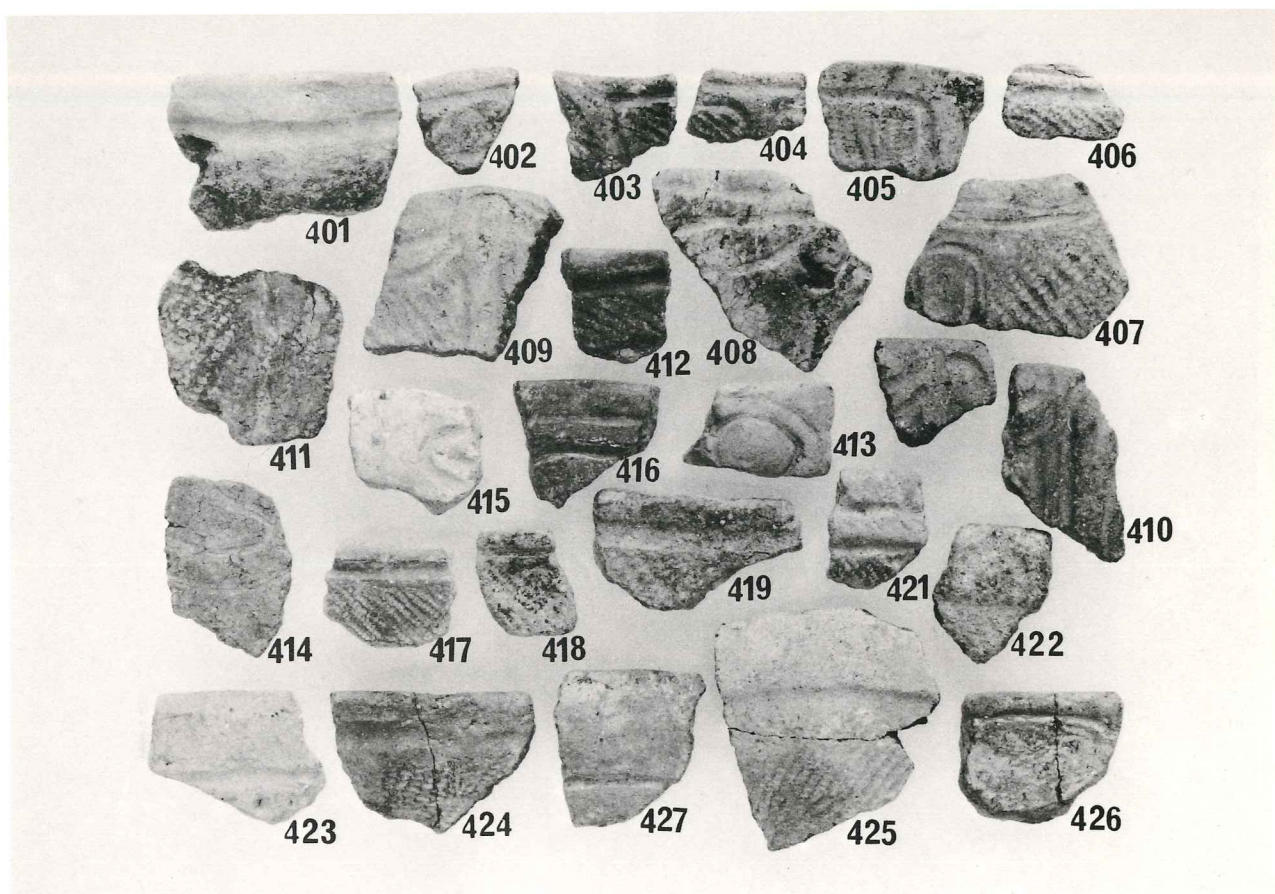
昭和58年度出土中期Ⅲ群—h類土器



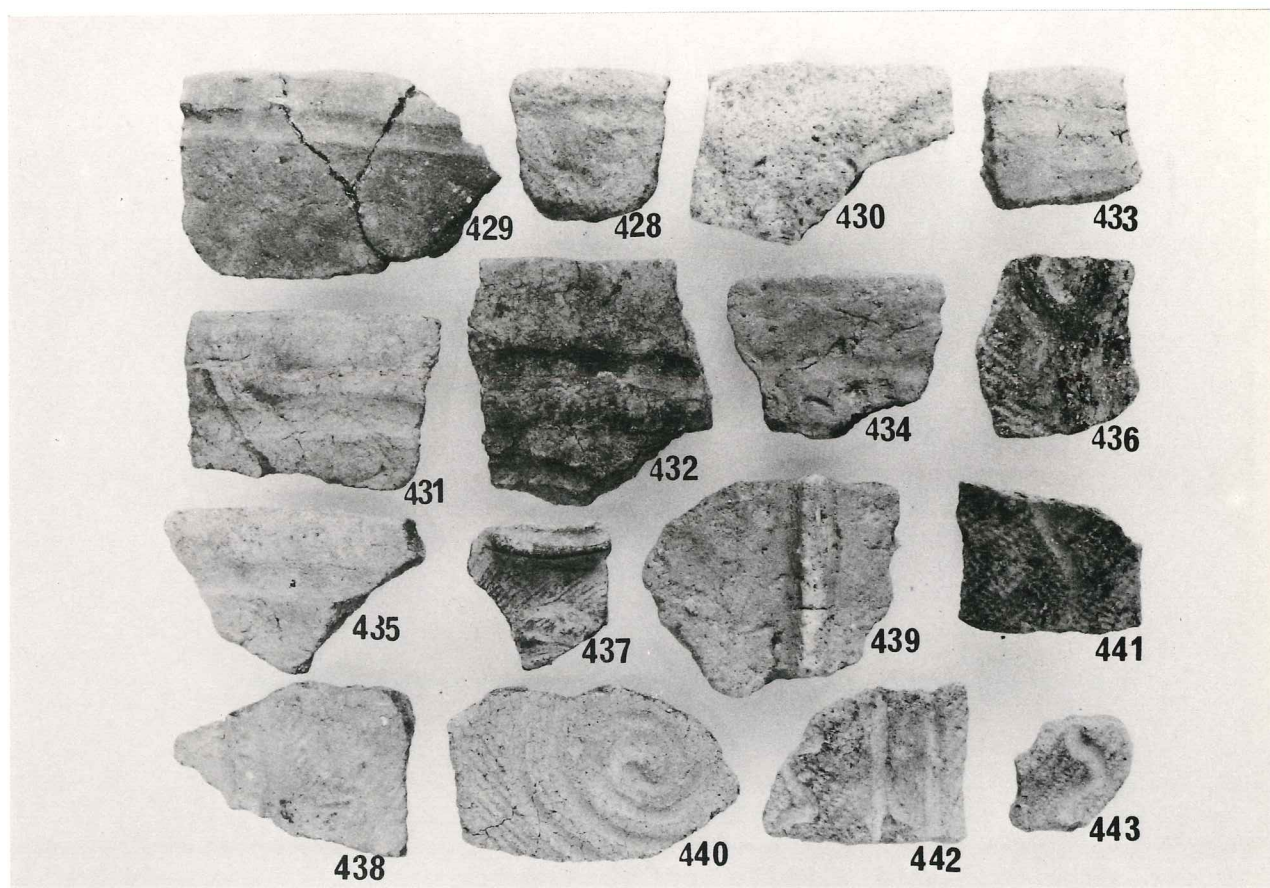
昭和58年度出土中期Ⅲ群—h・i 類土器



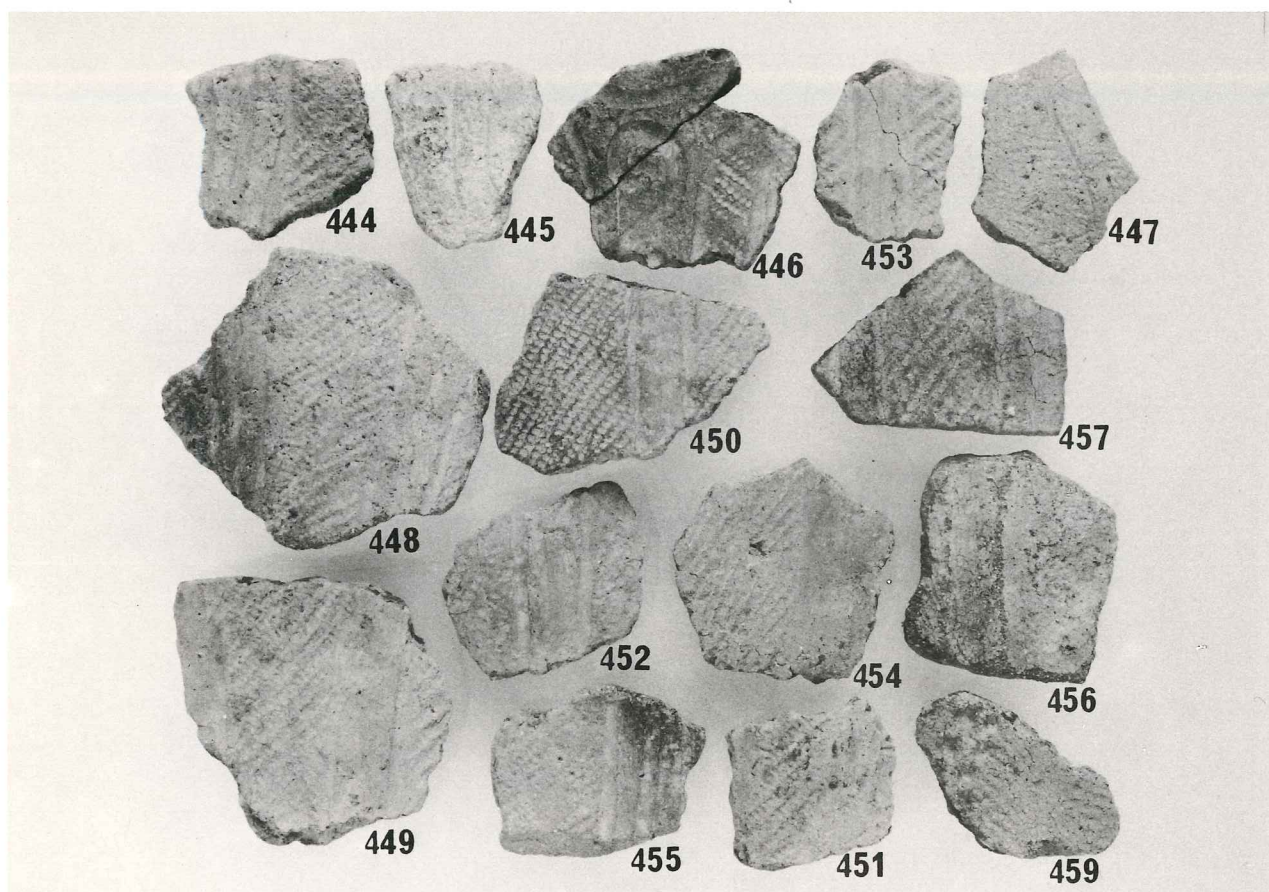
昭和58年度出土中期Ⅲ群—i 類土器



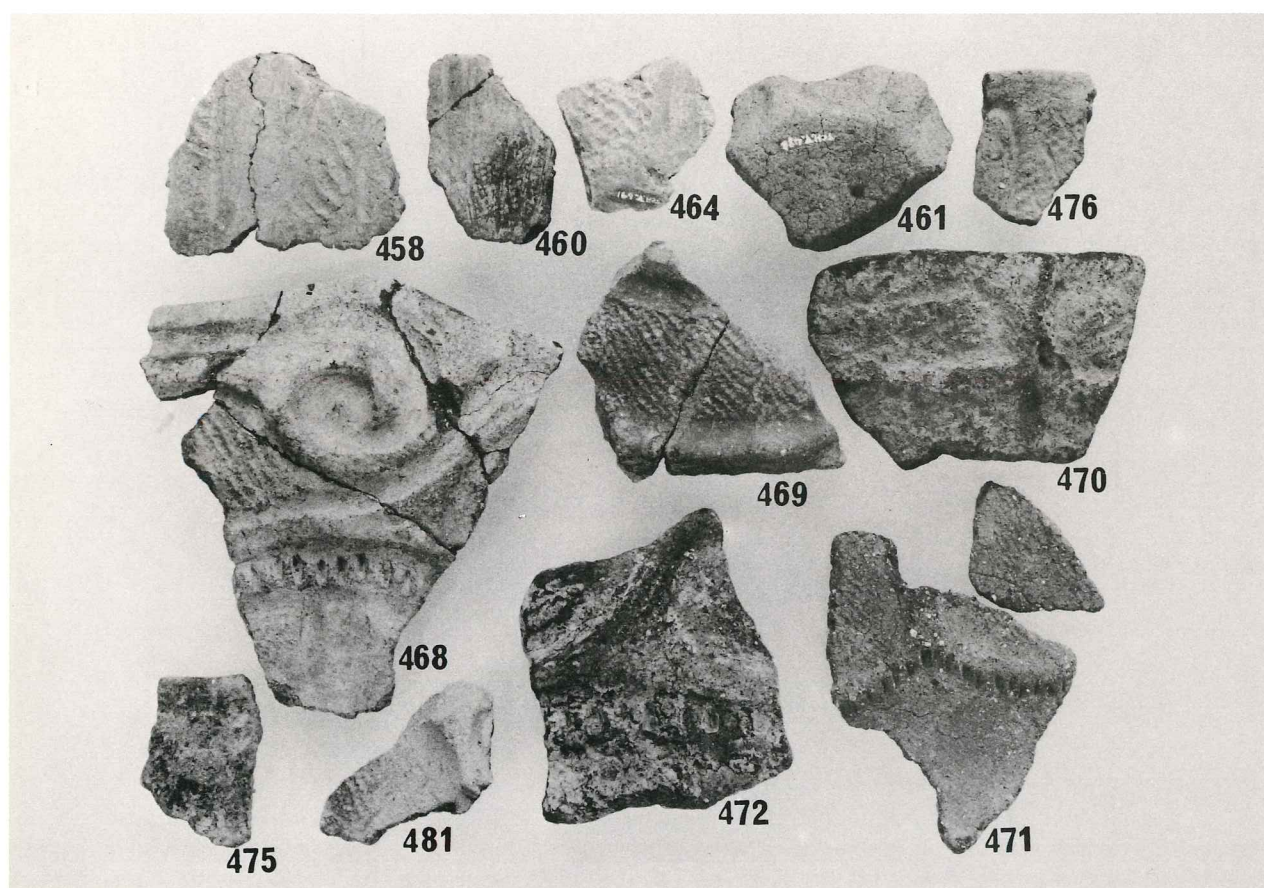
昭和58年度出土中期Ⅲ群—i 類土器



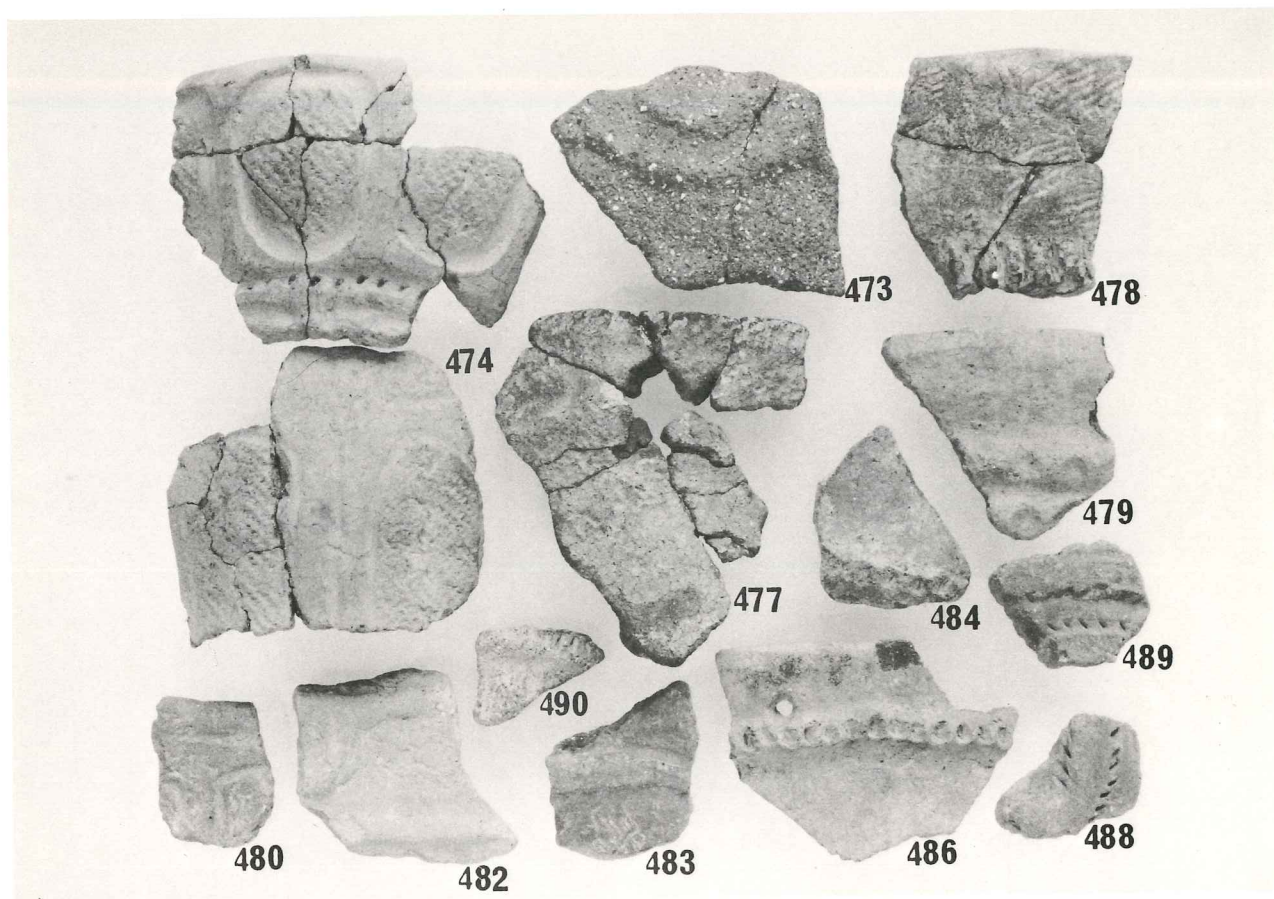
昭和58年度出土中期Ⅲ群—h・i 類土器



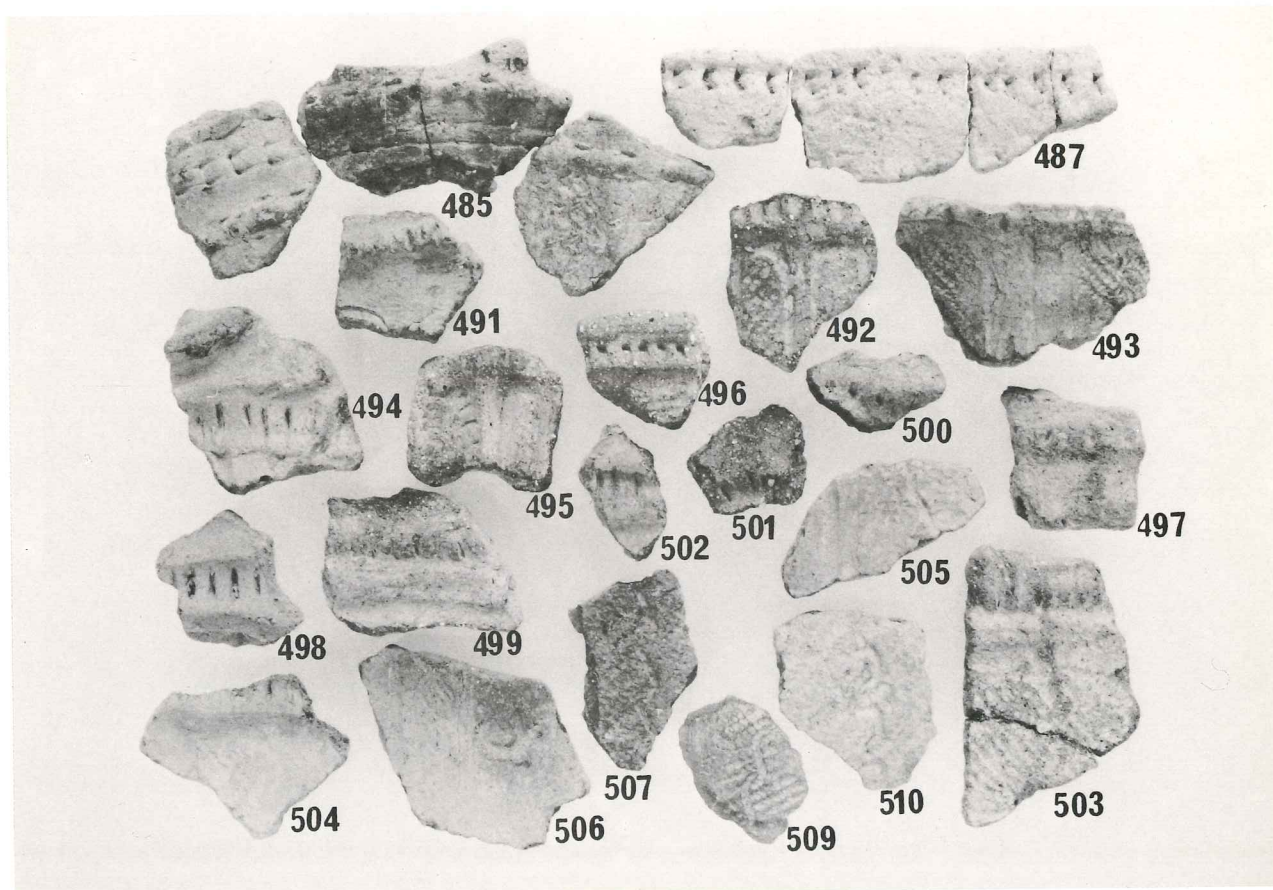
昭和58年度出土中期Ⅲ群—h類土器



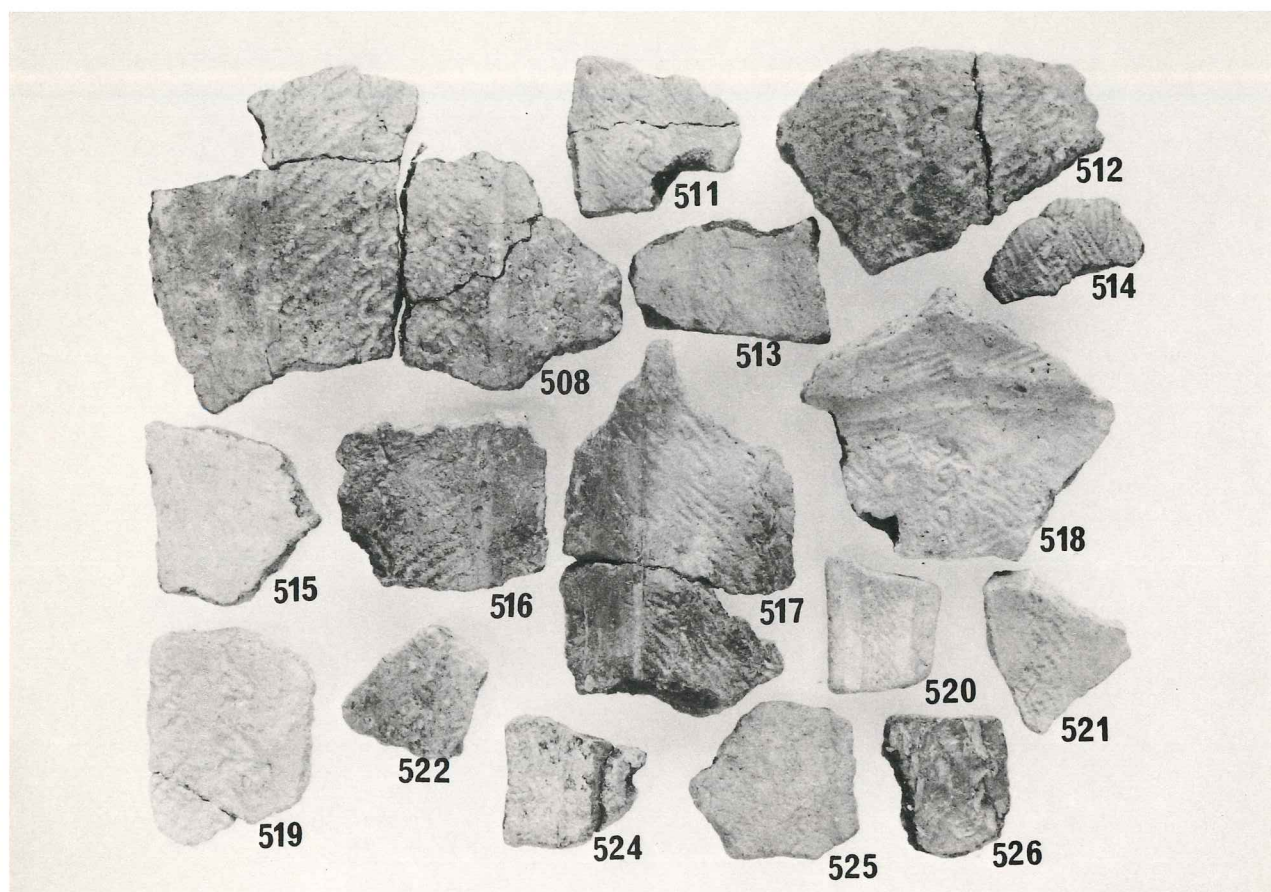
昭和58年度出土中期Ⅲ群—i・j類土器



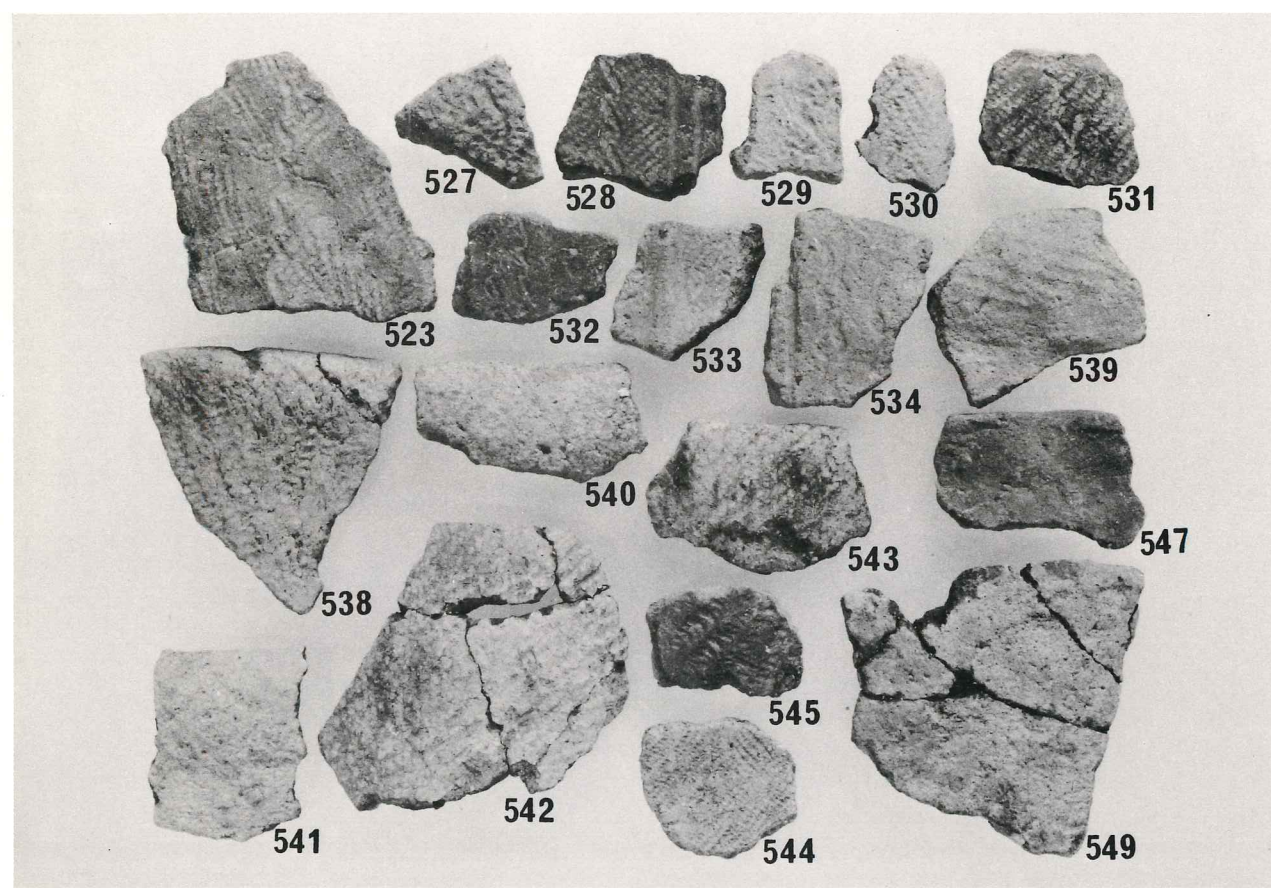
昭和58年度出土中期Ⅲ群—j 類土器



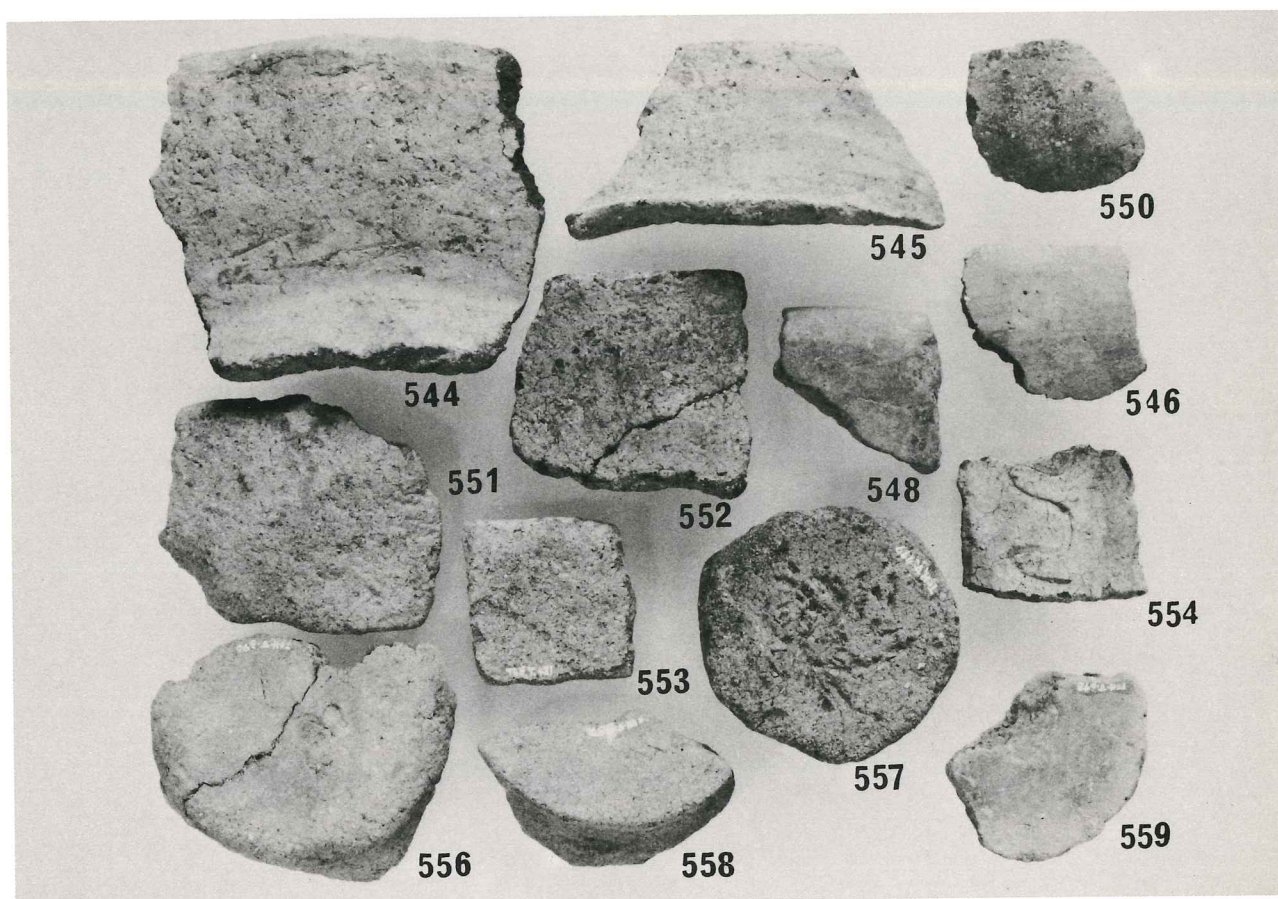
昭和58年度出土中期Ⅲ群—j 類土器



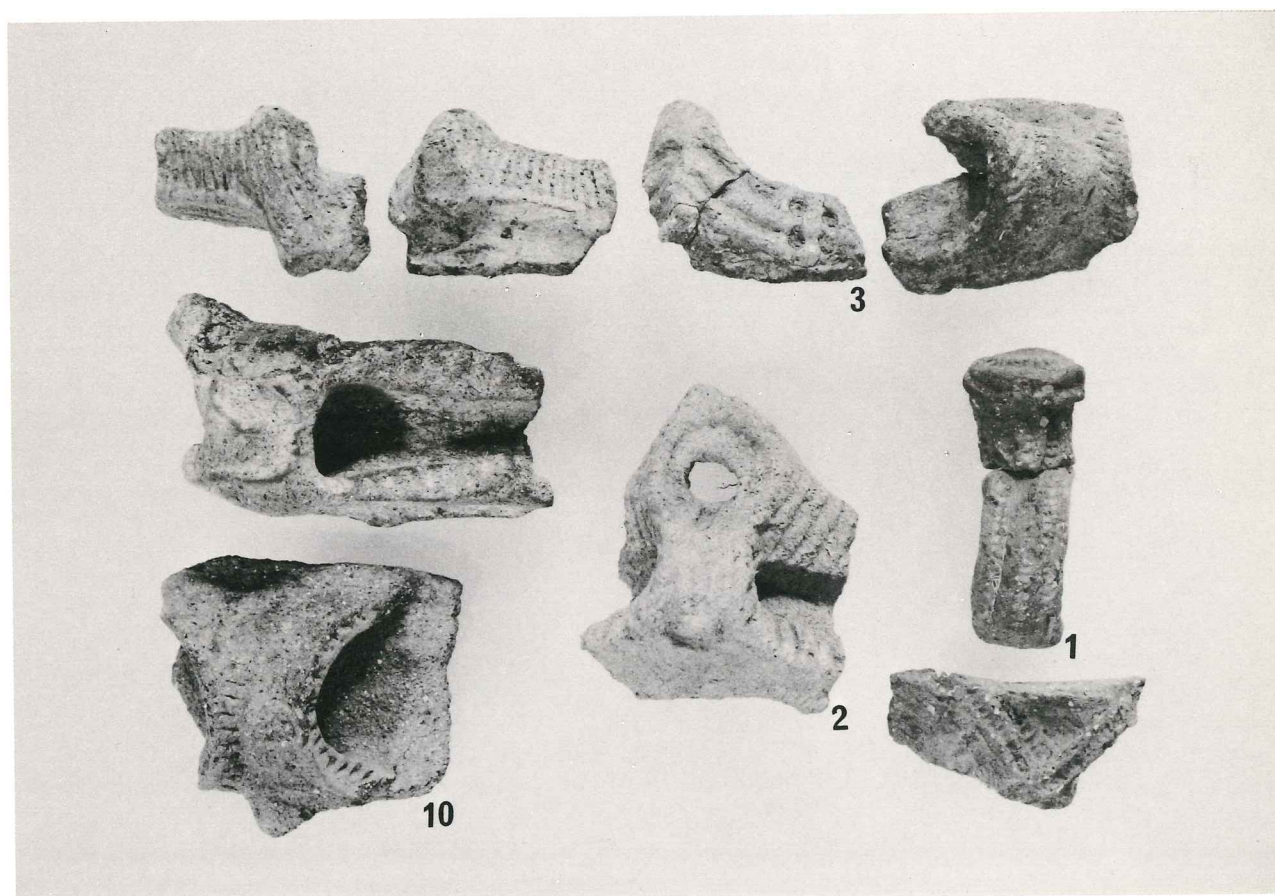
昭和58年度出土中期Ⅲ群—j類土器



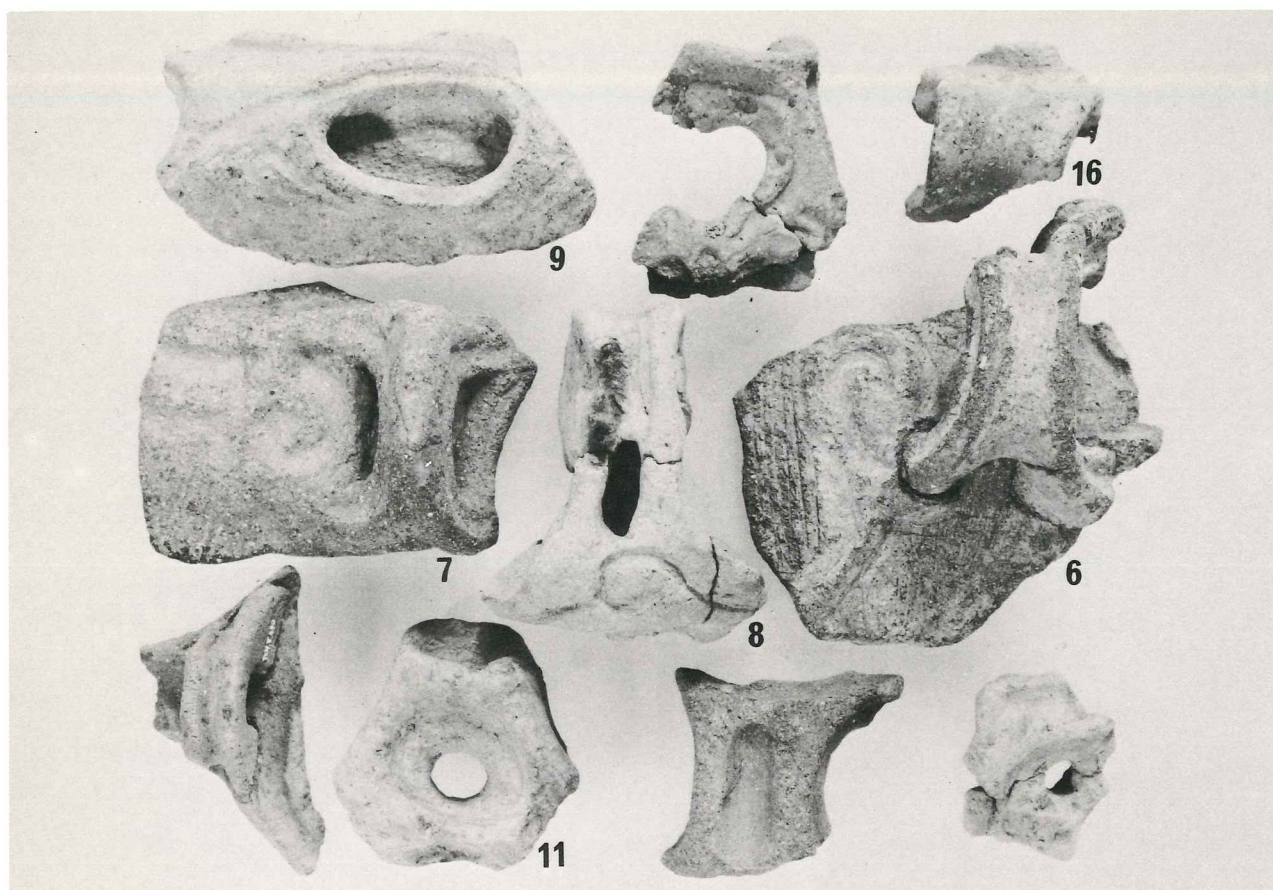
昭和58年度出土中期Ⅲ群—j・k・l類土器



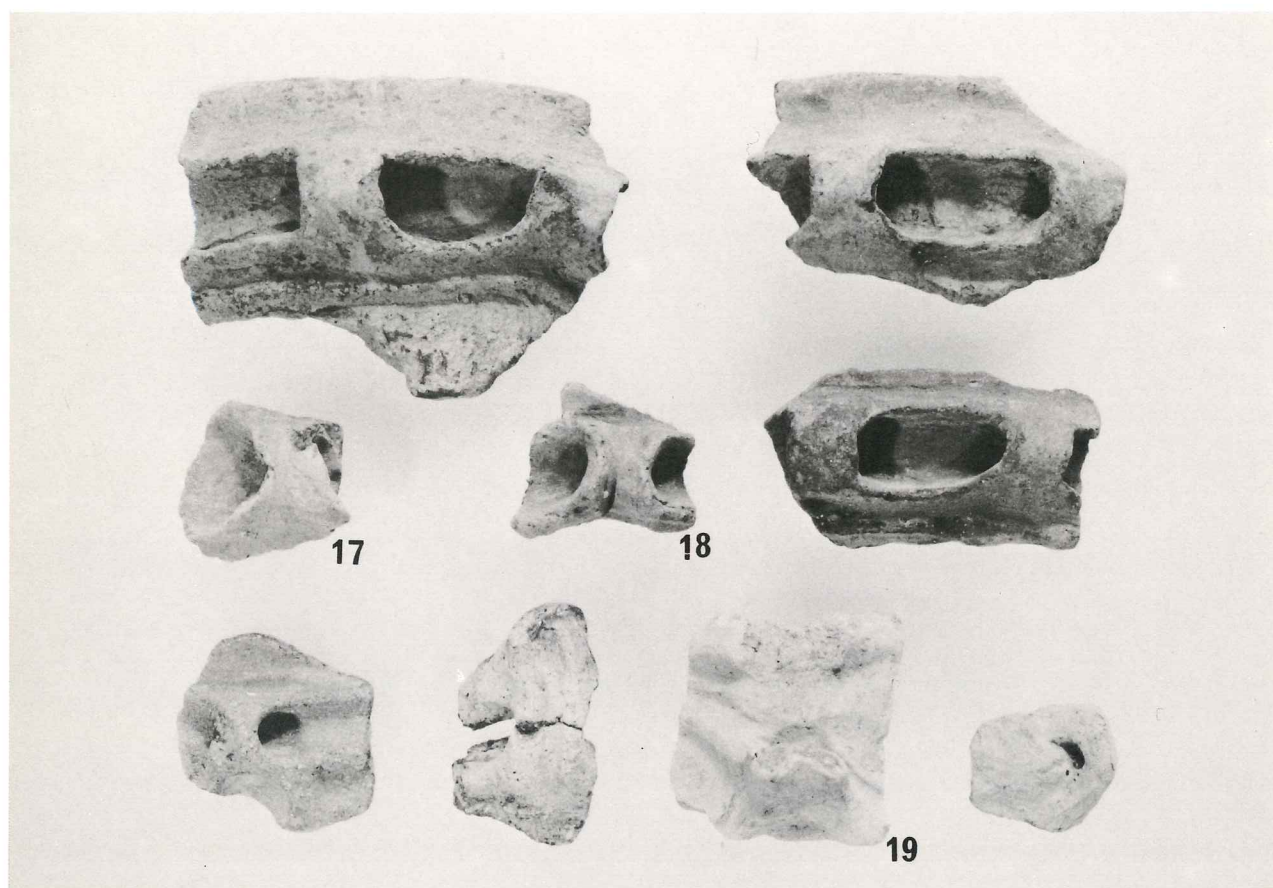
昭和58年度出土中期Ⅲ群—Ⅱ類土器・底部



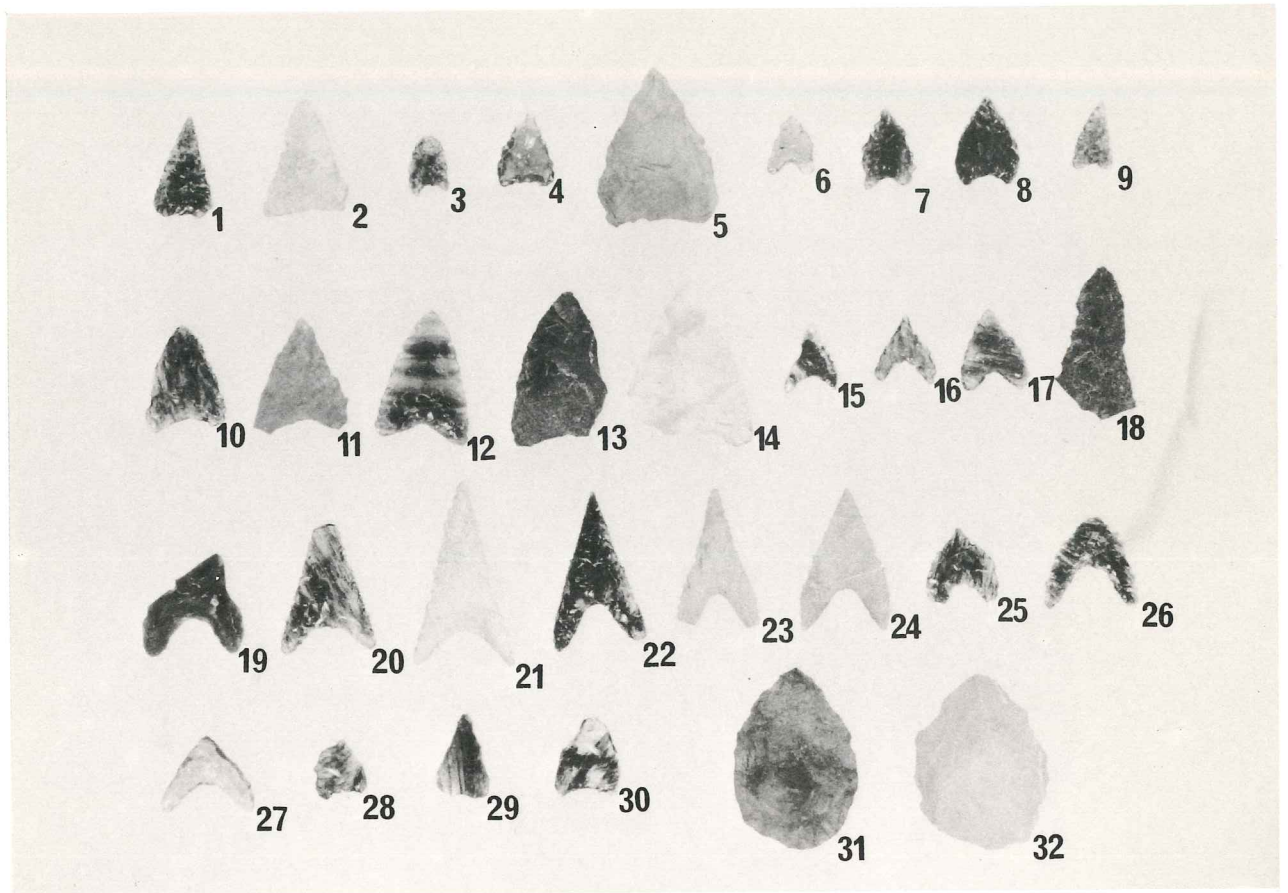
昭和58年度出土把手



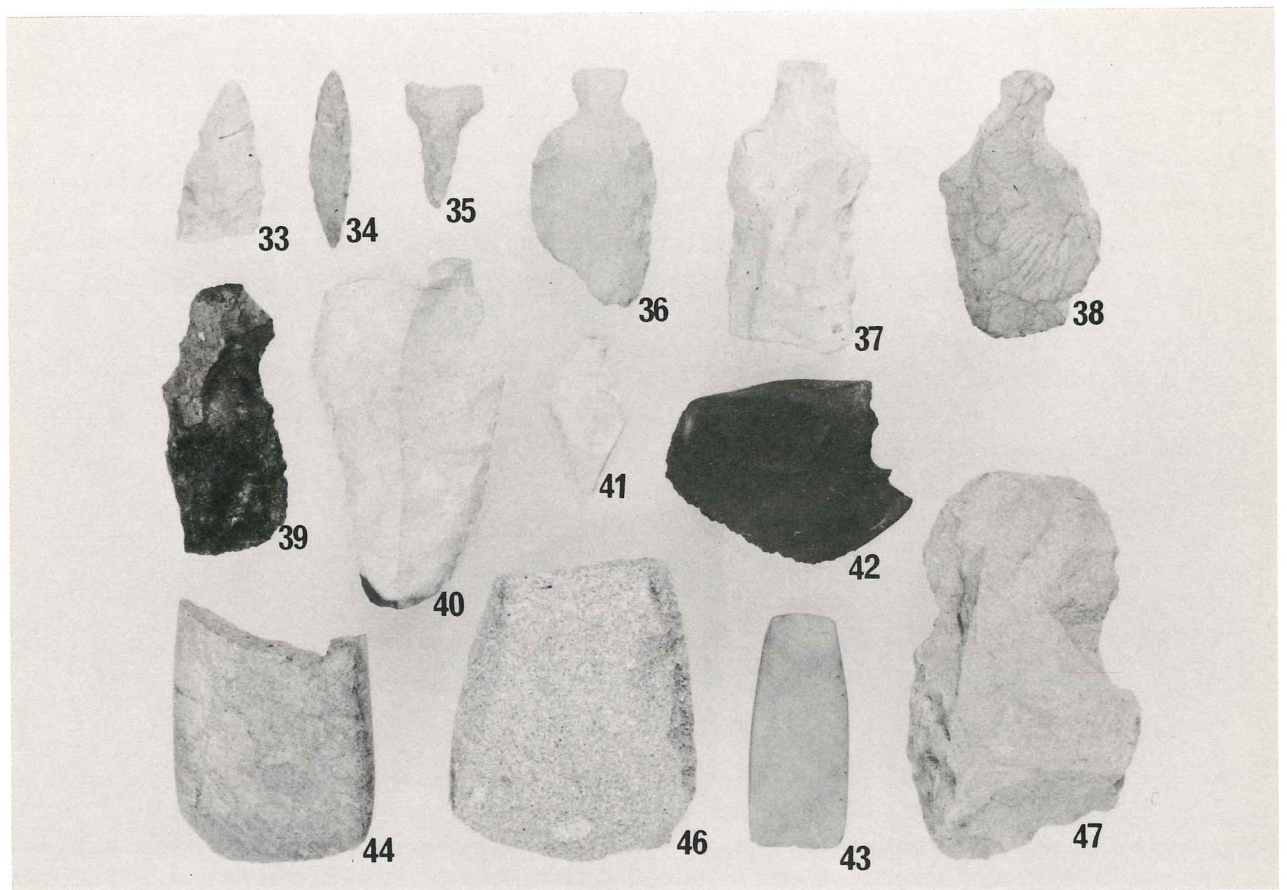
昭和58年度出土把手



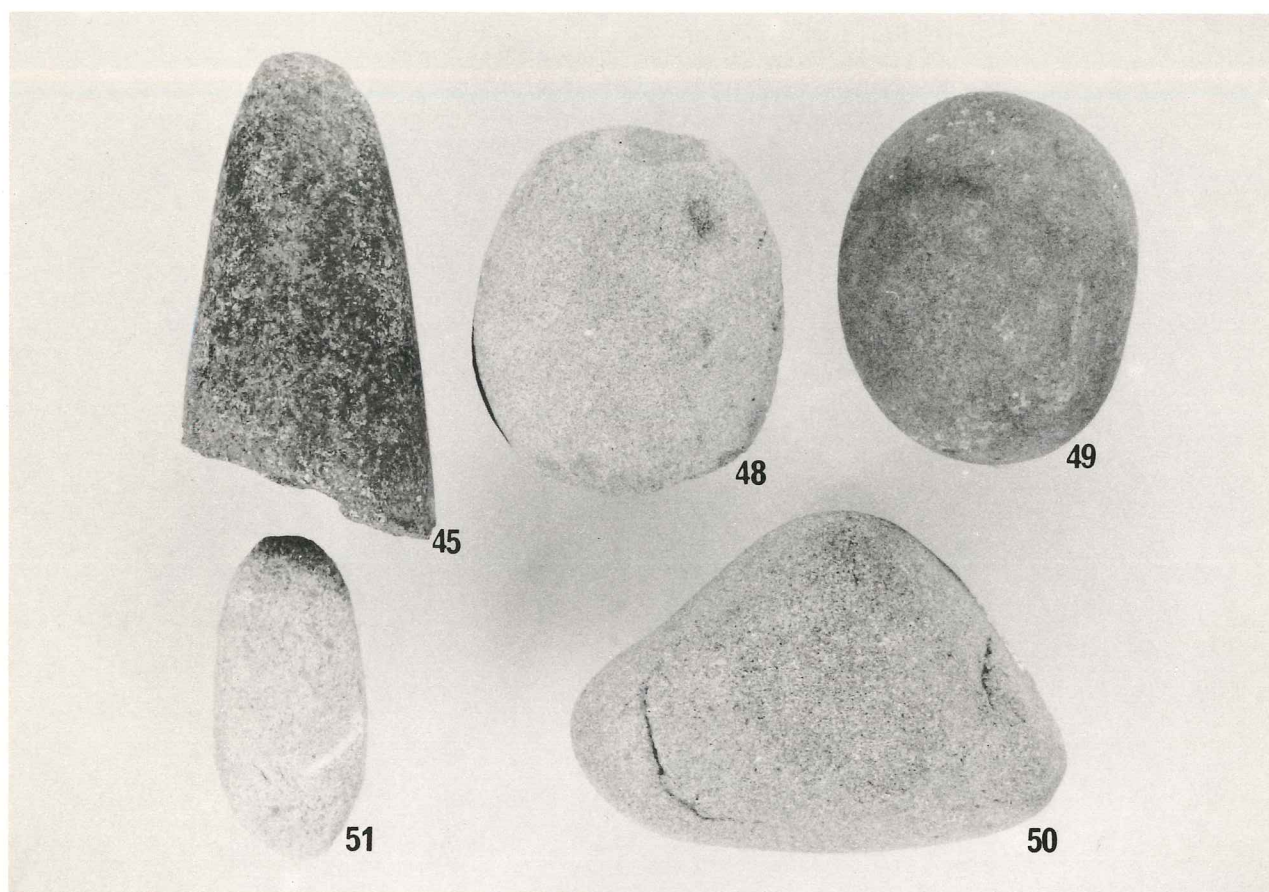
昭和58年度出土把手



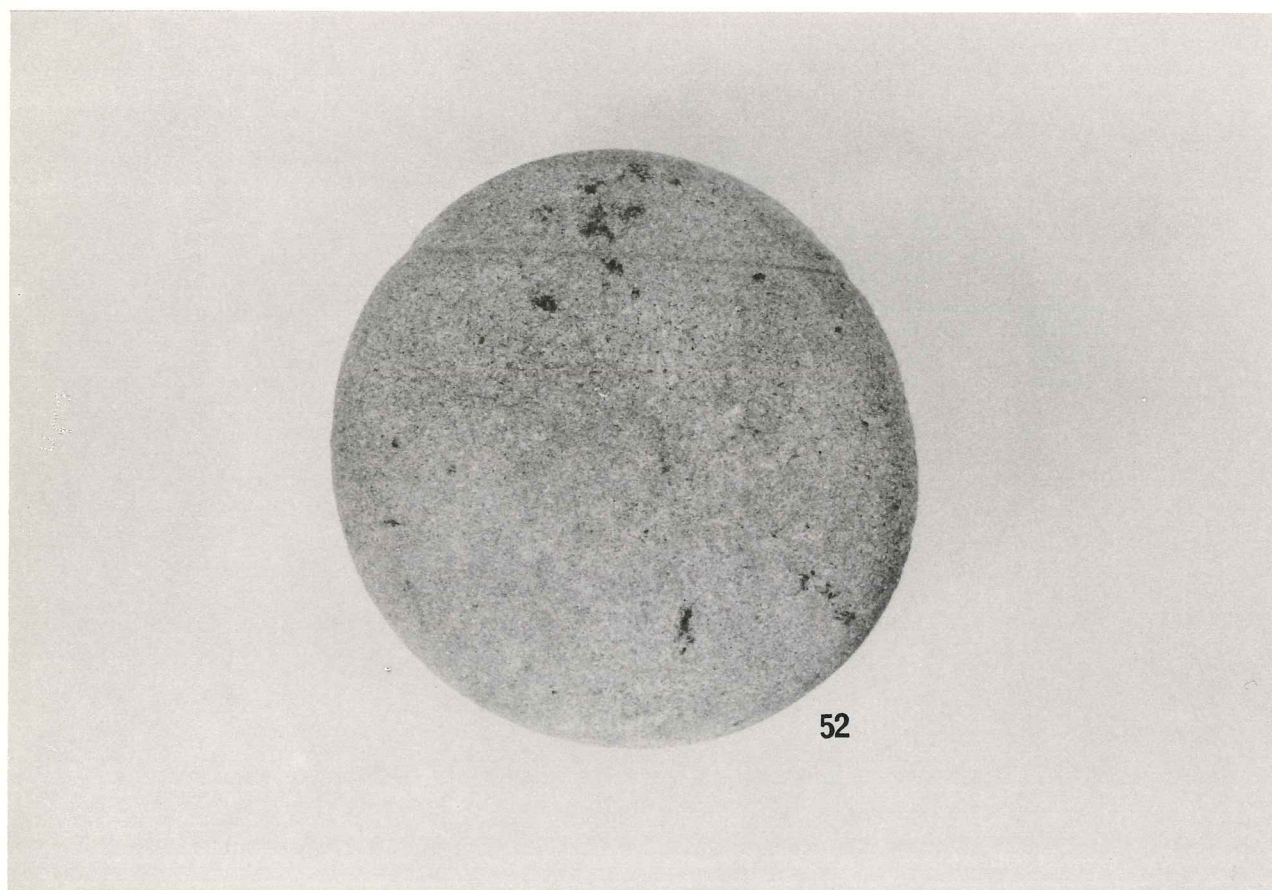
昭和58年度出土石鏃・ポイント



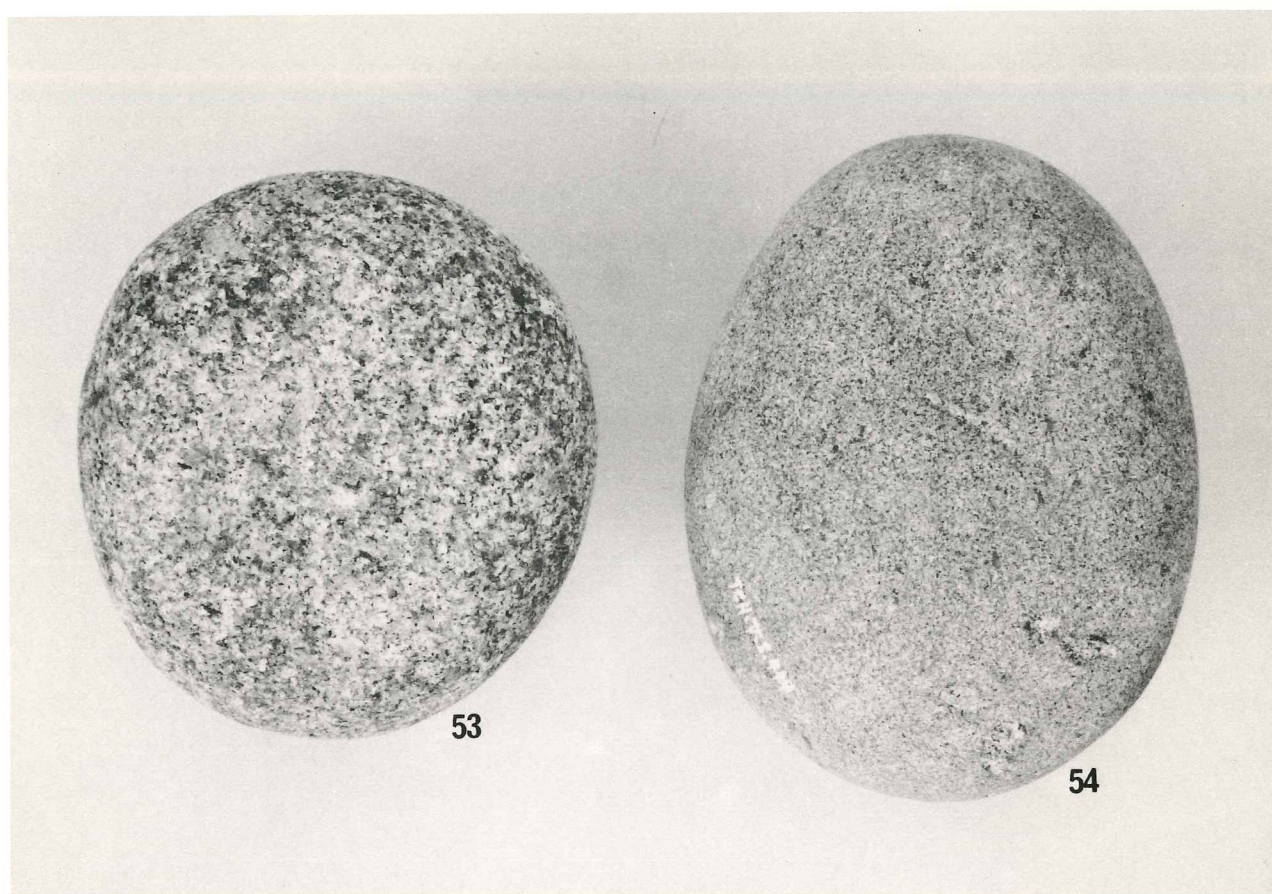
昭和58年度出土ポイント・石銛・石錐・石匙・スクレイパー・磨製石斧・局部磨製石斧・打製石斧



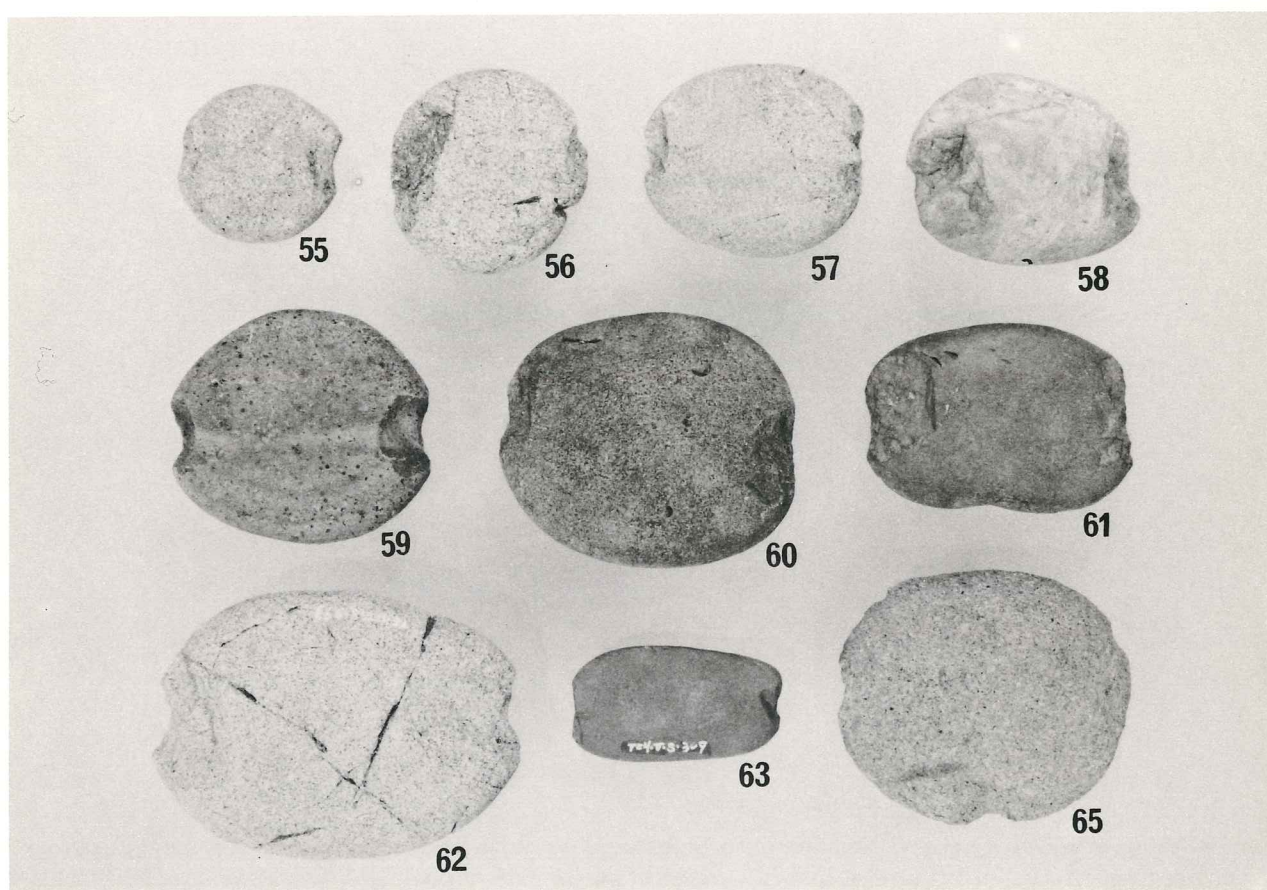
昭和58年度出土磨製石斧・敲打石・凹石



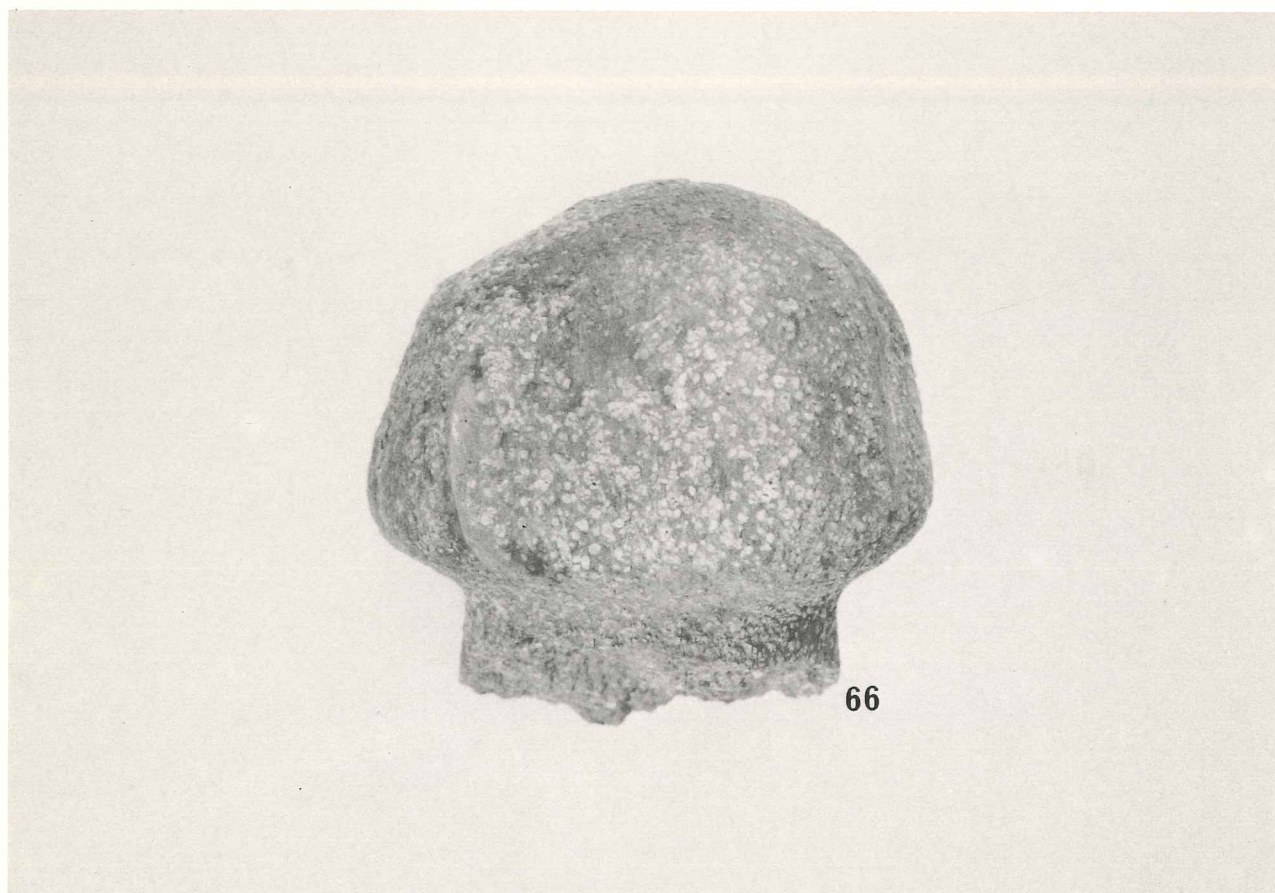
昭和58年度出土磨石



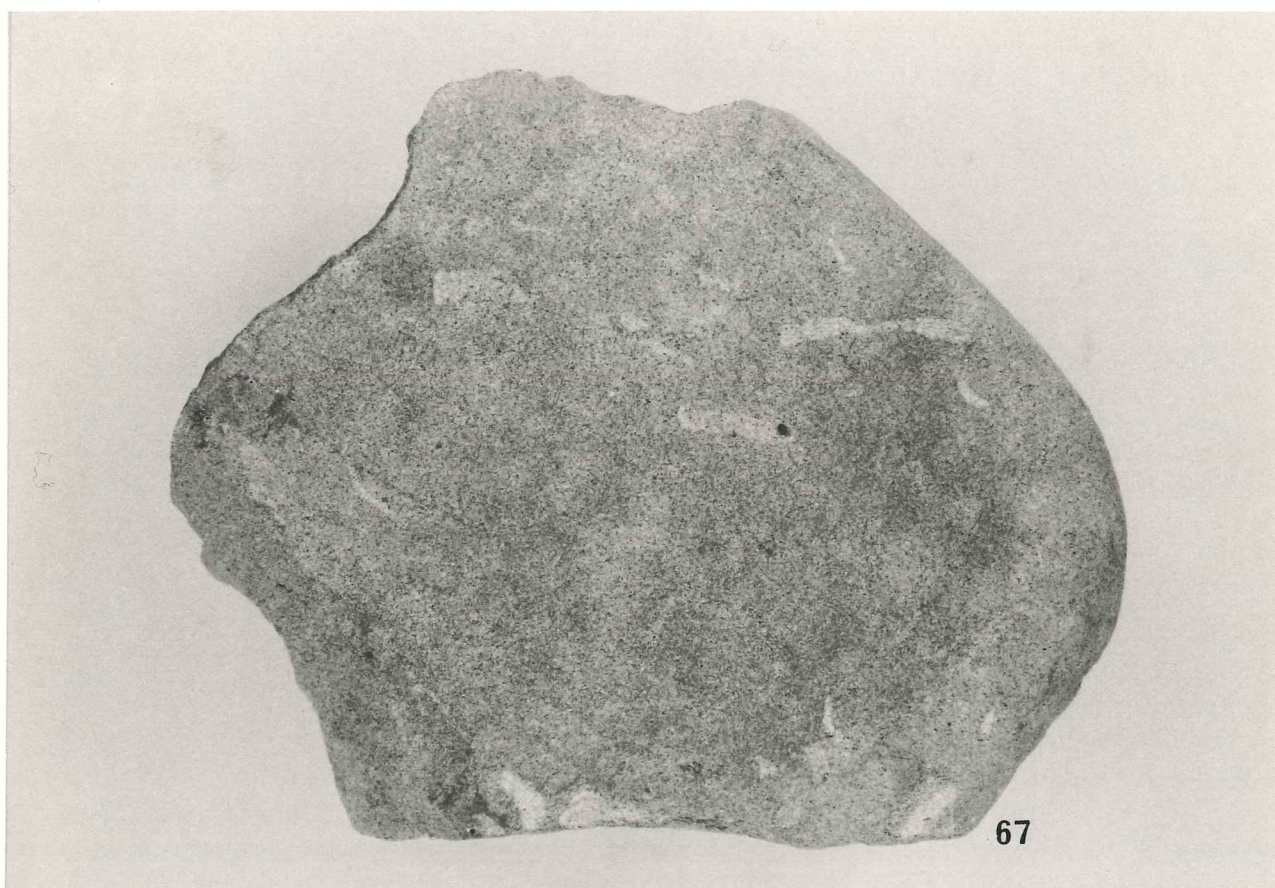
昭和58年度出土磨石



昭和58年度出土石錘



昭和58年度出土石棒



昭和58年度出土石皿

長 者 平 遺 跡

—昭和58年度緊急発掘調査報告書—

1984年 3月31日

発 行 静岡県袋井市教育委員会

〒437 袋井市国本3070-1

印 刷 株式会社 開 明 堂

〒430 浜松市中沢町1-1